明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）

女學世界



第八巻第十三號

博文館發行

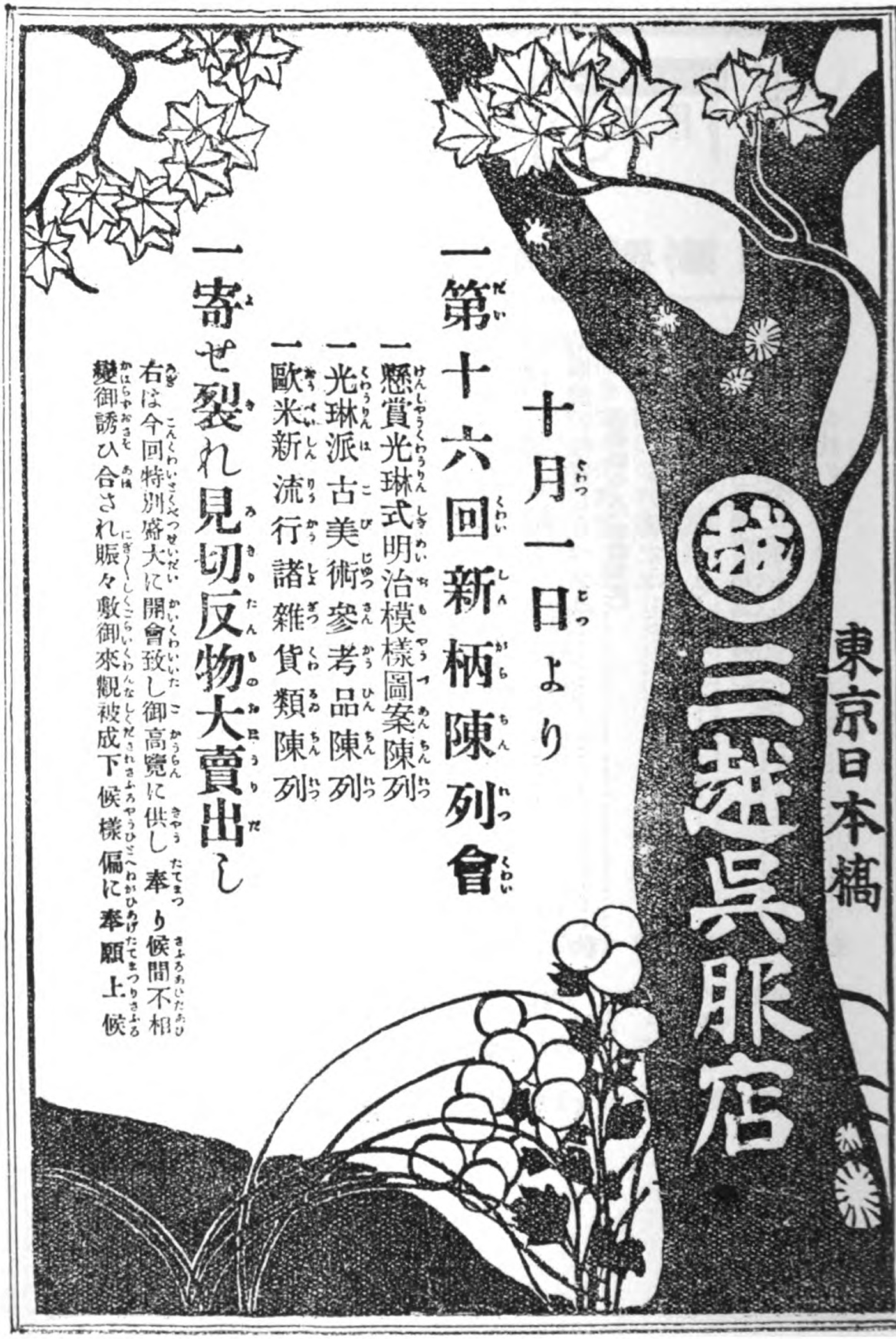
美顔水は天下唯一の美白光艶劑なり

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令嬢佳人争ふて之を用ゐ賞賛の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

――本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す




東京日本橋
三越呉服店
十月一日より
一第十六回新柄陳列會
一懸賞光琳式明治模樣圖案陳列
一光琳派古美術參考品陳列
一歐米新流行諸雜貨類陳列
一寄せ裂れ見切反物大賣出し
右は今回特別廣大に開會致し御高覽に供し奉り候間不相變御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣偏に奉願上候



女學世界第八巻

第拾參號目次



新製品

尊き方々の御料品



博士學士無害證明

新製品純無鉛御料たつたは夙に畏き邊りの御料として調進し參せし絶好無上の新化粧料で有升而も此白粉は最近十五六年間內務省衛生試驗所に奉職して數萬種類の分析に慣れたる敏腕の技師が發明に係る逸品にして色飽迄しろくきめこまかくむらにならずゑりにつかず自然の肌の樣に底美しく成給ふべし

十月一日より

第一回美術工藝品競技會

開催仕候

金剛石入金指輪



(1) 純白ダイヤモンド入…價金壹千圓

(2) ダイヤモンド四個入…價金六十五圓

(3) ダイヤモント九個入…甲價金貳百圓 乙價金百五十圓

(4) ダイヤモンド七個入…甲價金壹百圓 乙價金八十五圓

(5) ダイヤモンド及眞珠入…甲價金七十五圓 乙價金六十圓

(6) ダイヤモンド四個入…甲價金五十圓 乙價金四十圓

(7) ダイヤモンド及眞珠入…甲價金壹百圓 乙價金八十五圓

(8) ダイヤモンド及ルビー入…價金貳拾五圓

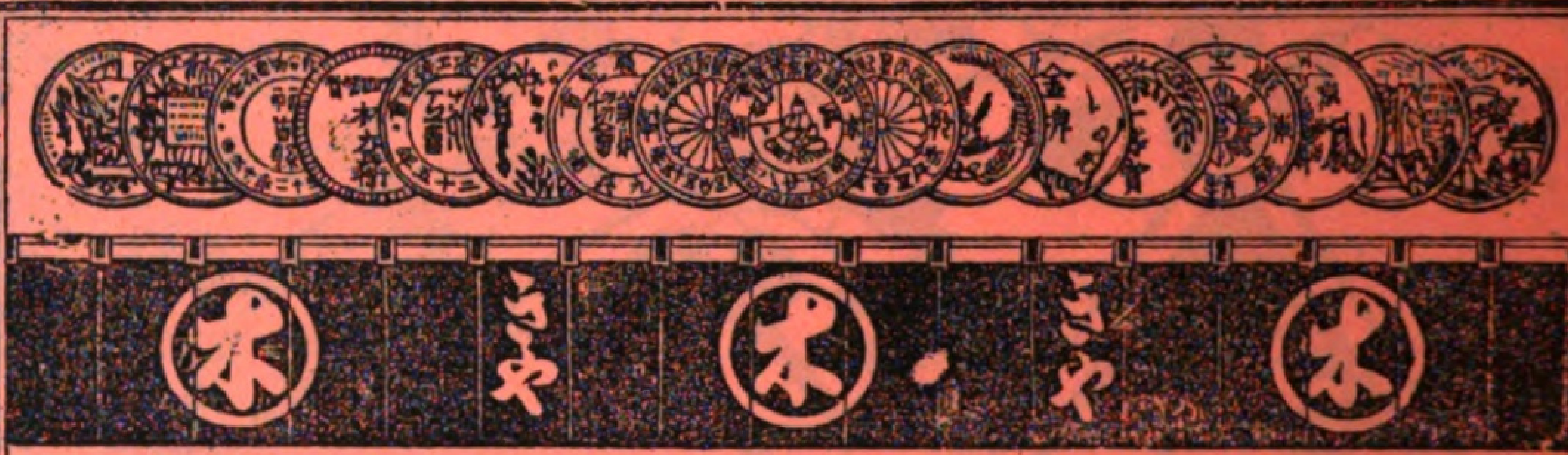
(9) ダイヤモンド壹個入…價金參拾圓

東京京橋南傳馬町。
振替口座九二九三

大西白牡丹



女（いの二）



美術
漆器
蒔繪

御婚禮道具
ぜんたん
家具
其他
色々
杯
製造

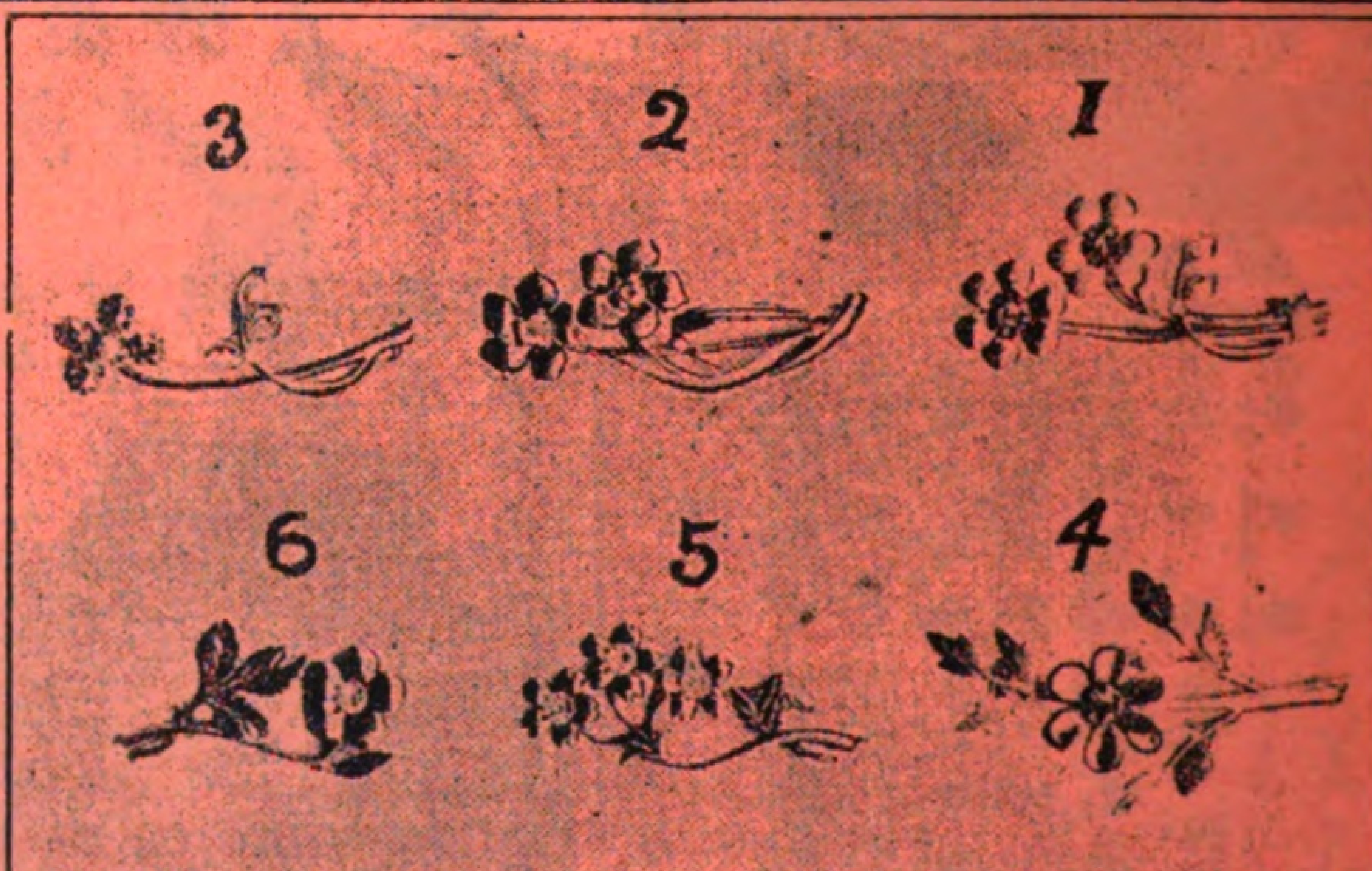
めうもの陳列場設置有之候間御隨意に御縦覽ヲ乞不拘御用向被仰付候偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區
室町貳丁目

木屋本店
林九兵衛

電話本局(九百九十七番 千七百十番)
電信略名(キ九)

最新流行形ブローチ



(1)十八金ルビー眞珠入　拾七圓半
(2)十八金ルビー眞珠入　拾五圓半
(3)十八金ルビー眞珠入　拾七圓
(4)十八金ルビー入　拾四圓
(5)銀製メツキ新ダイヤ入　金二圓半
(6)銀製渡金新ダイヤ入　金二圓廿錢

今川橋
松屋吳服店前

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西

電話本局二〇四〇番振替口座一五二二一番

女(いの三)



衛生家必携
懐中良薬

ゼム

ゼムこそは色美かりけれ
ゼムこそは味佳かりけれ
ゼムこそは香芳かりけれ
ゼムこそは効能かりけれ
秋こそはゼム可かりけれ
秋こそは書籍好かりけれ
秋こそは散歩良かりけれ
秋こそはゼム善かりけれ

主効

◉氣分を爽にす　◉悪疫を豫防す
◉聲を美くす　◉消化を良くす
◉頭痛眩暈　◉氣欝胸痞
◉食傷水傷　◉口熱口臭
◉悪酔宿酔　◉煙草害毒
◉息切渇　◉時候傷
◉船車酔

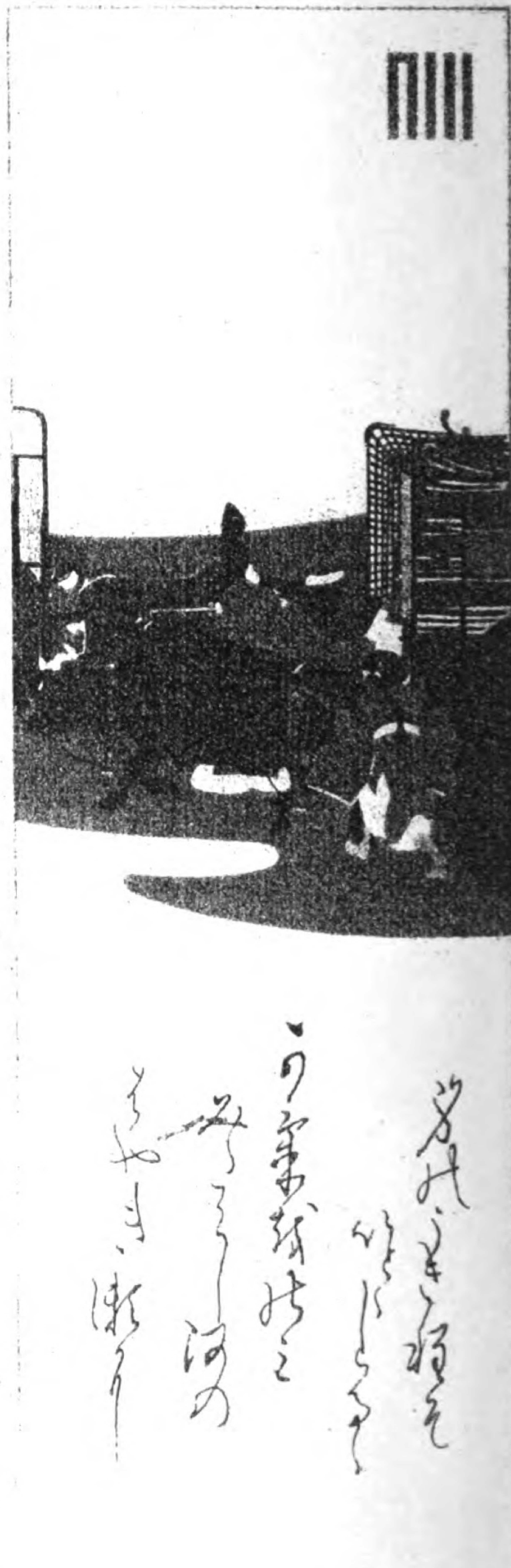
(ゼム定價)

七十五粒入十錢	四百粒入五十錢	容器入
百六十粒入廿錢	九百粒入一圓	二十錢

日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂山崎榮三郎
支舗　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(いの四)

葵



榊



一條成美画
星野天知書

●婦人の涙（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顔色蒼白にて白澤なく從前の病歷を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋繩の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・痳病・僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢
●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）
●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
藥劑師 **中西莊吉**（振替貯金口座千五百番）



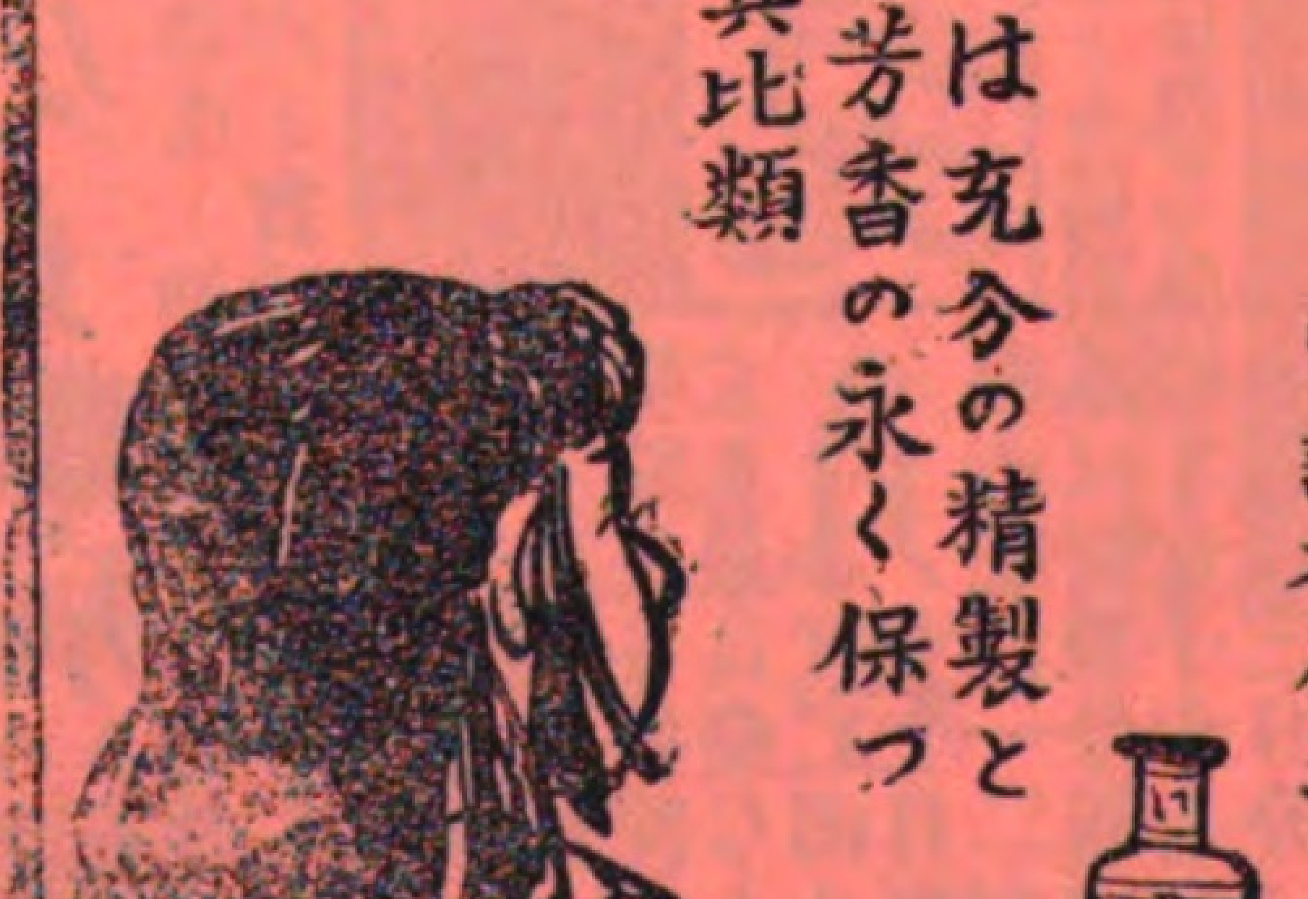
瓊姿香油

は愛すべきバラ。スミレの芳香があつて東髮散髮に適し誠に時世に應じたい、香油です

東京日本橋區通二丁目
柳屋本舗
電話本局二〇一番

本麝香入
柳清香油

は充分の精製と芳香の永く保つ点に付他に其比類がありません



女（ろの一）

根治確證

わきが

新治療 ラピヨシン藥

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

毛髮生養液 原名ベクネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也試みられよ●ぬけ毛落毛を止

毛をはやしたき人早く

有力なる最新液にて

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

化學製品 防 ハンドコロン

色の白くなる

容液

皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり盛にし

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をな

月やくさらい

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は效能極めて烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る

月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す

價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢少包料拾貳錢

專賣 東京神田小川町四十番 オリエンタル藥舖

電話下谷二五三五

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最強度……効能峻烈……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛



博士賞贊良藥 改良

女月丸

●肥滿病新藥（米國新輸入）

小供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〱肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〱ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏窈窕たる艶白となり誓て美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

藥價	一劑二圓五十錢	二劑三圓九十錢	三劑四圓卅錢	四劑五圓半	送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替壹〇六七七番 小宮愛生堂

女（ろの二）



御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
發賣元
丸見屋商店
ねり製
御園白粉
水製
御園白粉
こな製
御園白粉
淨白化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
新穎ふきうち白粉
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
高等香水油
御園香油
高等香水
御園香水
高等はみがき
御園歯磨

女(ろの四)

色づく梢



河崎蘭香筆


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コ八
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帯留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目録郵券
六銭封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

(はの一)

女(はの二)

常に婦人に適切なる大問題を解決するは本誌也

記事有益

婦人世界

體裁優美

十月一日發行 毎月一回 三卷十一號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

▲婦人は如何なる男子に嫁ぐか……村井弦齋

▲子供を遊ばせつゝ教育す 東洋幼稚園長 岸邊福雄

▲想像した日本婦人と見て驚いた日本婦人 米國女學生…

▲他家を訪問して愉快に思ふ事 秦利舞子

▲西洋の婦人結婚法

▲文藝問答 本號より新に開始

▲姙婦は如何なる醫師を選ぶか……榊博士

▲私の娘が成長せば如何なる人に嫁入らすか……三輪田女學校教頭文學士 三輪田元道

▲私は十五人の子女を養育するに如何に苦心せしか……服部金太郎氏夫人 服部まん子

▲文學士を養子に貰ひて失敗せる寡婦の實例… 東京女學館幹事 西田敬止

▲私の良人は高等官を辭して炭屋を開業せり… 前遞信事務官補夫人 猪越せい子

▲閨秀書家野口小蘋と跡見玉枝の面影

▲袖口は如何にせば體裁よくなるか 磯村春子

▲注意すべき小兒の百日咳 醫學博士 加藤照麿

▲懸賞當選 我が家の實驗

▲弦齋夫人の料理談

▲義齒は如何に取扱ふか ドクトル 志村誠麿

▲婦人服の裁縫懸賞募集あり

女（はの三）

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貮六番）（電話新橋八七四番） 賣捌 全國書店

はぎ



加藤南山筆



宮崎與平筆

●子を持つ親 病人ある家人は必ず讀め 特別製品各貳拾錢上り

定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢

ね小便袋

男女の區別あれば御注文の節乞注意
衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人

小兒病人の最も必要にしてね、おき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長



●つきやく世話いらず

子宮帶

有名醫學士の説明に因り考案したる品にして月經當時又は産後用として內外國人に信用ある婦人用品なり

定價 特製壹圓參拾錢 並製九拾錢 ●送料各拾錢引替廿五錢

大阪東區內久寶寺町四丁目
振替貯金口座壹六五四六番

旭商會雜貨部

らい病

醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール 一ヶ月分 貳圓
複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無效なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐きて其效能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

本舖 三河國碧海郡刈谷町 益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

通人の話

袖珍美本口繪入 定價金三十錢 送料四錢

辭書云ふ通とは其道に精しきなりと此の書は何れも名ある通士が最も蘊奥を極たる十八番の秘訣を蒐めしものなれば面白きこと疑なし

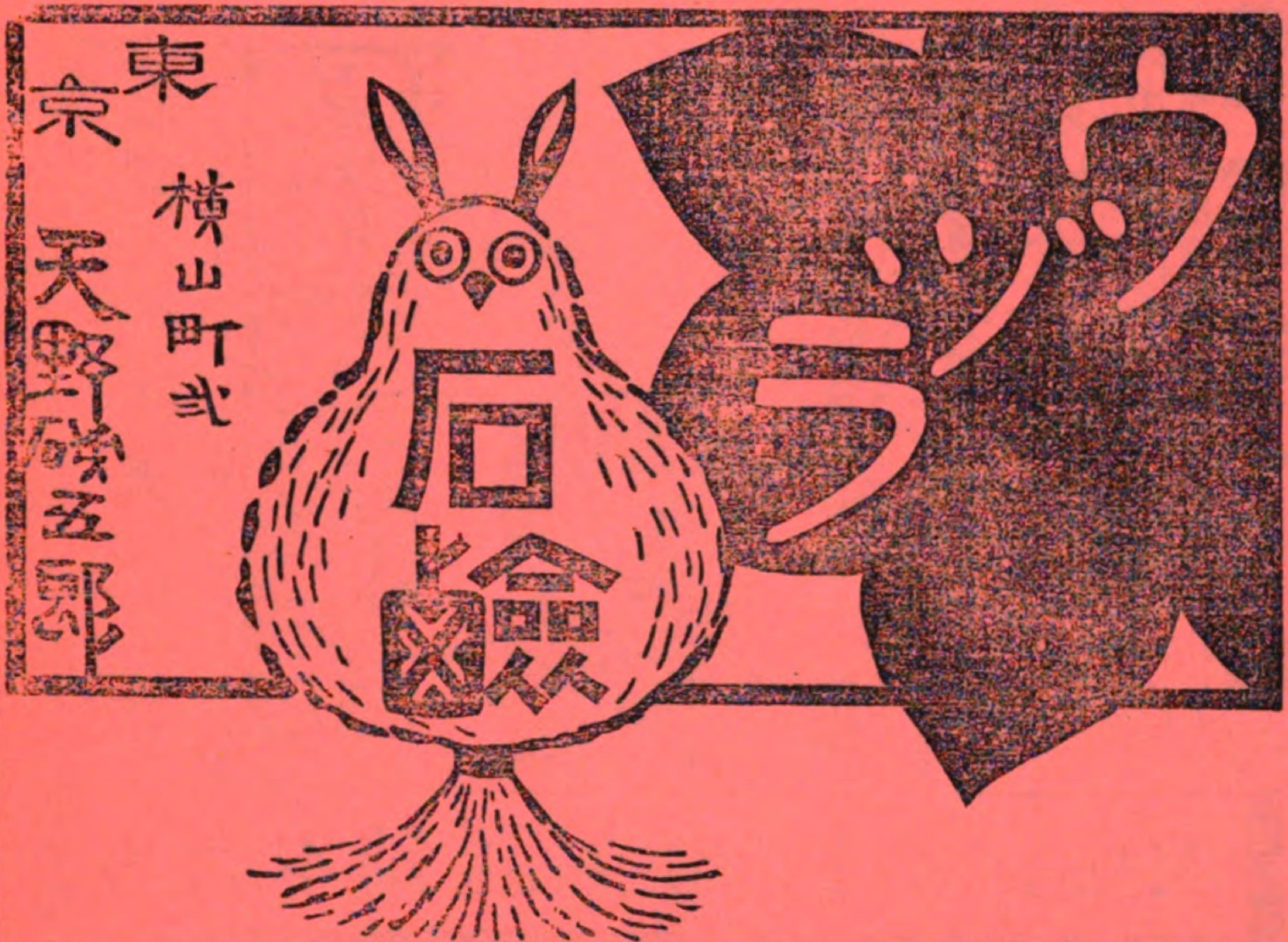
釣魚通 幸田露伴
小鳥通 佐藤善
畫葉書通 巖谷小波
落語通 今村次郎
盆栽通 喜谷實母散
刀劍通 松平頼平
玩具通 清水晴風
寫眞通 日向野善太郎
薔薇通 竹越與三郎
古死通 青柳長全
墓通 山口豐山
高利貸通 坊太郎
謠曲通 仁杉英
劇通 黑市
そば通 幸堂得知
銃獵通 綾井武夫
食物通 奥村繁次郎
書畫通 悅田彦助
園藝通 酒井忠興
球戯通 玉乃一熊
古錢通 守田寶丹
酒の通 鹽入太輔
籠通 村上友吉
吉原通 松本觀阿翁

發賣元 東京市京橋區銀座弓町二番地 **三立社**

賣捌 日本橋北隆館 神田東京堂 人形町至誠堂

女(にの二)

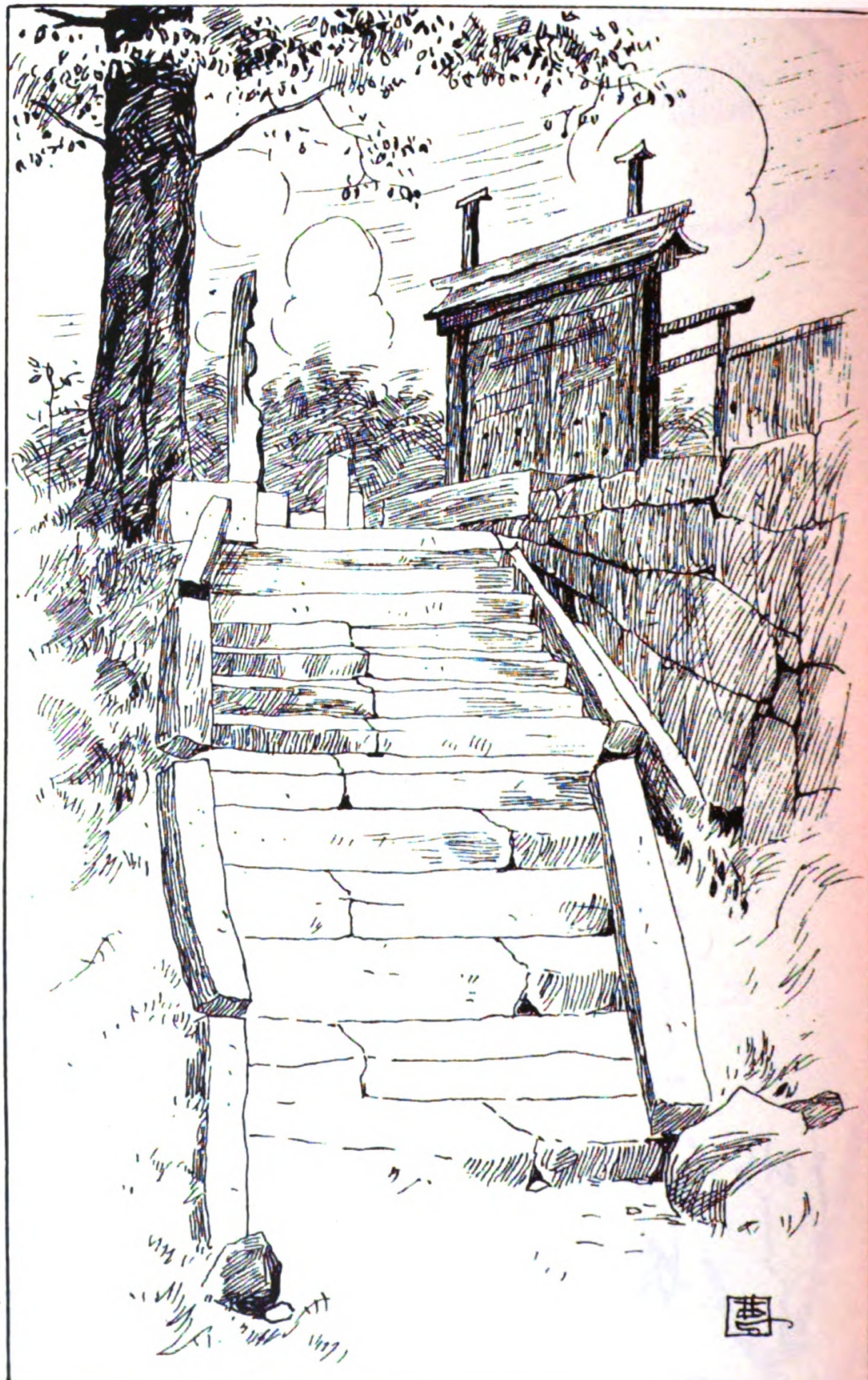
女(にの三)


ウヅラ
石鹸
東京
横山町弐
天野源五郎

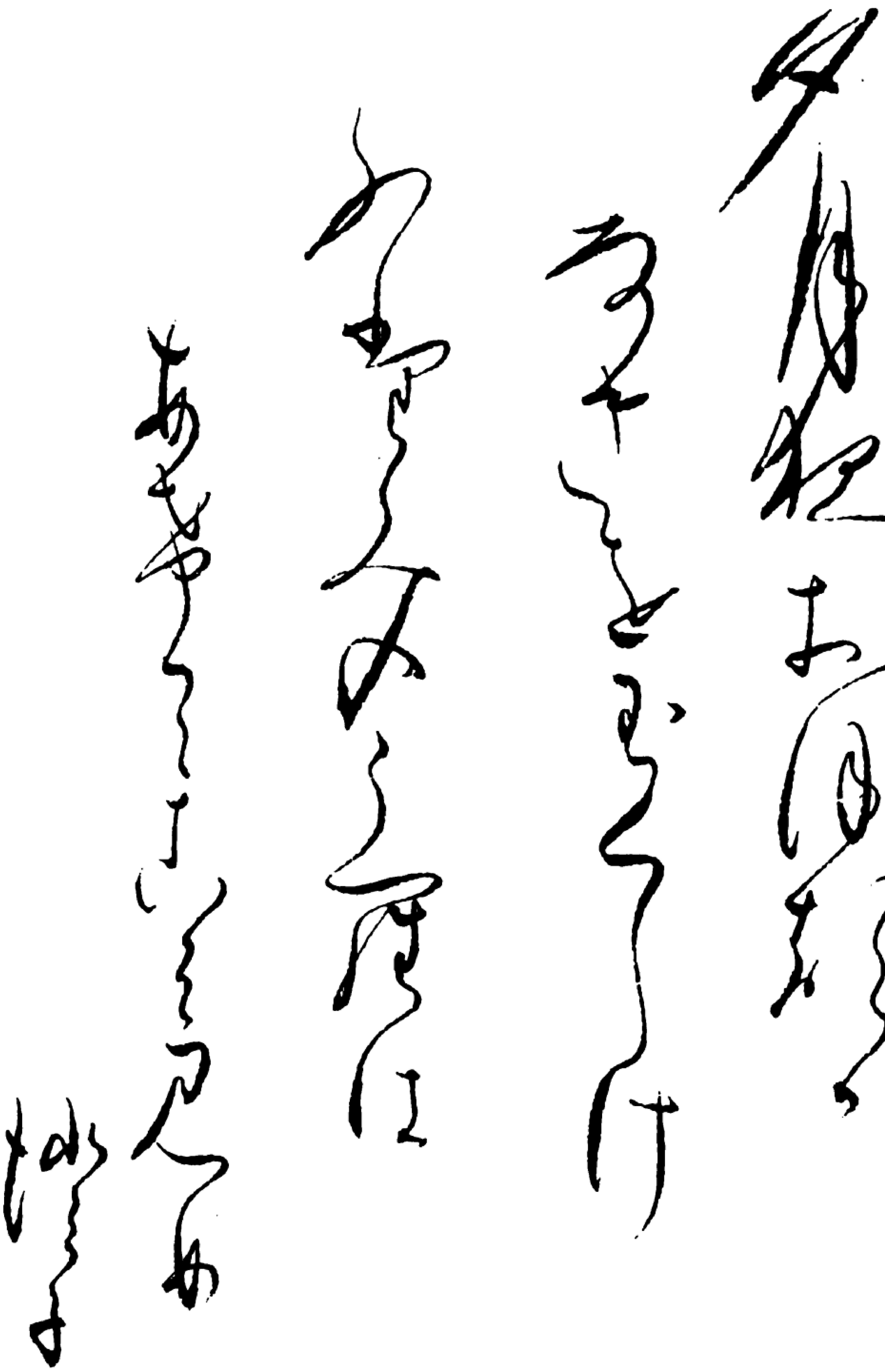

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醤油
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港

女(にの四)

茗荷谷の秋



竹久夢二筆



飯田澄子

女（ほの一）

美人紙おしろい

漉込專賣特許



完全無鉛

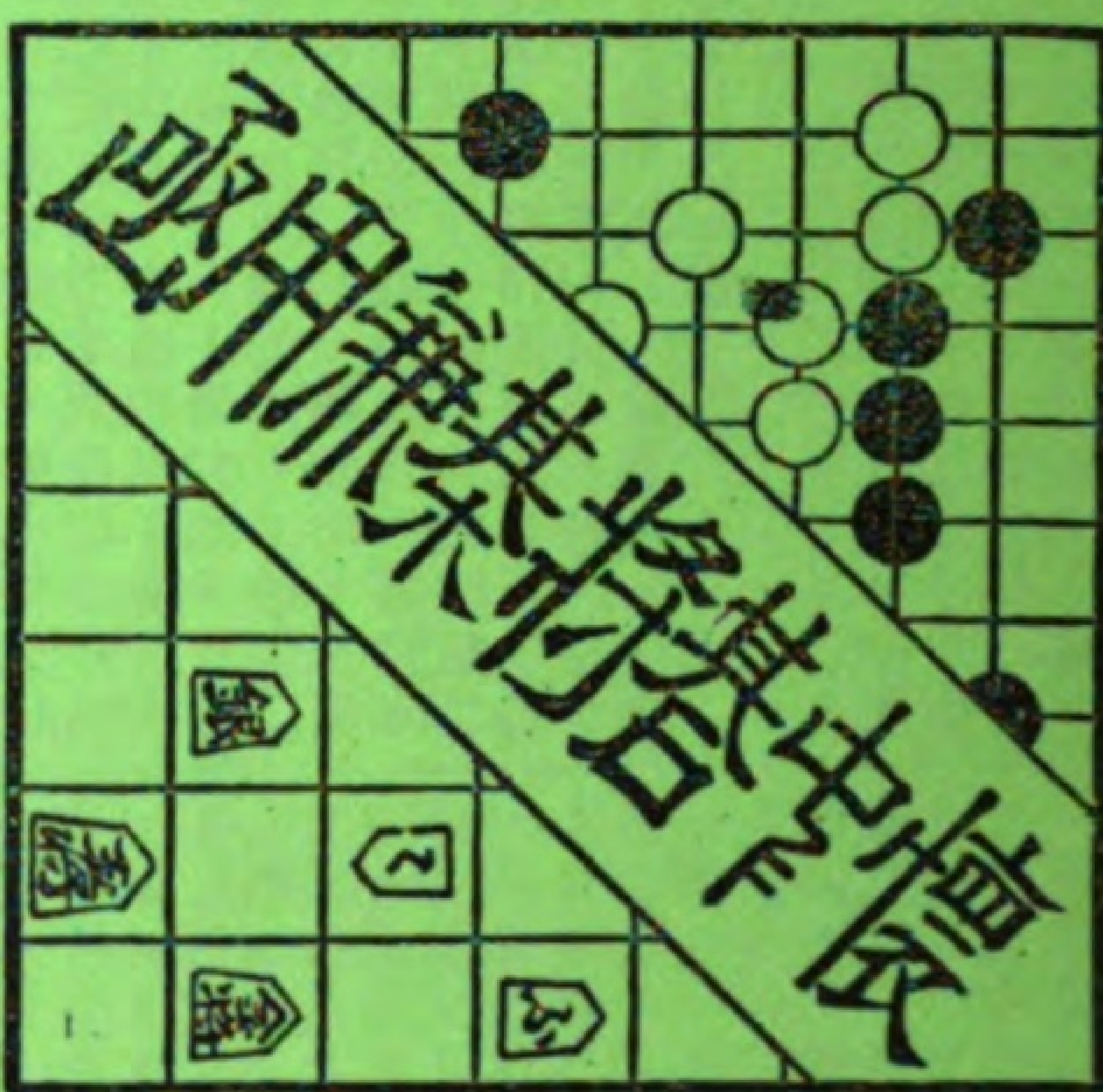
世界一有効 御化粧料

本品は紙に白粉を塗布したる舶來品とは異なり漉込みたる特許製品にて使用極めて輕便、附着よく、暢よく、斑にならず脂垢を吸取りて色澤を美しくする故生來の美白に異ならず眞に色白き天然の素顏の如く天工を奪ふと云ふは是なり御試用の上完全無缺の化粧料世界一有効の名に負かざることを知らせよ尚ほ御使用の便を計り口紅を添付しあり

製造本舗 中島代次郎
東京市本所區小泉町卅四番地

◎賣捌は全國到る所の小間物化粧品店に有り。

新案特許 **碁將棊兼用函**

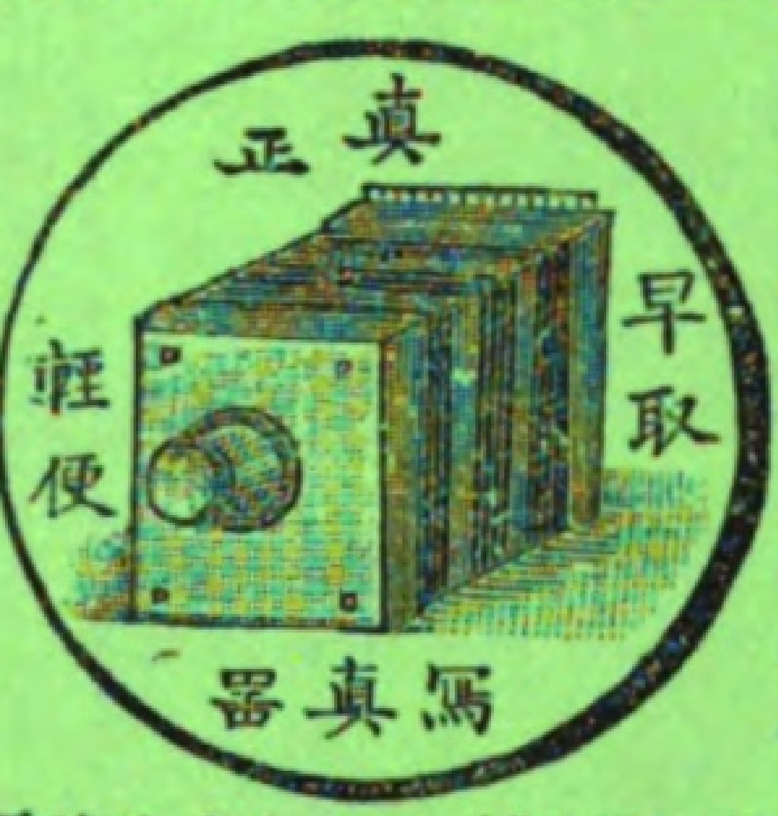


甲號七十五錢送料八錢
乙號卅八錢送料二錢

本品は方五寸高二寸弱の堅牢美麗の紙製合箱となり蓋を明れば中に二個の容器あり紙製優等の白黑石（三百六十個）並に將棊駒（四十個）を装置す使用の際は上下の箱を開展接合すれば忽ち一尺四方の盤面となり赤黑兩線並用して圍碁をなし黑線のみにて將棊盤となる上他の一面には十六ムサシの盤を圖畵し一器にして三具を兼備す旅行携帶に便利に隨時隨處に使用され贈物みやげに最適す（但乙號は紙盤にてムサシ圖なし）

●大喝采――學術妙用の利器

最良新式の完全寫眞器にして本器を用ふれば何人にても人物景色其他萬象を自由に撮映し得べし（注意本器は眞正の寫眞器にして複寫器にあらず安心御注意を乞ふ）



●新式 早取 輕便 **寫眞器**

本器は乾板、稀紙、平皿、臺紙、現象液、鍍金液、定着液、使用書の九種を揃へ一組甲號貳圓、乙號壹圓卅錢、丙號八拾五錢にて發賣す、特製甲五圓半乙參圓八拾錢送料並十五錢特廿五錢の事

代金引換注文は別に引換手數料拾五錢申受候事

發賣元 大阪東區釣鐘元町谷町西へ入 **東洋社**雜貨部

女(ほの三)

大學白粉愛用者への御禮

お待ち兼ねの壹千圓懸賞當籤披露

大學白粉愛用の御婦人方へ御禮として今夏催したる大懸賞は非常の盛況を以て締切ました就ては此れが抽籤は去る九月十日東京市日本電報通信社樓上に於て東京時事、報知、朝日、都、國民、毎電、二六、日々、日本、大阪毎日、時事新報、日本電報通信社及び特約店諸氏立會の上嚴正に執行し左記の方々へ當籤致しました。當籤の方々は十月廿日迄に遞送料を添へ大阪市高麗橋五丁目矢野芳香園へ本人自筆にて申込下さい申込順により御送り致します(先着當品當籤氏名略す)(照會は往復はがきに限る)

一等　婦人持金側時計

東京銀座二　山下美代子
加賀大聖寺　那谷秀

二等　東京製桐衣裳簞笥

廣島　大草小義
大阪　不動つれ
京都　森山光

三等　寶石入十八金指輪

大阪　今北きぬ
筑前　川岸こう
大阪　井上方花

四等　絽縮緬羽織地

近江　山田マツ
德島　郡ナニ
名古屋　稻垣ひさ
姬路　淵岡フミ

五等　婦人用流行洋傘

信濃　小林こう
和泉　福田カク
常陸　川崎はる
茨城　兵藤玉
武藏　飯島千代

六等　洋式化粧用鏡臺

香川　筒井千賀
大阪　船本もと
上野　能登スヱ
甲斐　淺川チヨ
長崎　太田ミヨ
滋賀　宇賀花
福岡　上野ツタ
大阪　丸萬花
熊本　米田まつゑ
門司　八波初江

七等　新柄袷地

筑前　野村まさ
愛媛　江戸薫
東京　今泉とく
肥後　山下キツ
博多　松の家トヨ
廣島　作田くに
德島　花岡元吉
宇治　浦田まさ
北海道　山口耕次郎
福島　渡邊タカ
東京　多田よし
京都　瀨戸イマ

八等　博多伊達卷（國名府縣名略）

●東鄉三枝●山中イソセ●田宮博●横田千代●兵野信●德久アヤ●山田あい●大杉ハル●栗木與吉●竹村茂一●坪田清子●圓城寺フキ●坂野なを●道添君子●市森吉次郎●斧屋タケオ●水谷タ子●山内しげ●保田トシエ●岩崎ヤス●小林末治●山田糸子●堀靜江●有本龜●川崎みれ●和田ひで●東山しす●池田榮子●内木桂子●江川トク●坂井久子●松浦りウ●加藤きくゑ●天津タカ●前川シズ●新沼らく●牧野しん●澤田ハツ●森山スエ●伏見屋なか●東鄉千代●中田カツ●宮本美津●遊谷ふき●野平冬●渡宇武繁●竹内まさ●鈴木父一●樋口艶●逸身春江●遠河ふく●土井廣吉●石賀すみ●渡邊くみ●小沼シゲオ●川俣ハツ●高橋チヨ●柏原次助●河合仁三郎●田阪ツル

九等　絹ハンカチフ

●伊東キミ●宮崎マサ●山村マサ●中島糸●矢澤ヨシ●伊勢田ノブ●松井イサ●淺野アサ●野村米吉●關トミ●齋藤ミス●中西方カメ●本間サキ●寺田アサ●河村岩吉●上方花●宮永傳兵衛●鷹野末●小川直秀●曾根原茂●尾子龜吉●篠原政

喜●中川廣一●杉田操●田島梅子●深田清子●高谷清七●山本春●永井初●津田千代●遠藤カク●近藤勝●佐々木世太郎●高田健一●小川三郎●安形ハツ●山本スエ●寺井ノブ●山崎富●中牟田ヨシ●樋口方アイ●黑川タイ●和泉君●山口光●花石君●山田增●石田時●岡田秋枝●駒田新七●北村トク●高橋菊次郎●八巻トラ●重岡マキ丗●伊勢戸吳服店伊々●南チゲり●松本昌●八尾文●飯田清●伊藤利平●志賀花●中垣ミチ江●千本木瀨八●豐田八重●辻三吉方三枝●芳賀玉●鶴本ツル●阿野信●田邊保●阪稻●畑菊江●竹泉小登良●高井春●深井方咲●田中ヨシ●宍戸歡二●井田末尾●田部ワエ●山本ナス●龜田サト●村上南店K生●田平キヨ●志田カツ●阪本方久江●住チカ●地圭咲惠●柿本林之助●山崎イツヨ●江尻靜子●明戸愼●下野りユウ●齋藤利●遠島正●平石方高●服部方キク●吉田長●金井久●湯淺カヅ●吉崎八重●山田方菊野●町田鵜子●青柿千代●吉田貞●末廣フク●伊東治輔●矢野正一●瀧原ユキ●長尾喜美●北川春●西田梅乃●瀧本イマ●島尾與太郎●松本靜江●須崎宮美●鈴木佐平●菊地アヤメ●井川文一●八尋トモエ●山本曾代●中川みれ●井坂安野●寺平マサ●朝倉惣二●長野ケン●成瀨國市●金川マキ●友池末●倉田サン●高橋榮●奥津春●松尾セイ●畑與三郎●塚本ナツ●石井榮●岡光三郎●鈴木キヌ●貫志百江●高橋文●吉田初●松本ミ子●宍戸モイ●小原元●大澤ユウ●上田たれ●塚本たづ●畑中かよ●土田ヨシ●山口富士●小田鈴●稲野眞一

東伏見宮妃殿下



本野大使と夫人並に母堂



毛髪を黒く長くふさくする
椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油

毛髪の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髪を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髪の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髪の助育を専一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店 電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番



東京販賣所
日本橋區通鹽町 佐野大和屋
日本橋區横山町 森本支店
日本橋區横山町 脇田盛眞堂
神田區橋本町 松井號支店

色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あることを發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顔劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

ランラン化粧水

女(への一)

新輸入 美容料 肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓也

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)

奏効確實 美容新劑 ふとる藥

本劑(藥名ヌクレイン錠)を細瘠者服用せばヌクレイン酸の主成分は直に體内の細胞體と結合しこれに新しき活力を附加し其機能を促進して萎非瘦瘠せる細胞を復活し營養機を興奮し速に體量を增し美容壯健を保ち程よくふとる特効あり故にやせて醜容の人。肺結核質。腺病質。萎黄病貧血者。生殖器能衰弱症。熱性諸病の衰弱者等速に本劑を用ひ豐肉美容强健の身體となれ……

藥價 壹劑分送料共參圓廿錢 貳劑分送料共六圓廿錢 貳劑分送料共九圓廿錢

毛の必ずはゑる確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に係る世界無比の毛髮發生藥なり即ち腫物の痕はげの痕やけどの痕頭髮及はゑぎわの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人本劑特製を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生すること確證す本劑は世にありふれたる種々雜多の毛生藥とは其効眞に天地月鼈の大差あるに付玉瓦混同視する勿れ藥價は特別製貳圓卅錢並製壹圓廿錢

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增のこと

以上六種 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

女(への二)

ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカーチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尙適當なる上品にして香氣優雅常に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり

本品は芳香馥郁なる花卉及薰氣を蒸溜して採取せる純粋の原料を精選して釀造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讚愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり





近時本品の成効を羨み粗惡品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商輩出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一靑年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに摸倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す

本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

女(への三)

天長節の準備と
お祝ひの服裝



天長節と子供衆の御祝ひとは最う間近くなりました御子供衆のある母御さん方は色々と服裝に付て御心配中ですが男女何れの御子供衆でも洋裝の方が餘程輕便で經濟で外見も御立派であることは申上げる迄もなく御存じで御座いませうが是れ等の御仕度は今の内に御命じになりませんと時期を失ひますから何卒一日も早く下名へ御用命を願ひます



紳士貴婦人
男女小兒
洋裝調製
新案ベビースボツクス販賣

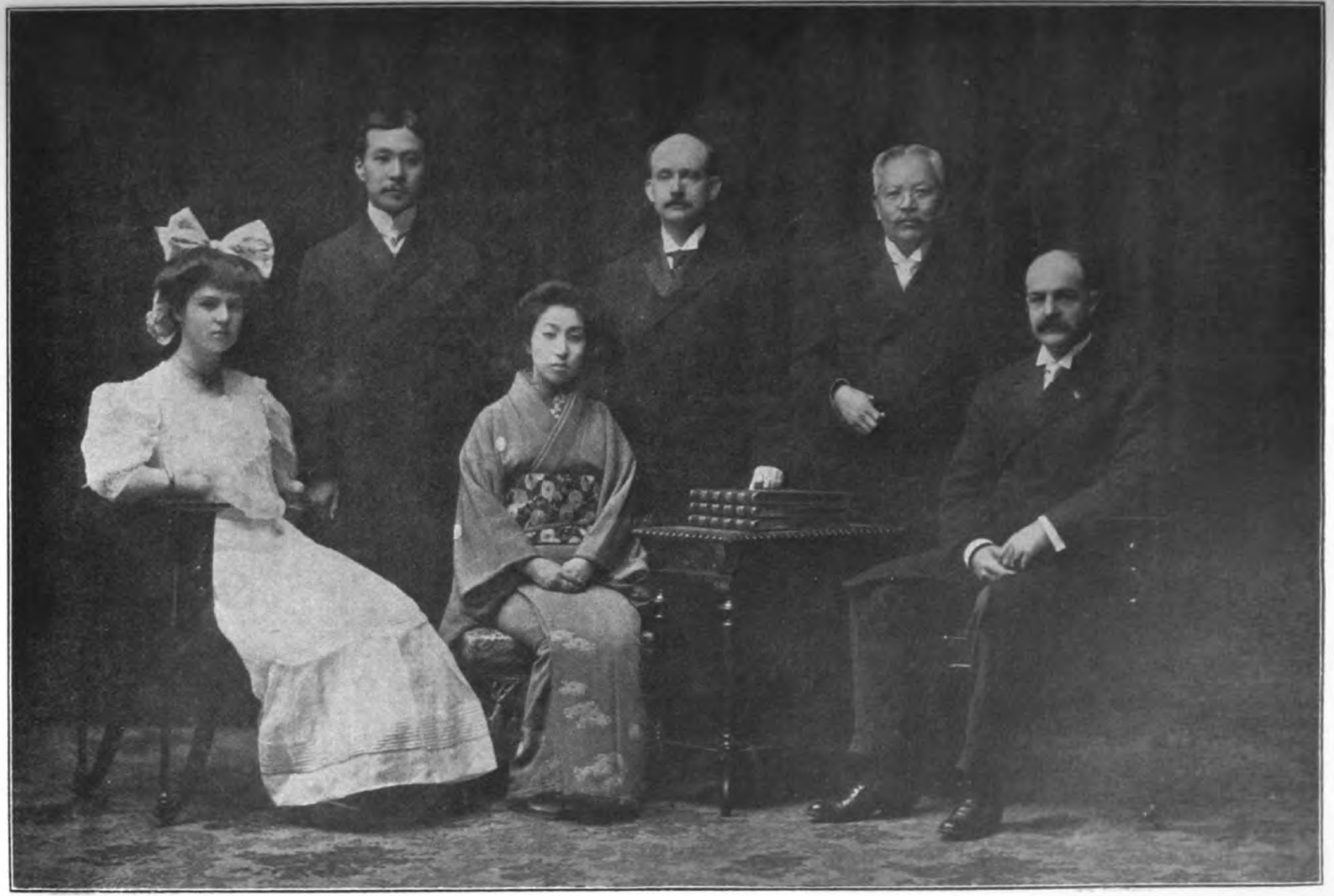
橫濱辨天通り四丁目八十番地(電三四四番)
中野屋洋服店

東京神田鍛冶町廿七番地(電本二九〇一番)
同東京出張所

韓國京城
同韓國出張所

去(への四)

高峰博士と其親姻



秋晴





磯の波

消化新藥 タカヂアスターゼ

本品は毎瓶强度一定効力永久不變なりこれ高峯博士發見の新法式に從ふ特長なり

澱粉不消化の一般徴候

醫學博士谷口長雄氏曰く『…澱粉不消化に因する重なる徴候は胃の膨大、疼痛、溜飲、腸内瓦斯蓄積便秘若くは下痢等にして甚く營養の障害を來す是等の疾病に對しタカヂアスターゼの頗る有効なるを信ず』(說明書は直接發賣元に要求せよ郵呈す)

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

滋養新劑 グリコナール錠

本品は各地有名藥舖にあり本品の說明書は直接發賣元に要求せられよ無代郵呈す

醫學博士北里柴三郎氏指導の下に化學者佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究創製せる本劑は滋養劑として肺病及一般病者虛弱者に必適なるのみならず之を用れば自から心臟を强め盜汗を制止し速かに體力を恢復して元氣を旺盛ならしむる特異の効顯あり

東京市日本橋區南茅場町貳番地

三共合資會社

女(その一)

全世界英雄番附投票募集

冒険世界

毎月一回五日發行

大判(四六二倍大)紙數百廿八頁

拾月五日發行　第壹卷第拾號　正價一冊十五錢　郵税一冊二錢

◉樹上の俠士と美人　裸體の獅子　押川春浪　◉冒険小説　怪人鐵塔　押川春浪　◉奇中奇譚　生ける死人　虎髯大尉　◉獨逸大飛行艇爆裂談　伯林通信　◉萬國選手　二十六哩大競走　倫敦通信　◉米國奇聞　西洋水滸傳　虎髯大尉　◉布哇横行　投繩強盜隊　河南山人　◉新ロビンソン漂流記　河武天風　◉滑稽風流猪狩　長髪男君　◉憂國志士の復讐　武中翁談　◉痛快豪傑高杉晋作　河岡潮風　◉北米東海岸旅行　坪谷水哉　◉書生の天下　大隈伯談　◉大氣焰談　松本君平　◉笑って斬られた男　武鬼者君　◉聯隊長の行衛　關東武士　◉艦内の午前　老水兵君　◉女子大學評判記　潮風逆人　◉武勇講談　澁川蟠龍軒　◉運動世界　日米野球戰爭等壯快々々

珍奇口繪

◎油繪三色版　輕氣球の二人　小杉未醒　◎快男子の豪遊　◎月桂冠は誰の手に?　◎美人の首　◎金髪夜叉

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替貯金口座第二百四十番　博文館

女(その二)

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町　衛生書院

ちいれもくせも
もはへうけあい
二大奇法

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆様の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

東京麴町區飯田町四ノ十六

女髮師　安部歌子

●佛國土產の最新白色新劑



色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院特得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈て敎ゆ

東京市東兩國小泉町二十七番地　愛隣藥院

無代價にて施藥

子宮病・血の道・月經不順

其外婦人諸病なれば如何なる重症にても必ず全治する奇妙不思議の妙藥あり見本藥及治療法書無代にて進呈

望の人は送費三錢封入大阪高麗橋壹丁目聖婦丸本舖長命堂藥房へ申込あれ



生徒募集

東洋音樂學校

東京神田裏猿樂町

簡易複寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書書版數十百枚を印刷し得べし

本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

●定價　二オンス堅裝 罐入送料共　金參拾錢　郵券代用壹割增

下谷坂本町二の廿四

中村屋商店

女(その三)

止金具（實用新案登錄第壹壹七壹號）

右へ廻せばつく。左へ廻せばとれる……

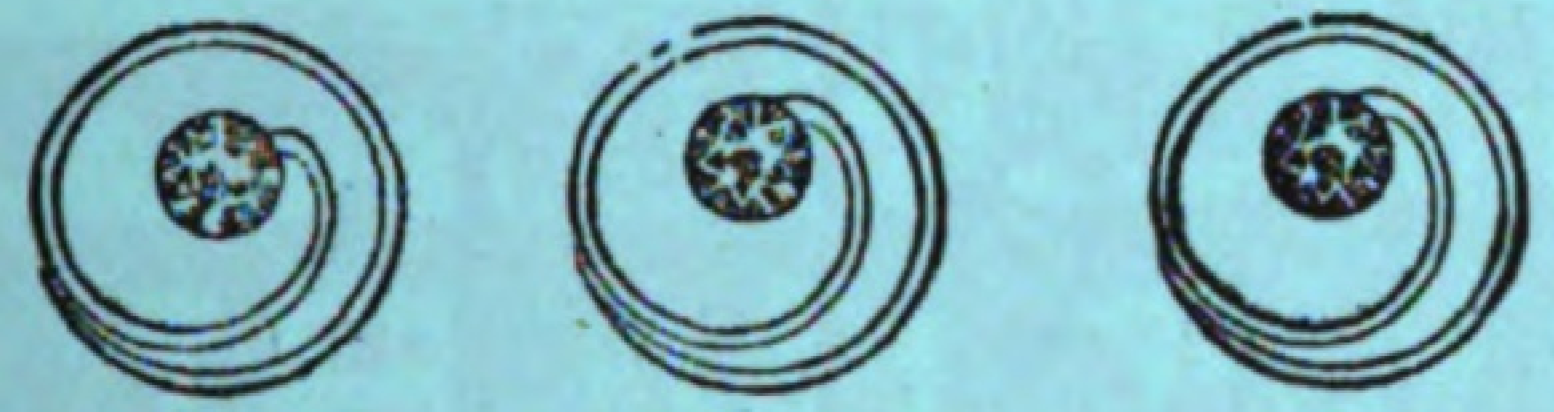
寶石自由かざり

新ダイヤ、新ルビー、人造眞珠
各三個にて一組
金五拾錢以上
上等金壹圓以上各種市内小間物店、半ゑり店。吳服店にて販賣致します…

寶石自由かざりいろ〳〵の寶石をうづ巻の針金で留てありますからお召物や半ゑり又はつむりのものそれ〴〵模樣に合せて御自分の好みのところに付けられそして取りはづしが自由ですから面白味と飾りをかねた新案です



女（との四）



製造元
發賣元

東京日本橋區馬喰町四丁目
婦人小間物卸商
人造寶石卸商
長電話浪一七一九番 ㊄振替貯金一〇〇三一番
宮本商店

東京日本橋區橋町四丁目
御料御園白粉發賣元
小間物化粧品問屋
長電話浪花四四八番 ㊄振替貯金六五三六番
丸見屋商店

東京市日本橋區葺屋町
吳服半襟卸商
楳垣商店
長電話浪花一六〇七番

ミシンの實習



京都女子商業學校ミシン專修科


曇りなき鏡はクラブ洗粉
愛用者の高尚なる素顔を
寫して第一に其特色を示す
永く使ふほど素顔の
美くしさを增すは
クラブ洗粉の特色なり

(その一)

女(ちの三)

造花原料

ハ東京市九段坂

吉住商店に限る

營業種目

造花器具

造花材料

造花及半製品

造花用蕊類

造花装飾用達

摘細工材料

新店の特色

御注文親切

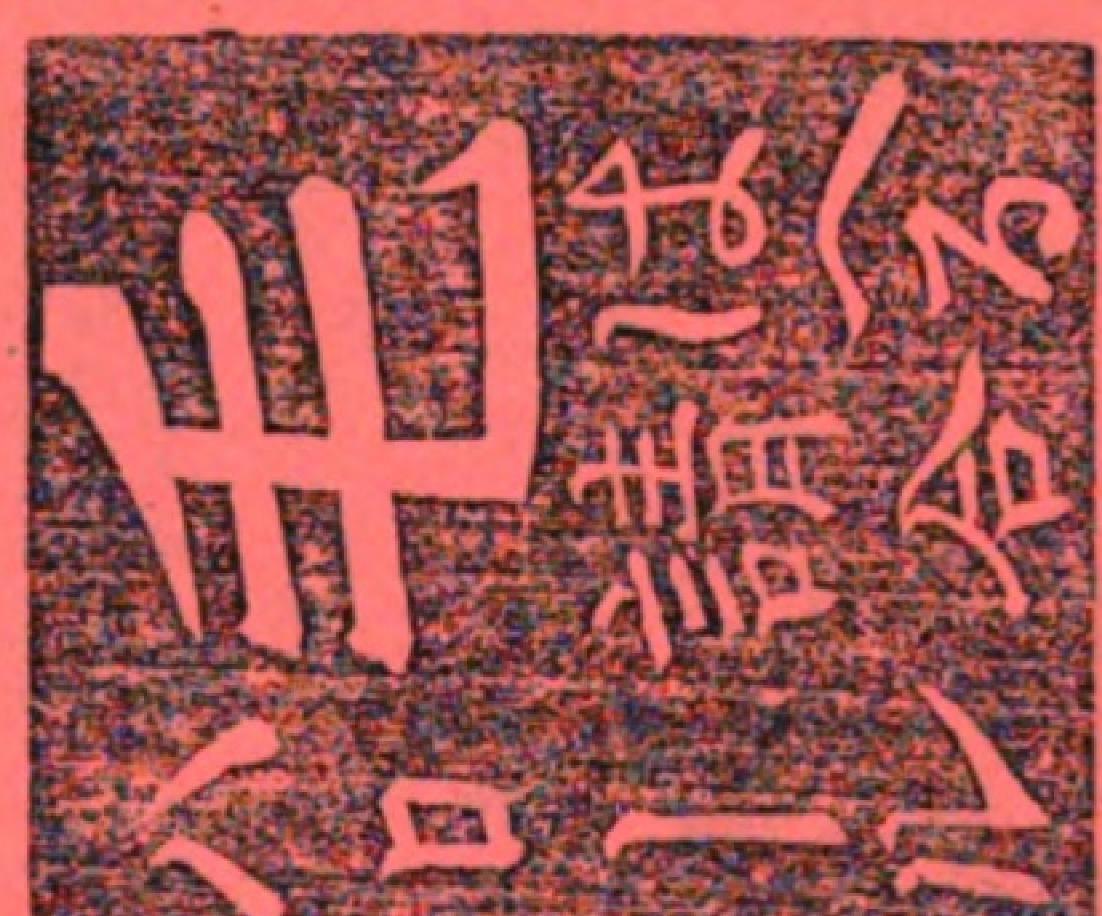
品質善良

價格低廉

出荷迅速

營業用雜貨入用の方ハ東京市九段坂

吉住商店宛申込まるべし



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞著品の比に非らず、左れば普通に醫師の處方する完警丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへきは、まゆげ、ひげ、陰毛等の薄を濃くし、あるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早め、ヤケド、デキモノ、ハッポー、キリズ跡の禿に生毛せしむる事請合

藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ●

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

本舗 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

●大取次左ノ通リ● ●大取次附近ノ各藥店ニアリ●

東京市

本郷六丁目赤門前 瓜生藥局

麴町區紀尾井町三 齋藤藥局

日本橋檜物町十八 龜田藥局

京橋區八官町八 野田藥局

神田淡路町二の四 森田藥局

芝田町四の一ノ二 加藤藥局

芝愛宕下町一ノ二 岩本支店

赤坂田町四の一 竹内藥局

同青山北町五 西井藥局

本所吉岡町廿五 小島藥局

四ッ谷大傳馬町二 永野藥局

高松市片原町 新明藥局

堺市大寺南門東入 一色藥局

京都市上京區寺町通り石藥師角

京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二 丹平商會

丸龜市本町 櫻井藥局

名古屋京町三丁目 飯田藤七

同 同 同 荒川長太郎

同鐵砲町三丁目 谷田藥局

神戸元町一丁目 西村關吏堂

廣島市橋本町 萬代藥局

神奈川青木七軒町 水崎藥店

仙臺市新傳馬町 櫻井藥局

岡山市橋本町 加藤藥舗

弘前市下土手町角 菊地藥店

大津市菱屋町 磯崎藥局

福知 藥局

安江洋反物店

女(ちの四)

轉　地　修　養　會



妙義山に於ける精華學校生徒



産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止しか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◎◎◎⦿著者は多年の實驗と最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり⦿病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

目次

婦人病の總論◎子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及〃根治〃◎月經時の手當月經〃病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき塲合姙〃の攝生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千六百一） 笹岡省三

女（りの一）

女（りの二）

少女世界　少女と談話　第三巻第十四號增刊



洋裝菊判紙數百廿頁
口繪石版寫眞版豐富

十月十五日發行

正價　金拾錢
郵税（本誌限り）四錢

秋の氣澄みて、讀書の好時期となりました。この時に當つて、少女諸子の座右に、有益にして趣味多き『少女と談話』をさゝげます、これは樂しい少女談話會のさまを、そのまゝに寫したもので、面白いお伽話あわれなる少女小説、有益なる歷史談、婦人傳、理科談などがあります。而してこれ等は一少女が談話會で話してゐるやうに記してあります。なほ附錄には少女文範が添へてあります

●表紙繪　鏑木清方筆

●彩色口繪（少女談話會）　渡部審也筆

●少女芝居 無言姫　巖谷小波作

（おもなる記事）

▲少女談話會　▲談話の心得
▲日本少女の花　▲少女第一の娯樂
▲おしろいの話　▲わが家の女中
▲猫の觀察　▲シャボンの話
▲工女メリー　▲勇ましき少女
▲清少納言　▲紅葉の錦
▲赤いコート　▲野の少女
▲籬の梅　▲ローラン夫人
▲寄宿舍日記　▲旅行みやげ

其他おもしろい記事が澤山あります。

販賣部電話本局二六二〇番　東京博文館本町　振替貯金口座第二百四十番

讀を

女（りの三）

女(りの四)

割烹の實習



大阪割烹學校夏季の講習會

最上醤油

キハク印

醸造元

茂木七郎右衛門

千葉縣野田町

電信略號ハク又キハタ

東京支店

中野長兵衛

日本橋小網町三丁目

電話浪花百七十七番

懐中要薬



登録商標 高木

本舗 東京市日本橋區元大阪町八番地 髙木與兵衛

女.めの一)


十月一日より
大賣開き見切反物よせきれ澤山
懸賞裾模様實物に染
上げたるもの幷に
圖案各種數千
枚其外季節
物珍柄取揃
へ陳列

醤油釀造界の一大革新

最良醤油



◉資本金＝壹千萬圓

釀造元
日本醤油釀造株式會社
東京深川區小名木川通　電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

特色
製造清潔
品質佳良
徴生ぜす
價格低廉
特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醤油を釀造販賣す

特約販賣所
東京日本橋區北新堀町
合資會社日本醤油東京販賣所
電話浪花「長」一四六番

其他
一東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地
一小賣店にて販賣致候間御用命願上候

女（めの四）

山根正次氏の一家



初涼！

正にミシンと親しむ可し

家庭用

シンガーミシン

○月賦販賣
○減價即金賣
○無料出教授

▲明細書　御申越次第無代送呈す



横濱市山下町六十一番地

シンガー裁縫機械會社

東京市銀座
京都市三條
廣島市猿屋町
仙臺市國分町
大阪市心齋橋
岡山市樋屋町
長崎船大工町
札幌南一條

其他全國到る所に分店あり

女(ろの一)

博文館發行



博文館發行の當用日記懷中日記の正確にして便益なること旣に定評あり世間幾多の同種發行中に獨り異彩を放ち其發行部數の如き到底局外の人の測度し難き高に及び今日にては日記と云はば博文館を聯想するか如き盛况を呈すること本館の榮とする所なり是を以て四十二年度分は特に紙質を精選し印刷を鮮明にし改良を加へ部數を增加し一點遺憾なき計畫の下に發行し全國賣捌店より發賣せり乞ふ倍舊の愛顧を賜はらんことを。

紙數
- 當用日記各五百四十頁
- 懷中日記各三百〇六頁

(附錄內容)

當用日記
- ●金錢出納錄
- ●知己人名簿
- ●雜錄
- ●諸統計表
- ●米價換算早見表
- ●諸稅則摘要
- ●郵便電信諸規則
- ●新式萬年曆
- ●徵兵規則

懷中日記
- ●雜錄
- ●統計表
- ●利子早見表
- ●諸稅規則摘要
- ●郵便諸規則
- ●徵兵規則大要
- ●年齡早見表

賣捌所は全國各地の書籍雜誌店及紙類文具店等到る所にあり

取次希望の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

女(その二)

發兌元 東京市日本橋區 振替貯金口座

明治四十二年度日記類

博文館日記の特色

用紙　何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ

印刷　日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり

製本　弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

趣向體裁

（**當用日記**）　日々欄には過去同月日の重要歷史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し、天氣、寒暖發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尙各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、毎日記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむ。附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衛生心得及び內外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり。

（**懷中日記**）　毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案內等を掲げ日々の上下欄に內外名家の格言を掲げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を附記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を附す。

本懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

當用日記定價

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）　▲正價**金五拾錢**　郵稅拾四錢

中形（四六判）**特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入）　▲正價**金五拾錢**　郵稅　拾　錢

中形（四六判）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）　▲正價**金卅八錢**　郵稅　拾　錢

小形（菊判半截）**上製**（舶來洋紙總クロース金文字入）　▲正價**金三拾錢**　郵稅八　錢

本當用日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として掲ぐ

懷中日記定價

新形（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帶至便）　▲正價**金貳拾錢**　郵稅貳錢

上製（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百〇六頁）　▲正價**金拾八錢**　郵稅貳錢

並製（舶來洋紙模クロース表紙金文字入美本紙數三百六頁）　▲正價**金拾貳錢**　郵稅貳錢

本町三丁目
第二百四十番　**博文館**

女（その三）

十月（神無月）

行事――一日は茶道にて風呂を廢して爐開をなす日なり。六日より十五日まで淨土宗諸寺に十夜講あり。十一日より十三日まで法華宗諸寺院にて會式を執行す。十七日神嘗祭、新穀を伊勢太廟に奉るの儀式あり。二十日惠比須講。此月下旬十三夜の月見。

季節――「寒露」、「霜降」此月上旬は時候の變り目なるを以て陰晴常なし。但し下旬に入て天氣漸く定り所謂小春日和の輕暖となる。尤も北風漸く威を逞ふして往々結霜を見る。衣服は袷に羽織といふ所。



家事――金山寺味噌、辛子漬、瓜茄子の味噌漬等庖厨日用品は概ね此の月に製し置くを可とす。又夜具の繕ひ、冬着の準備、障子の張替等をなす。

食品――ほう〴〵、さんま、栗の甘煮、栗飯、松茸鍋、松茸めし、初茸汁、芋田樂、衣かつぎ、新そば、柿、大根の輪切。

遊樂――好天氣を撰んで郊外散策を試むるに妙。下旬より菊の隱逸を愛すべく、又紅葉の錦を賞するによし。名所は碓氷、日光、鹽原、高尾、通天橋、箕面等。

日曜――四日、十一日、十八日、二十五日、神嘗祭(十七日)





女優論

山路愛山

（一）

高等の教育を受けたる妙齢の女子、女優と申すになり候儀につき御問の條一々拜承、覺えず一笑す。尊兄の如き人も女優を珍らしきものゝ樣に思はるゝこと不思議の至なり。僕を以て之を見れば女優などゝ申すもの決して珍らしきものに非ず。昔より日本にても俳優は女のしたる業なり。今より殆んど千年前我國には傀儡子と云ふものあり、天幕を張りて諸國に遊歷し、男は手品、輕業の類をなし、女は愁眉、啼粧、折腰步、齲齒笑など色々の媚術を逞しくし、朱を施し、粉を傅け倡歌淫樂して以て妖媚を求むとあれば是れ正しき女優なり。但し此女優は內職に節操も賣りしものと見え父母夫婿も其不行儀を詰らず、行人旅客に逢ふと雖も一宵の佳會を嫌はずとありて甚だ不埒なるものなれども、是れは西洋の女優も內實は云々の次第なれば、何處も同樣の醜態なり。扨其後に白拍子あり、始は水干に立烏帽子、白鞘卷をさして舞ひければ男舞と云ふ、後は烏帽子、刀を除ぞき、水干ばかり用ゐしかば白柄子の名を得たり、是れ亦今の詞に飜譯すれば女優に相違なし。此女優公家の政道衰へて武家の起らんとする前に出でたれば藤原の師長卿は舞容端しからず憂思の態あり、其音は亡國の音なりと申されたり。此白柄子は遊女の類にして貴人の妾たりしものもあり。是亦西洋の女優と一律なり。近き世には女歌舞伎と云ふものあり。林羅山其趣を記して「男は女の服を服し、女

は男の服を服す、髪を斷ちて男髷と爲し、刀を横へ、囊を佩び、男女相共に歌ひ且踊す」と云へり。是亦まがふ方なき女優なり。寛永年間男女打交りの狂言猥りがはしく相聞えしとて女歌舞伎は禁制せられたれども女のをどり子と云ふものは其後も絶えざりき。是亦名は異なれども女優に相違なし。國の歴史も知らず、風俗の變遷も心得ず、無學文盲、盲人の垣のぞきにて西洋を一寸見て來たりし半可通が女優、女優と珍らしく騒ぎたりとて尊兄までが一緒になりて女優熱に浮されたまふことゝさりとては笑止千萬に候。

（二）

いや左様に申されまじ、西洋の俳優は社會上の位置宜しく、俳優は紳士、女優は貴女の仲間入もする程なり、是は日本に無きことなり。今より後は萬事西洋流の世の中となるべきなれば、女學生などの中に女優となるらんことを心掛け、文士が文士劇に鼻の尖を動めかすこと無理にあらずとの御論もありげに候。さりながらそれも珍らしきことに非ず、日本にもさる例は澤山あることなり。たとへば能役者と申すは今の劇道の意味から云へばやはり俳優に相違なし、「オペラ」の俳優も並の劇場の俳優も均しく俳優なれば能役者もやはり俳優なり。元祿時代、將軍常憲公（綱吉）、能の狂言を好かれ、自身も踊り給ひしかば大名旗本何れも其眞似をなし、洋々として其聲江戸城中に盈溢す。幕府家人の子弟競ふて之を學習し以て仕進を求むと、三王外記に記したるを見れば獨り士人の俳優を卑まざりしのみならず、自ら俳優を學んで出世を心掛けしものありしなり。其勢の窮まる所、間部下總守詮房朝臣の如きは身を能役者に起して第六代將軍文昭公（家宣）の側用人となり、諸侯の列に入り、天下の政務に參輿したり。之を露骨に言へば俳優が其俳優たるが爲めに天下の宰相となりたるものなり。たとへば其迄には至らずとも狂言師、踊の師匠、をどり子など云ふ廣義の俳優が士君子に交りて身を立て家を興したるもの幕府の時代には其例少からず、西洋のみ俳優が善き位置を占

む日本に無きことなりなど〻思はんは早呑込の愚案たるを免れず、是亦珍らしさうに言ふには及ばぬことに候。

(三)

然らば今の教育ある女性が女優になりたりとて別段珍事にあらず。其女優が紳士貴女に齒せらるべきものに非ずと云ふ仔細もなきこと故、女優になりたいものは當人の心任に致し然るべきや否やと云ふ問あるべし。此間に答ふる前に先づ今の教育ある女性が俳優になるは半は大勢の壓迫にて半は浮氣の沙汰なり。先づ浮氣の沙汰と云ふ點より申せば女優は日本にては例なきものなること、女優は西洋にては貴女の部類に入るべきものなること、劇は美術の極致なることなど云ふ輕薄の議論に煽動せられ、女性固有の虚榮心に驅られて女優心願に及びたるものなること是なり。か〻る女子と雖も世界には其實左樣に身の圍りから後光がさす樣な難有味のある職業はなし、女優々々と立派さうに申せども實は昔の傀儡子、白拍子、女歌舞伎、ヲドリ子の類に相違なしと思はゞ所謂聞いて極樂、見て地獄の諺に同じく、虚榮の雲は空しく散りて、始めて女優の眞面目を發見し、隨分難業たるを覺るべし。それを覺りたる上に大决心を起し、それにても猶は舞臺を死場所と定めんとならば、それは當人の心掛次第にて局外者より異論を挿むべき筈にあらず。但し花の香も遠くより嗅げばこそ美妙なるものなれ、近くよりて見れば毛蟲の多くたかり居るものなり。女傀儡子、白拍子、女歌舞伎、ヲドリ子の類、昔の女優は半面はいづれも藝人なれども、他の半面は娼婦なり。西洋の女優にても穴さがしをしたらば半は娼婦に類すべし。或は娼婦に類するまでならぬも、妻ある人の意中人、密娼の類多し。たとひ藝を賣りて身を賣らずと立派に口上を述ぶるとも元來弱き商賣なり。面首の美を以て男子の歡心を買ふが持前の業なり。始は堅志猛行、動かすべからざる操ありとも後には自ら心も弱くなりて遂に墮落すること十人に九人までは先づ免れぬ所なりと謂つべ

し。されば今日と雖も俳優の身持宜しからぬは常なり昔し平賀鳩溪、俳優の身持を論じ役者の身の上は、貴賤上下の贔負を請け、諸人愛敬を第一とするなり。わけて立役、ぬれ事師、女に贔負せらるれば棧敷の入が多い迚、給金も上るなり。或は女の櫛、笄、手拭、浴衣、烟草入に贔負の紋を付けること、是等は不屆千萬なれども、付けさせる親や亭主がべら坊と云ふものにて役者の方に科はなし、又奥勤の女中なんど傳を求め緣によりて、扇、楊枝差に役者の手跡、歌發句を書て貰ふて是を尊ぶこと祖師の御筆、定家の色紙よりも勝れりとす。夫にも千差萬別、蓼喰ふ蟲も好々と、己が贔負々々、或は西の下棧敷、通りながらの捨詞、夫から熱にうかされて種々樣々の夢を見る云々と云へり。此段今の俳優も大差なし。されば先頃高麗藏不品行云云の評判起りし時も、我等は梨園の常態此の如し。今さら怪むべきに非ずと思ひたり。男子此の如し、女優とても同樣なり。女優の中に在りて處女の貞操、若くは人妻たる信義を失はじとするは眞に鐵心石腸を要することにてかゝる節婦は泥中の蓮なり。概して云へば梨園敎坊は賣淫窟なりと申したりとて決して今の時勢に迂なる議論とは云ふべからず。其賣淫窟に身を投じて女傀儡子、白拍子、女歌舞伎、ヲドリ子の境界を甘んじ、而も其貞節を全ふすること是れ豈に容易の業ならんや。それが出來ると思ふものはやつて見るが善し後で泣かぬ積りならば其人や英雄なりと謂つべく候。

(四)

日本にても俳優が必しも士君子の齒する所ならざるにあらざりしは前文の如し。さりながら能役者などの士人に交り出世したる世の中は決して盛世に非ず。士風の墮落し、國の命脈の衰へたる時なり。常憲公、能役者を重んじて士林に列せしより士風衰微して復た振はず。德川の滅亡は此に兆したり。されば其頃にても慷慨の士は左樣のものと同席するを耻ち、窃に優倡侏儒の時を得たるを憤りき。今日西洋にて俳優の社會的位置が卑からずと云ふとも家風の純潔を維持せんと

する嚴格なる君子人に在りては決して左樣のもの丶來りて其家庭を混濁するを好まざるべし。昔しは濟敎徒は劇場を閉鎖し、近き世にも「ジヨン、ウエスレイ」師は其敎徒の劇場に行くことを禁じたり。此精神は英國紳士の家庭には猶ほ何處にか伏在すべし西洋は俳優を重んずるとて、紳士淑女も共に彼等と人並の交際をすると思はゞ皮相の觀察なり、和漢西洋、何れも俳優の社會は大體より云へば決して聖人君子の齒いすべきものに非ず、殊に我國情より云へば俳優はやはり別の世界別の種族と見做し置くが當然なり。傀儡子は良民に非ず、白拍子は遊女の部類に出で、男女の歌舞伎も良民に伍し難き賤種として取扱はれたるは昔の事にて今の世界は一視同仁、人間に差別はなきことなれども職業の種類に依りては士君子の齒すべからざるものなきに非ず、たとへば娼家の主人の如し。女郎屋の亭主なりとて一個の良民たるに相違なく、法律を犯して營業するものに非れども、君は女郎屋の主人の如しと云はゞ貧士も怫然として憤るべし。又藝妓は藝を賣るものにて藝を賣るの一事に至りては帝國大學の敎授先生も同じことなれども、實際藝者は藝ばかり賣り居らざるが故にたとへばその姉妹が藝妓をなし居るは士人としては恥づべきことならん。錦着て疊の上の乞食たる人外の境界より脫したる俳優も、今の俳優社會の內幕を標準としたらば、心あるもの誰れか之と齒するを好まんや。先頃團十郎の娘の亭主が妻の俳優たるを恥ぢて離婚云々の事ありしは今の日本に於ては當然の事なり。一人一人に詮議したらば俳優の中にも道學先生なきに非ざるべし。さりながら梨園敎坊の空氣を全體として見れば誰れか鼻を掩ふて其臭氣を避けざるを得んや。世には物好の君子もなきに非れば左樣のものをも我家庭に近づけて寬大の量を示し、併せて風俗の改革を計らんと企つるもあるべし。昔しは少納言入道信西と云へば宏才博覽、典故に諳練し、兼て佛敎天文に通じたる大政治家なりしが、徒然草に依れば此人磯禪師と云ふ遊女の爲めに諸の曲節善きものを選び、之を舞はせたり。白拍子の始は是なりと云へり。信西入道も中々の

通人なりと謂つべし。後世にも信西入道なきに非ず。人各々見る所あり、諸公の俳優を近づけたまふにも一理あるべし。さりながら今の世に於ては俳優などの事は門外に拒絶し、女性は決して之に近づけぬのを良策とすべし。此頃貴婦人の催す慈善會の演劇は貴婦人と俳優と親しく物を言ふ機會多く從つて弊なきに非ずとて爾今以後は慈善演劇には手を出さぬことに約束したる貴婦人の社中ありと聞きたり。餘りに片意地なる樣なれども今の世にては是も一策なり。所詮今の梨園敎坊を尋常の婦人が身を投じて而も節操を全ふし得べき所なりと思はゞ脚下の暗黑なる盲目の行動にして淺膚の至りなり、左樣の社會に愛女を投じて平然たる親は鐵道の「レール」に我兒を横へて猶ほ危險を感せざる人なりと可ㇾ申候。

（五）

然らば女優は卑しむべく、女優となるは非なりとして何處までも敎育ある女子の女優となるを排斥すべき乎と申すに我等は左樣には存せず候。女優となりて泥中の蓮たらんこと固より難儀ながら其難儀を忍びて貞節を全ふする女性は必無と云ふべからず。其上天の配劑にて女優たるより外は渡世の道なき女もあるべし。或は雄志大才を懐きながら用ふるに所なく、女優の群に投じて其鬱勃の氣を散ずるものもあるべし。或は佛の方便と同じく愚民を敎育し、風俗の源を淸くするは芝居者となるに限るとの見込をつけて好んで身を泥海に投ずるものもあるべし、浪人者が口過ぎに太平記讀みになり、講釋師になるも同樣の事なり。芝居は萬人の喜んで見る所にて世の風俗も芝居を學びたるが多ければ俳優の感化力は坊主の説敎に勝れりと云ふは眞なり。女優たらんとするもの身を以て風俗改革の模範たるべき猛志を起し好んで人の赴かざる所に赴くものならんには是れ亦一見識なり。決して非難すべきものに非ず。其上今の世には隨分左樣の女も出來兼まじき勢なり。先日某老女史は其門下より女優志願者を出したるは口惜しきことなりとて歎息せられたる由新聞

紙に見えたれども、我等は女史なども知らず覺えぬ中に女優志願者の發生を助け居らるゝには非ずやと懸念するものなり。仔細は今は女學校流行の世の中にて女子の學校に行かざるもの稀なり。無邪氣なる女學生たるもの誰れか人生の行路難を知らん。行く〳〵はきつと賢妻良母になるべしと安心して扨學校は卒へたり。年頃にはなつたりと云ふ瀬戸にて世の中を見れば同窓の學友は富貴の家の女子なれば早く良縁ありて先生の敎の如く良妻賢母になり濟ましたり。さりながら我は貧人の子なり。敎育は人並に受けたれども今の世には金なければ善き婿がねは得難し、しばらく學校の敎師なりともして婚禮の仕度をなさん乎。同樣の女子多ければ其位置だに得ること容易に非ず。それを得たりとて餘り香ばしきことにも非ず。花の盛りを寂寥たる孤樓に暮らして徒らに老孃の譏を得んとす。さらば例の女の判任官とならん乎、商社の女通辯とならん乎、帳付けとならん乎。靑春徒らに老やすくして、而も男子に愚弄せられ易し。氣位だけは敎育の御蔭にて高くなりたれども、氣位が高き故、それだけ常人の妻とはなり難し。就中高才逸足の逸物にして尋常平凡の生活を好まざる女性に在りては然らば致方なし、せめては當今流行の女優ともなりて萬人の喝采歡呼中に抑へがたき慾望を埋めんかとは自然に思ひ付きさうなる事なり。十年は一昔とは申せども、此十年間の日本婦人の位置は丸で變りたり。昔は婚禮も容易にて、着のみ着のまゝの貧女にても相應に貰手ありしが今は女房の持參金を目當にするもの多く、貧女は大抵失戀に泣かざるを得ず。從て老孃も多くなるべき勢なり。而して女子敎育の進步は恰も此勢に鞭うつて進むものにして女の氣位は高くなり、婚禮は難儀になり、學校にては賢妻良母を育て上る積りにて親切に敎育すれども、賢妻良母の候補者餘り多く

其はけ口却て少く、遂に大膽にして志氣ある女子をして暗中飛躍を試みて、女優にさへならしむるに至る。大勢の壓迫眞に以て致方なき次第なりと申すべし。されば我等は女學生超過の點より申せば、彼の老女史なども不レ知不レ覺女優製造の手傳を致し居らるゝものならずやとも懸念するものに候。

（六）

筆の序に申すべきことの候。近頃は演劇を始め總じて公共の娯樂大に進みたるは西洋流にて賞讃すべき事の如くなれども、西洋にても公共の娯樂と家庭の娯樂とは一齊に進むこと少く、公共の娯樂盛んなるときは家庭の娯樂の荒むが常にて倶樂部亡國など云ふ激語を放つ論者もあることなり。新聞にて見れば劇道の改革は追々盛んにて大分西洋臭くなりたれば、之が爲めに青年男女の心を外に驅りて家庭の趣味を感せざるに至るが如きことなき様あらまほしく存ずるなり。東京にて電車に乘りて婦人の衣粧を見るに十年前とは華奢の進歩莫大なり。衣粧の華奢は一面には家庭の娯樂の減少を示すものなり。婦人が多く家庭に居れば衣粧も見えを張らぬ筈なり。婦人が外出すること多ければ衣粧の華奢はそれだけ進むものなり。我等是に依りて人情の濃淡、風俗の盛衰を察するを得べし。大日本は今や變化の渦流に沒せり。近き將來は如何。遠き將來は如何。關心に不レ堪候。





今後の婦人に必要なる頭腦

井深花子

目的の無い學問

女學生達の氣風も段々變化して參りました。十年二十年前の女壯士といふ樣な風は、地を拂つて無いと申しても宜しうございます。けれ共女壯士肌の亂暴な風は絶えて無い代り、今度は又媚びるやうな風が女學生一般に及んではゐないかと思ひます。何か恁う人に媚び社會に媚びるやうな氣風、例へば世間で家事經濟を女子によく修めさせねばならぬと言ふ傾向になれば、最う只管にそれにばかり走つて了ひ、又その流行が變れば誰も彼も靡然として皆それに走るといふ風があります。

學校などに出て居りますと、折節フッと怎麼疑ひが起ります。それは元來衆人何ういふ目的で學問してゐるのだらうといふ事です。何うも明瞭した目的が心に無いやうに思はれます。

何處の學校も直ぐに良妻賢母といふ事を申しますが、さてその目的とする良といひ賢といふ事は怎麼事でせうか。又口でこそ良妻賢母ですが、それを實現するには却々の學識能力を要しませう。その邊の事も今の若い婦人の間には一向問題になつて居らない樣に思ひます。

好ましからぬ傾向

そして一般に「安きを欲する」といふ心持が先に立つてゐると思ひます。さういふ處から自然獨身を好む

傾向が進んで行きつゝあります。頭腦の問題に一寸遠ざかるかも知れませんが、頭腦を云々する前に先づ此の事を申したいと思ひます。獨身などは間違つた事で、又其麼風が廣まつて行くのは世のために大變惡い事と思ひますが、然も其麼考を起す人の多いのは畢竟氣樂にしてゐようといふセルフイッシな考より外には何もないからで御座いませう。尤もこれは高等女學校程度の人には未だありません。それ以上の教育を受けた人に多いので、自分の糊口を計る位の技能を得て居る處から、其麼考になり易いのです。

私は元來良妻賢母の務を全うするには、今の高等女學校だけでは到底不足で、其の上に猶一段の學修を要すると思つて居ります。然るに今の高等女學以上の教育を受けた人達——言ひ換へれば始めて良妻賢母となるべき望みある御婦人達が、却つて僅かの技倆を頼み、家庭の主婦たるべき義務を面倒がつて、糊口さへ出來れば結句氣樂と下宿屋などに居るのを見ると、實に何とも言へぬ感に打たれます。

婦人である以上は善き妻たり母たるが己れの天職。頭腦や智識や技藝の養成も皆この天職の爲めといふ精神を持つ事が第一の緊要問題と存じます。

知的興味の必要

前にも申した通り私は高等女學校だけでは良妻賢母の資格に不足と思ひます。それだけのお母樣では子供が高等小學へ進みましたら最う子供の質問に應じてやる事は出來まいと思ひます。家事の整理でも何でも總てその程度で、到底不十分を免れません。

ですから女學校卒業だけでは、明晰な頭腦を養ふといふ上にも、遺憾の多いのは無理もない事と思ひますが、それでも若い婦人に好奇心といふもの——最つと物を知るといふ事についての興味がありましたら、まだまだ頭腦の開發が出來る事であらうと思ひますが、何うも其の興味が若い御婦人に無いやうです。

西洋婦人などですと、例へば正月の注連飾一つに就いても、これは何ういふ由來で何ういふ意味で飾るも

のかと、いろ〳〵の質問を出して精しく記憶えて了ひます。這麼風ですからずん〳〵と見聞が廣まり、智識も趣味も饒かになつて、話の材料も從つて殖えて參ります。其の他理科の事でも地理の事でも、何でも皆知るといふ事に興味を抱いて居りますから、ずん〳〵進歩して止まないのですが、日本婦人は何うも不可ません。

活用的頭腦の養成

女學校卒業生が一向活用が出來ぬといふ非難はよく耳にしますが、これは寧ろ家庭の罪だと思ひます。今の家庭は元來餘り學校に任せ過ぎてゐます。活用活用と言つてもそれは家庭で活用させる樣にせねばなりません。無論學校の敎授法の不完全もありませうし、又各自の努めぬのが固より悪いのですが。

例へば暑中休暇だと言ふと山や海へ遊ばせおき、又平常とても學校の事ばかりさせて家事には關係させぬのです。その內に卒業。お嫁に行く。すると嫁つた先で非難されるばかりか、實家の母親さへ餘り活用が出來ないと言つて苦情を言ひます。本人にも責任はありますが抑ゝ家庭が悪いのです。

それに次では女學生相互の交際の仕方に因ります。亞米利加の學校には此方程家事科などゝいふ科目を入れてありませんのに、卒業生の活用の利く事は實にえらいもので、家政なり社交なりを卒業と共にずん〳〵行つて參ります。私は米國でこれを不思議に思つて尋ねて見ました處、然ういふ事は幼さい時から母と共同して行つて來た事ですからと申すのです。それにしても田舎などから出て來て入學して、少時する內に所謂土臭い所が除れて、立派に擧動ふやうになつて、そして卒業する頃は確かに入學當時よりも、遙かに家政上交際上の技倆を上げて行くのを見まして、何うも唯從前家庭で練習してゐたからと言ふだけではなく、他に理由があらうと思つて居りましたが、後に思へば是れは女學生相互の交際上、切磋上から得られる結果で御座いました。

米國の學校の寄宿舍を私は「良家庭の殖民地」と名づけた事でしたが、全くその通りで、此方のやうな、學生同士の交際といふと無禮講になつて、お菓子の袋を裂いて直ぐ兩方から手を出すといふ樣な事がなく、隣りの室のお友達が訪問して來ても——單に用事で一寸來るのでなく、訪問して來た事となれば——チャンと平生の交際の作法を頽さずに應對會話するのです。良家庭の風儀を此處で更に練磨するのです。恁ういふ風で自然に磨きが懸つて行き、又お互の家庭へ招かれた時などに始終應用を忘れませんから、成程これが爲實際に離れずに、智識がよく消化されて活用いてゆくのだと合點が參りました。

此の樣に米國の學生の活用的頭腦がずん〳〵進むのは、學校の力を待つ譯ではなく、家庭の素養と、其れを當人同士がよく應用して磨く心とがあるからです。日本の御婦人にも最つと恁ういふ處を注意して戴きたいものに思ひます。

新工風の興味

新案、新工夫を試みるといふ興味が又日本婦人に缺乏して居るもの〻一つで御座いませう。家庭の改善といふ樣な急務の薩張行はれないのも、全く此の趣味が缺乏してゐるからかと思ひます。

恁うなつたのも固より原因は御座いませう。元來日本では種々の形式が餘り決り過ぎてゐるやうに思はれます。生花の法は恁う、茶の湯の式は何うとチャンと事が決つて居ります。衣服の事でも四季それ〳〵に大概の樣式は定まつてゐて、流行となればそれが又一種の型となつて、一般が皆それに從ふといふ狀勢です。その他種々な原因が御座いませうが、兎も角も新案を試みるといふ興味が婦人にはありません。

毎時西洋婦人を賞めるやうですが、美點は美點で學ばねばなりません。私の知合の或る西洋人夫婦で、既う長らく日本に住つて居りまして、芝の方に家作などを持つて居り、その一つの——然も小さな家に住つて

居りますが、それは全體疊を敷いた、普通日本式の家ですが、それを却々旨く工夫して、一寸西洋室の樣にも使へるやうにし、棚などを器用に吊つて、それへ裝飾に花形を截つたものを下げなどして、巧みに西洋趣味に調和させる工夫、其の他一つの窓掛でもよく調和の良いやうにする工夫など、却々考へて行つてあります。斯かる新工夫、新研究の趣味といふものが、最つと日本婦人にも出て來ねばなりますまい。

終生棄つべからざるもの

最後に一生棄てゝはならぬものは讀書で御座いませう。私が反覆して良妻賢母となるがためには、高等女學校以上の教育を要すると思ひますが、よし高等女學校だけで止めるにしても、書物を讀まうといふ頭腦さへあれば、必ず年と共に進歩するは申すまでもありません。私は學問は一生のもの、讀書は一生廢めべきものではないと思ひます。

◎人より何事にまれ談話ある時は、まづ其事を聞うけて後靜かにこたへをなし、又己が思ふ事も言ひ出づるものなり。あはつけき人は人の話しも中ばきかずして我より物を打つけに云ひもてさわぐなど無禮にして賤しきものなり。

◎人より他人の惡評など聞くとも直ちに信ずべからず。すべて世の中の人の心はあさましきものにて、或は何等かの關係の事より嫉妬のあまりに其人を譏り、又は意見の合はざるより、妄りに無き事をいひて惡評するなどあるものなり、故に自から其人をよく知らざる時は如何なる耳新らしき事なりとも只聞流し置きて決して人にいふべからず。

◎家の內は何事も規則を定め置かざれば亂れ行くものなり。朝夕の事はいふまでもなく、すべて物品の位置など整頓し、臨時の事ある外は取亂さゞる樣心掛くべし。主婦姫の行ひ正しき家は、召使に至るまで、いつしか見習ひて、日毎に仕業、おこなひも正しくなるものなり。



今後の婦人に必要なる頭腦

女子英學塾講師　辻村靖子

頭腦鍛錬の基礎

これは頭腦の問題に直接の關係が無いやうですが、塾などの女子を見るにつけて湧き上るやうに感ずる事は、最つと／＼身體を壯健にしてやりたいと言ふ事です。身體が壯健でなければ頭腦を明晰させる事も出來ず、何の修業も貫く事が出來ません。嘗ても旅行して信濃から飛彈、越中、越後の方を廻つて歸京した事がありますが、その途々の見聞でも度々然う思ひました。山へ登れば挫折つて了ひ、海へ入れば胸が惡くなつたと言ひ、全然最う意氣地がありません。塾では師範部の方は嚴重な體格檢査を致しますから然うでもありませんが、一般に申せばまだ糸のやうに繊細した體格の人が尠なくありません。恁ういふ人を何處までも學力頭腦の進むやうにと窘めましたら、最う何うしたつて殺すか病ませるかより外ないと思ひます。日本婦人の體格をどうぞ最つと壯健にしたいものだとは、平生からつく／＼感じて居る事で御座います。

ずん／＼物を言ふ習慣

元來今の日本婦人は無理な境遇に置かれてゐると思ひます。家へばかり縮めて物の言へぬやうにして置いて、そして話が出來ないと責め、籠の鳥にして些とも世間へ出さずに置いて、そして世間を知らないと非難

し、科學も智識も頭腦も得させずに置いて、そして無能力だと攻撃する。これが今の實況では御座いますまいか。ですから、何うしてもずん〳〵物を言ふ習慣を付けて參らねばなりません。何うか最つと物を言ふ樣に、發表すべき意志は最つと明瞭發表する樣にと、塾でも此の點に注意して居りますが、これは一般婦人にも總て望ましい事に存じます。

　近來コッポ博士御夫婦が來朝されて、その遊覽の折折の御消息は新聞で誰方も御存じの事ですが、殊に同夫人の何事に對してゞも、直ぐに何等かの觀察、批評、賞歎を爲されるのに感心してゐるお方が多く御座います。私も同感ですが、これは一つには、ずん〳〵物を言ふ習慣が付いてゐるからではありますまいか。日本の奧樣達とお話するのと、敎師仲間で話しするのとでさへ最う大分樣子が違ひますもの。『これは何うでせうか。一つ思ひ切つて批評して戴きませう』など〻申しても、奧樣達は却々口をお開きになりません。

　要するに今後の婦人は最つと物の言へるやうな頭腦の傾向にならねば不可と思ひます。と申したとて昔から言ふ井戸端會議的の、人の蔭口ばかり喋々する樣な事の避くべきは勿論です。然ういふ事を避けてそして猶ずん〳〵口の開ける婦人にならねばならぬので、然う望む上から自づと要領を得る頭腦の養ひも出來て行くのです。

要領を得ぬ舊婦人

　今は猶隨分の混沌時代だと存じます。何故ならば立派な旦那樣の處に分らない夫人が隨分居らつしやいますから……。然し分らないと言へば地方の財産家の奧樣こそ舊式の筆頭第一に載るもので御座いませう。行つて話して見ると『ホントウに日本婦人は死んでゐるのか活きてゐるのか』と思つて、傍目でも齒痒いやうな事があります。『この夏は御子息樣も鹿兒島(の學校)から御歸省ださうですね……失禮ですが旅費は何の位お費りになりますの』『ハア、九圓とか申しましたよ』『九圓? 汽車賃は○○驛から○○驛まで〻御座いませ

う。』『何うで御座いますか。私は薩張り』。まづ總てが這麽風で、其の家の財產額を聽いても分らず、一ケ月の收入が何うで支出が何うかを尋ねてもそれも分りません。其の位の方が可愛らしくて善いと申せば善いかも知れませんが、然し自家の財產や收支の大體位は知つて居て然るべきものでせうに、實際少しも頓着せぬ方が澤山あります。ですから一朝夫が歿くなつたとなれば最う闇黑で、他人に滅茶々々にされなどして、陷るべからざる運命に陷つたりなどするのです。

一寸噂をしても『彼家の遺產は八百圓だと言ひます』と仰在るから『餘まり少ないぢやありませんか。そりや必度間違でせう』と言ふと、『それぢや八千圓でせう』と暢氣なものです。それで決して愚かな婦人ではありません。昔風の寧ろ怜悧い女です。唯新智識も現社會も絕えて分らず、從つて分析的の明瞭した頭腦を持つて居らないので、家庭の細事、即ち衣服の修理とか日常の食物とか言ふもの丶外は、全然要領を得ないのです。夫が嚙んで含めるやうに、『家の財產が減つた譯ではない。價格が出たから彼處の土地を賣るのだから』と言ひ聽かせても到底分りません。『今土地を賣つて株券にでも、代へて置けば却つて儲かるのだから』と言つても何と言つても諾かずに、唯『先祖代々の土地を手離すとは唯事ではない』と泣き歎るなどといふ實際譚が、決して珍らしく御座いません。

地方の財產家の奥樣にこそ眞誠に目を開いて戴きたいもの、あれでは人間に生れた甲斐が無からうと思ひます。如彼いふ風では男子が妻を下女扱ひにするのも無理が御座いません。人格人權もあれでは悉皆自から拋棄してゐるのですもの。これにつけても今後の婦人は明晰した頭腦を養つて適れ見識あり品格あるものになりたいと思ひます。

新時代の婦人の魂

私の親族で或る地方官の妻になつて居るものがありますが、その夫が折節言ひ出しては心から妻に感謝して居るものが御座います。『私の今日あるは全く妻の力

が多きに居る」と申すので、『それは地方官など務めて居ると、いろ／＼な者がいろ／＼な手段方法を運らしては賄賂を贈つて來るのです。それをピシ／＼刎ね付けて返して了ふ事は我妻でなけりや出來ません、お蔭で隨分收賄沙汰でやられた者もあるのに、今日までそんな醜態を演じません」と申すのです。その代り世にいふ政治家貧乏、學者貧乏で、『私は御承知の如く、未だに三越白木へ注文したる一枚の晴衣さへも妻に與へる事が出來ません。けれども妻は其麽事に聊かも不足は言はない。何處の會へでも十五年前の結婚の時の紋付を着て平氣で出掛けるのです。この流行後れの古い紋付を着て恬として耻ぢない。この氣象がなくちや到底政治家の妻にはなれない」と淚を溢さぬ計りにその夫が申すのです。

昔から貞操の敎は何の珍らしい事もありませんが、然し恁ういふ氣象は全く新らしい學問、新らしい頭腦からでなければ出て來ないと思ひます。よく夫の職業夫の精神を理解して、それに同情し、又それを尊重するといふは、何うしても新學識新頭腦の作用であると思ひます。この親族の婦人(實は私の妹です)と前申した地方の財產家の奧樣とを比べたならば、實に隔世の感があるではありませんか。けれど何うしても今後の婦人は暗黑の一室に閉ぢ籠つてゐるやうな頭腦ではなりません。最つと世間も分り交際も出來、事業の價値や活動の尊さも理解し、組織立つて物を考へる事も出來るやうな頭腦にならねば不可ません。

けれど新敎育を受けた今の若い令閨でも、夫に少々負債をさせても先づ立派なお召をお强請になる方が多くは無いでせうか。これでは新らしい頭腦でも何でもないやうに思はれます。

多方面の人との交際

前に最つと物の言へる樣に、又世間を理解するやうにと申しましたが、それには婦人が最つと多方面の人に交る事が必要と思ひます。これは頭腦といふ事に離れるやうで決して然うでないと思ひます。

男女互に理解し合はねばならぬ必要から、健全なる男女交際の最つと行はれねばならぬは無論ですが、それを姑らく措くとしても、兎も角も廣く人に接せねば物も言へず、交際も出來ず、世間も分りません。毎度西洋婦人の實に交際上に氣の利いて巧妙なるには感服して居りますが、あれは全く廣く他方面の人に接して實驗的に得た事だと思ひます。例へば塾で晝飯の時、(卑近な例ですが)假りに傍の人のお辨當のお菜が、チト極り惡いやうに詰らないものだらうと思はれる樣な時は——また其れを西洋婦人は實に早く感付くので、不思議な位鋭敏なものです——何とか言つて、用事を旨く造へて外して了ひます。又結構な物の時には、『ソレは何といふもの?』と指しゝて聽くといふ風。實に人の氣合をよく察してそれは微妙なものです。然ういふ風に氣の附くには固より智識學問の力も要りませうが、又何うしても多くの人に、然も多方面の人々に廣く接して行かねばならぬと思ひます。その間から婦人の頭腦の開拓されて行く事は何れ程大きいか知れません。

けれど然ういふ交際上の事は家庭や社會が一般に許してくれねば出來難い事ですが、然ういふ問題は先覺者や有力者に任せる事として、各自の心次第で磨いてゆかれる部分を、十分に磨きたいものと思ひます。頭腦を磨き智識を磨く事は、やがて又道徳を磨く事であると私は信じて居ります。

末の見込のある婦人と無い婦人

三輪田元道

好運の第一資格

人間は内部外部兩面から見ねばならぬものである。

今まづ外部の事から擧げてゆくと、

第一、末の見込のあるべき婦人には、まづ健康といふ資格が必要である。即ち血色の澤やかな、元氣のいゝ、愉快な婦人で無ければならぬ。恁ういふ健康の婦人で無ければ、到底末始終の幸福は得られぬのである。よし一時は頭腦がよく活用く怜悧な婦人でも、虚弱な神經過敏な、弱々しいやうな婦人ならば、到底末始終の見込はない。されば外部から言へば、身體を壯健にして、常に嫣やかに、十分元氣でゐられるやうな婦人とならなければ、まづ第一の資格を失ふ道理である。源氏に描かれたる夕顔の君のやうなのは、即ち纎弱なる婦人の標本で、到底末の見込の無いものである。

表情と婦人の行末

さて第二は内部外部兩方に跨つてゐることで、即ち内にあるものが外に表はれて來る所謂表情が大切である。

さらば如何なる表情を有つべきかといふに、一言にすればチーアフルな、嫣然した、愛嬌あるものでなければならぬ。此の樣な婦人は學生時代にあつても主婦になつても、又社會に立つても、常に人の同情を得て成功すべき婦人であると思ふ。

之に反してメランコリーな、幽欝な、ヒステリー的な女子は、一家族としても隨分迷惑至極なものである

嘗て試みに『何ういふ妻君が最も滿足か不滿足か』と友人に訊いて見た處が『外から歸つて來ても病氣だとかヒステリーだとか言つて、ブラ〳〵と不機嫌な不愉快な顏をしてゐるのが一番厭だ。最う家へ歸る氣がしなくなるが、それを嫣やかにいそ〳〵と、元氣よく立迎へて與れるならば實に滿足だ。初めて家庭が眞に休養の處だといふ感が起る』と。これは蓋し總ての人の經驗を言ひ現はした語であらうと思ふ。

希望の曙光

次に精神上から言うて先づ要する資格は、役に立つ人といふ事である。言ひ換へれば即ち才幹、何方へ向けても切つて廻せる婦人である。例へば女學校で茶話會があれば其の幹事となるとか、或は會計となれば計算がキチンと出來るとか、餘興の準備にも間に合へばすべて不公平なく取捌くといふ樣に活動けると恁ういふ婦人ならば行末社會に立つても成功する事疑はない將來の立派な社交家や名主婦は、學校時代に最う其の運命を示すと言つても可い。

男子の方で見ても、學校さへ上席で出てゐれば世の中へ出ても上に立てるといふ時代では既う無くなつて來た。中學を卒つたゞけの人が却つて活社會では大學卒業者を後に瞠若たらしめてゐるのもある。殊に婦人などは程度の高い學校出よりも、然らざる婦人が却つて活動いてゐる例は珍らしくない。その差別はと言ふと要するに才幹のある婦人が成功するのである。女は固より政治家にもなれず將軍にもなれぬが、然し主婦としてよく働き、優れたる良妻賢母となつたならば男子が大政治家、大將軍となつたと等しく、その婦人の成功であらう。

さて次に末の見込のある婦人に必要な資格は、人の善い婦人であるといふ事である。然も此處が面倒なので、役に立つ婦人といふものは其の代り少し有毒性なものである。然るに役に立つ婦人で然も人の善い、道德的の婦人でなければ眞正の見込あるものではない。役には立つが人柄に厭味があつて、人の缺點、弱點は

かりを見る、意地の惡い人といふやうなのは、遂に終を善くするものではない。玆にいふ人の善い人といふのは、言ひ換へれば即ち親切な婦人といふ事である親切な婦人は母としても妻としても、はた隣人としてもすべて人望を得るに違ひはないのである。

されば親切にして才幹あり、然も身體が健やかで、表情の愉快なる婦人は、確かにこれ末の見込の十分なる婦人である。

運命を左右するもの

さりながら人物は良くても運命が惡かつたら何うしよう。女は運命次第で玉の輿に乘るのもあれば乘れぬのもあると、これはよく言ふ事である。けれども女子の運命は全然初めより偶然のものとのみは言へない。世に時めいてゐる婦人を見ても、いろ〳〵其の運命を齎すべき條件が付いてゐる。けれども又その條件たるや決して人物の一點のみとも言へぬから、玆に少しくそれ等の事を考へねばならぬ。

まづ數へて見ると女の運命を定むべき條件は、前に言うた身體、智德より、さては容貌、財產、親の地位門閥、親戚、知己朋友の良否、恁ういふものが皆女の運命を左右してゐるものである。

まづ通常何が第一番の働きをなすかと言へば容貌である。婦人がこれに憂き身を窶すのは無理もないと思ふ。然し之を以て婦人取捨を決するは固より理想的の事ではない。次は親の地位——職分官等といふ樣なもの——これが高ければ其の力で娘を何うにか恁うにか片付けて行けるといふ事もある。然しこれも無論理想的の事ではない。次は持參金。殊に歐羅巴などはこれが最も尊ばれるさうである。日本などでも亦これが行はれてゐるが、これ亦理想的でない事無論である。理想を言へば固より人物を本位にすべきもの、女らしい婦人、身心の健かな婦人、これが第一條件となるべきものであるが、社會がまだ其處まで進んで居らぬから、寧ろ第二條件、言ひ換へれば附屬條件に即ち地位財產によつて決るやうな狀勢である。即ち女子の運命

には地位財産といふものが至大の影響を與へてゐるのである。

然し其麼事で婦人を取捨するは誤れりといふ事は、早晩世に認めらるゝこと疑ひも無い。否、今日でも識者は既に認めて居るのである。されば將來に運命を決すべき若い婦人が、何時までも地位財産などばかり重んじてゐたら、それは時勢後れの考と言はねばならぬ。世の中はずん／＼人格を以て運命を開拓すべき時勢に進んで居るのである。

賴もしい床しき女

されば末の發展に最上の希望を言へば、第一第二の條件を悉く備へてゐるにあるが、其麼理想的の好運兒は世に幾人もあるものではない。つまり二個の條件を具へてゐる者は、一個の條件を具へてゐる者よりもより末の見込のある幸な婦人である。さればより多くの條件を具へる程、末の見込も倍加してゆくのであるから、その少なきを歎くよりも、成るべく多くの好條件を具へんと努むるに如くはない。

けれども我々から見れば就中その人柄に屬する條件を具ふることそ、末の見込を有望ならしむる所以である之を具體的に言はゞ、人たる以上、女ながらも信賴するに足る、床しい、賴もしい婦人が眞正の人物であらう。同時に又一寸逢つても和氣靄々として、比較的謙遜で、それながらに又胸襟を披いて語るやうな、度胸のあつて且つ懷かしい處のある婦人。かゝるものが才德兼ね備へた有望な婦人であらう。容貌は敢て美ならずとも、何となく高尙な、氣高い處あれば申し分はない。その他に至つては外部條件であるから、有るは無いに優つてゐるが、要するに何うでもよいものである若し其のどうでもよいものを一二具へてゐるのに慢じて、却つて根本の内部條件を立派に磨く事を忘れたならば、即ち衣服を美にしブローチを輝かす事のみを知つて、心の玉を磨く事を忘れた者があつたならば、それこそ末の見込の無い女と斷言するに躊躇せぬのである。

末の見込のある女と無い女

女子高等師範學校教授　篠田利英

死活を定むる條件

末の見込のある婦人も無い婦人も、皆其人自身みづからが運命を語つて居ると思ふ。私が多年の實驗から感じてゐる事を一二申して見ようならば、

まづ第一に死活を定むる條件は、其の婦人が注意深いか何うかといふ事である。例へば學校で學課を學ぶにしても、其の他の稽古事をするにしても、或は將來人の妻となつて家事の整理をするにしても、注意深ければ皆成功するであらうし、粗雜な不注意な人ならば失敗に終るに限つて居る。

然も其の注意深い人か否かは、鳥渡した處で直ぐ分る。例へば(附屬の女學校で)廊下に紙片が落ち散つて居る、それを注意深い人は直ぐ目に付けて拾つて一定の場處へ置くがそは〳〵としてワヤ〳〵と騷がしい人達は少しも其麼事に頓着しない。傍で默つて見て居ると「ハ、ア」と直ぐに首肯かれるのである。又女生徒等の知らぬ間に、敎場の机の中を一々見廻ると直ぐ分るけふは檢分のある日と豫て知れてゐる日には整理いてゐた机でも、知らぬ間に見ると中は紙屑が充滿で物は亂雜。まるで引掻廻したやうなのが澤山ある。然るに然ういふ風に秘密で調べた時でも、毎時チヤンと淸らかに整理されてゐるのがある。これを見較べると誰でも後者を取る心が起るは當然である。

その他習字の爲振り、裁縫の爲振り、一寸とした端端で注意深い人物か否かゞ直ぐ分る。たとへ習字用の紙とても、鄭寧に取扱つて其の空白の無い樣によく使ふ者と、亂脈に書き散らして餘白が殘つてゐるのをズンズン醱去つて了ふ者とある。さては裁縫に針を失くした、小布片が見えぬ、糸屑は邊り一杯、といふ樣なのに至つては其の滑稽なるは先づ忍耐するとしても、

其麼調子で將來家政をやられては堪らぬと誰でも避易せざるを得ないのである。

整頓家と交際家

けれども人間は物の整理をするばかりでなく、又人に交るといふ事がある。然るに右の樣に何事にも注意深くて、總てよく事物を整頓する性質の人は、一方に何處か極り過ぎた窮屈な處があつて、人との交際は下手ではないかしらといふ疑問が起る。これは無理ならぬ疑問である。

處が實驗上は然うでない。私の模範的



だと思つて居つた生徒などを見ても分るので、それは最う注意深くて頭腦が綿密で學課の成績の最優なるは言ふまでもなく、そして快活で隨分戲言も言ひ合へば高笑ひもする否運動會で競爭をしても一等を取るといふ樣な婦人でした。今はさる令名ある文學士に嫁して和樂な家庭を作つて居る。其の他今私の頭腦に浮んで居る數多の實例を考へて見るに皆此の婦人と同じ樣な好傾向を持つて居る。決して交際下手の人々とは思はれない。

勿論中には注意深いと共に多少陰氣な側の人も無いではない。これは何うも面白くないが、概して言へば注意深い婦人が却つて打解けた交際に長じてゐると言つていゝ。されば整頓家必ずしも交際家と兩立せぬのではない。否、寧ろ此の兩面を注意深い人が兼ね備へてゐるといふが實際である。

けれど又恁う云ふ婦人もある。例へば客が來る、茶を出す、さあ其の茶碗なり菓子鉢なりが少し斜めになつて居ても氣になつて堪らない。不覺話の調子が入興まずに眉に皺が寄るといふ樣になる——。これは所謂整頓癖に陷つたもので、恁うなつては人との交際は出來ない。一人で精々キチンとして、そして孤棲獨居で寂寞としてゐるより外仕方はないのでせう。

人望のある婦人と無い婦人

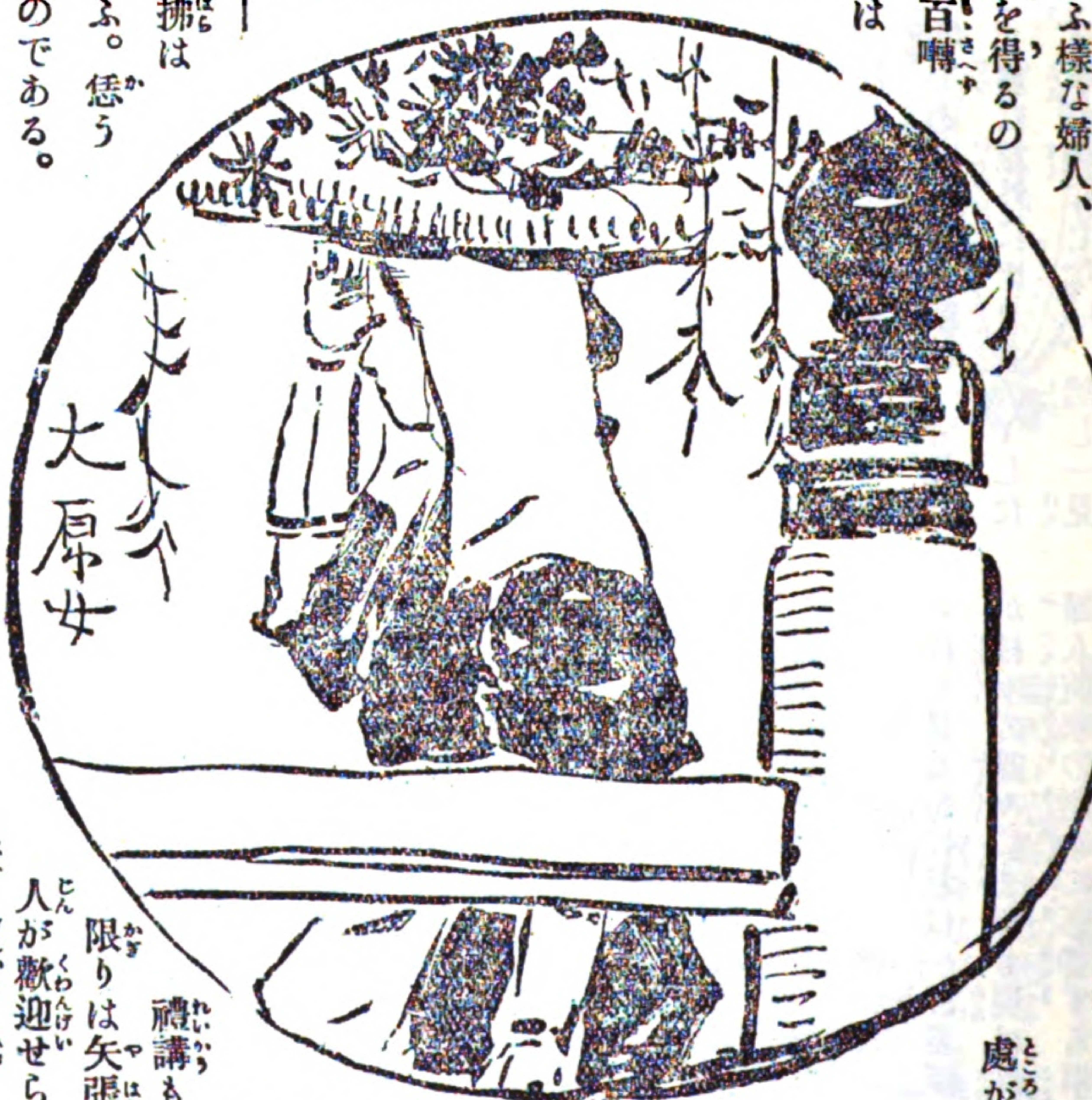
右のやうに癖に陷つた婦人や、或は陰氣で人と打解けて話せぬ婦人は、これは何うしても人望はない、固より無理ならぬ事である。

之れに反して、とかく陽氣な、派手な浮いた、調子の婦人が人望がありさうに思はれる。そして然ういふ婦人は自から人望ありと思つてゐるらしく、内心得意げに見えるのがある。果は得意の笑を憚らず表に現はしてゐるのもある。

さりながら是れは當人が餘程考へ物である。果して他の人々が自分に「人望」を寄せてゐるのであらうか。人望といふものを解剖すると、之れには尊敬といふ分子が無ければならぬ。信用といふ分子が無ければならぬ。然るに單に人に好かれる、面白がられる、愛想よくされるといふので、それで「人望あり」と得意がつて居るのは少し見當違ひではないか。弄戲にするやうな意味でチヤホヤされるのは人望ではない。

さらば眞の人望は何ういふ人が得るかといふに、つまりは矢張注意深い人——最つと具體的に言へば、中心に一つ締つた處があつて——即ち一定の主義があつて——その締つた處は決して頽さぬが、それ以外に於ては戲言もいふ、打解けもする笑顔で氣輕に人にも接

する、茶話會でも快活に、餘興の準備にでも快く奔走する、といふ様な婦人、慥ういふのが眞の人望を得るのである。唯口が輕くて百囀りに囀り散らしたのでは忽ち他人に腹で笑はれたり、或は爪彈きされたりするのであるが、幾ら快活に談笑しても締る處が締つて居るから——例へば粗雜な自堕落な言葉は決して使はぬとか、他人の陰口は決して言はぬとか——おのづから人に敬意を拂はせるだけの品格が伴なふ。慥ういふ婦人が人望を得るのである。



ざつくばらんの妙味

處が又交際の妙味は餘り締り過ぎないにある。形式ばらずに、ざつくばらんに少しも氣を置かない處にある、だから然ういふ風でなくちや到底親しい交際は出來はしないと、慥ういふ心持の婦人もあるやうに見えるが、さて其れも何うであらうか。

比較的下等な社會には無禮講も宜しからうが、然らざる限りは矢張禮儀ある裡に打解ける婦人が歡迎せられるであらう。禮儀、作法は言行に磨きを懸けたものである以上

その磨かれたる言行の間に打解けた情味があれば、其方が遙かに美で人を惹付けるに定まつて居る。無教育な婦人と教育の磨きの懸つた婦人とを較べれば、得失は直ぐに分ることで、從つて又ざつくばらん流の教養ある社會に歡迎されべきものでない事も勿論であらう。

かういふ作法、擧動の上で立派に妙味あるやうに成功する婦人はと言ふと、私は又飽くまでも彼の注意深い、行渡つて頭腦の活動く婦人であると思ふ。主婦としても、社交界の人としても、注意緻密な性質でなくては、到底將來成功の人では無い。

遊びのある顏

固より一瞥で人を評價する事は出來ぬもので、茫然したやうな人と思つても、長く交際して見ると、存外深みのある、沈着いた人物であつたり、或は一寸見はさも怜悧さうに見えても、實は意外にチヨコ〳〵した人であつたり、といふ樣な事が少なくない、然し一見して「これは何うも……」と思はれるやうな婦人がある。必ずしも容貌の美醜といふ事ではなく、つまり表情といふものが大切なのである、即ち引離して眼や眉や鼻筋や口元や、それを一々に見れば別な事もないが、それを纏めた全體の感じを言ふと、どうも何となく茫然と、顏の何處かに活動かぬ處があるやうな即ち東京の語でいふ遊びのある顏といふのがある。

恁ういふのが即ち注意の薩張集まらぬ人の相で、何も總てが締りがなく、學問でも技藝でも品性でも規律的の進步を遂げず、將來甚だ有望ならぬ婦人である。

又美貌ではなくても締つた顏付の婦人がある。多くは是れ注意深い婦人である。段々見てゐると其注意深い處が種々な點に現れて來て、進步が日に〳〵著しい。

顏貌ばかりではない。物の言ひやう、衣服の着振りなどにも、何となく弛けたのがあり、締つたのがあるそれを見る每に私は「注意深い」と「注意深くない」とが種々の端々にまでも現はれて來て、從つて又それが婦人將來の運命に影響する事大いなるを今更に思ふのである。



面白き辭世のかず〳〵

天然生

人が死に臨んで作る所謂辭世の歌や俳句は、思想發表の結尾であるから、其人格の如何を知るには、恰好の參考であると共に、又精神修養の一助になるものである。試に多くの辭世の中、面白さうなものゝみを擧げて見よう。

△本因坊算砂は、碁の大家で、本因坊の初代である。織田信長、豐臣秀吉、徳川家康の三代に仕へ、所謂相手變れど主變らずに圍碁を業とし、とう〳〵法印となり、元和四年に六十四歳で歿したが、其の辭世は流石に圍碁家だけあつて、矢張り碁を譬へにしてある所が面白い。

碁なりせば劫をもたてゝ生くべきを
　死ぬる道には手もなかりけり

△元政上人は俗名を石井吉兵衛といふ。初め彦根藩に仕へ、後江戸に來り、某所に遊び偶々某女の自殺を悲しんで僧と爲り、再び西國に歸り、深草に住んで居た。それ故深草の元政とも呼ばれて、近代の高僧であつた。寛文八年四十六歳で歿したが、其の辭世は名高いものである。

深草の元政坊は死なれたり
　我身ながらも哀れなりけり

△地黄坊樽次は本名を茨木春朔といひ、林大學頭に就いて儒學を修め、後ち酒井侯に仕へた人である。此人は非常な大酒飲みで、寛文十一年に五十八歳で亡くなつた。大酒家だけに其の辭世迄が酒氣を帶びてゐる。

南無三寶あまたの樽を飮ほして
　身は明樽とかへる故里

△水野十郎左衞門は、徳川氏の旗下で、禄千五百石を食んで居たが、性質が磊落豪放で、白柄組なる黨を結んで其隊長となり、幡隨院長兵衞の黨と爭ふて、寛文四年死刑に處せられた。時に三十五歳。

氣のつまる娑婆になか〳〵居たくなし
　地獄の底へ所替へせん

落すなら地獄の釜をつんぬいて
　あほう羅刹に損をさすべい

△西山宗因は通稱二郎作といひ、初めは肥後の加藤家の家臣であつたが、後大阪に出で松永貞德に就き、俳諧を學んで上達し、芭蕉と共に其名を擧げた人である。其後更に江戸に出で、種々の書籍を著はしなどして、天和二年に七十八歳で歿した。

宗因をどこへと人の問ふならば
　ちと用ありてあの世へといへ

△北村季吟は通稱久助といひ、近江國北村の人で、初め醫を業とし、後幕府に仕へ、祿五百石を賜はつた。松永貞德の門人で、歌俳諧に長じ、寛永二年に八十八歳で歿した。

花もみつ時鳥をも待出て
　此世後の世思ふことなし

△清水如水は藤根堂と號し、狂歌に長じ、嘗て

世は清めり吾れ獨りのみ濁酒
　醉ッてねるにて候ふの水

など、詠んだ程の名人である。また瓢簞に彫刻することが巧みであつた。享保十三年歿し、年七十二歳。

火事喧嘩地震神鳴り公事晦日
　飢饉病のない國へ行く

△志道軒無一は、本名を深井榮山といひ、墮落して、江戸の講釋師となつた。性質は至つて磊落放縦で、あらゆる欲望を遂げて世を終らんと志し、そして實にそれを實行した人である。明和二年八十三歳にて歿す。

東よりぬッと生れた月日さへ
　西へとん／＼我もとん／＼

其まゝに歸るぞ夏のはだか蟲

△朱樂菅江は江戸の狂歌師で、繪馬屋額輔等の師である。寛政十年歿した。墓は青山青源寺にあると云ふ。

執念の心や娑婆に殘るらん
　吉野の櫻更科の月

△手柄岡持は本名を平澤平格といひ、佐竹侯の家臣である。狂歌や狂文に長じ、小說も作つた。けれども藩侯の命によつて戲作だけは中年で廢して仕舞つたさうである。文化十一年七十九歳で歿した。歿する數日前に、

狂歌よむうちは手柄の岡持よ
　よめぬとならば日柄牡丹餅

△式亭三馬は本名を西宮太輔といひ、八丈ヶ島の爲朝神社の神主菊地茂の子で、江戸の書店萬屋の養子となり、戲作を業とし、著書は頗る多い文政五年歿した年は四十八歳。

善もせず惡もつくらず死ぬる身は
　地藏もほめず閻魔叱らず

△太田南畝は通稱直次郎、初め四方赤良、後蜀山人と號し、狂歌の大家で、諧謔を以て一生を送つた人である。文政六年四月、七十五歳で歿した。危くなつた時、門人共が辭世をと請ふと、

冥土から今にも迎ひ來たならば
　九十九までは留守とことわれ
留守といはゞ又も迎ひに來るならん
　いつそ嫌ぢやと言ひ切てやれ
と雜戯談を言つてゐたが、いよ〳〵死に臨んでは大に眞面目になつた。
時鳥なきつるかたみ初松魚
　春と夏との入あひのかね

△狂歌堂眞顔は、本名を北川嘉兵衛といひ、太田南畝の門人で狂歌に長じ、一時京都に居て二條家から宗匠の號を受け、文政十二年七十七歳で歿した。
うまく食ひ暖く着て何ふそく
　なゝそぢ七ッ南無阿彌陀佛

△十返舍一九は本名を重田貞一といひ、初め駿河の縣吏であつたが、後大阪に出で、淨瑠璃を作り、更に江戸に出て戯作を業とし、特に滑稽に長じ、道中膝栗毛の如きは最も名作と稱せられてゐる。天保二年六十八歳で歿した。或は五十七歳であつたともいふ。辭世に、
此世をばどうりやお暇せん香と
　煙と共に灰さやうなら
とよんだか、次の歌も一九の辭世だといふことである。
今までは人の事だと思ふたに
　おれが死ぬとはこいつたまらぬ

△谷文晁は通稱を文五郎といひ、畫を以て田安家に仕へ、後白川樂翁の爲めに集古十種といふ有名な歴史書を編作した人で、實に近世の大家であつた。天保十二年歿し、年は七十八歳、墓は淺草源空寺にある。
長き世を化けおほせたる古狸
　尾先な見せぞ山の端の月

△紀定丸は本名を吉見儀助といひ、太田南畝の門人で、初め野原の雲輔と名のり、後紀定丸と改め、狂歌は最も上手であつた。天保十二年七十六歳で歿した。
狂歌師も今日か明日かと成にけり
　紀の定丸もさだめなき世に

△大木戸黒牛は有名な狂歌師である、大木戸黒牛とは、彼の貞觀年中の歌人大友黒主に眞似たのであらう。
生きて居たうちは何かと神ほとけ
　聖もいかい世話で御座ッた

△國定忠次は上野國國定村の人で、博徒の親分として其名世に高く、見分頗る多し、任侠心あつて、よく貧民を憫んだけれども、屢人を殺したので幕吏に捕へられて、大度といふ所で磔にせられた。時に年四十一、

後國定明神と崇められた。刑せらるゝ前、馬に乘せられて引廻はされてゐる時に、

金銀をつかひはたして角となり
桂馬に乘ッて京の一鎗

△曲亭馬琴は本名を瀧澤淸左衛門といひ、江戸深川に生れ、初め武家に仕へたが、嫌になつて其處を去り、次ぎに山本宗英といふ醫官に仕へて醫術を學んだが、これも嫌になり、更に龜田鵬齋に就いて經書を學んだが、これも亦嫌になり、次ぎに山東京傳に就いて小說を作つてみたが、今度はどうやら物になつて、後に小說では頗る名高い人となつた。彼の八犬傳の如きは、二十八年の月日を費やして作つたといふ大册である。明和四年六月生まれて、嘉永元年十一月歿した。年は八十二、其墓は小石川茗荷谷深光寺にある。辭世は、

世の中の役をのがれて元のまゝ
かへすは雨と土の人形

△葛飾北齋は、本名を中島鐵次郎といひ、江戸本所の人で、吉良上野介の臣小林平八の子だといふ。初め浮世繪を學び、後一派の畫風を創め、近世の大家と稱せられ、嘉永二年に歿した。年は九十。墓は淺草誓敎寺にある。北齋は洋畫を研究したから、畫の姿勢が自然にかなつてゐるので、外國人などは他の畫よりも此の方を賞揚してゐる。辭世はなか〳〵洒落たものである。

ひと魂でゆく氣さんじや夏の原

△繪馬屋額輔は、本名を松下貫久輔といひ、英一蝶の畫風を慕ふて、別に英一翠と號し、又朱樂菅江に就いて狂歌を學んだ人で、年々初午に自畫の奉燈を稻荷社に獻納するを例としてゐたが。嘉永七年正月歿した。年は七十四。其年の初午に

捨てらるゝ古き繪馬屋の額輔も
最早今年が終り初午

△喜多可庵は名は武淸、字は子愼、別に鶴翁と號し、谷文晁に就て畫を學び、大家となり、安政三年八十一歲で歿した。

來て見れば二本榎の面白さ
噺の友は其角一蝶

△松亭金水は、本名を中村源八といひ、初め錐耕人となつたが、後戲作者となり多くの小說を作つた人である。文久二年六十六歲で歿した。

六十路餘り六歲の今日を命にて
浮世の夢はさめはてにけり



本野大使と共に三越呉服店を訪ふ

藤井瑞枝

私が本野家を御訪ねしたのは、七月七日、――即ち大使が御歸朝になつてから、丁度、十日目――の午前で御座います。一應、まづ、御玄關におとづるれば、何時の間にやら、私の顔を見知れる御取次は、直に奥へといふのです。すると、もう端近に、夫人の久子さんの御聲がして、

「まあ。たまさんですか、御約束の時間は、遠に通り越して居るのですから、先刻から待つて！、待つて！。」

と被仰る。そこで私は、

「どうも、西洋時間を守らないで濟みませんが、今日は、御外出の御日どりの樣に新聞で承知致しましたから、御留守に參つて、待ちぼうけもつまらないとおもつて、わざと遲れましたので。」

「相變らず、のん氣な事をいふて居らつしやるの子、今日は、その豫定の外出が止んだので、午後には、三越呉服店に行かうといふのです。」

「三越へは、私もまだ參つた事が御座いませんから、丁度よい折から、御一緒に御供を致しませうか。」

「え!?、あなたは、また、一度も居らつしやらないの?。」

「勿論、私などの樣な身の上の、而かも、田舍にばかり居りましては、三越などへ行く用事の、あらう筈

がないでは御座いませんか。」

「それもさう子、……では、兎も角も御飯を戴いてから參りませう。」

との仰せにまかせ、不遠慮の私は、早速御家族と共に食卓に就き、色々、露國の飲食物や、其他の御話も承はりつゝ食事を終り、食後には、夫人の御衣裳部屋へ往つて、夜會服をはじめ、いろ〳〵の御召を見せて戴き、其模樣の優美な事や、配色の調和のよいのに感心し、また、晝夜によつて光澤を異にする寶石を、本野さんに説明していたゞいたりして、さて、いよ〳〵、麻布鳥居坂の御屋敷を出かけたのは、午後の一時半、大使御夫婦と、御母堂と、私と、つまり四人で、一臺の馬車に乘つたのです。

私は、如斯久しぶりに馬車に乘つたので、いつぞや、まだ幼ない娘の頃、久子さん（こゝで夫人といふと、どうも人情にうつりませんから、やはり昔通り、久子さんと呼ばせて戴きます。）と御一緒に、馬車に乘つて淺草あたりへ遊びに往つた時の事を、心ひそかにおもひ起したのですけれども、常日頃、シャンジュリジェー（巴里）の大道や、まつた、ネバ河岸（露都）の大通りを先を拂ひつゝねつておあるきの久子さんには、今、馬車に御乘りになつたからとて、格別、特殊の感想の御起りになる筈はないとおもつたばかりでなく、久子さんとは、此の間、途中まで御迎ひに行つた時に、色々承はつた事も在るのですから、今日は、態と、話頭を本野さんの方へ向けたのです。

「久しぶりの御歸朝で、少しは日本の變つた所が、御眼にとまりませうか。」

「されば、……道巾の廣くなつたのと、電車の出來た丈は確に變つた樣ですな。」

「其ほかには？」

「其他にも色々ありませうが、…………繪畫などはどうも惡い方へ變つた樣ですな。」

「近頃は、畫家も昔とは違ひ、よほど新畫題などを撰ぶのに、注意を拂つて居る樣に聞いて居りますが。」

「それがです、何人でも、西洋の模倣をやればよいと

思つて、而かも、其短所迄をも、短所と氣付かずにまねるから悪いのです。」

「短所とは？。」

「おしなべて云ひますと、西洋の畫は沒線描法で着色を重視して居るのですが、日本の繪は、線が重なものに成つて居るのです、然るに、近來の西洋人が、日本の線法を學んで、甚だ不完全にそれを現はしておくのです。それを、その拙ない線法を、西洋畫の特色でゝも在るかの樣に心得て、日本の連中が、倘より拙なくそれを模寫するから、結句、見



るに堪へぬ拙劣なものが出來上るんです。」

「へー成る程。──」

などゝ感心しながらも、談話はいつしか道路の觀察などに移りゆく程に、梅雨中を珍らしくも日光が射して來たので、久子さんが、洋傘をひろげて、御母堂にさしかけて御あげになる、私も向ふへ屈むで、其陰にならうといふ、稍、か、い、づるい方法を案出して日光をよけて居る中に、ふと其洋傘の柄について居る、銀製の鳥に眼がつく、さても、此洋傘は、今度、大使が御母堂に御土産に御持ちかへりになつたものだ、

さうでして、そのかざりの銀の鳥は、「コックドボアー」といふて、露國に居る山鳥の一種ださうですが、日本の雉子に似て居て、もそつと大きく、かつは、非常に耳の敏い鳥ださうで、此鳥を狩に往くのは、なか〳〵六ケしいとの事です。

かくて、短時間にもかゝはらず、私は、何んでも、かんでも、見るもの、聞くものを珍らしがつて、久子さんの鰐皮の小さい手かばんの中を明けて、其中に在るものを、色々引出して、説明を伺つたり、おねだりしたりなどしつゝ、して居る内に、馬車は、いつしか宮城前の廣い道、――あのそら、芝生に小松の生へて居る附近、――まで進んで參ります頃、久子さんが、路傍を通行なさる御若い紳士を見かけて、

「ア、伊藤さん―。」

と被仰ると、先方も、帽を脱つて一禮なさる、馬車稍行き過ぎてから、本野さんが、

「勇吉さんだつたか。」

と御訊になる、私はまた私で、

「勇吉さんとは、先達、御名の代つた、博邦さんの事ですか。」

と、つけ加へますと、

「えゝ、えゝ、さうです。」

とは、久子さんの御返事。

そこで、私はひそかに思ひました、一體、私達の考へに依りますと、公爵様の御世嗣とでもいへば、黒塗馬車か、然らずとも、二人曳位の俥に乘つて、都の塵を蹴だてゝ御通行なさる事とばかり思つて居りましたのに、豈に計らんや、只、御一人の御徒歩!、一寸、意外な感に打たれました、かゝる感想に耽ける間にも、馬車はずん〳〵進んで、日本銀行や、正金銀行の、立派な建物の前を通り抜けて、いよ〳〵三越呉服店に近づき、正面の入口の所へ着きますと、店員の高柳さんが、ちやんと、もう其所に待ち受けて居らつしやる、又、あたりには、白い揃ひの洋服を來た下足番が、大勢群がつて居るのです。私は、今この洋服の下足番を見て、先年、大阪の三越店で、女の店員が、（賣方がみ

ん女で在つた様におもひます。)みんな、洋服を着て居るのを見た時程、異様な感には打たれなかつたのですが、併し、やはり、下足番などは、もゝ引、紺かんばんの方が一種の日本的雅味を帯びて居はしまいかとおもはぬでもなかつたのです。今日、途中で逢つた、露國馬車でも、佛國馬車でも、みんな、御者、馬丁共に、日本式のいでたちなんでしたからネ、人の好奇心



といふものは、却つて妙なものぢやありませんか。

徒言はさておき、いよ〳〵店内へ這入りますれば、先づ、階下から、階上へと、順に見様とするのが、誰しも人情の赴く所でしよう然るを、高柳さんは、階下よりは、二階へ、二階よりは、三階へと、観る間もあらせず、歩を早めて案内をなさるのです。私は、どうなる事かと、不審におもひつゝ、皆さんの後へ附いて

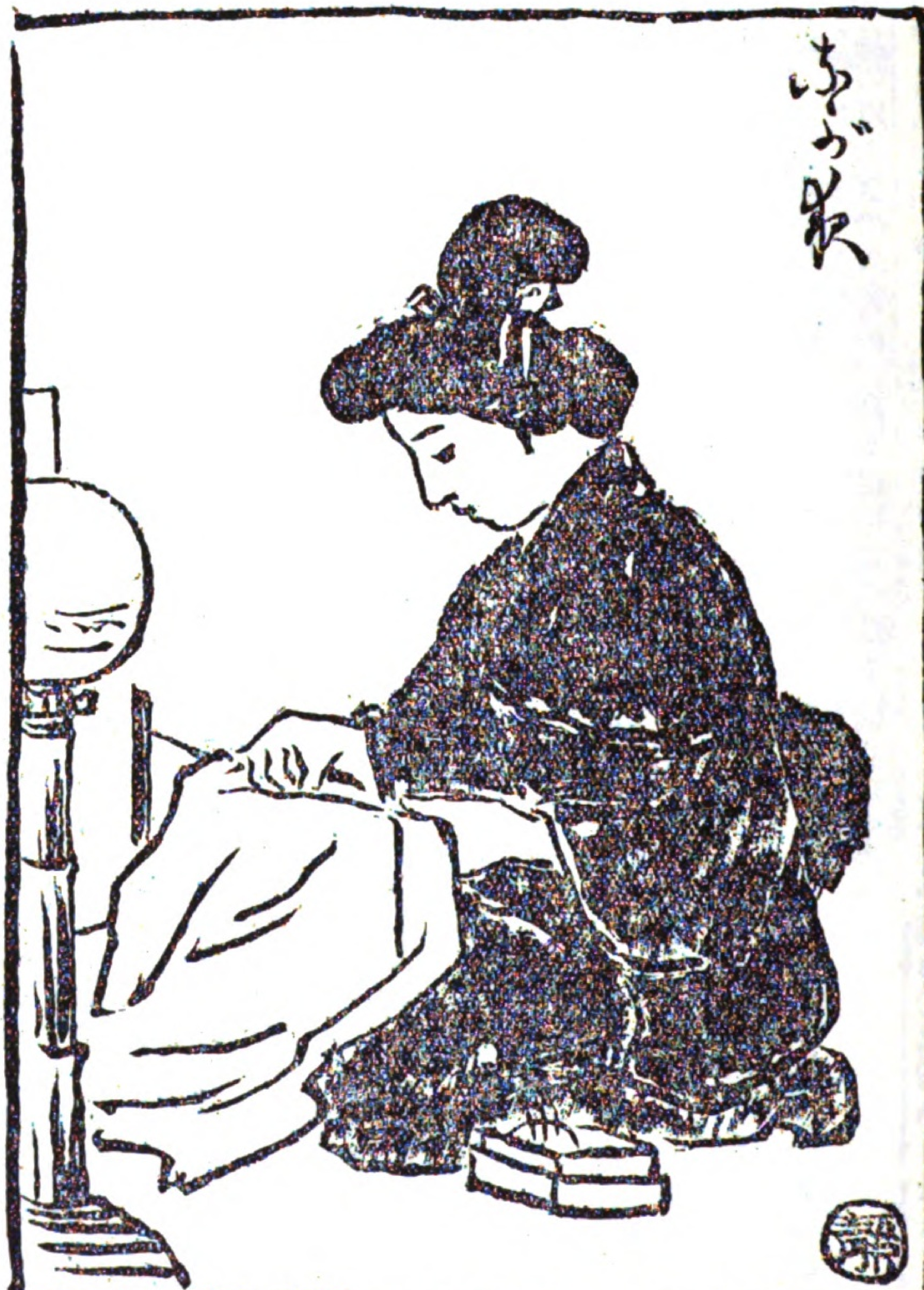
參りますと、すうつと、三階の端の、特別接待室へ請じ容れられるのです。さてこそ、高柳さんが歩を早められたのは、この爲で在つたと、おそまきながら、合點せられたのです。

其うちに、御茶が出る、御菓子が出る、美事な果實籠も出て來る、色々の御馳走が並び終つた頃、番頭がしらとでもいふ人であらうか、絽の羽織を着た老人が出て來て、大使に向ひ、今日來店の榮を得た喜びやら、主人が不在の言ひ譯やらを、極めて慇懃に述べて居られる、もしも、これが御大名の御屋敷などなれば、さしづめ、此老人は、接客係、何々佐渡守とでも名のるべき人であらうかと、客をそらさぬ中に、自から、自分の品位をくづさぬ所、さすがに、三越の老番頭さんとぞ見受けられました。

さてこの接待室は、一寸見渡した所、二十疊敷位の大さで在つて、巴里の、日本大使館の喫烟室と同じ裝飾ださうで、何から何まで、竹づくし、つまり竹の間といふのださうですが、私は、皆さんを稍離れて、一寸傍の方の小さい机によつて、きよろ／＼と、室內を見廻したり、覺え書きをしたりして居たのです。

まづ、四方の壁の、下方三尺ばかりは、本物の燻し竹で、それから上方は、絹地に青竹を描いたものを張りつめて在るのです。窓掛は、廣巾の壁縮緬に、竹に雀を圖案樣に染め拔き、雀には、一寸、金糸の縫があしらつて在り、明治の仙臺萩の若君の御部屋とでも云ひたい樣！ 卓子にも、椅子にも、そこらに在る置戶棚にも、植木臺にも、みんな竹の彫刻が施して在つて唯、ストーブの上が、茅葺屋根にかたどつて在る丈が稍異彩を放つて居るのです。而して、此室內のすべての圖案は、久保田米齋氏の意匠に成つたとの事ですがストーブの前に立てゝ在る小さい銀屛風、これには、墨繪で枯木に烏があらはして在るのですが、それが、場所柄、何とも云へぬ程、引立つて見えるのです。私は、先年、泉州の或るお寺の寶物で、雪舟の筆の同じ樣なものを見た事が在りますが、如何に此部屋にあればとて、どうも、これは久保田氏の筆ではないらしい

さりとて、雪舟が甦つて來る譯もなし、はあて、誰だらうと、一寸、高柳さんにおたづね致しますと、果して、京都の竹内栖鳳氏の筆だとの事です其外にも、大きな花鳥の屛風や、山水の屛風が、位置よく配列してあり、又、鹿皮の椅子が、五六脚、別に壁際に立て並べて在るのですが、その斑紋と云ひ、色合ひと云ひ、如何にも眞に迫つて居るのですが、試にたづねて見ますと、勿論これはこしらへものだとの事なるほど、斑紋の工合も、大さまでも、揃つて居るのですものネ、かゝる分りきつた事を、改めてたづねたりするので、いよ〳〵私は田舍者の本性を現はした事と御一笑下さいまし、其他植木鉢には、純粹の竹や、棕梠竹をはじめ、常春藤や百合なども種種あつて、清風おのづから、室内に生ずる有樣です。



やがて、室内を一順見終つてから、皆さんの卓子の方へ行つて、本野さんから、そこに在つた、巴里の大使館の寫眞を見せて戴き、色々說明も伺つたのです。

そもそも、巴里の日本大使館の室内裝飾は、悉く三越呉服店が、御用を承はつて、取まかなつたとの事ですが、其價格、實に十三萬圓餘、彼所には、竹の間斗りでなく、菊の間、櫻の間、紅葉の間、武器の間なども在つて、いかにも善美を盡し、中にも菊の間の格天井の如きは、最も精巧を極めたるものなりとか、やがて、私も御相伴に茶菓を戴いて、それから、そろそろ陳列場の方へと出かける。

接待室を出でゝ、先づ外國人向き、輸出向きの一區劃の方へと足を向くれば、まづ最初に眼に入るものは蜜柑色の地合ひに、萠黄の模様を染め出したる、極めて派出な友禪縮緬の厚ぶきの着物が、高く目に立つ様に懸けて在るのです。どうもこれは襠とも、長襦袢とも違ふ樣だに、はたして、何だらうと、小首を傾けて居りますと、久子さんが、

「これはネ、外國人が貞奴と呼ぶ着物なんですよ、いづれ、外國人むきのものですから、そうら、傍に帶に用ゆるしごきが添へて在るでせう……つまり「きも○○○○○のさだやつこ」と申しまして、貞奴式の着物といふやうなわけで外國人が珍らしがるのです。」

「へー　さうですか。」

さては、此頃日本では、川上夫妻が外國人の贅澤風を輸入して、風俗を華美にするのは、戰後の經營をする日本に對しては、甚だ不心得極まるものだなどゝ、一部の人々の攻撃なさるのを耳にした事も在りますがこれで見ると、貞奴は、やはり日本の華美をも外國に輸出して居るらしいですが、かくて、一貞奴が、東西風俗のメヂエーターになるなどは、さても、さつても、世の中の事は、意外の邊に、意外の勢力の在るものに候らはずや。

それから、本野さんが、まづいと被仰つたヌーボー式縫取り座ぶとんの在るあたりを通つて、髪の道具の在る塲所に行くと、束髪用の三ツ櫛など澤山並べて在

るので、私は、つひうつかり、久子さんに向ひ、
「先年、貴方が御歸朝の時、三ッ櫛をさして居らしたでせう。然るに、日本では、やつと此頃が流行よどうしても日本は五六年流行が後れて居りますのね。」
と云ひますと、これをきゝつけたる、こゝの係の番頭さん、何條この話をきゝもらすべき、
「イヤ、今でも外國人樣方が、澤山此等の品を御土産に本國に御持かへりになります。これでも、流行に後れぬ樣に、大かけ足で骨折つて居るつもりで、……。」
私は、かく云はれてハットまごつきました、すると、さすがは交際に慣れ給ひし久子さん丈あつて、
「外國では鼈甲が、大變珍らしいですからね。」
など、と、取繕ふて下さつたので、やつと、私は其場を逃れたのです。
今度は、極々薄地の織物、左樣、透綾の樣な、明石の樣な、絽に似た樣な地合ひのものですが、色々の斑



紋や、縞や、筋のあるもので、勿論、此所のは、皆洋服向で、領巾に用ゆる狹ひ物や、服地にする巾の廣い物や、種々あるのです。中にも、此頃外國では、外出の時殊に夜會などに、行く時には、例の繪に畫いた辨天樣や、天人の身のまはりに、ひら／＼としてゐるあの領巾見た樣なものが流行するとの事で、そんな種類に出來上つたものも澤山ありました。全體、日本では、羽毛のボアーなども、しつかり頂の周圍へまきつけますが、これも、外國では、やはり、肩から腕のあたりへたらして、たゞ飾とするのださうで、現に、今日久子さんも、水色の羽毛のボアーを、さうしてたらして居らつしやるのです。服地の所で、薄鼠の絹縮に菊の縫の在るものが一組久子さんの撰に入りました。

それから、今度は白キャラコの、寢臺かけ、食卓かけ、茶卓かけの樣なものを、久子さんが、しきりにくりかへして見て居らつしやる、緣に輪廓を拔いたり、中に花鳥や福壽などいふ文字さへも、拔き模樣になつて居るのです。

「日本通の外國人樣方は、福壽などいふ文字の意味を充分御承知で御求めになる方もあります。」

とは、番頭さんの話、本野さんは、

「安いものだなあ、つまり人間の勞力が安いからだ。」

と被仰る、私は、

「買物に來て、安いと御賞めになるなんて……。」

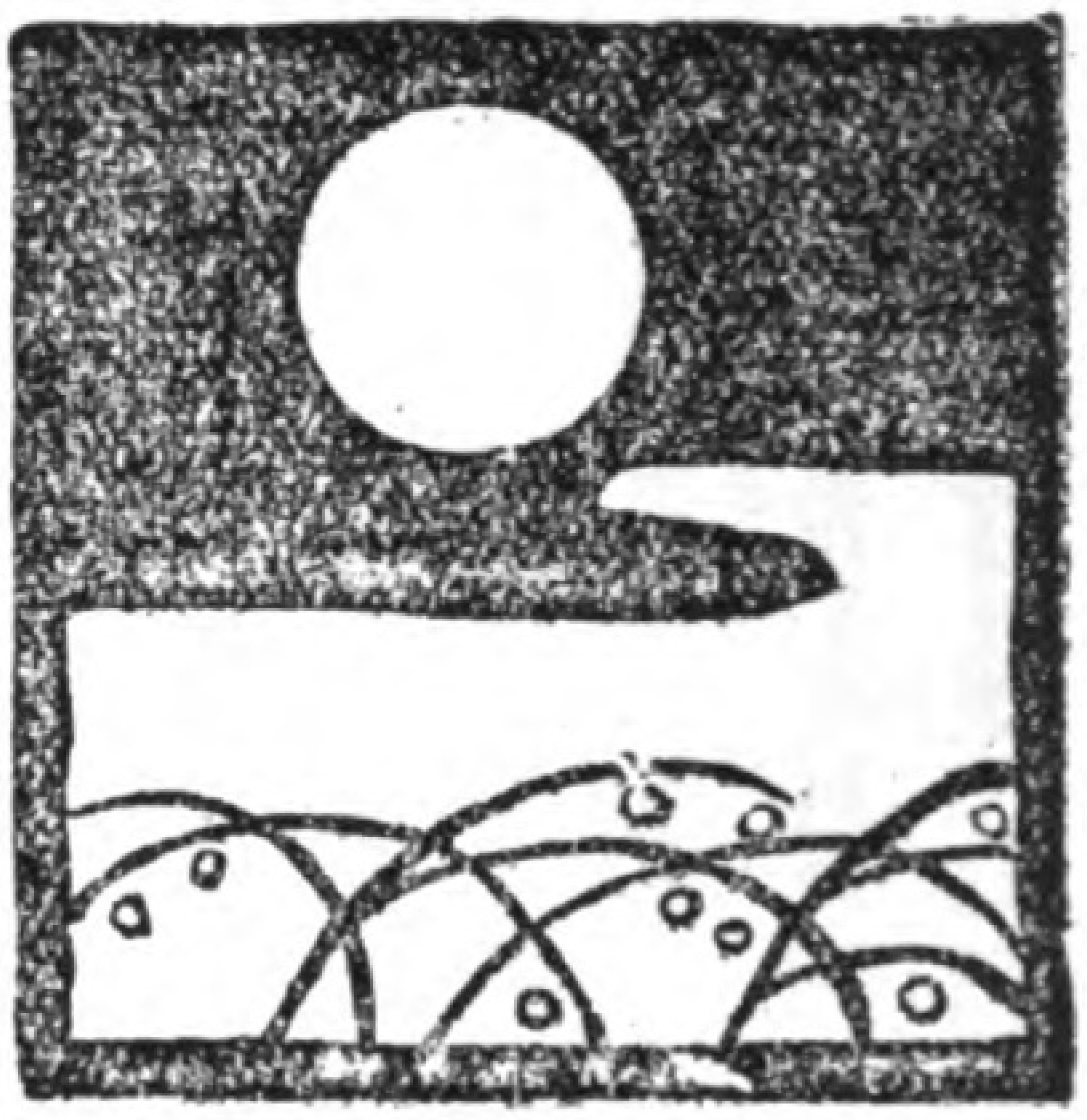
と、いふて笑へば、

「高いといふてもまけはせず……、實際安いものですよ、外國から持つて來る御土産は、一寸したものでも、みんな勞力が高くついて居るから、日本人の想像以上ですが、日本から外國へ持つて行くのは、割合ひに得です。」

などゝ御話になるのをきゝつゝ、私は別に、天鵞絨の模樣物を見て、精巧に織つたものだと感心して居りますと、本野さんが、わざ／＼裏を見せて下さつて、

「そら友禪です織つたのではなくて染めたのです。」

と御笑ひになる、私は何といふ阿呆でせう、今迄、度々天鵞絨の袱紗や皿敷を見たり、さては、いつぞや高島屋(?)で大阪の博覽會へ出品した、大きな／＼、廣巾の山水畫の天鵞絨を見た時も、やはり、精巧な織物だとばかりおもつて居たのですよ、それも、これも、いつも見るばかりで、自から所持した事がないから、こんな思ひ違ひをしたのでせう、呵々。(未完)



重き負擔に苦みつゝ世を味ひ行く婦人

くれなゐ

夫が亡くなつてから既う彼れ是れ一年餘りになる。思へばまるで夢のやうだ、其間私は最う體の續く限り腕一杯、朝床を離れる時から疲れきつて枕をする迄唯だ無茶苦茶に働いたと云ふに過ぎない、是れでは全く普通の勞働者と選ぶ處はない、私のは先生といふ稱號を以つて呼ばれる勞働者で、熊公八公と些か異りはないと云つても好い位、斯くして私の一家は恙く今日迄只の一度も三面記者の御厄介にもならず、水死者だの轢死者などゝいふ哀れな名を新聞紙上に止めもせず生存てゐたと云ふだけ、得る處は只だ夫れだけと末の赤ン坊がやつと歩くやうになつたのと、私の白髮がちらほらと見えるやうになつたのと、めつきり老女じみて來たと笑はれるきりです。

豈夫是れ程の運命にならうとは思ひも及ばなかつたから、やれ避暑だやれ避寒だ等と其時々には隨分思ひ切つて華美を盡した。今思ふと那麼事をしないで心掛けをよくして置けばよかつたと染々思ふ、厭だつたけれども已を得ず昨日日歸りで鎌倉へ行つた時ばかりは何とも云ひ得えず今昔の情に堪へなかつた、三年前に來て三橋に宿つてゐた頃、よく夕方等海邊を散歩すると夫は乾度風は金波を動して遠く聲ありつてあれを低聲で口ずさむ、昨夕も月が出たので尚且金波を動かしてゐた、誰の詩だつたか一寸名は忘れたけれども松間の明月は長へに如此し、といふ轉句をつく〴〵思つた、よく人が月日は流れて行く水のやうだと云ふ、人が有

るけれども夫れは餘程氣樂な人の云ふ事だと思ふ。然う聞くと什麼にも淸く美しく樂しいものゝやうに思はれるが、倘且人生行路難しで小川の水のやうにすらすらと流れて行かれるものぢやァ無い、其間には幾多の汗や涙がこもつてゐるのだらう。

自分の樣に家に財なく、子供の三人も有つて夫に死別れた者は、世間に有る習ひだけれども、扨自分の身に降りかゝつて來て見ると、今更ながら運命の奇しきを覺えずには居られない、病氣さへ直つたらどうにでも成るといふ萬一の望みの綱を賴りにして、友人の助力を仰いだり、多忙しい眠る暇もない中から家庭敎師に雇はれて出來もしない不熱心な貴族の子女の相手をしてやる、那麼にした揚句亡くなつて終つたのだもの、實際途方に暮れるといふのはあの事だらうと思ふ、恁麼時に最も杖とも柱ともなつて呉れるのは親類よりも誰れよりも親友が一番だ、私は言葉では迚も云ひつくせず心で感謝しては泣いて居た。

野邊の送りをすますと直ぐに四五町先の裏通りの玄關とも入れて僅つた三室といふ極く手狹な、其代り家賃も以前よりは半分も少ない家を見付けて引越した。

極く節儉して女中も減して一人ぎりにして、私は翌日から此度は家庭敎師の掛持ちといふ事を始めた。歸つてからは遂い近所の娘達に國文を敎しへたり英語を復習てやつたりする、是れは但し心ある人の同情で、一人でも生徒が多い方が收入が有つてよからうといふ考へから紹介して呉れたのだ、終日歩き廻つてがつたり疲れきつてお湯へでも入つて來ると好い心持ちでうとうと居眠りでもしはじめるとガラリと格子戸の啓く音、夫れからは夜の十時頃迄は會話やら文法やら眠むい眼をこすり〳〵見てやらなければならない。

で夫れをすまして床に就くと十一時か十二時、朝は早くから起きるし、終日體を休める暇もない、父を失つた少さい子供達は一日淋しく送つて私の歸るのを待つて待つてゐるのだ、いつでも上の二人は格子に背中を擦りつけるやうにして茫然往來の方を眺めながら立つて待つてゐる、私の影が見えようものなら兩手にぶら

下るやら、抱き付くやら取り巻いて喜ぶさまは只だもういぢらしいと云ふより他は無い、中の女の子が父様を探しに行くと云つて雨の降るのに諾かないから以前の家迄行つて見せてやつたと總領は姉さん氣どりで私に話す、ねえ母さんお父様は天國へ歸つて待てゐらつしやるんだつてね、皆母様に孝行をして惡い事をしないと天國へ行つてお父様に逢ふんだつて教會の先生が仰有つてよと總領が云ふ。

今日は日曜日何日もならせめてもの體安めに此日だけは思ひきり朝寢をして、午後から散歩に子供を連れて出掛けるか、



裁縫でもするか一週間中の疲れを洗つたやうな氣になるのは此一日ばかりだ、けれども今日は私の爲めに種々今後の方針について考へてやらうと云つて呉れる親切な主人の友人の方々が午後から來て相談會を開くと云ふのだから、構はない譯にも行かないからまア心ばかりのおもてなしでもしようと思つてゐる。

献立は何にしようかしら、昨夜は考へる積りで床に入つたら直ぐ眠つて仕舞つた、よく以前は眠れないので藥を呑んだり何かしたものだけれども、此頃つたら自分でも可笑しい十七八の小娘の時分のやうに眠くつて／＼朝

起きるも辛いし、夜は横になるかならずに直ぐ眠つて仕舞ふ、皆は氣樂になつたから十年來の我儘が出たのだと云ふ、然うかも知れないと思つてゐたら環は私の貌を一目見ると病氣ぢや無いか大層窶れたと云ふ、何有に奈うもない唯だ眠いばつかり、誰れも起さずに置いて呉れたら一年でも二年でも寢て居たい何ンならもう目が覺めずに土になつても好いと云ふと環は神經衰弱ぢやア無いかしら、誰れかに診察して貰つたらと心配して呉れる、親も兄弟もない一人きりの私の身に親身になつてくれるのは環ばかり、此可愛い弟子を私は奈うして破門するやうな氣になつたのだとそと自分の心が鬼では無いかと思ふ時も有る、夫の手前よからぬ風説の有る環を愛弟にしてゐる譯に行かず泣いて眞面目になれと云つて別れた、破門はしたものゝ折ふしは裏口からそつと私に逢に來る、愛弟も隨分有つたが今は夫れ〳〵相應な令夫人になつて更に音信もしない、夫が亡くなつてからは尙更の事此樣裏町に引込んでゐる者へ貴夫人でも有らう者が訪ねて來られようか、忽ち新聞種だといふのが今の貴夫人の頭に有る、弟子ですら其通りだものを、無論友人交際ひに管鮑の交りなどは藥にしたくも有りやしない。

自分の境遇を儚んだり悲しみ始めたつて限りが無いから萬事運命だとして斷念めて仕舞つてはしやいで騷いでゐるのを人の氣も知らないで、やれ先生は呑氣な方だの、お氣樂で面白さうだの、一日でも好いから先生のやうなお身になつて見度い等と眞面目臭つて云ふ貴夫人も有る、聞けば成程可哀想な方だと思ふやうな人も有るけれど、貴夫人なんかのやうに遊んで暮してる人には苦勞する位の税はかゝつても好い、幾程泣言云つたつて同情するやうな暇はないと云ひ度かつた、況してや我が身が羨しい等と虫が好いと云ふか馬鹿げてゐると云つて好いか呆れて仕舞ふ、換りたくばいつでも換つて上げると云つたら大笑ひにすんだ、明日は奈うなるやら運命次第、其日暮しの空模樣氣にする人も同樣な私、何處の野末で果てるやら、大切の〳〵秘藏まで出して折ふし、眞面目な人を吃驚させてゐた私

の新内や舞の手振りもいつ身を助けるものになるかも知れぬ、同情寄せるには金さへやれば好い孤兒は可哀想で繼母は恐しいものと位思つてる人に私の身が分らう筈が無い。

貴夫人と云へば昨日の事矢張敎しへに行く某家の令夫人がいづれ新聞のなんかで讀んだものだらう、滔々として生活難を說いて下すつた、結局生活難だ何だ彼だといふのは怠惰者の云ひ草ですねは驚いた。

◎



誰れだかの話に人は泣ける內は花だと云はれたけれども全くの話だと思ふ、笑ひの內に涙があるといふやうになつては最う人間もお終ひだ。

昨夜遲く使に遣つて夫れなり預けといた紙入を婆やが持て來る、彼れだけの品物を渡して只つた是れつきりと少し落膽する、之では今日のお客するだけの入費にも不足ないかも知ない、貧乏人は益々貧乏するやうに社會が出來て居るのだらう、夫れも好い、婆やが云ふのに伊勢屋で此度からお

通ひになさいましつて云つたとて通帳を貰つて歸つて來たのには私も思はず貌が赧くなつた。

子供達はまだ教會から歸つて來ない、父が亡くなつてから皆仲好しになつた、私は久しぶりで物置きからテンピを出して、よく主人の居る頃は臺所の隅に置き付けになつて居たものだ、斯うして出して見ると何んだか懷しいやうな氣もする、全然眞赤に錆てゐる、でもよく拭いたら使用へない事も有るまい、テーブルが無いから稽古机を三個合せて並べて上から白い布を敵うて置く、一寸テーブルまがひな物が出來る、手廻しにお菓子だけも出して置かうと思つて貰物の風月の箱を開けると唐饅頭と栗饅頭丁度好い、大きな鉢に並べて入れてゐると、御免なさいと云ふ、オヤと貌を擡げると環が笑貌で立つてゐる臺所から來るのは御用聞きど環ばかしだ、今日はお多忙しさうねと揚り端に腰をかける、私も臺所に手拭を被つたまゝ坐つて、えゝ少し手傳つて行かないかと訊いて見る、手傳つても好いけれどもお客樣ぢやアと笑つて見せる。

夫れも然うだ、殊に主人の友達だから主人が亡くなつてから徐に環の出入を許したやうに思はれるのも面白くないからと云つて、公然許す譯にも行かないしと思つたから賴まない事にする。

環は來春からいよ〳〵初舞臺で女優になつて顯れて萬都の青年を惱殺するのだとすさまじい氣焰を吐いてゐるといふ事が新聞に出てゐたから、今更ながら環には呆れて仕舞つてゐたが逢つて見れば以前の通り些少とも變つてやしない、相變らず洒落た裝はしてゐる紺しぼりの縮緬の浴衣に絽縮緬の羽織を着てゐる、環は私より五つも六つも若いから何處となく生々としてゐる、若い人は見ても氣持が好い。

「環さんはいよ〳〵女優になるんだつてね」と訊くと

「えゝもう決心しましたわ、西洋の女優の地位なんかの話を聞くと日本なんかまだ駄目ですね、でも將來は望みが有ると思ふわ、ですから大いに活動する積りよ私見度いな者は奈うせ眞面目な者にはなれないんですもの、貧乏世帶は嫌ひだし、地道にして居れば流行の

登錄商標



主治効能◎眼・耳・鼻・咽喉・船暈・汽車暈に苦む人は本具のあるを知らぬ人なり

◎醫藥にて治せざる病は如何にすれば全治するか!!!

アクチナ

一個を備へ置けば家族應用の便あり

●本具は携帯至便なれば何れの場所にても用ひらる

登錄商標



サンデン電氣帯

（説明書無代進呈）

主治効能

●神經衰弱諸症●神經痛諸症●中風●リヨーマチス●脚氣●脊髓炎●糖尿病●遺尿●胃擴張●胃下垂●消化不良●常習便秘●慢性腎臓炎●男女生殖器虚弱●不眠症●遺精●夢精●早漏●手淫の諸害 貧血●夏瘦●ヒステリー●月經不順…其他男女共各病後の衰弱

變光電燈球

本電球に一燭と八燭、一燭と十燭、一燭と十六燭の三種あります明るくしたり暗くしたりするに左右に捻りさへすれば誰にも容易く出來ます在來の電球に覆を附けて暗くするのは熱の爲に火災の出來る恐れが有りますが本電球はそんな事はありません極めて安全で便利であります本電球は病院旅館待合等は勿論一般寢室用として極めて便利で且つ最も經濟的のものです

●營業品目

●電燈●電話●電鈴●表示機●電球●避雷針●探檢電燈●懐中電燈●電池類●其他一式●醫療器械●製糖分析機具一式

電球は各種共製造致居候間特約販賣仕候

本店 東京京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋四一二二番
支店 大阪市心齋橋筋一丁目西側
支店 横濱市相生町四丁目六十三番地
電話横濱一九三一番

サンデン電氣商會

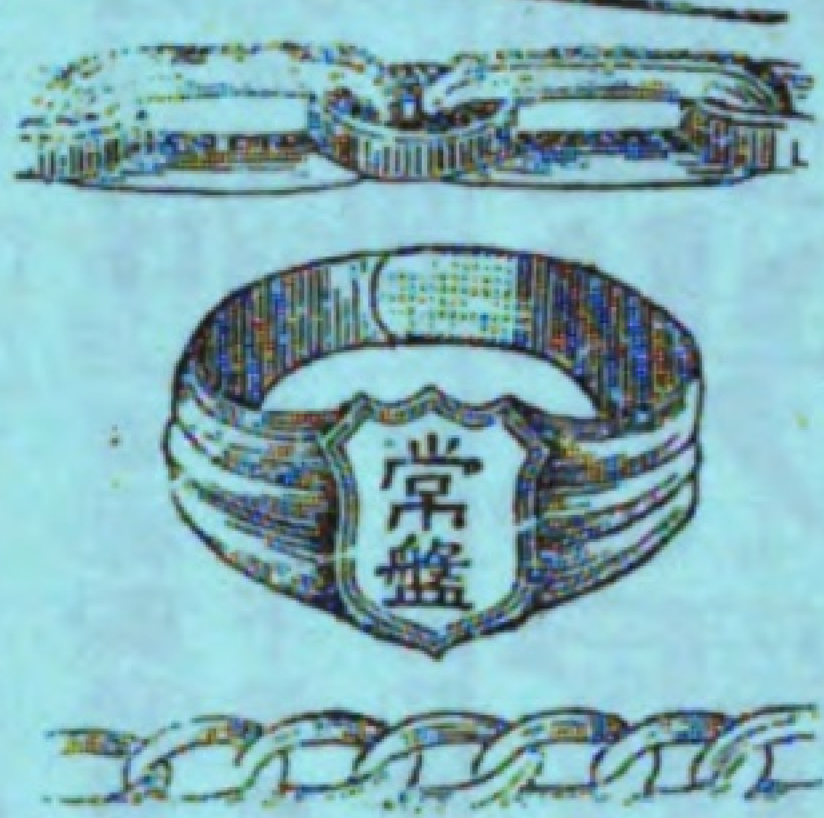
女（その一）

純金包張細工裝身具

△本品は其名稱（包張）よりも實品に價値ある事は大阪有名新聞：朝日毎日新報時事：等の記事に張金術と題し高評嘖々たるは獨り本品のみ

美術 保險 專門





△純金包張指環

四匁付 **三圓五拾錢**

五匁付 **四圓貳拾錢**

△右の外御注文に應じ如何樣にても調製可仕候に付御申付命を希

●御注文の節は指廻り寸法及印面の形ち御明記被下●印面の種類は卅種

文字彫刻料一字廿錢 送料十錢

●時計鎖八匁付 六圓半より種々

◉18金側 包 合成金側 張 懷中時計

弊店は各國時計中品質精良にして最堅牢正確なる物のみ撰拔し廉價に販賣する右時計は總て三枚蓋にして形は御望み次第各卅ヶ年保證を付す

價

18金包側 甲卅圓乙廿五圓

合成金張側 甲拾三圓乙九圓

各送料十二錢

以上の外金縁眼鏡老眼度付其他御婦人用金銀細工物色々 目錄入用三錢

附言

以上の品は在來の人造金の如き品と其地質大に異なり故に外部純金を以て包張せば光澤は勿論其重量は正に純金同一永久使用の稀品也

發賣元 大阪東區京橋貳丁目 **常盤號**

法學博士 男爵 加藤弘之君 序

文學博士 帝國教育會々長 辻新次君 序

早稻田大學總長 伯爵 大隈重信君

東京帝國大學教授 文學博士 中島力造君 贊助

學習院教授 秦政次郎君 著

世道人心

洋裝菊判總クロース紙數三百八十八頁

正價金六十錢 郵税十錢

東京 博文館 本町

本書目次

叙論●本論●第一章 宇宙自然の理法と人生必然の道義●第二章 人生の觀念と人道との關係●第三章 人生に於ける家庭社會國家の成立及其の公義●第四章 時代思想の變と世道人心●第五章 人類の定義●第六章 人類性と動物性との自覺●第七章 先後天性の順化●第八章 順化の原則●第九章 霊魂の所在●第十章 人の心性●第十一章 心性の機關●第十二章 心性の分類●第十三章 心性の活力●第十四章 心性の平均共存●第十五章 心性の元質●第十六章 人生の目的と人道の標準●第十七章 人心及人格の完成●第十八章 人生の權道に於ける目的標準及運命●第十九章 神隨の道と各自の分●第廿章 神と人と勢力範圍●結論◉附錄 人道に關する學說史論

女(その二)

田口掬汀新作

世評此如し

東京二六新聞の評に曰く

主人公高槻昇は輓近思想界に於ける個人主義の代表的人物にして、人爵を棄て名望を棄て有ゆる壓迫に抗して理想を現實にせんとする人なり是に對するお柳の濃情にして節義を重じ昇に對して情を完ふせんとする、人をして同情感奮せしむるに足る、尚お柳に對する眞喜子、昇に對する楠男等を對照せしめ、各々人格の高卑を比較せしめ讀者に何等かの暗示を與ふる處あるは確に注目すべきの作なり、倘性格描寫の上に於ても昇とお柳眞喜子と母堂の如き大なる成功と云ふべし近時文壇出色の文字として吾人は是を推重す

小說 怪光

前編既成
後編發賣

口繪……前編(原色版)渡部審也氏畫
　　　　後編(三色版)結城素明氏畫

總クロース製裝釘堅牢最美本大冊
定價各冊金八拾五錢送費各冊金拾錢

發行所　東京府荏原郡入新井村　不振會

世評此如し

東京朝日新聞の評に曰く

某公爵家の實事を材料にして新舊思想の衝突を描かうとしたものと受取れる、日本今日の社會を描寫せん爲に特に此急激なる思想の變革に伴ふ或狀況を取つたのは著者の手柄として大いに賞せざるを得ぬ、家族本位の日本に於て個人主義の輸入が思想の衝突を來したと云ふ事は小說の材料として極めて恰好のもので評者は大隈伯爵家の離緣事件の時にもさう思つたが一條公爵家の離緣事件を知るに至つて殊に其感を深うした(中略)青臭い挑發的の小說ばかり出て來る今日評者は怪光を近來の好著として歡迎する。

發賣元　東京神田表神保町　上田屋　同區同町　東京堂　京橋區中橋廣小路　梁江堂

女(その三)

太陽記者　長谷川天溪君著（再版）

自然主義

非常の好評

全一冊　洋装四六判美本紙數約四百頁
正價金五拾錢郵税八錢

著者白す、學者的の文字が難有き人、或は理想的を衣裳とする諸氏より看れば本書は外道の筆であらう。若し飯を食はずに生活する法を知つて居る人から見れば、三文の値打もあるまい。僕には惡魔となる氣もない、野心もないには輕薄に新奇を衒ふのでもない。唯現實に立脚して見ると夢の醒めたやうの氣がしたから裸體の人間として考へた儘を書いたのだ。故に御化粧好きの人や、虛言を繁昌せしめやうとする人々からは讀んで貰はうとも思はぬ。

東京　((博文館發行))　本町

文學士　久保天隨君釋

唐詩選新釋

第壹卷再版―第二卷既刊

全五冊　菊判和裝　紙數各約二百五十頁

正價　一冊金參拾錢　郵税八錢
全部金一圓卅五錢　外要送料

唐詩選の世に行はるゝ、すでに久しく、家絃戸誦、今に至りて衰へず。從つてその註解、亦た多しと雖も、或は高遠に過ぎ、或は通俗に失し、取るべきもの幾んど之なし、本書は善く其衷を折し繁簡宜しきを得、周匝精當、著者の學力を傾注し、すべて集めて之を大成したるの觀あり。なほ卷首には精細なる解題を附し唐詩の大略を論述し、作家小傳を載せ、ひとり、これのみを以てするも、支那の詩學史として、絶大の價値あるを疑はず。世の文學に志あるもの、必ず一繙せざるべからず。

博文館

女(その四)

偉人の母

モリス、ブロック著
前田越嶺譯

偉人の母

再版

全一冊　洋裝菊判美本　紙數百八十頁
正價金參拾八錢郵稅六錢

●1 羅馬の偉人グラッキの母
●2 宗教界の偉人オグスチヌス（オーガスチン）の母
●3 佛國の詩人アンドレセニエ兄弟の母
●4 獨逸の文豪シルレルの母
●5 獨逸の天才ゲーテの母
●6 ナポレオン一世の母
●7 佛國の文豪シアトブリアンの母
●8 佛國詩人ラマルチンの母
●9 佛國の博學者リットレの母
●10 佛國の歴史家ミシュレの母
●11 佛國武士の典型バイヤールの母
●12 佛國の將軍チュレンの母
●13 佛國博物學者リンネの母
●14 普王フレデリック大王の母
●15 ワシントンの母
●16 瑞西の敎育家ベスタロッチの母
●17 蘇國小說家ウオーターースコットの母
●18 獨逸の音樂家メルデルッソンの母
●19 獨逸の詩人ハイネの母

東京　**博文館**　本町

◉子のある**親**　病人のある**家**　人は是非**必要**

本品に紙製の類似あり注意

ね小便袋は**近**來非常に發行せり

●衛生を重ずる人は●
●德用輕便を好人は●

一度試み給へ本品は各病院の有功證明有**最上**の**ゴム製**なれば永久使用し得る常に洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人子供病人等有人



は一時も早く使用し其効驗を知られよ本品は：：立ち：：すわり：：ね：：をき等に毫も差支無妙の特長

●定價**大人用**壹圓九十五錢**中人用**壹圓廿錢**乳兒用**九十五錢外に特別製各廿錢上り各送料十二錢

ゴム專門　大阪市東區京橋貳　**常盤號**　振替口座八一六八

引風一切
太陽散
速治新藥

人常に此の、風邪早治しの最新良藥なる（太陽散）を家庭に備へ置き、殊に旅行の折は必ず携へ機に臨み服用し以て後難を遁れ給へよ

藥價〔桐箱四十包入金五十錢。十五包入廿錢。七包入十錢。送料各二錢、各地有名藥店に有り若最寄藥店に無き時は直接注文を乞ふ即送す〕

東京日本橋本町三丁目　藥種問屋　**博愛堂**

博文館女學世界編輯局編纂

家庭日常の寶典

家事整理の墨繩

明治四十二年 家庭日記

總クロース金字入頗美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅拾錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

附錄

▲本書內容の一斑▲

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。



家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして、眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

發賣元　東京日本橋區本町　博文館

島田三郎君序　小野田翠雨君著（速記者の見たる）

現代名士の演說振

再版　全一冊四六判洋裝美本紙數三百卅頁口繪寫眞版數十個　正價四十五錢郵稅六錢

無くて七癖有つて四十八癖、現代各名士の演說振りも種々樣々の癖がある、癖の速いと遲いの、態度風生の善惡、速記者泣かせ五人男など著者が二十年來の經驗に依り、其速記眼に映じたるものを、公平に率直に忌憚なく素葉拔き、演者自身でも己れに此樣な癖があつたかと本書を見て始めて覺る位で、先きに讀賣紙上で大評判を取つたものを、今回增補訂正したものです、本書は演說研究者の好材料となるは勿論、一度本書を讀んだ後で、諸名士の演說を聽きて彼是比較して見ると餘程の興味があらうと思ひます、誠に近來にない面白い本です、而して本書所載の人名は左の六十四名である

所載人名

島田三郎○花井卓藏○西園寺公望○角田眞平○三宅雄次郎○田尻稻次郎○鳩山春子女史○江原素六○橫井時敬○松本君平○辻新次○坪井正五郎○尾崎行雄○山本權兵衛○本多靜六○細川潤次郎○田中正造○高木兼寛○成瀨仁藏○望月小太郎○肝付兼行○伊藤博文○大岡育造○樺山資紀○谷干城○鳩山和夫○澁澤榮一○井上あくり女史○竹越與三郎○下田歌子女史○釋宗演禪師○芳賀矢一○田代義德○巖谷小波○三輪田眞佐子女史○棚橋絢子女史○海老名彈正○嘉納治五郎○戶川殘花○加藤咄堂○高田早苗○北里柴三郎○高島平三郎○松村介石○近角常觀○重野安繹○德富蘇峰○宮川經輝○山川大吉郎○石川半山○圓城寺清○井上豐太郎○木下尙江○幸德秋水○安部磯雄○南條文雄○長谷川泰○田中喜一○山路愛山○中島觀琇師○嘉悅孝子女史○鷲山彌生女史○大町桂月○新渡戶稻造

加藤文學博士序　辻教育會長序　高崎正風男監修　學習院教授　秦政次郎君謹修

教育勅語奉釋

全一冊洋裝菊判金模樣刷　美本紙數百十二頁　正價廿四錢　郵稅六錢

教育に關する勅語は單に學校のみならず家庭社會を通じ一般の國民に賜はりたる聖諭にして人道上の大憲法なれば必ず其謄本を奉戴して各人拳々服膺せざるべからず而れども聖旨の宏大深遠なる之が奉釋を試みたる者少なからず何れも特色ありと雖も各階級に通ずる能はず是に於てか一德會長高崎男爵閣下は秦先生と相諮り特に先生に囑して歷朝の御遺訓と祖先の遺風とを詔勅御製並に正史正籍より謹み審按して卑近簡明なる通行の口語に奉釋し勅語を全國の同胞一千萬戶の家庭に普及すると共に聖旨の在る所を知らしめんとせらる歐米にすら大に此の勅語に感激して或は教科書中に入れたりと聞く我が國民たる者は一人にても知らずして可ならんや本書は老幼とも既に假名字を讀むの目あるか之を聞くの耳あらば聖旨の宏深なるをも拜了すべく特に青年心性修養は此の第一義勅語の外に覓むべからず弊館幸に發行の榮を荷へり全國の各位每家に一本を備へて必ず聖諭を奉體せられん事を望む。

販賣用電話本局二千六百卅番　**東京本町博文館**　振替貯金口座第二百四十番

女（その七）

◎毛髪を美くする最新劑◎

如何なチヾレ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美しく出來ても髪の毛が惡くては遂にお化粧の目的は達し得られません殊に近頃は髪の毛の黒きを尊ぶ日本人に不向きな香油を毎度見受けますが是れは一面から言ひますと國粹破解であつて嘆はしき次第と云はねばなりません

茲に於て當研究所は常々其の弊を思ひ多年の實地經驗を重ね調製したものが『高砂白毛染』で……此の液は白髪赤毛を染むるに最も完全なるは勿論どんなチヾレ毛も一劑で必ず美くしくなります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重要品として頗る高評を博して居ります

尚又該液は在來品の如く御使用後手拭なぞを冠ぶる不便なく極めて輕便簡單なる液體で衛生に關しては特に警視廳の無害證明を有します有効禮狀日に增し多大なり

◎ちぢれ毛直し 白毛赤毛染 **高砂**

(價定) 大壜四十錢 小壜二十錢

送料大小壜共一個四錢

東京市神田區橋本町三丁目四番地

本舖 **東京化學化粧品研究所** (電話浪花千百五十二番)

着物だつて着られやしない、ねえ先生全くのお話でせう」とこれだ、これだから世間の人から誤解を受けるのだ、環は世間の人が思つてるやうな惡い女ぢやア無いけれども、餘りむき出しで何んでも彼でも自分の思つた事はずんぐ\云つて仕舞ふといふやうな性質だから聞く人によつて飛んだ誤解を受けるやうになるのだ。

「何有に先生もう少しの辛棒ですよ、今に私がよくなれば先生に怎麼生活の苦勞なんか掛やしないわ、私が全然引き受けて先生には樂隱居にして上げますよ」「いくら樂でも私は隱居は嫌だねえ」と私も思はず吹き出した。



私は付合せの野菜物を刻んでゐる間に環は自分で番茶を煎じて呑みながら、お菓子を食てゐる、最う二十七だと云ふのに獨身者は氣樂な故か何處か子供らしい處が殘つてゐるものだ。

「女優も好いけれどね環さん、貞奴つて頭があるから厭だね、何んでも好いから誰れもまだしないもので何か無いかしら貞奴の下に使はれるのは殘念ぢやア無いかねえ何か面白くつて、お金が澤山とれて樂な事は有るまいか、然すれば明日からだつて只つた今からでも家庭教師なんか廢業して終ふけれどもね」と私は

串談に云のを環は眞個にして「全くね先生見度いに學問が有つたつて、學問を賣て生活するんぢやア堪らないわね、まだ藝人の方が好い、なまなかの學問したゝけ癪に觸るでせう、あの好い事があつてよ、兜町へ行らつしやいよ」「イヤだよ環さん、私は環さんのやうな身輕な獨り者ぢやア無いんだもの、まかりまちがつたら一家こぞつて餓死するんだよ、あゝ然うなりや環さんの家にころがり込むから好い」「大丈夫、先生が相場に手を出すやうな時節が來れば、私なんか環孃とか何とか云はれて、ヤンヤつて喝采を博してる時分だから、何有に食客の五人や十人珠の履を穿して上げるわ」「大きな事を云つて又何日かのやうに秋の末になるに浴衣がけでいなせな處を見せて呉れないやうにして下さいよ、先生奈うぞねつて云つても此度は知らないから」と云ふと、「其節は又奈うぞ以前に增して御贔負を」と生意氣に一寸低頭をする、全く環だけは世間で云ふやうな那麼女ぢやア無い、反つて温順しいと云はれてる人に惡い事が有る者だ。

子供が歸つて來た、是れから多忙しくなるのにちよこ〳〵してゐられちやア五月蠅くつて仕方が無いから環に頼んで夕方迄遊びにやる事にした。

◎

夫の學生時代からの親しい友達ばかし、差支が有つて來られなかつた人も有るので、六時までに來たのが五人、半年に一度づゝ是れから斯うやつて集つては私の身について種々と相談相手になつてやらうといふ事になつた、嬉しいものは心を打ち開けた親友だ、其處になつては何と云つても女は駄目、隨分親しい友達でも一朝其間に些かでも面白からぬやうな事でも有つたら、再び以前のやうな親しい友にはなれぬものだ、尙且氣が少さいからかも知れない。

子供達が一人前の者に成る迄、例へば女ならば高等女學校卒業する位迄の間私を助けると思つて一人づつ友人が預つてやらうかといふ說も出た、すると一番年を經つてゐる法學士の木村さんといふのが「夫れは不可ない」と云ふ、「自分の子なら自分で育てたらいゝ

ぢやア無いか」と云ふ、私は胸が一杯になつた。
「併し此儘續けて行れる者ぢやアないし、第一僕ア妻君の體が續くまいと心配してるんだ」と會社員の太田さんが云ふ、私は何も云はずに只だ無言つて聞き役になつてゐる。
「僕だつて夫を思はないぢやア無いさ」
「併しね君、世間にやア隨分恁麽例は澤山有るんだらう、財産も何にも無くつて良人を失つた妻君なんかは一體どうなるんだらう」と柱に凭り掛つて居た林さんが膝を進めながら云ふ。
「夫れはねエ君種々有るだらうけれども大抵は子供を連れて里へ歸るとか、子供を他家の養女にでもやつて再婚するとかね」
「まア然うだね、現に僕の姉なんかも子供を連れて家に歸つてるんだけれどもね、其子が又泣き虫でね實際あれや困るね」
「兎に角難問題だよ」と太田さんが云ふ。
「奥さん女中を止すつて譯にやア行きませんか」と今迄無言で居た吉田さんが隅の方から云ふ。
「夫れや駄目だ、妻君が毎日出るんだからね、留守番は無し幼さい子供は居るし夫れや迚も駄目だよ」
「然うかなア」と弱つたらしい聲がする。



「眞個に皆樣に種々御心配かけて私一人だとどうにでもするんですけれどもねえ、何しろ幼さい者ばかしなんですから」と私も氣の毒で堪らなくなつたから遂ひ口を出した。

「寧ろ家庭教師なんか止して仕舞つて學校へ出ちやアどうだらう」

「夫れやア損だよ、割が惡いだらうと思ふね」

「何有に學校ばかりにしないで家にも盛んに弟子をとるんだよ」

「夫れぢやア尙苦しからう」と此樣事で彼れも不可ない是れも駄目だと云ふので却々定まらない、皆の心は云はないけれども再婚したら夫れが一番好いと云ふやうなのが顯はれてゐる、併し今更結婚する氣もなし、子供達にしても又私と同じやうな運命を踏んで行くのが可哀想だ、私の母も年若くて夫を失つたと云ふので直ぐに私を置いたなり、他家へ嫁いで仕舞つたので、私は祖母さんの手に育てられた、よく祖母さんは私を抱いて炬燵に當りながら、お前の母さんは不實者だ〳〵と云つてゐた、不實者つて甚麽な者だらうといつでも私は思つて、祖母さんに訊いて見ると、可愛いお前を置ひてきぼりして行くんだもの、不實者ぢやア無いかと云ふ、で子供心にも母はよくない女だと思ひ込んでゐた、併し逢つて見た時案外優しくつて好い小母さんだと思つた、夫れと同じ事で今私が結婚でもしたら乾度子供達は私を恨むに違ひないんだ、夫れでなくとも傍の者が皆然うして仕舞ふんだから仕方がない。

「どうでせう奥さん、上のお二人だけは何處か然るべき家へお預けなすつて、お宅に女學生の四五人も置いて見たら奈うでせう、而して今迄通り教授に出て居たら少しは好いだらうと思ふんですがね」と太田さんが云ふ、皆夫れが好からうと贊成する、私は何んだか氣が進まなかつたけれども、親切にして呉れる人達の感情を害すのが厭だから、一應ようく考へて見てから然ういふ風にお願ひして見る事に致しませうと答へて置いた。

で結局子供達は他家へ預ける事に定つた。

是れで先づ談話の一段落が付いたと云ふやうに、然るべき家を僕等の方で又探して御相談しようからと言つて別れた。話の半から末の子供は私の膝の上で眠つて仕舞つた今自分達の身はどう定められて居ようど母に寄り掛つたまゝ何事も知らずに、安心して眠つてゐるのだと思ふと最う自分等は奈うなつたつて構はない、體が續くまで働けば好い而して倒れゝば夫れまでだ、譬へ埴生の宿につゞれの衣を身にまとはふども、溫かい愛の光に凍えさせはしない、せめては子供だけも



愛する親の手許で育てたい。客を送つて洋燈を持つて次の間へ立つと上の二人は床に入つたまゝまだ目をぱち／＼させて起きてゐる。奈うしたのまだ寝ないのかいと訊くと母さんが來るまで待つてゐたと云ふ。恁麽母でも居なければ淋いのだと見える。

○旅泊

友さそふむろのとまりの朝あらしに聲を帆にあげて出る舟人　義重

ふろさとをみろめ生てふ夢もあれな海を枕のうきとまり舟　弘賢

○海路

いかにして人もかよはんわだの原舟とかぜとのたよりならずば　後宮院



妹を望みし人へ参考として言送る書

秋雨

一

兄たる僕にすら、當時十九のおしんには戀がないのかとかつて幾度かうたがはしめた。

常に地上を熟視する眼は性來のつぶらなる瞳を人に見せたことがない、くつきりと白い、ふさ〳〵と黒い、この兩境なる美を有する額でいつも問答する計だ。

一と度かれを見たものは『いやにすました氣ざな女だ』といふ。二度三度彼女を見たばかりで一度も物を言つたことのないものは「野心家？」を意味した文字をかれに浴せる。

しかし兄たる僕はたゞ「我の強い女」存外單純な奴だとおもふてゐた。

我の強いだけ人から指をさゝれまいの心が身に一寸の隙もない、よくもあゝしてゐて肩がこらぬものだと傍からは氣がもめる。しかし當人はすでにそれが習慣性となつて終つて、むしろその態度からはずれるのは『わざとらしいぐらゐ』に耻る氣味だ。

野心家と見えても強いて三者の言を否定し得ない、何をさしても人後に落ちぬところは才子肌にはよくある柄だ。

かくいへば利口な女らしくきこえるが馬鹿だ、實に愚直だ。よくいへば公平かも知れぬ、極端に腹の蟲が西から東へ飛ぶらしい、此の點を以て第三者は輕薄な利口ぶつた女といへばいはれる。

彼女は全然死んだ母親の氣質をうけてゐる、受けたのみならず七つまでは訓へられたのだ。

此の上述べてもつまりは同じだ。そこで最も彼に近

い僕が結論をつけるならば、この「我の女」の外形、内容を、綜合しておしんは正銘の九寸五分と斷言する。

役に立つがまた他に反抗と恐怖を起させる。女には決してのぞましくない性質とおもふ。

＊　＊　＊

由來、第三者は冷靜である可きものだ。以上の材料（精細の事實を以て證明するいとまはないが）を僕の判斷として提供することに由てすでに僕の責務は終つたのだ。

一年前の僕ならたしかにこゝらで御免を被る。



が、ことしはすでにおしんは、より深い材料を僕にあたへて、より重い判斷をうながした。

二

嫉妬が半分、よせつけぬ、よりつけぬ、が二分五厘づゝといふおしんには親しいものが未だない、人並みの交際は例の我で、見苦しいことを見せなかつた樣だ。尊敬は可なり蔭からうけた相だが親しんだ者は一人もなかつたらう、結果は敬遠主義をとられたに外ならぬ。

可愛相ではないかといひたいが今は堪える。最も將來の應援を默契する朋友間に於てすでにこ

れであつたのだ。

僕は僕の妹としてかゝる目に遇はして果して人間になれるかしらと少なからぬ危ぶみもした。しかし一言も彼女にアドバイスしなかつた。幼より獨立獨歩只「獨」の字に馴れた彼女はかならず「獨」の賜よりして何等かを反省し、何等かを得るとひそかに信頼の影が僕の心の奥にさして居たからである。

いかに我のつよい彼女も、否強かつた丈け人なき折りの涙もいかばかりであつたかと同情されるがこれが學校生活の時代を通じての現象だつたのにはあきれるの外はない。して見るとたしかに種は彼女自身が蒔いたには相違ないのだ宛然人間をも一個の小宇宙と見るならば、彼女は超然追ぼり出されたのだ。

こゝにかれはこの寂寞、この煩悶を塡充し、解決し様として海に赴いた。とある東海の濱にさすらふた。海はたしかに彼女をなぐさめた。はげました即ち海はかれにとつて沈默の響であつたのだ。人間に失意したかれは苦悶のありさまをわれを覺えて始めての親友海に明かしたのである、その時の彼女が快は到底傍觀者の計り知ることの出來ない、おそらく彼女が空前の黃金の時代であつたらう。生の興味はこゝに彼女にきざしそめたのである。

以來かれの我は大分まろくなつた同じ我が出るにしても人を刺すがごときものではなくなつた。

果しておしんは獨の賜を海に得た。我が非をみとめたのだ。然し反省せるものは滿足せぬ、彼女は生の興味を感じてよりは、溺くばかりの愛を人にさゝげて人と自分との美なる關係を復活し度いと試みた、此の試みの第一人者となつたのは最もかれに過去に於て相反目した年長者であつた。僕はこれをおもふと實に女といふ奴ほど判らないものはない。勿論女子通有の短長は共有して居たらう。二年前の學期末におしん曰く、

「私しを今學期きりで退校させるといふ人がありますのよ」

と言つたその當の敵である人はおしんが最初の握手者であつたのだ。多少以前に於て双方、互が、魂をにら

み、境遇を同情し合ふて居たことは事實であるが、空しく麹室に醞釀されて居たのだそれがある機會に由てかをりをはなつたのである。そして其の熱度は單に友情を以てとゝまらぬ。夫婦の愛情も及ぶまいとおもはれる。僕は同情の愛といふものをこれに由て學むだといふてもよい宛然僕の妹は世話女房だそして人に問はれた時も決して好く紹介したことがない、惡口半分で居る。過去に於て甘き花影を知らぬ兩人はお互に獨占の快を覺えたといふ樣だ。

此の間の消息についてはおしんの日記に躍如たるものがある、はからぬ夜おしんがよむでくれた懺悔の日記の一節には、まづ天眞に暗淚を禁じ得なかつた。

しかし僕は當局のものではない妹たりともその日記を發くことは出來ぬ。

が、彼女は決して戀をしらぬ女ではなかつた。それ以上に我が强かつたのである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

以上第二にあげた事實には僕が大分第三者たる位置からはづれて、主觀的同情が混じてゐる。突然に聞く君には茫漠として却て或は模糊なる參考に君をまどはすなきやを懼れる。

しかし今はまだおしんも僕の只一人の妹である。君が誠情を以て僕の妹を所望せられたことを非常に感謝する。と共に君に提携を許すまへに以上の事實を臆面なくさらけ出して君が決心の參考に供する。

（をはり）



お姉上

その五　卒業

侶松女史

過日來、試驗の爲め意外の多忙を極め御無沙汰致し候、此頃は、その疲勞も有之候にや昨今、いかにも意氣悄沈致し居り候、小弟は、どうしても、小弟の境遇に一大變化を與へれば、限りなき憂愁をぬぐひ去ること難く候、「復活にあらざれば、即ち自殺」、此二者何れを撰ぶべきかは、小弟が目下の問題に候、お姉上よ、小弟が目下の苦悶を以て單に失戀のそれとのみおもひ給ふなかれ、小弟が煩悶は、理想を失へる煩悶に候、現在を超越せんとする煩悶には、社會人文の成果に對して、呪咀を敢てせん煩悶に候、小弟に新らしき理想あらしめ給へ、然らざれば、死を與へ給へ、小弟は今の社會、今の道德、今の宗教に滿足して現在を享樂し得る者に非ず候、然れども、然れども、小弟が享樂し得べき新生活！嗚呼これ如何なる生活、如何なる理想に候ぞ、是れ小弟が目下の大問題なり、生死を賭して解決すべき問題なり、問題の解決は、何を與へ候べきぞ、曰く、「復活か將た自殺！是れ終局の斷案ならずや、小弟は孰れを取るべきかを知らず、たゞ、復活の人生は尊ぶべく、自殺の生涯も羨むべしと存じ候、復活は、平和の宮居に達すべき第一歩にして、自殺は、寂靜の世界に入るべき門戸なればなり、兩者其歸趣を同じうせば、小弟は、寧ろ、自殺せんか、されど、あゝ、されど、小弟は到底煩惱の子に候、地上の兒に候、…………自殺すべくあまりに理性に富み居り候、否、單に理性とはいはじ、小弟の「感情」は、痛切に之を制し申候、即ち「感情」は聲を出して、自殺は殺風景極まるものにて、決して詩的なるものに非らずと叫び申候。

世には、哲學人を殺すなど申すものも有之候らへ共、小弟に、もし、哲學思想なかりせば、今日迄は生存せず、すでに既に、遠の昔に自殺せし事と存候、小弟は、「生きて解脫の境に達する能はざらば、死すとも、尙、其域に到るを得ず、畢竟、痛苦は相齊しかるべし」と、ありし古言を、何遍となく、、、、、、、、かみしめ〳〵味ひ申候、幾度か、我を誘ふ暗黑なる深淵に臨みつゝも、瘦我慢を振ひ起して、やつと此方の岸に踏み留まり居り候、あはれ、かくて生存は遂に小弟にとりての本能なるべく候か？。

本年は、形斗の學校の業も卒へ、親族知己に對する申譯、…………嗚呼、ほんの申譯丈は相立ち候、學校にては眞學生なりとて賞品を授けられ、朋友は小弟の試驗の出來榮よ

きな羨み候へ共、嗚、かゝるはかなき地上の名譽を、小弟はいかで心に嬉しと思ひ申すべき、小弟が心中には、今後數段の修養を積んで、永遠安住の地を得んと思ふ希望の燃ゆると共に、又、現下の苦痛を去るの工夫をも要し候、小弟が心の惱みを知らざる朋友知己は、小弟が卒業をいたく喜び、郷里の或る親族は、小弟の卒業を聞くと同時に其愛孃を妻に與へんと申出せりとか、をかしくも昨日、國許よりの通信に有之候！されど、小生は我心を欺いて、いかでか、彼等の申出を直に容れ候べき、嗚呼、郷里もつひに小弟が爲には、安住を與ふる地にはあらざるべきか、さはいへ、先達姉上の仰の如く、小弟は、今心に惱みあると共に、身にも病ある樣覺え候まゝ、暫らく塵多き都會の地を去つて、自然に親しみ、古郷の山と水とに對して、身をも心をも癒やさばやと存じ候、委細は近日參上の上に御相談可申候。

君よあはれ、きゝませ己が執着の
きづなたちえぬ、弱き子のなげき。
とざゝれし、心地もしげり北極の、
くらく冷たき、氷の中に、

例に依つて、御笑ひ草までに。おゝさよなら。

七月二十日

その六　歸省

一昨夜無事歸宅致し候、家とは申せ、古郷には殘るよろこびも無之候へば、我家も他國の心地して、郷里の山紫水明、變らぬ樣の、却つて怪まるゝばかりに候。

本日夕方、一封の御便り着……ほの闇うなりゆく二階の欄に凭りて、獨り御玉章を讀みし刹那の感興、箇中の消息、アゝ何とか察し給ふ、苦笑と、哀感との、交々湧くを覺えつゝ、やう／＼讀み終り申候。

姉上よ、はかなきは我の運命なるかな、孤心永しへの歡樂を、雲の外なるジュピターに契つて、あはれ之より幾年の涙を姉上の詩料に供ふべきか、幸に永遠の香りはなくとも、我文は無窮の哀歌なり、……

よもすがら、愁ひてさくよ、月見草、
月さす間こそ、命なりけれ、
夕日かげ、消えての後は、夕靈の、
行衛やいづこ、あゝ君問ふな。

兎に角、我性格を新にして、生涯の轉機を開かん事は、我目前の願と相成り候、此頃の哀感、總てこれ病氣の所爲にや候はん、小弟は、もう少し男らしくならればならず候。靈魂までが死んでは大變に候…………かくて日夜不安の念

に囚られ居り候へ共、乍去、小弟は、狂せる譯にも無之候まゝ御心配に不及候、煩惱の中に活動の中に、まことは眞晝の夢の中に、信仰の大河の流の、遠く〳〵耳底に響くな覺え申候、おゝさらば、姉上よ。

八月　二日

その七　溫泉行

拜啓………小弟は、一昨日より北信の山間、小さやかなる溫泉に、俗腸を洗ひつゝ罷在候、乍去、小弟が懐は、今はいづこをさまよひつゝ在りや、信ずる多くの友か、友も知らじ、敬すべき師父か、師父も知り給はじ、兄弟姉妹か、否々、總ては之を知らじ、あゝ唯知り給ふは、神と姉上とのみ。

鄕里にも、多少心を傷むる問題も有之候ひしが、變轉中に眞實を掴んで居さへすればと、興味を以て事に當り申候、小弟も、いつ〳〵までも煩悶しつゝ、空しく日を送り、父の心を傷ましめ、弟妹の教育を疎にし、自分一身も、風塵の中に老い了り候ては、折角人界に生を受けし甲斐なき事と存候かくて昨今、小弟は胸中に一片耿々の理性を失はざらん樣にと、つとめて自からを策勵致し居り候。

昨日は山里の徒然なるまゝに、大西博士の遺文を讀んで、色々面白き暗示を得申候、大西先生は、哲學者、批評家たるに似もやらず却々歌なども詠み殘して床しき性格を持たれたる人に候ひし、叙景歌よりも、むき出しの叙情詩の方が、よく出來て居る樣に覺え申候、而して、俗歌の内に、こんな可笑しいのも有之候。

わしが心は、戀する心、
戀せにや心が、ないわいな。

餘りよい調子にも無之候へ共、あの謹嚴なる大西先生の作とおもへば、尠からず感興を覺え申候。

君と手を取り、松原ゆけば、
人がみる樣な、逢ふ人が、

先生も、なか〳〵えらひものに候はずや、尙、卷頭に自筆の短册の縮寫が有之候が、

行けど〳〵、到らぬ空を、慕ひても、
のぼるや人の、心なるらむ、

少し理屈に過ぎた傾き有之候も、實際の事と存ぜられ候。

昨日は、この本を讀んで、何ともなしに勇氣を得申候、之も著者の餘德の一端かも知れ不申候、お蔭にて、どうやら本日は頭腦の疼痛も少しく癒りし樣の心地せられ候、これから暫時入湯しつゝ靜養致すつもりに御座候、昨夜散步



の途次、手折り得し山百合を枕頭に挿して寝に就き候に、夜半それとなく匂ひ来る花の香を懐かしみつゝ、

夢に見えし幻や何、さよふけて、
火影に白き山百合の花。

小弟も、心靈の慰安に憧がれて、折ふし病的憂欝に陥り、姉上の三十棒を喫すること度々に候へ共、小弟とても、いついつまでも、駄々をこねて、姉上を困らせは致さず。其内には、屹度御恩がへしの出来る様につとめ可申候。

甚暑の候、姉上にもつとめて御安泰ならむことを祈り申候。御令弟へも久しく御不音、よろしく御傳聲願上候、匆々

八月　十七日



我が敬愛する文章

小崎千代子

西洋の婦人は非常に讀書の趣味を持つて居りまして互に訪問しても直ぐ本を讀むとか、本の話をするとか致して居りますが、日本の婦人はさういふ譯には參りません。學校にお通ひの頃は多少は本もお讀みになりませうが、家でも持ちますと、讀書などゝいふ事は大概棄てゝお終ひになります。誠に殘念な事ですが、一つは境遇が許さないのでも御座いませう私なども、家政を修め、子供を教育し、旁宗教上の働を僅ばかりでも手助けをして居りますから、如何しても外出の時間が多いので、一日中齷齪と暮して殆ど讀書に親しむ事が出來ません、それでもまあ一番親しみますのは矢張り聖書で御座います。我田引水のやうで御座いますが是ればかりは手離した事は御座いません。そして職掌柄からでも御座いませうが、婦人會や何かの時お話でも致すのに、譬なんかを小説や新聞の雜報から引きましては、どうしても俗になりますから、矢張り聖書からとるやうに致します。それに私は重に日曜學校に働いて居りますから、小兒に關係した本などをよく見ます、西洋人の書いたのや日本の教育者が書いたのが教文館あたりから出ますのを大概眼を通して置きますが、是は愛讀といふのではありません、愛讀書と云へば矢張り聖書で御座います。一言一句金言で成り立つて居る樣なものですから、いくら讀んでも盡きない味があります。殊更に何處が秀れてゐるといふ事は無いけれども、強いて愛讀する處を申せば、舊約では箴言と雅歌、新約では雅各書で御座います。新約は基督の傳を弟子等が書いたものですから、小説でも讀むやうな面白味はありませんが、舊約の方になると、實

に神秘的な面白味が御座います。讀でゆきますと種々太古の風俗や人情が偲ばれて、鳥渡神と人との譯でも讀むやうで御座います。雅歌なんかは、言はゞ全體が詩で、實に名文で御座いますが、特に五章の十節以下なんかは、私は幾度となく繰り返して讀みます。

「わが愛する者は白くかつ紅にして、萬人の上に越ゆその頭は純金の如く、その髪はふさやかにして、黒きこと鳥の如し、その目は谷川の水のほとりにをる鴿の如く、乳に洗はれて美しく嵌れり、その頰は馨しき花の床の如く、香草の壇の如し、その唇は百合の花の如く、沒藥の汁をしたゝらす、その手はきばみたる碧玉を嵌し黃金の釧の如く、その體は青玉をもて被ひたる象牙の彫刻物の如し、その脛は蠟石の柱を黃金の臺にたてたるが如く、その相貌はレバノンの如く、その優れたるは香柏の如し、……エルサレムの女子等よ、これぞわが愛する者、これぞ我が伴侶なる」

是だけ讀んだのでは、意味も分りますまいが兎も角も斯様に美しい詞を以て、美しい小說を書いたやうなもので御座います。もし私に筆が執れて思ふやうに文が書けましたらば、雅歌なんかゝら材料を得て小說をかいて見たいと思ひます。實際さうしたら嘸立派な小說が出來るだらうと思ひます。詩だの歌だの御詠になる方にも隨分參考にならうと存じます。また箴言ならば三十一章の十節以下をとります。誰か賢き女を見出す事を得ん、その價は眞珠よりも貴とし、その夫の心はかれを恃み、その產業は乏しくならじ、……云々」この邊からはよく女の心得になる事を書いたので、誰方がお讀みになつても爲にならうと思ひます。

聖書と申すと、皆様は大變むづかしいものゝやうに思して、信者でもあまり讀まない方がありますが、舊約なんかはよく分つて、小說を讀むやうに面白う御座います。

惜しとおもふ命もかろし何な身の
くるしき戀と人にしらせん

後柏原院



婚前婚後に處する法

櫻井ちか子

物質的の進歩に伴ふ生活の困難を想像して、教育あり技倆ある婦人方が結婚を忌避されるのは必然の情で御座いませう。併し樂は苦の種と申す卑近な諺を深く味ひますと、結婚婦人と獨身婦人との運命によく當嵌つて居ると存じます。好運な結婚は別物として通例の結婚は苦勞が有勝なものですから獨身で通す方が全く氣樂なやうに見えます。新婚の樂しみは束の間に過ぎて、子供の二三人も追かけて生れゝば、子供に身體を縛られて物見遊山にも思ふやうに出歩けず、世帶の苦勞に加へて良人の我儘、姑の干渉なぞ厭な事が重りますから、嗚呼結婚しなけりや宜かつたなぞと多數の細君は悔むやうです去りながら此處が嘗て學校で薫陶された婦人の献身的精神を發揮すべき舞臺ぞと觀念して暫く辛抱する内に子供も成人し、軈て祖母樣と肩に縋る愛孫も出來て所謂老樂の境遇となりませう。獨身者は若い内こそ呑氣で花やかで小皺も早く寄らぬ代り、老後の心淋しさは何に喩へやうもありますまい。私の知つて居る某婦人は獨身で暮す決心で、外國へまでも出掛て才能を研いて參りましたが、實驗上から追々老後の事を考へて、縱令自分は兄弟達の厄介にならずとも、母君として待遇される感じと、老いたる姉として待遇される感じとを比較すると、雲泥の差がある事を悟り、遂に良縁を求めて結婚いたしましたが、先づ一般の婦人は若い内に家庭の犧牲となつて樂の種蒔をした方が安全であります。

▲双方を知れる媒妁

米國邊のやうに男女交際が自由で、婦人が男子の心を見きはめた上の結婚でさへも、結婚前の理想とは大分異ふ事が往々あるので御座います。私が彼地に滯在

中、未だ新婚當時の牧師夫婦と一緒に田舎へ旅行した事が御座いました。都會では道のぬかる處は少しもありませんが田舎は矢張處々に水溜りがありまして、若夫人は其度に良人の腕にすがつて飛び越しました。後で若夫人は『婚約中に若し斯う云ふ塲合があつたなら良人は私を抱いて飛越て呉れたでせうに』と私に言はれました。滑稽のやうな話ではありますが、結婚前後の情熱に此位の差があると云ふ一例になると存じました。夫ですから結婚しようとする婦人方は自分の感情にばかり任せずに、兩親とか或は確乎した知己とかに善く見極めて貰て、嫁するのが一番安全で御座いませう。私は職掌上自然媒妁を頼まれる塲合が多う御座いますが、皆結果が宜しいのは、双方をよく知つて居て御世話いたしたからだと存じます。

▲身分の釣合

相互の愛情さへ完全ならば結婚して差支へないと云ふのは當然の理屈ですが、一家を成してから樣々の障礙が起つて破鏡の悲を招く事が往々ありますのは、理屈以外に種々の事情が蟠つて不幸の原因となるやうに思はれます。身分の不釣合なぞも原因の一つで、學問趣味の深い人が、商家育ちの娘を貰ひますと、談話の材料や、感想なぞに合はぬ處が出來て參り、何となく双方に物足らぬ感情を生じて、追々交情が疎になる事が御座います。私が親戚の某商家へ參りますと、談話が何樣も合ひませんで、矢張向ふは商家同志、此方は此方の連中の方が談話に面白味を感じるので御座います。結婚もこゝらの加減を餘程注意しなければなりません。

▲食物趣味

一概にも言へませんが、郷國の餘り懸隔つた者が結婚いたしますと、食物の趣味に大層相違がある爲めに面白くない塲合が往々あるもので御座います。食物趣味なぞは些細な事のやうですが、日々家庭の愉快を作る基ですから却々忽せになりません。納豆の好な東京人と昆布の好な大阪人とは何んとなくソリが合はぬやうに思はれます。會津の婦人を妻にして居た福岡の某

知人が、或時私方へ參つて、『僕は久々で歸鄕して弟の妻の手料理を食べたが、實に十年振で國料理の風味を賞翫しました』と言はれた事があります。又私が小濱に居りました頃、矢張小濱に參つて居た東京の某知人が、小濱の婦人と結婚いたしたのですが、母親さんが私の家へ參つては、御宅の御香々は本當に旨しいこと、宅の糠味噌は如何しても私の口に合はないのですとこぼされました。東京人は糠味噌の古い程味が好いと喜びますが、上方では成るべく新しいのを賞味すると云ふ相違があり、夫婦の間だけなら不愉快ながらも如何にか濟んでゆきますが、嫁姑となりますと、食物が一番和樂の媒となるものですから、趣味の相違は一寸面倒なもので御座います。斯樣場合に遭遇した婦人は成る可く家族の趣味習慣に合ふやうな料理を拵へるやうに注意しなければなりません。

▲主婦の鬨

或る細君が『私は自分の拵へた料理を良人や來客に供へて、旨いと悦ばれた時が何より一番嬉しいので、此時は鬨を揚げるやうな心地がいたします』と言はれましたが、料理の巧者なのは家人の歡心を得る一番の捷徑で御座いますから、主婦のよく〱注意すべき事で御座います。

▲隠れたる賢妻

理想の妻と云ふ問題が八釜しくない昔の婦人の中に却つて床しい働きを致した者が御座いました。私が年のゆかぬ折に見ました本の中に、斯う云ふ事がありました。或大工が寺院の普請を受負ひ作業して居る際、過つて門柱を片々短かく切つて了つたのですが、其門柱は珍貴の材木で却々代りの物が手に入らず、途方に暮れて居りますのを、妻は深く心配し乍らも是に就て一言も發せずに、毎日重箱を三つ四つ持出し、角違ひに積では崩し、崩しては積んで居つたのです。大工は默つて妻の爲す事を見て居たが、フッと發明いたし門柱の上へ角違ひに木を組み上げて、どうにか間に合せ首尾よく工事を終へたと云ふのでした。私は理想の妻と云ふ事を考へる度に此大工の妻を思ひ出し、沈靜にして才智ある模範的賢妻であると感服して居るので御座います。

八十三歳 媼の生活

高須梅溪

私の祖母は、數年前、八十三歳の長壽を以て此の世を辭したのですが、一寸面白い性行の人でした。住んで居たのは、大阪です。

△眞宗の信者

祖母は、眞宗の信者でしたが、他の神佛をも粗末にせず、何處へか往き歸りの折、神社佛閣の前を通りますと、必度、御賽錢を上げて、禮拜するのが常です。朝は、眞宗の御經文を誦する前には、東天を仰いで、天照大神に祈念を凝らすことを忘れません。之れは、三百六十五日、一度も缺かしたことがない位です。全く邪念のなかつた信心家です。

△働らく事が好き

祖母は、働く事が好きな人でした。朝から晩迄無爲に居ることはありません。臺所の掃除もすれば、御飯も炊く、御菜も作らへる、縫物もする、何か働いて居らぬと、氣色が惡いのです。勿論、老人の事ですから、夏になると、二三時間は晝寐を致します、冬になると、炬燵に足を當て乍らトロ〳〵と一時間ばかり心地能く眠る他は、絶えず何事か致して居りました。

△徒歩主義

性質は極めて勝氣の人で、却々車に乘りません。七十の坂を越してからも、テク〳〵と歩いて、一里以上も懸け離れた親戚を訪うて、歸途も亦歩かうとして「危いから」と心配されて、無理に車に乘せられて歸つたことも度々あります。ツイ死ぬ前迄、矢張、佛に御供へする花な買ひに行くと言つては、勾配の强い坂を上下するのでした。畢竟、歩くことが大好きなのです。

△淸貧に安んず

私の家は、中途から零落したのですから、十數年來、隨分祖母の心を苦めるやうな事もありました。然し祖母は、一向之を苦にせず、何時も同じ心持で、愚痴を言つたりすることは、決してないやうでした。貧に安んじて、平和に其の日を送りさへすれば滿足して居りました。

△晩酌二合

食物は、別に好き嫌ひはありませんでした。何でも戴いて喜んで居ります。私等が「あれは好き、之は嫌ひ」と申しますと、「左樣な贅澤を言つて可かぬ」と叱られた事が度々ありました。然し祖母は、一般に魚肉を好んだやうで、月の一日、十五日には必ず新鮮な魚を求めて、家内一同と共に食卓に就くのを樂みとして居りました。酒は、好きな方ですがそれも一二合の處で、毎晩二三時間もかゝつてユツクリと飲み乍ら種々の話をする事が好きで昔話も能く出ます。煙草は別に好きな方でありません。

△能く咀嚼す

晩年齒は二三本しかないやうでしたが、それでも澤庵等を好んで、細かく切つて食べます。章魚のやうなものでも、少しばかり味うて喜ん

で居ります。御飯は能く咀嚼せぬと嚥下さぬ方で、毎日、食事には三十分以上を費しました。ですから私共は、「祖母の食事は長い」と言つて笑ひますと、自分も可笑しいと見えて、「仕方がない」と申して居りました。御飯は朝夕共に三椀位でした。

△小説と旅行が好き

娯樂と言つては、別にありませんが、旅行、芝居、義太夫、小説等は、何れも好きな方で、稲荷、文樂の人形淨瑠璃には、度々まゐつたやうです。旅行は、餘り遠くへ出かけたことはありませんが、伊勢參宮は致しました。住吉、濱寺あたりへは、折々、私を伴れて遊びに行きました。小説は、日毎に暇があれば、必ず見ます。然しそれも「梅暦」や「西鶴全集」のやうなものでなく、主として「八犬傳」や「道中膝栗毛」や「西遊記」等で、其の他、高僧實錄、忠臣、義士、節婦孝子に關する讀物が好きでした。「弘法大師一代記」は始終手を離さずに讀んだもので、大師の御德には、餘程信心の念を深うした樣です。毎月廿一日の大師めぐりの日には、必ず市内の大師めぐりをして、朝早く出で、夕方に歸りました。私も其の御伴をして、此處彼處の寺を訪づれた事が御座いました。子供心にも呑氣で面白いと思つたやうに記憶して居ります。

△花の道樂

祖母には、尚ほ一つの娯樂がありました。それは、花を作ることが好きなのです。勿論、大阪の片隅、桃谷の里と言はれるやうな田舎に住んで、而かも庭のない隠居に居たものですから、祖母の思ふやうに花を作る餘地はありません。

然し祖母は、別にそれを苦にしないのです。花を作ると言つても、朝顔や夕顔、又は白粉の花位ですから、誠に詰らぬやうですが、祖母には何よりの樂みなのでした。

夏になると、必度破籬に夕顔朝顔が微笑むやう、其の以前から丹精を込めて、種子を蒔き、水を灌ぎ、自分一人で骨を折りました。私が學校時代の夏休みに、桃谷の隠居に歸りますと、唯、其の家内の汚いのに困りましたが、祖母の丹精になる朝顔夕顔の花には少からず慰められました。此の花を培ふと言ふことが祖母の樂天的氣象に、一段の餘裕を加へたに違ひありません。此の事は曾て、私の文集の中に書いたことがありました。

△孫を愛す

祖母の體格は、極めて頑丈な方で、指等も拭掃除をするため大變太く爲つて、火を掴んでも一向熱くないと申して居りました。丈は餘り高い方ではなく、婦人としては、先づ普通の方でした。

祖母には、二人の孫がありました。私は其の一人です。今一人は叔父の娘です。私は夙く兩親に別れましたので、祖母は、殊に私を可愛がつて、大抵の無理は、通して吳れました。然し餘り横着が過ぎると、月に一度位、嚴格に戒めることもありましたが、打擲することは、決してなかつた樣です。

△二階より轉ぶ

祖母の死因は、家人の留守中二階へ用事を爲に上つて、其の降りる時に梯子を踏みはづして、後頭部に大分の負傷をした事が、少からず打撃を與へたやうです。然し例の勝氣な方ですから一向に驚きません、平氣で醫者に其の傷口を縫つて貰つた相です。私は、其の負傷後、郷里へ歸つた時、少し元氣が衰へたやうに見受けました。それが最後の訣別とは夢にも思はなかつたのです。



△長壽の原因

必竟、祖母の長壽は、大體が其の頑丈な身體の御陰かも知れませぬが一つは、其の樂天的の氣象に負ふ所多く、愉快に働き、愉快に遊んで、暴飲暴食をせなかつた處にあるかと思はれます。所謂善女の生涯とも申すべきでありませう。

肺病の新藥

紐育の醫學博士ラッセル氏が野菜より製造した液汁が肺病の靈藥である事を發明し之を服用せしめた患者の十一名が數ヶ月の後に根治全快したと云ふ驚く可き實驗談あり。此の靈藥の新發見は歐米醫學社會の一問題となつて是非の論議が喧しいようであるが現今英國倫敦で同國醫界の泰斗オールドフイルド博士は此靈藥に就て發表した意見に依ると『予は野菜の液汁が果して百中百まで肺病を根治し得るや否やはまだ容易に斷定することは出來ぬが、兎に角結核病を治療する最良の道は患者の血液に奮鬪力を增進せしむるに在るといふ點に於て、予は發明者ラッセル博士と全然一致してゐる、又予が從來の經驗に徵すると、菓物や野菜の液汁の人體の血液の要素を養ひ、且其勢力を殖すに最も必要で、食品中には一日も缺く可からざるものである。今一二例を擧ぐると菓物の中では予は乾葡萄を第一位に置き、其次が林檎と梨である、或は此等を酒に醸したものも殆と同樣の效力がある、其處で野菜の中では之も予の經驗から云ふと胡蘿蔔が何よりも最も血液の營養分に富んでゐる。但し之は煮るよりも生の儘を細かく大根おろしのやうに擂り潰して食するに限る。胡蘿蔔の次は芹が最もよろしい、凡て野菜が人體に好いのは言ふまでも無く野菜の中に含まれたる液汁其儘の液汁即ち液汁中の鹽分であつて、之が非常に血液の營養となるのであるから、他の食物の如く料理、即ち煮焚して用ゐれば肝腎な鹽分を散逸させて仕舞ふ、其處で是非料理して用ゐたいとならば煮焚した汁を野菜と共に其儘に保存するか、或は單に蒸氣を以て蒸煮にして用ゐるか、此二途を取られば普通の料理法に依つて野菜は殆と何等の效用も無いと言つてよい』云々と尙博士は英國人に取りては穀類の液汁即ち酒精を含まざる英國製の麥酒マルトチー（麥酒の類）抔が最良の營養分であると言つてゐるが、人種食物を異にしてゐる日本人に取りて博士の野菜食用法は衛生上大いに參考に供すべき價値ありと思ふといふてある。



讀書の趣味

日向欽子

△乙女時代の讀物

私はもう七八歳の頃から、只譯もなく書物が好きで、讀めなくとも繪などあると、夫を見ては想像すると云ふ樣な風でしたから、釋迦八相記や田舍源氏の樣な草双紙が、柳行李一杯でした。其頃は今と違つて、少年小女の爲に綴られた無邪氣な美くしいお伽ばなしや、面白い中に種々の事を書き込んで博く物を識せると云ふ樣な進んだ物がありませんでしたから、姆母が話して呉れたのも矢張昔のカチ〳〵山とか、舌切雀とか、桃太郎とかを順に繰返して行く斗り、浦島の話しが少し詩的で、紅皿かけ皿で浮世の影法師を見せられる位な處なのですから、何か珍らしい物をと、子供心にも探して居りました。それで古本屋の店先でも、何でもそれらしい物さへ見ればあの恐ろしい四谷怪談でも、嘘の樣な猫騷動でも、お構ひなしで買つて貰ひました、拾歳の聲を聞いてそろ〳〵獨で讀める樣になると、丑滿頃に家鳴り震動がしたとか、美くしい一人娘が名の知れない病にかゝつたとか云ふ樣な事は、面白なくなつて、姫鏡などの樣な歴史的の話しを集めた物などを好む樣に成つて參りました、夫からはもう何と云ふ事はなく手當り次第に讀みましたが、十四の春、伊勢物語を見ましてから急に古い物が好きになつて更科日記の初めの方にある樣な熱心で、少しのお小遣を溜めて置いては古文學の書物を買つて出來る丈讀みました、此家へ嫁して參りましてからも猶其くせが止みませんので夫からも墳墓の中の文學だとか、骨董の樣な物だとか、種々な事を云はれまして口惜しがつた事も御座います。

△英文と英詩

英文の物ですか、左樣で御座いますね、私はどうも赤ん坊の樣ですけれど、希臘の神話とか、フェリーテールスの樣な物が大好きです、何時でしたか坪內博士の新曲浦島を讀みました時、初の幕の終の方に、

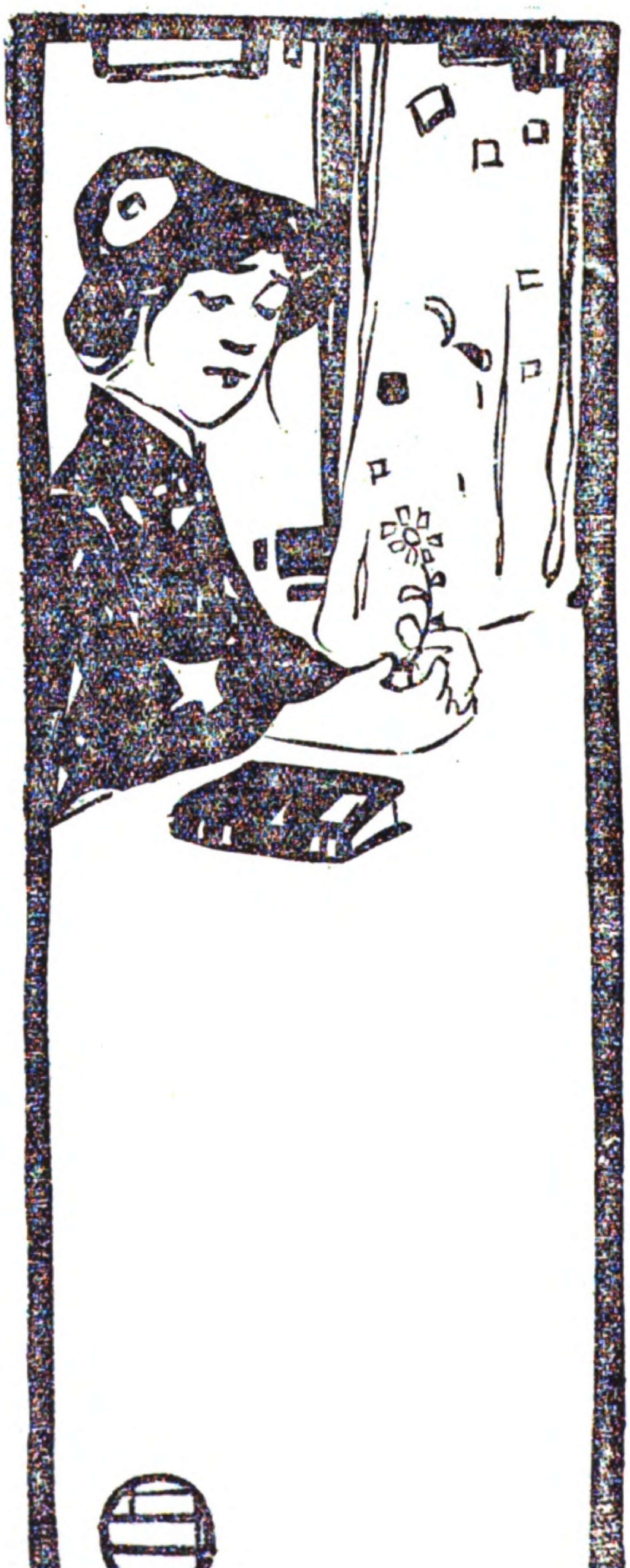
「春和に、ながめ果なく瑠璃澄みて八千尋徹る朝ぼらけ、龍の宮居の軒端にも、映る深空の影うらゝかに、めも彩雲の漂へる、見れば心のあこがれそめて、人の界を愛づればゆらくたま藻花秋立つこころは海神の父のゆるしも浪の上に浮ぶや龜の姿して」

と云ふ處がありましたが、私しは確に此處は The Little Mermaid.だと思ひました。成程斯云ふ風に通はして歌つたら、何の事もないお伽ばなしでも、面白い物になると考へた事も御座いました。夫で又わからぬくせに六ケ敷物が讀んで見たいので、一冊を讀むのにも夫の樣に疾く讀み切つて、それから又外のに移ると云ふ事が却々出來ません、それも前に斯樣な字があるから、此處は多分斯樣な意味に違ひないと、宜加減に解して讀むと、後までも何となく氣が濟まないので、解らない字は一頁にたとへ幾個ありましても、一つ〳〵に字びきを引いて見ると云ふ風な譯ですから、一冊讀んで終ふのには却々時間がかゝります。ですから夫までは決して他の書物に手をつけないと云ふ譯には行きませんので、つひ見たくなつた物を一寸見る、斯云ふ風で彼方は半分、此方は三分の二と云ふ樣な可笑な讀み方を致します。其上氣に入つた處でもありますと、其處へ暫く止つて終つて、繰り返しては讀んでゐるといふ風ですから、猶更後れて終ひます。私しは故イーストレーキ博士の娘のマリー孃と親しくして居るものですから彼の人が英詩の事を親切に敎へて呉れますので、此頃は漸く誰のには如何云ふ姿が多いとか、誰のは斯樣な調だとか位が、解る樣に成つて參りました。

△英詩と和歌の優劣

私しが和歌に斗り凝つてゐて英詩集などのぞいても

見ない頃『いくら日本の歌がよくつても、西洋の詩にはかなはない』と夫から云はれまして、そんな事はあるまいと思つた事も御座いましたが、或る幾首かの物を除けては、夫の方が勝になりはすまいかと思ふ事も御座います。何と云つても日本の歌は字數が限られてありますから、充分な事が申されませんね、然し又長くしたからといつて殘りなく云ひ表はされると云ふ物でもないのですから、六ケ敷う御座います。和歌よりも又短い發句の方に却つて趣きの深い物がある事も御座いますから、彼の伊勢物語中の歌でも、云ひ殘した不足な處に云ひ得ない妙味があるので、夫が又た日本の歌のよい處なのですから、比べると云ふ事になりますと何方とも一寸定められません。彼の有名なポーの'The Bells.' などは調べと云ひ形容と云ひ如何すればあ



あ云ふうまい事が云はれるだらうと思ひます。天には星がキラ／＼して空氣も凍る樣な冬の夜、山の上から轉がる樣な鐘の音、希望に滿ちた未來の夢を語る樣な婚禮の鐘、急遽しく物凄い火事の半鐘、淋しく恐しい死の鐘、夫が各其響になつて居て、讀み方によつては其儘に聞えますからこゝ等が英詩の特長かとおもひます。結局日本の歌は短い詞に餘情を含ませる、西洋の詩は其時の光景や、物の音や感情を、見える樣に聞える樣に、成程と思はせる樣に、云ひ過ぎない程度で、親切に書くと云ふ樣な違ひがあるのだらうと思ひます。

△小說と院本

日本の小說類ですか、中頃からの物も隨分讀みました、父が近松の淨瑠璃が大好なので、小さい時から委しく聞いて居ましたが、自分で讀みました時は又一しほ面白く思ひました。殊に世話物を讀む度に新らしい趣味を見出す樣な心持ちが致します。以前は世に有難い貞女だとか、驚くべき忍耐力を持つてゐる人だとか思つて居ました、あの天の網島のおさんも、此頃は一種の虛榮心に捕はれて、人情に背いてゐる面白くない婦人の樣に見えて來て、何處までも感情の儘に、身を委せた小春の方が慕はしい樣な氣がして參りました治兵衞が身を犧牲にしましたのも、自然そんな處にあるので御座いませう、夫から「淀鯉出世瀧德」の吾妻や「槍の權三重帷子」のおさいなどの性格は、却々面白い物だと思ひます。日本のシエクスピアーだと云はれる程の人なのですから、上手なのは申すまでもないのですが、極く短い文章の一つにも、深さと廣さとがあるのですから私しはもう大好きで御座います。

夫から馬琴の八犬傳、是も惡い筈はありませんが、私しは餘り好きでありません、水滸傳を源として書いた物だとか聞きましたが、何ですか餘り噓々しい樣な、大き過る樣な、場面が變つて事情が複雜になつてゐる割合に、氣の變らない、飽の來る物の樣に思はれます。私は幾度試みましても、順序を追つて終りまで讀み通すと云ふ氣になれません。一つはあの文章の口調を餘

り好かないからでもあるのでせう、口調が氣に入つたのは西鶴です、紅葉山人や一葉女史も皆此人の流を汲んでゐる樣で御座いましたが……紅葉山人の物も大概讀みました。どうも三人妻と伽羅枕が一番いゝ樣に思ひます。評判の金色夜叉も梅林でお宮が貫一の後から其肩に散りかゝつた花びらを取つてやる處など、何とも云はれぬ味がありますが。でも矢張三人妻の方が遙に上だと私しは思ひます。多情多恨もよう御座いますけれど、何ですか翻譯物の樣な氣がしましてね、然しまあ何と云つてもうまい物でした。一葉女史のも大好きでよく讀みましたが、此頃になつて見ますと餘り文章を氣にかけて、勞はり過ぎはしないかと思ふ樣な心持が致します「後のこと知りたや」と云ふ樣な風に終りを結ぶ邊りに、何となく殊更びた處が見えるのは若かつた故でもありませう、文章として見るには結構な物で御座いませうが。小説として其筋を見、人情の微細な處を味ふには矢張二葉亭とか、小杉天外とか云ふ樣な人達の自然らしい物の方が面白い樣に思ひます。露伴のですか、さうですね、あの人のは隨筆めいた物の方に私しの好な物が御座います。小説も惡い筈はないのですが少し理屈めく樣な處が御座いましてね然う深く味ひましたら面白いので御座いませう。私しが小説と名の付く物を手に取つて見はじめたのは淚香の翻譯物で、夫はその頃まで讀んでゐた昔し風の物とは、目先が全然變つてゐて、あの草深い牧場のあたりで、野花を摘んだり、水の清い川のほとりで、女が靜かに物思ひをしたり、又電燈の光りが晝を欺く樣な大廣間に美しく着飾つた貴女紳士が數知れず集つて來て話し合つたり、舞踏をしたりする樣な處が譯もなく氣に入つて終つたので御座いますよ、例へて見れば前に讀みました物は幻燈の樣で、後のは活動寫眞の樣な氣が致しましたからです。……近頃の物では、と申しましても大分もう古くなりましたが天外の蛇いちご女主人公のお京の性格が面白う御座います上に、其書出しが又一寸他の物とは變つてゐます。あれを讀みますと何ですかエノックアーデンの海邊の遊びを思ふ心

と、一つになつて、終ひには自分が草など摘んで遊んだ小さい時の事など思ひ出す様になりますの、あゝ云ふ罪のない事を書き出しに致しますと、讀む人は知らず〳〵引つけられて終ひますよ、夫から浪六のだと思ひましたが、原田甲斐と云ふのが御座いましたね、あれだの澁柿園の由井の正雪などは日本の小説として外國の人に見せても恥かしくない物だと思ひます。讀んで居りましても、其人に逢つて見たい様な心持ちが致しますからね、是も浪六の書いた物ですが、奴の小まんと云ふのがあります。あれが一しきり大好きで御座いまして、寢る時も枕のそばに置きましたので、友達などから寬小太郎（小まんに戀して死んだ若人）だと申された位でした、其次には鏡花の高野聖に湯島詣などをよく讀みました殊に高野聖は鏡花獨特の妙技を表はした物で深林の氣が身に染む様な、蛭の件から佛國の名畫にでもあり相な澗の邊り、夫から山の小家で月夜の中に鳥や獸の姿をした妖怪變化が群つて來て、それ等の鼻息羽音が木の葉の戰く様に聞えたといふ處に至つては、能く幽冥の境を寫して、ざわ〳〵の音やいまはしい姿が青白い月の色に浮んで見える様な心持が致します。斯いふ様な幻の影は、ポーの詩か、話しの中によく見る事がありますが、昔しの日本の小説には餘り見受けない様に思ひます。夫から又極近頃の物で面白く讀みましたのは澁柿園の淀殿、前に淀君と云ふ人は張も操もない平凡な女性だと思つてゐましたが、彼を讀んで居る中に少し見直す様な氣も致しまして、其境遇に同情する心持になつて參りました、これも筆の力とでも申しませう。彼れ程の女性であつたか如何かは疑問ですけれど、少なくとも感情の強いヒステリー的の婦人であつたらうと思はれます。

△自然派に就ての感想

先頃から自然派と云ふのが興つて來て、抑も小説と云ふ物は文章の遊戲でもなく、又人の頭腦に或る印象を止める爲に書くのでもない、たゞ世の中にある事を作らず飾らず其儘に現はすのが目的なのであるから只

有りのまゝさら〱と書いて見せれば自然に人が感動するとか云ふのださうで御座いますが、私しなどは矢張美くしい形容詞が使つてあれば美麗でいゝと思ひますし、英雄の擧動とか、美人の可憐な容姿とか、德の高い人格とか、其時現々と見えた影が、永く頭に殘る樣な書きかたの物が好きですから、其自然派とか申しますのはあまり面白いと思ひません、夫に丁寧に寫し出してある處は人の卑劣な性情だの、汚穢い方面ばかりなのですから如何も讀む氣になりません。

△王朝文學に就て

あまり古くはありますが此處へいつては源氏物語など隨分內容は不道德の極ですが、夫が悉く戒になつて居るのは、流石紫式部の意匠だと思ひます。其上に今の謂る自然派の書きさうな處はうまく逃げて、美くしい方ばかりを、彼の優美な筆であらはしたのですから、惡いはずはありません。桐壺から夢の浮橋まで詰らぬと思ふ處は一つもありませんけれど、わけて私しが好なのは、末摘花、葵、蓬生です、丁度源氏が雪の朝末摘花の家を出る處でしたが、車をよせた中門がひどくゆがんで居る、雪の明りで昨夜も見えた、しかし何と云つても晝よりはあらがかくれて居たが、今朝又見ると隨分ひどい。

考へて見れば餘り美くしくもなく又餘り自分が愛してもゐない此女君の處へ來る樣になつたのは、今はない其父が娘を思ふ靈魂の手びきだらうなどゝ思ひながら出て來ると、庭の橘の木に大さう雪が積つて居る、家來を呼んで拂はせると、羨やましさうに松の木がひとりでに起かへつてさつと雪をこぼしたのが、末の松山にこえる浪を思ひ出させたと、云ふ樣な事が書いて御座いますが、其羨ましさうに自らこぼした雪の音が、聞えるのと共に、上の方へ反動で上つた松が枝が、見える樣な氣がしまして、續いては音もない靜かな朝の雪を、重さうに支へてゐる曲つた門もあり〱心に浮んで參ります。

其次は葵の卷で、例の車あらそひの處です、「御禊の

日延喜式に拾二人の供奉が出る、其中に源氏の君も入つて居る、其行列を見ようとて道すぢには棧敷をつくるやら大騷ぎ、一條の大路は物見車でせまい程になつて居ます。其車の中には盛裝した姫君や、奥方が乘りこぼれる程になつてゐるから、御簾の透間をもれる色々の袖口計りでも、見ものだといふ位。其中に六條の御息所もあじろ車で見に來て居ました、廿九歳の自分より五つ六つも年したの源氏の君に戀をして居る。



其源氏が今日の供奉の一人となつて車の前を通るのを心待ちにして居ると、其處へ源氏の奥方で今御姙娠中だといふ葵殿が飛ぶ鳥も落すいきほひで、車の前をはらはせながら來たのを見て、御息所は快からず思つて居る處へ、葵殿の方の御附の人々は六條の御息所の車だなと思つたから妙に意地惡をしてよく見えない、搨所へ押し遣つて、自分の方を前に出しましたから、御息所の車の搨も折れて隅の方へ押つけられて終ひまし

た、御息所は殘念でなりませんから歸らうかと思ひましたが押分けて出るのも大變であるし丁度其時最早直だと云ふ聲が聞えたので、源氏が其處をお通りになる時には、きつと自分の方を一寸御覽になるだらうと思ふ其目が戀しい計りに忍耐して待つて居ると、程もなく源氏は自分等の前をお通りになつた、通りながら少し笑ひを含んだ目で見ない樣に見て居られたのは御息所の方ではなくて誰か外に源氏が好な人の方でした、



猶見て居ると葵殿の車は一寸見てもわかるから其前を通る時には特別に親切さうな表情をする源氏の御附の人々は其前を敬禮して通りました、そこで御息所の口惜しさと失望はもう極度に達した」といふのですが其時の御息所の心持もよく解りますし又好ものと云はれた源氏が多數の貴女の集つた中を澄して通る其樣子が見える樣ですからね、蓬生はほんの少しの處なんです源氏が久しく打絕えてゐた末摘花の處を思ひ出して訪

闇する處なので生ひしげつた蓬の露の深いのを御附人の惟光が馬の鞭で拂ひながら御入れ申上る、時々ばらばらと降つて來る雨が木々の葉に溜つて下をくゞるとぼたりぼたりと落ちかゝる『御笠さし上ませう木の下露は雨よりも濡れまして』などいひながら御案内をする、前に來た時さへひどくゆがんで居た中門はもう跡もなくなつて終つたといふ丈ですがもう何ですか四邊がさも靑い樣な心持が致します紫式部といふ人の頭腦には如何なに美くしい想が滿ちて居たのでせう、此外に枕の草紙、徒然草なども私しの大好な書物です。其痛快な批評、奇拔な觀察は讀んで居ても思ふ處へ手の屆く樣な心持ちが致します。私し枕の草紙を讀む度に淸少納言が昔しの人の樣には思はれませんので、逢つて文の事などを色々敎へてもらひたい樣な氣がする事が御座いますよ。

◎初　戀

入そむる戀路はまだやとほからん
　かれてくるしき我心かな　　續古今

◎忍不言戀

しのべたゞ知らせて後のつらからは
　いはぬ賴みもあらし物ゆゑ　　爲家

◎顯　戀

人知れぬ袖にさへ猶つゝみしを
　いかで世にもる涙なるらん　　稱名院

諸共にしのびはてんと契りしを
　たがおこたりにもれしうき名ぞ　　惟麿

◎觸物催戀

月の夜半雲の夕もみなかなし
　そのよにあかぬ時しなければ　　永福門院

◎戀の雨

けふの雨よ晴るも佗しふるもうし
　さはりならひし人を待つとて　　永福門院

◎戀　命

有とても逢せも知らぬ命をば
　何のたのみに猶をしむらん　　玉葉集

◎競人戀

誰もけふ心をしかとかけければ
　逢おくれてはいはれざりけり　　俊紀



心細き分娩の一日

紅涙女史

產氣

何時からと〳〵と眠つたと見える。ふと我にかへると、又一しきりグーッと痛み出して來た。夜中の二時頃から何うやら產氣がついたらしい。此の二週間程と云ふものは、痛んでは止み〳〵して居るので、今朝も又さうかと思つて見たが、次第に痛むのがはげしい。一體もう何時かしらと思つてゐると、六時が打つ、今日はいよ〳〵本當だらう。早く神崎さんを呼びに遣らうと、

『いそや。』と呼んだが返事がない。再三再四でヤッと、『お呼び遊して！』とねむさうな顏を出した。

『書生の大島でも石川でも產婆の處へ行つてくれる樣に。』といふと、

『オヤ、お痛みで御座いますか、……二時頃からですつて？、お起し下さればおさすり申しましたに、そんなら少しもお早く。』

とソヽクサ出て行つたが、おさと樣をも起したらしい。起さ無くてもいゝものをと思つたが、仕方がない。

小姑

『痛み出したつて？。又僞なんだらう。ちいつと痛んでも嫂さんは大騷ぎするんだもの。』

『でも大分お苦しい樣で御座います。今大島さんに急いで呼びに行つてもらひましたから、もう神崎さんが見えませう。夜中からの御痛みださうで。今大島さんに急いで呼びに行つてもらひましたから、もう神崎さんが見えませう。御隱居樣も旦那樣も御留守で御座いますが、お產は此のお離れで遊す樣にと仰つて居らつしやいましたから、一寸お掃除丈しておきませうとぞんじまして、お氣の毒樣で御

座いますネ。」

「お部屋のお取り上げかい、仕方がないネ。此處でなけりや不可いのかしら。」

「成丈ヶお産の後は氣をおもませ申さない樣に靜かな處〳〵と皆申ますんで、此處も此間神崎さんがお撰み遊したので御座いますよ、ほんとうにお氣の毒樣で……

……。」

「大變な騷ぎのもんだネ。今日は私出掛樣と思つてたのに、出る譯にも行くまいネ。どうせ彼樣な風だからさぞ難産だらうし、ア丶〳〵厄介だワネ。」

なんて云つてるのが手に取る樣に聞える。私の目の前では、さぞお苦しからうの、早くお樂になれば好いの、少しお休み遊せのつて體の好い事計り仰有て、蔭だとまア、あんなひどい事をと、つく〳〵腹が立つ。いそが、

「お掃除が出來ましたから今の中にあちらへ御出で遊せ。」

と言ふから、少しお部屋へ日光を當て丶からにじ樣と言ふと、

「お障子はすつかり明け離して置きましたが、それなら其樣遊しまし、ちッとおさすり申ませうか。」

と云つてくれたが、どうせ痛ひのが輕くなるでもなし

「ア丶有難う、だけれど、それよりは早く皆に御飯にして上げて、此の子も起るだらうから直ぐとつてくれる樣に梅にも食べさして置き。」

と云つてゐると、さと子さんが、

「嫂さんお痛みですつてネ。如何です?、マア何も知らずに可愛い丶顏して好く寢てますこと、今日から姉ちやんになるんだよ。……オヤひどく痛み出しまして?。ちつとおさすり申ませうか。神崎さんはどう遊したかおそい事ネ。私本當に心配ですわ。」

痛むを幸ひお返事もしないで居ると、いそが、

「それじや神崎さんの入つしやらない前に片づけて仕舞ひませう。里子樣召上つてお仕舞ひ遊せな。奧樣、貴女も少し我慢して召上つては……。」

と云つてくれたが、今痛いので食べる氣にもならな

い。とそんならばとて二人とも立つて行く。其處へ大島が歸つて來た。

同情

「行て參りました。直に參るさうです。……先生が御留守ですからさぞ御心細いでせう。併しお氣を確に。」

と力付けるつもり。十七の子にしてはマセた事を云ふ。

聽ておいそが又やつて來て、

「本當にお身重の奧樣をお置きして遊びにお出掛けなさるつて法があるものですか。これがお嫁樣でなくて



さと子さんだつたら、どんな騒ぎで御座いませう。奉公人の私がこんな事申上て失禮ぢや御座いますが、本當に行らつしやつたのかしら？とにかくお殺生にお出掛けなさるとは。他處樣では何て御方だらう　それにお老人もお有んなさるに、何故まアあんな事おさせなさるのだらうつて子、呆れて居つしやるのですよ。貴女が先達も臨月丈はよして下さいつて仰有いましたら、さと子樣は今時の人の樣ぢやない迷信だとか何だとか仰有いましたが、そりやアさうかも知れませんが、外

の事とは違ひまして、まア人の不可いと云ふ事はしない方が好いでせう。……さと子樣は目の前ぢや先刻の樣なお優しい樣な振遊しても陰へ廻るとそりやアひどい事仰有るのですもの、私でさへ腹が立つてなりません。』と言ふ。

いそが又何か云ひかけるから、

『およし〱、聞えでもすると不可い、早く仕舞つておしまひよ。』

と言つて出してやる。

不安

一刻々々に痛みが増すと共に、不安の念が高まつて來る。實家が近けりや母樣に今から來て頂かうものをなど〱思ふ。初産の時は實家でもあつたし、どんなものか知らずに有耶有耶の間に生れて仕舞つたが、此度は何だか恐しい樣な心持がする。前の産には一時過ぎから痛み出して、朝の七時頃にはもう可愛い頭と並んで臥て居た事から考へると、もつと〱激しく痛んで來なけりやならないのに、ひよつとすると、里さんの云つた樣に難産でもするんぢや無からうか。どうも里子さんの云つた一言が心に懸つてならぬ。此度は八ヶ月目頃から起居動作にも痛みが伴つて、二週間も前から丁度産氣づいた樣に二三時間痛んでは止んで仕舞ふ從つて身體のこなしは全然自由にならなく無つたのがをかしい。私にや知らさないが、ひよつとすると神崎さんがお姑樣にでも注意してお置きなされたのを里子さんが聞き込んで、其れであんな事を仰有つたので無いかしら、もしもさうだつたらと思ふとゾッと身の毛が立つ。いくら心配したつても仕方の無い事だけれど、もし難産して死ぬ樣な事だつたら可愛想なのは此の子だと嬢やの寢顔を眺めると偶然に目を醒して母ちやんと言つて泣き出した。

これを機會にお離れにお引越しをして置きませうと手傳つて貰つてやつとお引つ越しをする。シーツを替へたり何かして居ると、神崎さんが、

『遲くなりました、如何で御座いますか。』

と這入つて入つしやる。診て下さつて、『もう直きで御座いますよ、おいそさん、お湯をお頼み申します。』とて、其處らを片づけて、用意の分娩具や石炭酸をお出しなさるやら、白メリンスの產衣に、白木綿の襦袢、襁褓などちやんと揃へて可愛らしい友染モスの布團に廣げてすぐ着せられる樣に用意して入つしやる。

『貴女、御飯召上りまして？』と仰るから、

『いゝえ。』と申すと、



『少しでも召上る方がおよろしう御座いますよ。』とていそに指揮してこしらへて下さる。お腹を押へ押へやつと無理に二膳頂いた。

產科醫

產室には誰も這入るなと云ひつけてあるから神崎さんと只二人。痛みは刻一刻に增して來るがまだ生れさうにもない。もう十一時も打つたらしい。『九時半頃には』と神崎さんも云つて居られたのに何うした事かと苦しくもあるし心に懸ると、神崎さんが、

『産科を呼びませう。』と仰る。ハッと思つたが、心頼みの方の仰有るお言葉故、

『どうぞ。』と只一言。伺ひ度は山々だが、伺ふと反つて不可いと我慢して居ると、不思議な事には痛みは次第に軟いで來て、今度は眠むくて〳〵仕方が無い。キユウと痛んでは又眠くなる。

『サア御飯は召上れますまいからこれでも召上れ。』

つて仰有る聲にフッと我に反つて、

『ア、有難う御座います、どうも眠氣がさして仕方が御座いませんの。』

と云ひながら、持つて來て下すつた牛乳と玉子を頂く。

『ア、さうですか、困りますネ、お眠り遊すと長引きますから、　成丈氣を確にして居らつしやいまし。』

と叱る樣に仰有ので、眠るまいと氣張るけれども、眠くなつて堪らない。産科の吉田先生の入しつたのも現の樣に覺えて居る。

『成程、フーン、妙ですな。』

と仰有つた一言がピンと耳にひゞく。いよ〳〵難産かなと覺悟する。併しそれが夢の樣でさして氣にもならない。

『眠らない樣にしつかりとなさい。』

と仰有る聲が耳に入るから、一時はつとめて寢まいとするけれど、又何時か現にかへつて仕舞ふ。痛みの方はズーッと輕くなつて、時々鈍い痛みがするけれど、而かも好い氣持ちで、其の儘仙境にでも引き入れられる樣だ。

不意に飛び上る程痛かつた。思はず、

『アッ！』と云ふと、

『お痛いでせうが、かうお眠氣がつきますと困りますから。』

とてお腹をぐッ〳〵とお揉みなさる。さうすると激しい痛みが付いて次第に陣痛が激しくなつて來る。一寸お止めなさると又眠る。現になると母樣が見えたり、父樣が笑つて居しつたり、嫂やが母ちやん〳〵つて呼んだり、花園に立つて居たり、何だか無茶苦茶の夢の樣な感じがする。

『何うもかう眠つて仕舞れては不可ませんネ、子宮底をもつと押して。』と云ふのが聞えたと思ふと、お腹が引つくり返る樣に痛い。併し其のお蔭で正氣付いてだんだんに生れさうになつて來た。『いけまない樣になさい。』と度度注意をなさる。私も一生懸命。



出産

やつとの事オギアの一聲。ヤレ〳〵とグッタリして仕舞ふ。何時か燈がついて居る。

『お目出度う御座います、坊ちやまで御座いますよ。』と神崎さんが仰有る。苦しんだ甲斐があると嬉しく思ふ。後産も無事に下る。

『サア〳〵お湯を下さい。』と仰有ると、先刻から待ちかまへて居た連中が盥盤を運ぶやらお湯を汲んで來るやら。後の方で神崎さんが、

『まアよく肥へて、オヽ〳〵よし〳〵、お産が長かつたから苦しかつたでせうネ、オヽ〳〵お耳がこんなに

お〻痛い〳〵。』
などゝ云ひながら洗つて居つしやる。
『別に變つては居りませんか。』
一番これが私の心配。片輪でも仕方が無いと云ひ條見る迄は心配で〳〵。
『エヽ〳〵皆御滿足で御座いますよ、今お目にかけますよ。』
と仰有る。先生もお手をお洗ひなされて又一應診察して下さる。
『色々と有難う御座います。』と申上ると、
『いや、まづ御無事で、もう二時間も長引くと赤さんがどうかと案じましたが。』
其處へ山里さんと大澤さんの兩夫人が、
『お目出度う、坊ちやまですッてネ。』
と言ひ乍ら襖の蔭から、
『這入りましてもよろしゆう御座いますか。』
とお聞きになると、神崎さんも、先生も、
『サア〳〵。』と仰有る。神崎さんは、
『ホレ御覽遊せ、大きな目ッ目を明けて、可愛い坊ちやまでせう。』なんて仰有る。
『マア可愛い事、一寸抱かして下さいまし。』
つて、子供欲しがりの山里さんは、抱かして貰つて喜んで居らッしやる。大澤さんが、
『先生も神崎さんもおすみ遊したら何にも御座いませんがお飯をあちらで……。』
と仰有ると、先生は、
『イヤ折角ですが、少し急ぎますから。』
と仰有つて、幾何お留め申してもおきゝにならずにお歸りなさる。

子の無い人

それからやつと赤ちやんを傍に寢して下さる。ソッと小さな手を引つ張つて指を一本々々數へて見る。神崎さんはお笑ひなされて、
『大丈夫ですよ、「アザ」一つ御座いません、お尻によくある青いのも此のお子さんには御座いませんよ、只

卵水がおあんなさらなかつたのでお耳に少しお怪我がありますが、それも大した事ぢや御座いません、随分お苦しかつたでせう、彼樣致しませんと、眠腰と申まして、彼のまま打捨つて置いたら大變で御座いますの、親も子も不可ません、ですからお痛くともア、して陣痛を起させますのです。」

と仰有ると、子が欲しい欲しいと口癖に仰有る山里さんは、

『ソンナでしたの、長いから案じてましたが、さうでしたか、だけれど此樣な可愛のが生れゝは私幾程苦しくとも好い



と思ひますわ、ア、さう〳〵彼れをまたがせて頂戴な。」

『さう〳〵、其樣でしたネ、お約束ですから其の儘にしてあります。サアおまたぎ遊せ。」

つて胞衣をまたがせて貰つて居らつしやる。

そして、

『若しこれで私も子供が出來たら奥樣ウンと御禮をしますよ。」

と笑ひながら仰有る。迷信だとは御自分も知つて居らつしやるけれど、人があやかるなどとお敏へ申したので、駄目だと思ふけどもつて前々か

らのお頼み。その中に梅やいそや手傳ひの婆などが這入つて來る。そして各自にのぞいて『可愛いゝ〳〵。』だの『御容色好し。』だの『男に惜しい。』のと御愛想を云つてゐる。婆やが山里さんに、

『貴方赤さんを一番先きに抱くとあやかるつて申ますよ。』と云ふと、

『マア、ソウ。それちや知らずにした事だけれど、私が一番に抱いたのよ。』

もう御自分にも出來たかの様にコロ〳〵喜んで居られる。

『どれもう一度抱かせて頂戴な。』

白モメンに毛を入れた平つたい枕して毛布に包まれてスヤ〳〵眠つて居るのをソッと恐しさうに抱き上げて不器用なお手付きでお抱きなさるのを婆やが見て、

『マア奥様、そんな抱き様遊しちやお苦しゅう御座いますわネ。』

つて多年の功で敎て上げて居る所へ里子さんと嬢やが這入つて來た。

『嫂さん、男だつたさうで御目出度う、何んなにまアお祖父様やお祖母様が喜びませう、ドーレ。』

つてのぞいて見て、

『ホーレ赤ちやんだ、嬢やは姉ちやんになつたのよ、』おとなになさらないと不可ませんよ。』

つて云ふと、

『あたちも赤ちやん抱つこ。』

つて云ふ。危いと止めると、とう〳〵泣き出す。一寸抱かしてやる。もう滿足して居る。神崎さんは、

『さう申せばアノ御隱居様方や旦那様は？』

と不思議さうにして居ないのをお尋ねなさる。皆一寸ためらつて居る處へ、大澤さんが梅にお膳もたせて、

『サア〳〵皆様、彼方へ入しつて御飯召上つて下さいまし、大變おそくなりましてお腹がおすき遊したでせう、今日は私が一寸此邸の奥様がはりで御座いますよ、オホゝゝ。』と言ひつゝ皆様を奥へおつれなさる。相變らず快活な方だ。

おそくなりましたで氣がついたが、最う大分更けた

らしい。
「もう餘程おそいのネ、何時に生れたらう。」
「丁度七時半で御座いました。」
「さう、實家へ誰れか電報打つてくれたの？」
「エヽすぐ石川さんが打ちました。」
　お腹がシク〳〵痛むけれどお湯に梅をそへて三つ許り頂いた。

電報

　お實家から祝ひの電報が來た。石川が早速讀んで聞かせる。其れを聞き乍ら、今に此の子も直きあの位になるだらう、と生れた許りの赤子を見ると、急に引き延し度い樣な氣持ちがする。電報の文は短いが、温い父母のお情があふれて居る。ほんに實親の恩は子を生んで育てゝ見てつく〳〵と身にしみる。
　明日は夫も歸られ樣。歸つて入しつたら何んな顏遊すだらうと考へると、一種の笑が浮かむ。併しこれが男でなくて、女だつたらどうだらう。男の子で好かつた、坊やであつて何んなに肩身が廣いか知れない、好い子だなどゝとりとめのない事計り考へる。と神崎さんが、
「いろ〳〵どうも御馳走樣で御座いました、お氣分は如何です、何とも御座いませんか。」と仰るので、
「先刻から又お腹が大分痛みます樣で……。」と申上ると、
「アヽさうで御座いませう、後腹と申して幾度も御産をなさる度に甚く痛みますものです。痛む方が子宮の收縮を早くしますから却ておよろしいので、御心配は御座いません。それぢや明朝十時頃に伺ひますから御湯の御用意を。」
と仰有つて御歸りになる。

姑

　臺所の方で大澤さんが笑談仰有つて、若い者達を笑して居つしやるのが聞える。室へは誰も來ないので、好い心持にウト〳〵と眠る。

『ア丶寢て居る樣ですよ。』

といふお聲が耳に這入る。ふと見るとお姑樣。

『ア丶お歸り遊せ。』と申上ると、

『ア丶目がお醒めかい、坊やださうだの。』

つてニコ〳〵と赤坊を御覽なさる。

『御親父さんが大喜びぢやらう、大變長くて苦しんださうだが、後は何ともないかい、先刻里子が產氣づいたと知らせて來たが、そんなぢやなからう、さとの朝來た頃にはもう生れて居るだらうと思つて居たものだからの、それに久し振りに廣田の叔父さんが御出でたりしたので、何の彼のと歸るのがおくれてな。』

つて言ひ譯を遊ばす。

『イヽエ、つひ長引きまして產科醫迄も聘びまして濟みません。』と申上ると、

『ナーニお前、どうしたつてもア丶云ふその道に明い方にかゝつて居れば、其の方の仰有る樣にするより仕方ないさ、昔と違つて今は却々御產つて云ふと大騷ぎするから、私達の若い時分ぢや、尤も今の人の樣ぢや無い、働きが違ふが、その爲めか、難產なんぞと云ふ事もめつたに無かつたけれど、マア〳〵何が何でも無事で男の子だから苦しみ甲斐もあつたと云ふものさ、孃はわしが今夜抱いて寢ます、そいぢやお眠み。』

つて仰有つて、立ちがけに、

『尙也はどうしたかの？』とおきゝなさる。

『一昨日獵にと申して出ましてまだ歸りません。』

『フーン。』と仰有つたきり彼方へ行つしやる。ちよいちよい當て付けを仰有る。夫の居らぬ事だつて御存じないのぢや無いに、と思ふともう淚が留度なく出る。產後だからこんな事思ふまい、又これで產後でも惡かつたらと氣を取りなほすが、又思ひが直き色々と好い事には走らぬ。ア丶氣にすまい〳〵とまぎらかしに琴歌の賑かなのを心の中で歌つて見る。目を閉じて居ると何時かしら屋外はシンとして來た。



描かれたる二個の女性

鹽井雨江

女性の模範としてよい人物は、誰れであらう。むづかしい問題で、現實社會の人間では、自分はその資格の人を答へにくいが、文學の中の人物では答へる事が出來るやうに思ふ。古來文學者に依りて描かれた女性の中には、澤山の好女性があるが、其中でもことに自分の惚れ〴〵とする女性が二人ある。其一人は竹取物語に於けるかぐや姫である。かぐや姫はもと天上のお姫樣であるから、其の人格の高いのはもとより當然でもあらうけれど、それにしても溢るゝばかり優しい情の中に、動かすべからざる强固なる意志と、凛として侵すべからざる氣骨とを包んで居られる所が限りなく床しいのである。

姫の光り輝くやうな容色は世間の人をして恍惚と醉はしめるばかりであつたが、中にも五人の男子は殆ど生命も寶も皆投げ出して、たゞ姫の歡心を買はむものとつとめた。然るに姫は何處までもそれを退けた。然り姫は心强くもそれらの男子の願を拒んだのである。拒んだけれども、それは決して姫の心の冷淡な譯でも邪險な故でもない。姫がかの育てられた翁夫婦に別れを惜んで。

みこゝろをのみ惑はして去りなんことの悲しく堪えがたく侍るなり。かの都の人はいとけうらにて、老いせずなん。思ふこともなく侍るなり。さる處へまからんずるもいみじくも侍らず、老い衰へたまへるさまを見奉らんこそは戀しからめ

といはれしあたり、更に

脱ぎおく衣を形見と見給へ、月の出でたらん夜は見おこせたまへ、見捨て奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地す

と嘆かれしあたりを見れば、姫はまさにこれ優しい情の權化かとも思はれる。これ程やさしい涙をもつて居られたかぐや姫のことである。もとより眞心を傾け盡していひよる男の情に多少動かされない譯ではない。たゞ自分は何處までも天上のものである、到底地上の人と交りを結び得らるべきものではないといふ所信を飽く迄も固く守られたのである。自分は如何なるものである。何うすべきものである。どうすべからざるものであるといふ所信を飽く迄も守つて動かなかつたのである。自分はこゝが姫の最も敬すべき處であると思ふ。

婦人は一般に優しい涙に富んで居るが、自分の所信を守るといふことになると、さあ何うであらうか、何うも其點が乏しいやうに思ふ。否今の若い女子などには、所信をまもる守らないはさて置き、何の確たる自信も目的もなくて動いて居るものがある。最早そんな人は無い筈だと思ふが、矢張り成るべく金のある、位地のよい、氣樂に虚榮心の滿足が出來さうな家に嫁さうといふよりほかに何んの考もなく動いて居る人があるやうだ。例へば試みに何のために學問をするかと問うても、一向かうといふ答案のない人がある。斯樣な女に限つてやがて其學問も中途でやめて了ふのが例であるが、このやうな女の行末が誠に不安心に思はれるのである。

一體日本の女は、生れつき卑屈に出來て居つて、ペコペコお辭儀することなどばかり上手で、忍ぶべからざる屈辱や壓迫を受けても、大抵は女だから仕方がないと我慢をして居るやうだ。堪忍辛抱といふことは必要である。我慢すべきところを我慢するのは、尊い勇氣である。それ故服從すべき處に謹んで服從するといふ念慮は、甚だ大切である。が、女ですから仕方がないといふ服從は、卑屈な服從でほめられたものではない。其癖表面でばかり從順で、裏面ではなか〱不平をこぼすのであるが、自分はこれらの婦人に、何うかして『しばらく待て』と天人を叱り斥けたかぐや姫の如き凜とした氣骨を持つてほしいと願ふのである。

今日の社會では若い婦人に對する誘惑が甚だ多い。こ

年寄達はそれを恐れて、青春の婦人を恰も箱の玉か籠の鳥のやうな工合に押し込めて置うとする。けれど籠の鳥は常に自由の野を戀ひて隙間さへあれば飛び出さうとする。餘りに嚴しい家庭の娘は、却つて一寸の隙を侵す誘惑にも忽ち誘はれて墮落するものである。

　又誘惑が何うの、それを防ぐ道は何うのといつて、むづかしい說敎や議論などをする人達もあるが、其の誘惑を受ける當人の心の狀態を餘所にして、外からそれを防ぐ方法などを講ずるかは、臭いものに蓋をするの類である。どれ丈けのことが出來ようぞ、自分はただ若い婦人達に向つて、かぐや姫の如くなれと勸めようと思ふ、誘惑に負けるといふのは畢竟此方の心に弱い處があるからである。もしも婦人がかぐや姫の如く、その所信を守ることに強くかつ凛然侵すべからざる氣骨を備へて居るならば、縦令百の誘惑が身につきまとふとも、何の心配もなく安心して、世に處して往かれるではないか。實にかぐや姫が、姫の天上を疾く〳〵と促す迎への天人共を制して

しばし待て、……物一言いひ置くべきことあり、……物知らぬことなの給ひそ

といはれし言葉は何たる嚴粛な意味のある言葉であらう。少しもあわてたるさまなく、靜かに天皇への手紙



を認められたといふ、その悠々迫らざる姫の態度はげにあたりを壓して餘りあつたらうと想像される。

さるにても、文學者は、かぐや姫の如き立派なる女性を天上から拾うて來て、下界の婦人にその模範を示して居るのに、人々は何故それに倣はふとしないのか、不思議でたまらないのである。

自分の好きなもう一人の女性といふのは、近松が作の中の天の網島のおさんである。おさんこそは純然たる地上の世話女房であるが、實に人の妻女たるものゝ模範としてよいと思ふ。おさんは紙屋のお內儀さんとして、其の家政の整理、夫の內助といふ點は、實に遺憾なく盡して居る。彼女は殆と自己を捨てゝ了つて、家に夫に子に人に對して、立派な行爲をして居る。夫治兵衛が家のことも、商賣の事もすべて忘れて、小春といふ情婦に現をぬかして居る間を、おさんは苦しい家の經濟を切り盛りして、商賣の取り引から子供の世話、雇人への心付まで一切自分の双肩に荷負つて心配りをしたのである。

夫が炬燵にうたゝねを、枕びやうぶで風ふせぐ、外は十夜の人通り、見世と內とを一しめに、女房おさんの心配り

實にこの女房おさんの心配りでもつて、紙屋の身代はもちこたへたのである。放蕩ものゝ治兵衛が其老舗に賣店の札を貼らずに濟んだのは、全くおさんの內助の御蔭といはねばならぬ。

それにしても、おさんの全く自己を忘れて、その放埒の夫に體面を保たせようとしたことは、特に愛すべく慕ふべき處である。夫が情婦通ひに疲れ果てゝ、晝寢をして居ることは、枕屛風にこれをいたはり、折柄豫て夫の行狀に口やかましき親類の來るときくや、

そんなら治兵衛どの起さう、のう旦那殿起きさしやんせ、はゝ樣と叔父樣とが連れ立つてござるげな、この短い日に商人が、晝中に寢たふり見せてはまた機嫌がわるからう

と、一向夫の信用を墮さじとつとむる處、何處まで優しい心根であらう。さては夫が無念の述懐を聽いて、

小春の自殺を推するや、

やゝそれなれば、いとしや小春さんは死にやるぞや……こなさん早う往て、何うぞ殺して下さるな

と自ら夫を促し立て、岩國の紙の仕切銀に才覺して置いた金を、惜しげもなく夫の前に出し、なほ其の身の晴衣はもとより、

是を曲げては勘太郎が手も綿もない袖なしの羽織も混せて郡内の始末して着ぬ淺黄裏黑羽二重の一張裏、丸に蔦の葉ののきものかれもせぬ中は内裸でも外錦、男飾の小袖までさらへて物數十五色

無いものまでもある顏して、



私や子供は何着いでも、男は世間が大事請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立てゝ見せてくださんせ

と賴む。かくておさんは我が身のことは全く忘れて、たゞ〳〵夫の名譽と小春の身の上とを氣づかうた。

恥をかくまい體面を維持しようといふ考と徒らに外見を張り表面を飾るといふことは大いに違ふ。前者は立派な人間の德性で、後者はいやし

い虛榮心である。おさんのは前者である。我れを忘れて夫の體面の維持をはからうとする、實に立派な德性を示して居るではないか、のみならず、嫉妬は女の持病、我の念のみ强くして、容易に怨みを忘れえぬのはその常であるのに、おさんの心意氣は實に愛すべきではないか、自分の愛情のためには、憎い敵である小春の生命を是非救はうとする心意氣は、實に尊いものではないか、而も夫から、

請出して其後かこふて置くか、家に入るゝにしてから、其方は何となることぞ

といはれてハッと行き當り、

アッアそうぢや、ハテ何とせう、子供の乳母か飯炊きでもしませう

といふ飽くまでも自己を滅し盡くした心情に至つてはもはや人間の心ではない、無上に尊い處である、さすがに治兵衞も、

あまりに冥加が恐しい、この治兵衞には親の罰天の罰佛神の罰はあたらずとも、女房の罰一つでも將來はようない筈、許してたもれ

と手を合はせて感泣せざるを得なかつたのである。

犧牲とか献身とかいふ言葉は、近頃の婦人に好んで口にせられるが、自分はそのやうな事を言葉で聴くのを好まない。それは行が一向理屈に伴はないことを見るからである。一體犧牲献身は自ら之れを口にすべきものであらうか、おさんの如きは何の高尙な學理を聞いたり言つたりすることは知らなかつたが、それでも立派に犧牲献身の行ひをして居る。犧牲献身はかくてこそ初めて尊いものとなるのではあるまいか。

さる婦人會に所謂犧牲献身を唱へて居る婦人が、久しぶりで鄕里へ歸省した。たま〳〵其の一子は重い病氣にかゝつて寢て居つた處であつたが、母さんの歸られたを非常に喜んで、モー母さんいつまでも、坊やの側に居てとたのんだ。ところが何うであらう。その婦人は、母さまは社會のために働いて居るので、お前の看病はして居られないのだからとて、タッタ一日居つたばかりでまた出京して來たといふ話がある。成る

程それは私事を捨てゝ、大きな犠牲献身をする所以かも知れぬ。併し母親として、子供に冷淡なやうな人は女として果して何れ丈けの價値があるだらうか。同じく親といつても子供は寧ろ母親のつきもので、母親にとつては、子供は自分の生命よりも尊い大切な寶なのである。然らばわが生命にも代へて、子供の幸福をはからうとするこそ、母親たるものゝ眞情で、そこがやがてまた女の情の尊い處ともいはれるではなからうか。それを思ふと自分は、かの病中の子供を見捨てゝ上京したといふ婦人の心事を疑はずには居られない。そしてそれと共におさんの、



オ、最愛しや、生れて一夜もかゝが肌を離れぬもの…ふたりの子供が朝ぶさまへわすれずかならずくわやま(子供の藥)のませてくだされ、のう悲しや

といつて子供に別れを惜んだ、優しい慈母の情を限りなく床しく思ふのである。

要するに婦人と子供とは、到底離るべからざる關係をもつて居るものであるから、よしまだ母親とならぬ内にせよ、婦人は子

供に氣がつくやうでなければならぬ。それを側に子供が遊んで居つでも見向うともせず、何の愛想もなく、とりすまして居る婦人があるが、自分はそれを見る毎に必ず思ふ、かういふ婦人は、果して將來母親となる資格ありやと。自分はらしい〳〵といふことが最も好きである。女らしからぬ女、母親らしからぬ母親は、自分の甚だ嫌ふ處である。自分は最も、おさんの何處までも女らしく世話女房らしき心づかひを好む。

それにしても自分は何故おさんの如き女性を殊に慕はしく思ふのであるか、今日の若い婦人が徒らに口ばかり達者になつて、實際の事に何も出來ないことを、甚だ遺憾に思ふからである。決して無暗に新しい理屈や議論を排斥しようとする譯ではない。今日の女子は主婦の務めはどうだとか、家政のとり方は何うだとかやかましい理屈をいふけれど、實際の行は一向出來てないやうだ。自分はそれらの婦人に、しばらく口をつぐんで、おさんの心懸けや、行を考へてもらひ度いと思ふ。實際家政が何うのかうのと論じて居る女學生の中には、自分の毎日の學課の整理さへ出來ないで居るものが居る。或は其稽古の書物を忘れて來たり、或は出せといふ作文の期日を違へたり、そして偶〻其の作文を出すのを見ると、まるで噓字だらけの蚯蚓書きである、つまりたゞ一枚の作文の整理さへ出來ないといふ譯である。こんな事では將來家庭の人となつた曉が思ひやられるではないか「家内は口はなか／＼達者なもんだが、實際にあたつては、何も出來ない。手紙一つ書くことさへ滿足には出來ぬ」このやうな言葉は立派に教育を受けた婦人を妻君とした人の口から、屢屢洩れきく處であるが、考へて見ると、成る程さうもあらうかとうなづかれる。

世間では、文學などは取るに足らぬといふ風にいふて居るけれど、文學の描いたことには、甚だ學ぶべき處が多いやうに思ふ。一體近頃の若い婦人には、趣味の點が殊に欠けて居るやうに思はれるが、婦人は一通り文學美術に對する趣味を養つて、それを日常の行ひなり、家庭の生活なりに現はしてゆくといふ事が、大

いに必要だらうと思ふ。嘗て或る夫人から自分の家に繪葉書を寄越された。處が其繪葉書には犬か何かの繪が書いてあつたやうだが、其の繪の上へ一面に字を書いたものだ。何のための繪葉書である。實に沒趣味な話ではないか、しかもそれは何か食物を送つたといふ知らせで、その食物は何うして食べればよいかといふ料理法を書いてあつたのだ、自分はこの沒趣味極まつた繪葉書のために、折角送つてもらつたその食物を少からず不好く頂戴したやうな次第である。このやうな趣味のない人のつくつて居る家庭は果して何んなであらうか。心もとなく思はれる。

とにかく自分は竹取物語のかぐや姫と天の網島のおさんとを、文學に現はれた模範的婦人だと思ふ。二人はもとより過ぎ去つた時代の人であるが、其の美しい精神と行ひとは、何處までも敬慕すべきものである。自分は今の婦人が、この二人の心を心として、其の上になほ、今日の知識技能を修めてゆくならば、實に立派なものであらうと思ふ。（文責記者にあり）

水野秀方女史の美擧

曩に物故せられし畫伯水野年方氏が、生前揮毫せられし繪畫の下圖は、一々保存しありて非常の數に達し、畫家の參考品として無上の參考品の由なるが、夫人秀方女史は其の散佚を恐れ、且つ公衆の研究に資せんが爲め、其を年方氏が嘗て苦心して蒐集せられたる美術及び歷史的の參考品及び圖書類と共に、帝國博物館、同圖書館及び大橋圖書館等へ頒ちて寄贈されたりと云ふ。即ち新古校合摺一冊百枚綴貳拾七册、雁皮寫本四拾四册、やまと新聞下繪參百八拾參枚、以下美術品貳拾餘點及び鎧直垂、蜜着、烏帽子睿頭、衛府の太刀壹振、以下歷史的參考品參拾餘點を帝國博物館へ。常山紀談參拾册、花洛名勝圖會三册、故實叢書百餘册、以下百餘點を帝國圖書館へ、同種の圖書及び美術參考品百餘點を大橋圖書館へ。孰れも既に納められたりと、誠に奇特の事といふべし。



留守宅日記

月待女

さき頃蟲干しの折ふと出できたる古き日記當時をしのばるゝ方もあらむと。

一日

海上無事鎭南浦上陸の報が來た出征の際夫は家のうちにすつこんで心配斗りして居つた處が丸のあたる時にはあたるからお花見にも散歩にも行つて氣をまぎらすがよいといはれたが或人は戰地の事を思へば夜もあつぷすま重ねては寢られぬと仰つたがお姑樣は留守中風でも引いてはならぬと仰る何れを是とすべきかは私には分ぬが兎も角淋しく成たので物足らぬのと萬一の事があつたらといふ心配で自然浮々は出來ぬ生ては歸らぬと遺言までせられ夫人も立派に死んでお出でなされといはれたとやら新聞に出て居たが私はどうぞ犬死はせず立派に勳功をたてゝ目出度う凱旋を祈るのである何しろ始めて戰地に出す手紙後に人樣から笑はれるやうの事が有つてはならぬと午から中かゝりて認む、うまく書うと思ふとなほまづくふだんのなぐり書きの方が餘程よいと思ふ、終に一寸細字で丸よけの御守をはなし給はぬやうと記し置く。夜は追送品求めに行く、あれもこれも思ふものは澤山ながら、嫁して間のなき身なればさし扣へ、只おさしづに從ひ置く、歸りてシャツの縫ひかけ仕上げてしまふ、都合のよい事もあらうとポケット作り置く、下手ながら自分の手になりしと思へば心地よい、其れから手編みの靴下三足出來て居る。

二日

聯隊長の御留守宅訪問す、床に飾られたる具足に並び、御主人の御寫眞に松魚節と御酒が上げてある、如何にもよい配合だと見とれて居る、夫人はかすりの召物に同じお羽織の質素なのに、私の指環が時節もわきまへずにといつた樣に光るので、穴にも入りたいやうな心地がした。夫人は赤十字や愛國婦人會に入會をそれとなく進められたが、何れ姑にも相談の上と能き程に返答して歸る、途中夫の無事を祈るため觀音樣にお參りする、御門のそばで賤しいみなりの女、子供負ふてつか／＼と私の傍に來て何かいはふとするから、又何か與れろといふのだらうとサッサと行き過ぎ、歸りに見れば先の女、片れに何か縫てもらつて居る樣子に、さては新聞で見た丸よけの千人縫だ、彼の女の夫も戰地に居ると見える、アヽ氣の毒な、あの風采で見ると兵卒にちがひない、身をつみて知る人の痛さ、嘸心配な事であらう、ほんに兵卒の遺族程みぢめなものは有るまい、私も一と針縫ふてやる、背の子は母の苦勞も知らずスヤ／＼寢て居る、序に夫の姓名を聞いて見樣かと思つたがやめる、ほんとうに戰爭程罪なものはない、何日かもこんな事をいつて夫に叱られたが、まづ一人の戰死者に親兄弟妻子各一人づヽとしても、五六人のなげきとなる、近くは三浦中尉の未亡人、十七歲のあたら蕾の花を朽ちさせてしまはねばならぬ、其れを御覽なさる親御の心中はどんなであらう、人事とは思へない、自分の身もどんな運命になるやらウカ／＼こんな處歩いて居られないと、急ぎ足に三越の前にかかる、不景氣だの何だのといつても大した賑ひ、お金のない人はどこにあるかといふ樣である、軍人の妻となりては質素を旨とすべしと御勅諭にもあるし、決して流行などは追ふて居られないと深く覺悟はきめて居るものヽ、矢張り美しいものは目にとまる、此前の日淸戰爭の時分には藝者上りの奥樣などに、いろ／＼醜聞があつたとやら、皆意志が弱いからだなど思ひながら、家に歸つたのは日暮れであつた、矢張り外出すると氣分がよい、見た事聞た事をランプの下で語る。

三日

朝うら〻かなる空に初鶯の聲を聞きながら出來立ての御飯に温いお汁で朝のお膳に向ふ、何だか今日は室内のすま〴〵までも明るい樣で、春の氣がみちみちとして居る、ほんに勿體ない、每日安閑と疊の上で温いもの頂いて、戰地ではこんな事はゆめにも出來まい、行軍や何かて、一朝ぬけても物足らぬといはるる夫の、嘸困つて居らつしやるだらう、全體いつ戰爭がすむであらう、鶯は相變らずよい聲を續けて居る、ふと、

　こん春は共に聞かばや鶯の聲

吾れながら平凡だと思つたが、其上が出來ない内に食事はすんだ、私は姑小姑と共に留守をするのだから何やかやと氣がまぎれ、夜も日も戰地の事思ふ暇はないので、却りて身體の藥と見え、餘所の奥樣方のやうに夜分寢られないの、ヒステリーだのといふ事もなく至て丈夫で、何より幸福だ、實際子供でもあれば格別、獨りで居た日には所在なくて、病氣でもしなくては仕方があるまい、何だか此二三日戰地と書ふとしては戰死と書いてしまふ、いくら氣をつけて居てももう五六度になる、ほん當に緣起の惡い事、折柄陸戰隊號外チリン〳〵と急ぎ賣り歩く、胸がドキ〳〵する買つて見ると第一軍だから夫も參加されたに違ひないが、死傷者の姓名は書いてない、何だか胸が板の樣に成つたやうな氣がする、床に這入りはしたが、心配で寢られない、枕元の夫の寫眞が今更のやうに目にとまる、出征前多忙の中をわざ〳〵江木へうつしに居らしたのだ、手編みの手袋かつこう惡くむぐらの樣だと笑はれたが、戰爭に行くといふので勇氣がみちて居て、今までの内の一番上出來だと思ふ、之れが形見となつたらどうしよう、行つて來るよとお馬にヒラリと乘つて後もかへらず往らした時の御心の中は、どんなだつたらう、今も其後姿は目に見るやうだ、お姑樣も矢張り心配でお寢みに成られないと見え、寢返り斗りして居らつしやる、時計は一時を打つ、かくて此夜は明かす。

四日

朝新聞の來るを待ちて見る、私の姉の夫某功五級金鵄勳章を賜ふと二號活字で書いてある、まあどんな勳功をおたてなすつたのだらうと思ひながら、次の頁を急ぎ見れば戰死將校として某と出で居る、ハツト思つたが若しや讀みちがひかと俊寬ならで繰りかへし見ても官位勳等一字半句の間違ひもないが、夫の姓名は似よりのもなかつたのでまあよかつたと胸なで下したが、扨氣の毒なは姉上である可愛相なは子供である私とちがひ常から男まさり



の雄々しい氣性の姉上だから、とりみだした風はお見せなさるまいが、人情に變りはない、どんなに哀んでお出でなさらう今少し近ければお尋ねする事も出來るが、先づ手紙でも書ふ、萬一混雜の場合で間違ひだつたらどんなに嬉しいだらう、昨日は人の上と思つたのに、姉の身の上と成つた、次は愈々私の番ではないかしら、其れにしても里の兩親の心痛思ひやられる此上は私の身の上に、若もの事のないやうに、思へば兄上も武運拙い方である、何處をどういふ風に

おうたれなすつたのかしらぬが、始めて戰場に出た斗りでと思ふと、胸はりさくる樣だ、昔からのどには死なじとやら軍人の面目とはいひながら、凱旋せらるゝに越した事はない、つく〴〵戰爭程イヤなものはない、日淸戰爭の頃には未小學校時代で國の前途も家族の心配も考へず、只出征軍人の英姿を停車塲に送る度、アア勇ましい男らしい、自分も將來はと深く胸に印したのもこの時だ、ヤレ占領のヤレ擊退との、連戰連捷のたび新しい軍歌が出來たり、祝捷會があつたり、嬉しくて何日迄も戰爭が續けばよいがと思つて居た、講和談判の成立した時には子供心にも不平でたまらなかつたものだ間もなく姉上は軍人に嫁がれたので此上もない名譽と思つた今日こういふ事にならうとは夢にも知らず、何だか昨夜からの氣づかひで今日は食事もしたくない。

五日

午前軍人家族慰問會員訪問せられ自分は醫師の家內でありますから、御病人でもあらば御遠慮なく申越るれるやうとのこと、日本婦人も却々活動する樣に成つた、私は若し夫が戰死されたらどうしよう、未亡人再婚說が大分雜誌や何かに出て居るが、私はそんな氣にはならないから、何處までも某の未亡人で小學校の敎員にでも成らうかしら、夫では一生名もなき者で終らねばならぬ、今少し和歌でも上手だと貴族の姬君のお相手にもなれるのだが、昔から婦人の成功した人は皆未亡人に成つてからだ、午後區內の婦人會から慰問袋を二十錢以內で作つて出して呉れとの事、色々考へた末今から集めて出しさて皆に渡る頃には初夏のぼつぼつ暑くなる時分だから、汗しらず、自畫の扇子、寶丹、美人繪端書これは彼地では一番歡迎されるときゝ二三枚只これだけが超過して居る、後夫の許より軍服一着送り返さる、何かはいつて居ないかとポケット一一調べて見たが、引ッつぶれた卷煙草一本の外何もないのでがつかりする、又號外だほんとうにピク〳〵する、死傷者の中に夫の姓名はない、今度もまあよかつ

た、每朝新聞見るまでと號外出る度の氣持といつたら恐らく人には分るまい、餘りいつも死傷が多いので、此間も或人からお宅では未御負傷もなさいませんかといはれた、全で待つて居るやうではないか、餘所の奥樣たちはお料理のおけいこなどして居らつしやるが、私はとてもそんな氣も出ない、裁縫をも少し習ひたいのだが、此間もお姑樣の縮緬のお羽織の衿には少からず苦心をした。

六日



上野の花今年は後れて昨日今日見頃といふ花見といへばちと差支るが氣保養に一度見て來るがよいとお姑樣の仰せ、妹達と行く、上京以來初めて見る花の名所、世間は廣いあちらに歌ひさざめく者、こちらには緋の長襦袢で鬼ごつこするもの、矢張り春は春、まるで別世界に來た樣で氣もハレ〳〵する中を、切髮の若い未亡人が行く、大方氣をまぎらさん爲めであらうが、甚だしく人目を引く、姉上にも髮切る事はおとめ申さう、此度の戰爭で澤山の壯丁を失つたが、其れでも荷車引くもの、番頭らしい

もの、又は學生、兵卒なども隨分歩いて居る、アレが不忍、コレが東照宮と、一々敎へられ、歸りには何だかすまない樣な氣がして家に着いた、差し出された端書見ると野戰病院から出された夫からのである足部の銃創で不日後送されるとあるまぎれもない筆の跡ボンヤリと夢から覺めた樣な氣がする、それなら何故新聞にも出なかつたらう、アノ我慢强い夫の後送せらるゝ位だから必ずひどいに違ひない、けれども足部だから生命に關する樣な事はあるまいと、お姑樣は仰る、たとへどんな不具に成らうとも命さへあればよい、今頃は慰め與れるものもなくどんなに淋しからう、けれども足でまだしも幸福、兩眼を打たれでもなされたらそれこそ「明月や座頭の妻の泣く夜哉」でそばの者がどんなにつらいだらう、澤山の中だものこんなのも有るだらう思へば憎らしいロスキと思ふ刹那、彼國の死傷者の家族もどんなに日本を恨んで居やう、捕虜となつたものゝ妻子はどんなに安否を氣づかつて居よう、皆國のためにすることで、お互に何の恨みもない眞に同情すべきものだ、此上は彼我のために一日も早く平和克復を祈るのである。

東京婦人俱樂部の設立と藤生貞子女史

一定の年齢に達した女子は、學校に於て敎育を受ける事が出來るが、旣に母と成り祖母と成つた人若しくは規則的順序を踏んで居らぬ者は新智識を求めて行くのに誠に不便で有つた。婦人俱樂部は卽ち之等の婦人に智識と趣味と其他總ての方面に向つての滿足を得せしめんが爲めに[illegible]つたので有る、且又學校敎育は型にはまつた人物を作り出すに適して居るが、この婦人俱樂部は各種婦人の精神的傾向に向つて其人を敎育して、特殊の能力を發揮せしめんとするのが目的である。先づ俱樂部最初の事業としてはさし向き研究科を開き、本月十日より英語、裁縫、メリヤス、料理の研究を開始し、弘く會員並に研究科生を募集する由。この俱樂部は英文山ざくらの作者として有名なる且つ廿有餘年間敎育界に貢献せる藤生貞子女史であるが、女史が最近六年間に於ける家塾的敎授が如何に多くの人を感化するに適したるか、其結果が今回俱樂部設立主眼の動機と成つたのである。本部及び研究科は牛込區水道町四十八番地に在り。

女學校出の奥様

はる子

よるは十時におやすみ、朝は六時にお起床・にんげん八時間眠れば澤山との論より御宅は萬事にきそくたゞしくお兄さまおかぜでも召すと、これは生理學で習つた何何とかわたくし共にはさつぱり分らないむづかしいことをおつしやつて、奥様のお心通りに御介抱あそばすといふばんじ學校主義。旦那さまは三十二三、奥様は二十六とやら、學士に女學校出の理想のお家庭にておはすらん。御宅は相當にざいさんあつて、かあさまがお一人・妹さまはよそへ御縁付なされ、おとうとごは工科な卒業直ぐに地方へ御出張といへば、たゞいまの所ろ御宅は七人ぐらし。奥様のお口癖はなにごとも經濟々々とのことなれば、表むきはちよいとはでなお暮しに見えても内々はなかなかの御しまり方。八百屋さかなやもみんな奥様ごらんなされて、まことは現金がよけれどツレもあんまりだとてやむなくの通帳。一事が萬事皆な此の寸法で押しまはさるゝなれど、奥様の御召物やお中襟はこの例ならず、平常はきり立ての銘仙ぐらゐめして、髪は廂髪、お兒様はお二人共男のお兒・平生洋服許り召さすも、例の明晰なる頭腦より割りだされたる、主義なるべく、偶まお友達など御出でになれば。

「宅の兒はね貴女二人共洋服ばかしにいたしましたの、その方が手輕でございましてね、其上經濟ではございますし、第一見た處も宜敷うございますからね、貴女のもさう遊ばせな。」

などゝお勸めあそばすを承はりし事もありげり。同級の方は皆な奥様のお家庭の、規則正しく、お兒さまへの體育をお氣にせらるゝ程あつて、背が延びぬと困るからとて平常坐る事をさせられず、兩足共投げ出して御飯を召食るを御隱居様何やら一言仰せられしとて、奥様泣ごゑ出したまひ、十言も云ひ返しあそばされしを見る事あり。凡て古きをすてゝ新らしきを貴ぶ旦那様も、明治式なれば、奥様も自ら許したチヤキ〳〵のハイカラにて、萬事が西洋流とあつて、日曜等はお夫婦が散歩にお出ましのお留守、お兒様のお守も並大抵のものにはあらず、御自分たちはさかんに間食遊ばされても、お兒さまには嚴しく胃をわるくしてはとの條件付にて、食後の外は一切お上げにならず、いか程お兒さまねだらるゝとも知らん顏遊ばすを御隱居さま見かねてお菓子などお上げあそばせば直ぐに瞋容して、

「切角私が一生懸命に躾けてゐるものを、かあさまがわるい習慣をつけてお了ひなさるから困ると」旦那樣への蔭口に、一方は母上一方は妻。彼方たてれば此方がたゝず、旦那樣も進退こゝにきはまつて、たゞ頭掻いて苦笑あそばす事たび／＼なり。

「貴郞は決斷力にとぼしいわれえ。」と仰せられしことありかゝるなりは旦那さまの負けときまるなり。

　朝は手早くお化粧あそばし、旦那さまのお目覺め待ちてお夫婦にて英語交りでお話しを遊ばしながら、お膳がさがると、旦那さま御出ましとあつて、それよりお部屋で今日のネクタイはいけないの洗はせるのを忘れたからカラーが少しよごれてるけれども我慢してくださいのとキヤツ／＼と笑ひながら奥樣お手傳で漸つとお仕度がすめば、又一時ドッカと長火鉢の前に胡坐を掻いて扨一服。夫れよりゆつくりと靴の磨きかたがわるいとか大のお洒落ゆゑ私共にまで苦情をおつしやてガラリと格子戸をお開けになる。旦那樣御出ましのあとは、奥樣天下にて、別にお隱居さまへのお氣兼れもなく、御隱居樣はお兒樣對手に着物のほどき物やら、御丹精につぎをあてたり、老眼鏡の下でおぼつかなくなさるのを知らん顏して、トントンと旦那樣のお部屋へ入つて新刊の婦人雜誌を御覽んあそばす事もありヴアイオリンのお復習とかで朝からキユツ／＼私共には分らない曲を頭が痛くなる程お彈きあそばす事などあり又急に思ひ立つた樣にミシン臺に腰掛けて坊ちやんの御洋服をお友達から見本を借りてお出であそばしたとかにて、しきりにおやりあそばす事もありて、斯かるなり魚屋や八百屋か參りましたと申上げればお前のいゝやうにとのみ振り向きもなさらずさりとはあんまり規則正しくもと首傾しげればならぬやうなる事もあればときなりは旦那さまのお召物の袖口などの綿の出てゐるに初じめてお氣付かれ、吃驚りあそばして急にほどいて洗ふやらつぐやら張るやら思はぬ時に思はぬ用が私共の身にふりかゝる事もありて、去る時はせつせとお裁縫自慢の針を運ばせ給ふやら。奥樣御自分はシヤンとした御扮裝に競べて御隱居樣のペラ／＼の八丈物には見向きもなさらずと云ふ始末、男のお兒樣なれば終日お宅に居らるゝ時は玩具の奪ひ合ひやら鬼子ッ子やらで、お座敷の廻りをぐる／＼廻つたり轉んだり。泣くやら怒鳴るやらお宅の中の賑やかさ、

「コレ／＼お浪二郎が又泣いてゐるから鳥渡降りて來て見てお遣りなさい。」と御隱居樣の階子段の下から二階へ向いてお腰をさすり／＼仰在ると。

「ハアイ。」と大きな聲でドン〱と蹴けおり樣、二郎樣を抱いてすかしたり、上のをお叱り遊ばすやら。お仕事を遊ばせば其邊りを肩につかまつたり、飛んだりはれたり、戶外へお出になればすぐに轉んだとおつしやるし、流石の奥樣も此のお二人のお兄樣を持てあましの氣味で、お晝の內は奈何やらぐじや〱で濟んでしまうともう五時となつて旦那樣のおかへりに間もないこと夕方の御仕度、御自身御手づからの、西洋料理のナレ之がカツレツのビーフテーキのと、御自身はちやんと一つ處にお坐りあそばして私共を手足のやうに、ソレ鍋をざるを庖丁をと仰せられ漸つと出來あがつた時は西洋皿に盛つてスープとそのまゝ奥へ、お後の始末もなか〱大抵にてはあらず、ヘツトを澤山お使ひ遊ばすことゆゑ洗ひ物も大方ならず。ソレも御氣の向く時にかぎつてたま〱御面倒なる折には、わたしどもに學校時代の筆記帳をポンと投つて之を讀んでいゝやうにおしなさい、と仰せらるゝ儘かしこまつて二品三品いたせば仕樣が惡いとてお叱りを蒙ることもあり、御機嫌なれば其位は大目にお見逃しくださる事もなどまち〱なり。御食事後お夫婦は水菓子を召あがるがならひにて、四季折々の果物お膳にのぼらぬ事なく、それを又お子樣方が欲しがつてキヤア〱おつしやるを、子供は七つまで果物をやらぬ、胃腸が惡くなるとか云ふ事にて、何でも消化よきものをと云ふてビスケツトかカステーラぐらゐの物よりほかはおつかはし遊ばさず、一郎樣も二郎樣も八時といへば、どんなに面白いお遊びがありても何でも無理やりに、もう時間ですからお寢みなさい、とお寢かしあそばさる。お床も小さい敷布團でみなさまべつ〱に、お生れなされてより奥樣お抱き寢あそばせし事なきとか、これは母親との添寢はその子の衞生上害あるやう、なにがしの博士よりのお話にて斷然かく遊ばせしといふ。

お隱居さまも夜ははやくおひけになれば後は二階で御夫婦が脚本などを讀んでシンミリ遊ばすかと思へば、青春や魔風戀風の一節を奥樣の冴えたお聲で讀み上げてお騷ぎ遊ばす事もあり、其折々のお氣儘なるべし。時折は旦那樣のお友逹など御見えになれば、奥樣は大急ぎに手水をおつかひ遊ばすやら、お化粧お召物かへまで遊ばしてちやんとお美しくおなりあそばしたら扨これからお茶をしづ〱とお持ち遊ばす段取なれど幾等急いだとて其間約丗分もかゝらうと云ふもの、されど旦那樣はおくさま自慢ゆゑ何のお叱言もおつしやらず、美しいのを見てくれといはぬばかりの御樣子。例へばお友人間に奥樣天

下の蔭かくれなかりしとぞ。奥様がお出でになれば淋しかつたお座敷も例のお雛様でお如才なきおとりなし振に花が咲いたやうに賑かになるのを、ひとへに奥様の御交際上手とお取り遊ばし、旦那様ホイ／＼ものゝ悦にいりたまふやうお見受け申しぬ。十時となれば時間といふのでキチンとお退けになる。お退け前には必ずお夫婦とも微温湯にて御口をお嗽ぎ遊ばす、之も衛生上何々のおためとかにて。

下町出の奥様

峰子

御宅は元とそれがしの高等官、たゞいまは休職ゆゑ旦那さまどちへも御勉めなきも、一度は外國の地も蹈みたまひしとかいふ、これは奥様御自慢ばなしのひとつなり。

それにしては少しの嫌味もない御方、お歳の頃は五十六七、髪の五分刈で中丈の、召物も高々紡績ぐらゐの、併かもツンツルテンで、冬も極寒ならでは足袋も召さぬと云ふバンカラ。宵は早く朝未明に起きられて、餘り廣くもない借家の庭をすつかり奇麗に隅からすみまで掃きたまひ、裏に少しの空地あるをこれさいはひと夏は胡瓜に茄子、南瓜等植ゑられて、朝毎に琉璃色の茄子の小さきを御手づから二ツ三ツ捥とられ、今朝のお味噌汁の實にせよと仰らるゝのは流石の私共も只其の御丹念なるに感服仕るより外はなかりし。畑もズツと御見廻り遊ばせば、朝貌の鉢やら種々の草花、盆栽の手入れ遊ばして、漸つとお氣がすめば悠然と縁側にこしかけられて、その煙草盆引きよせ、火種のなき等はさら／＼の御苦情もなく、マツチで御手輕に煙草スパ／＼紫の煙を朝晴の空に吐き給ふ。此度は又御門の前を掃き淸めて、地ならしのために帚木片手に土蹈みたまふところ。見上げたてまつれば何の高々二三十圓の安官吏としか見えぬ實直な御様子。折々は肥料も畑に掛けられるとかや。これは奥様宿夫にも困るとの愚痴の中に數へ給ふ。

旦那様朝の御道樂がすむ頃、奥様は御寢間着の儘遂々と縁側に出られ、庭の朝貌も這麼お目にてお分りかと危ぶまれる迄の御目づかひ、一寸蹲んで庭を一わたり。「まあ／＼奇麗にお掃除が出來ましたことオ、朝貌が今日はむらさきが澤山咲きましたこと。」などゝソレ／＼輕い細い透き通るやうなお聲でお世辭を延べられるさま、その聲その體つき、誰が目にも直ぐにたゞ者ぢやあるまいと思はせる奥様の御様子。それでも成可くは堅氣に／＼とお作り遊ばすなれど、袖波つて

りの8歳などどうみても意氣なり。四十の上な七つ八つ、瘦せぎすの纎削として背丈高く、寄り添へば何こやらに白粉の香の匂ふべきさま。お召物も平常はお絹物ぐるみ。お夫婦の間にお子無きまゝ貰ひ見遊ばせしと云ふお孃樣は今年二十三お色の白ければにやお髮もうすく眉もうすく、何處やらに果敢無げなるお顏立ち、これを花にたとふるならば、不如歸の初じめ伊香保の浪子の月見草とも競べんか、御容姿はなか〳〵に捨て難たけれども、夫れに引かへ御言葉つきのあら〳〵しさ、之は鬼薊とも申す可し。自身の御癖は朝夕鼻にかゝりて下女は人間とも思召さぬやうなるお口振り、朝は一番遲くれて御目覺めになり、奧樣どういふものか貰ひ兒と云ふ事を深くお隱しなされて、何事も露さん〳〵と仰せらるればお孃樣いゝ氣になつて父樣が對座のお掃除などフヽンと鼻で遇らはうと言ふ當世向き。夫れは父樣の御道樂よと一口にいひ消したまふ。學校は四五年前に卒業あそばし、今はお琴とお花にお茶のお稽古、英語は在學中發音が一番だつたと云ふ事が今でも御自慢といふ事。どんなに暑い日でもお顏は屹度お湯で御洗ひあそばし、奧樣は直ぐにお髮上げ。露子樣はそれより早速お化粧にて、ヤレ、マツサーヂクリームのレートの何の、お白粉は何とやら、藥の頰紅のとゴテ〳〵と鏡臺の前に並べての大肌ぬぎ。私のやうな田舍者は、一目見て魂げたと申さればなるまじき品々。

「あれさ、何をみてるの、厭な花だよ。早く癖直しのお湯でも持つてお出でなれえ、眞實にぼんやりしてさ。」との劍突は私等の間拔ものには度々の事なり。露子樣御念入りのお化粧の間に、奧樣はお寢召のまゝ長火鉢の前に膝を崩して長煙管でのお煙草、流石こゝ等は昔し忘れぬなされ方と折々は感服いたす事なり。

「露さんひだりの方が少し薄いよ、首筋が何だか濃すぎるわ、こゝから見るとムラが出來てゐるよ、粉なのではたいたら佳いだらうドレ〳〵一寸貸してごらん。」と奧樣立つてお孃さまから刷毛を取つて直してお上げになる事などあつて漸々にお化粧りもすみお召替もすむころは夏にても九時すぎ。

「ヤレ〳〵草臥れた、飯はまだか。」と旦那樣兩手を後ろに突いて仰け反るやう遊ばせば、

「えゝもう直ぐですから一寸御待ち下さい。」と仰せらるゝなり別に急がうともなさらず、二人の下女を追ひ廻してやつと御獻立がすむ迄はなか〳〵の大騷ぎ。奧樣中々のお口喧しきに似ず、お臺所には薩張り御

出にならず、私共の好い加減な間に合はせもので御滿足のお樣子ゆゑ、京都の着倒れのお仲間なるべし。それにても御氣の毒なるは旦那樣にて、お飯の不味いも御運動のせいにやズン〳〵掻ッ込んで召上り、後はプラリと御用も無き身の、圍碁のお友達へ御出でになるか、偶ゝ書畫骨董の店で終日無駄話して御歸りになる事もありて、奧とお勉め遊ばせしお友人等は私上つてから一人もお見えになつた事なし、大概お暇なれば、隣との境の垣根が倒れるとか、栞折戸が破損れたとか云ふ段になれば、いいもの見付けたとばかり、終日お一人で釘を打ちつけたり、棕梠縄で結んだり素人療治をなさる御姿を拝見すれば、何となくお氣の毒な感身に迫つて、もとはいづれの高等官にておはせしや知られど、今少し男らしきお仕事もがなと私どもまでが心ないためれば、増して虚榮坊の奧樣、之を何よりお嫌やがり遊ばして。

「何卒れ、もう好い加減になすつて被下いな。」

と仰せらるゝお聲も洩れし事あれど旦那樣然う云ふ時は唯笑つてお返事なく、翌る日も〳〵さら〳〵奧樣のお言葉お用ゐなさらぬところを見れば此の旦那樣何事もお口にお出しなさらずに何事も御自分のお好き通りに遊ばす方と、お見受けいたしぬ。

露子樣朝の內はお琴のお稽古に御出で遊ばし旦那樣もプラリと御出ましの後は奧樣お一人御退屈さうに都新聞の三面を小聲にて妙な節をつけて讀み給ふ、三面の特に何々假りとかゞ御贔屓にてそこを御覽の折は誠に趣味深き御樣子にみえし、お午の御膳は片ばかり、其樣に欲しくないからと仰せあつて餘り召食らず、午後よりは露子樣と鏡臺を中にさし向ひでお仕事をあそばすなれど、御家內はたつた三人ぎりのことゆゑお裁縫とても然う〳〵はないのに、此度はあの着物を羽織にして、あの帶を片側取り替へて、長襦袢を縫ひかへてとお孃樣は御自分の召物ばかりをせつちやう、、、、遊ばすゆゑ、お仕事は絶えず。月の二七にはお茶とお花のお稽古にお出ましになるより外は、大抵尺もち給ふ。三時となれば私共は御用かしこまつて餅菓子やに馳け出し、金鍔や田舎まんぢゆうでお茶をいれて、芝居や寄席の話しで笑ひ乍らお過し遊ばさるゝ御氣樂さ、晩なれば旦那樣少しのおさけに氣ばかり大きくおなり遊ばし、むかし聞きかぢりあそばしたらんやうなる端唄口吟みあそばすやら時には緣日へお獨りで御出かけになり、おかへりには安物の草花や、競賣りで買つていらつしやる花物など、あくる日は洗足になつて植ゑかへらるゝといふ始末、奧樣は露子樣のお師で三味線

たお復習ひなさるやら、時なりは芝居へもお出ましになりわたくしも一度か二度はお供おほせ付けられし事もあり。また浪六の貸本にお二人してお笑ひ遊ばすなど見るからにきくからに餘りにお氣樂な御身の上と、古るくからゐる老婆にきけば、旦那樣の恩給といくらかの財産とにて斯くは御幸福の御身なりしとぞ。勤めて氣樂な御宅なれど、行儀見習とか少し心あるものは嫌がるとの事なり。

それにしても折々學生らしき方が二三人出入り遊ばすたゞハテ面妖な、お友達も無いにと思へば、奥樣とお孃樣と二人掛りでソレ〳〵お如才無きお待遇。後にてうかがへばお孃樣御養子の候補者の面々なりしとぞ。





懸賞諸國珍菜晩餐料理

（選者秋穂益實）

一等　薩摩芋（八百匁にて五人前）

群馬　甲斐榛枝子

一　吸物

薩摩芋三百匁をまるにてよく蒸し、皮を去り、金篩にて漉し、別に浅草海苔をあぶりて平に置き、その上に右の薩摩芋を、厚さ二分位にむらなく延し、巻きて小口より程よく切り、煮立ちし清汁に入れ、吸口に摘菜及び柚子を入れて椀に盛る。

一　フライ

薩摩芋三百匁を皮をむき、薄き輪切りになし、玉子の黄身のみを溶したる中に入れてよくくるみ、バタを鍋に溶して揚げ、薬味に鹽胡椒をふり、熱き所を皿に盛りて出す。

一　酢煮

殘り二百匁の皮を取り、千六本に細く切り、水にてアクを出し、一時間程酢につけ、それよりその酢に二倍の湯を注し、鹽、砂糖を加へてよく煮つめ、それに赤唐辛子を細かく切りて混せて出す。

評　時節材料の調理中最も料理法の困難なる薩摩芋を以て巧に和洋折衷の献立を造り、且つ配合をよくして普通家庭の晩餐に適せしめたるは感服の外なし。

一等　栗（中粒二升五合）

本郷　近藤こと子

一　栗飯

栗八合許の皮と澁皮を去り、水につけてアクをぬき、米六合許と共に釜に入れて水加減をなし、醤油と酒に

て味つけて炊く。

二　栗蒸　（附加の材料玉子、みつば、松たけ、ぎんなん、柚）

先づ栗五合の皮と澁皮を去り、水につけてアクをぬいで置く。次に玉子一人前に付き一個づゝを各々蒸茶碗に入れてよくかき廻はし、その中に玉子の三倍の煮出汁を入れ、味醂、醤油にて味をつけ、其中へ前の栗をおろし金にてすり入れ、それへみつば、下煮したる松たけ、銀杏等を適宜に入れて（海老の湯かきたるものあらば尚よし）蒸す。吸口そぎ柚。

三　栗ともあえ（梅干、きくらげ、きざ柿）

先づ栗六合をほうろくにて煎る。次に栗六合をゆでる。又別に上等の梅干大二個の核皮を去りて擂鉢にてよくすり、其中へ前のゆで栗の皮と澁皮を去りたるものを入れて共によくすり、それに砂糖を入れ、煮きり味醂にてのばし（きんとんの衣より少々ゆるき加減）、きくらげ一合をゆでゝせんに切り醤油砂糖にて下煮したるもの、柿四個許の短冊切り、及び以前の煎りたる栗の皮澁皮をむきたるものを右の衣にてあえる。但し梅干の酸味強すぎる時は非常に味を損なふなり。

評　栗料理としては組合せ宜しきを得、且つ仕方も斬新なり、殊に第三の共和へにキザ柿を用ゐ、栗蒸におろして地にしたるは粋の極と云ふべし。

二等　八ツ頭芋（八百匁位で五人前分）

筑前　石野瀧子

一　芋豆腐

里芋の子の皮をむきてゆで、柔かになりたる時取り出して庖丁にてよくつぶし、それを擂鉢に入れて、葛を水にて溶かしたるを振りかけながらよくすり、更に白砂糖と鹽とを適宜に加へて又すり、チチ〳〵になりしものを、蒸して流箱にうつし、暫く風當りのよき處に置き、やがてかたまるのを取り出して好き程に切り、それに紫蘇を細かくきざみたるものにて香ひをつけて酢味噌をかけて出す。

一　天婦羅

親芋をすいき少しばかりつけたる儘皮をむき、之れをわさびおろしにておろし、それに砂糖と麥粉と鹽と

を程よく加へ、能くすりたる後、煎りたる黒胡麻をふりかけ、能くかきませ、之を胡麻の油にてあげる。但し芋の子の大さ位にする。

一、汁

椎茸のだしに、白味噌をすり立て、それに芋のずいきを一寸二三分位に切りて入れ、一と沸き煮立てゝ香ひ付として、めうが紫蘇等を小さくきざみて用ゐ、椀に盛りし後卵一個づゝつぶさずにかけて出す。

評　婦人の想像も及ばざる珍趣向なり、これを掘り立ての新鮮なる材料にて調理せば定めし佳味ならん、田舎料理の妙想ひやられて嬉し。

二等　松茸　（五百目五人前）

静岡　野田榮子

一、裏白松茸

松茸は成る可く茎の硬きを撰び、鹽水に漬け置く事、かくて其の松茸五百目の三分の二位笠の大きなる分を撰びて茎を切り放し置き、別に鱚の中位なるを一本すり身になし、鹽、胡椒、砂糖少々にて味付けたるを其の笠裏につめ、之を蒸籠に立て掛けて蒸す、尚外に味醂一杯、醤油二杯、煮出し一杯、砂糖少々の割にて葛をとろりとする加減に汁を作り、之を蒸し上りたる笠に掛け、大皿に盛りて出す。口生姜。

二、松茸の浸物

前の切り放したる茎を濡れ紙に包み、熱灰に埋め置き、よき程に取り出して水に浸けて紙をはなし、根より小さくさき、之を小かぶの頭葉と共にゆでゝ五分位に切りたるものと共に浸し物となし、小猪口に盛りて出す。

三、松茸ちり

殘りの松茸を大きく切り、又別に豆腐二丁を一寸角位に切り、之を鍋の底に昆布を敷き七分目位水を入れ葛小猪口に半分位とき入れて煮立ちたる中へ一緒に入れて煮、よき頃に汁と共に椀に盛り、それへ別にゆず酢一杯、醤油二杯位の割に混せたるを味よき程に掛けて出す。

評　第一に於て主なる材料を使用し、第二、第三にて茎を適當に調理

したるは巧妙なる手腕と云ふべし、殊に第三のチリ鍋の如きは時期に適して趣味多し。

二等　家鴨

（羽島一羽七百匁五人前）

鎌倉　R、N

（注意）先づ家鴨を大なる器に入れ、煮立ちたる湯を注ぎかけて毛を取り去り、鹽をつけてよく洗つて庖丁す。又鳥を殺すには、兩足をくゝりて倒につるし、鋭利なる庖丁にて頸を落し、暫時其まゝにして血を出すか、又は頸をしめるかするなり。

一、吸物

並肉の處八百匁許りを細かくたゝき、それに葛粉の篩にかけたるを大匙一杯許り入れ、尙玉葱をワサビオロシにてすりたるを少しく加へ、之を小形に圓く作りおき、別に普通の淸汁をこしらへ、冬瓜を巾二分長八分位に短冊切として煮込み、用意の肉をも其の汁にて煠で、出來れば程よく器に盛り、それに茗荷の色よきものを細かくきざみて入る。

一、刺身

上肉の處百五十匁許りを薄く切り、之を攪き交せたる玉子に浸しおき、やがて熱湯に入れて暫時煮、後引き上げて水氣をとり、之を器に盛り、それに大根を一寸位に切りて皮をむき、鹽水に浸して之をカツラムキとし細かに切りて水洗ひしたるもの及びワサビを添へ醬油に味醂少し加へたる汁をつけて用ふ。

一、ダンプリン

殘り肉を骨ながら程よく切りて鍋に入れ、熱湯を注ぎ、鹽を入れ、弱火にかけて凡そ一時間半計り蒸しおく、別にメリケン粉二合、ペツパー少量、ベーキングパウダー小匙二杯、鹽小匙輕く一杯を交せ合せ、肉の蒸し上りたるを見計らひて右の粉を牛乳と水と半々に交せたるもの五勺餘にて手早くこね、之を少さくチギりて肉の上に載せ、更に十分間許り蓋を取らずして蒸すなり。

粉は必ず肉の出來上りたるを確かめてからこね合すべし、又火加減はこねたる品を入れたらば充分に強くすべし。

評　巧みなる調理の組合せなり、のみならず家鴨の殺し方及び仕方等の說明も行屆きて誠に結構なり。

三等　生　鰯　（中七十五尾にて五人前）

兵庫　岡本　あさ

一、鰯のグレー（二十五尾）

鰯の頭と腸とをぬいて、鹽と胡椒を當て、次にメリケン粉でまぶし、それをフライ鍋にバターを引いて、少し焦げる位になつた所へ入れてザリザリといため、之を皿に盛つて橙酢か柚をかけて出します。

二、鰯の衣まぶし（二十五尾）

澤庵を細かく骰の様に切り、一寸水へ浸けて、しぼり上げ、別に鰯を生のまゝ頭も腸も骨も、皆ぬいて少し斜めに四つ程づゝに切り、それを先の澤庵と、一しよにまぶして小鉢に入れ、其上へ柚を少しづゝおろしてかけます。

三、吸物鰯の衣まき（二十五尾）

鰯の頭と腸を抜いて、少し鹽を當て置き、別にメリケン粉一合、玉子二個に、水少量を差して粘とかたいめにとき、扨先の鰯を、ざつと洗ひ、骨を抜き、それに右の衣をつけて別に作りある汁の煮立ちし處へ一つゞつ入れ、浮き上りたる時鍋を下して椀に盛ります。吸口は葱をきざみて少しづゝ入る。汁は昆布と鰹節とでよき煮だしを作る。

評　鰯は使ひ途の廣き材料なれば、答案は最も多けれど、献立の配合の斯の如く妙なるものは尠し、就中衣マブシの如きは製法頗る斬新にして風味將た絶佳なり。

三等　新生鮭　（一尾四百五十匁位のものにて三品づゝ五人前）

札幌　伊佐敷清子

先づ鮭を三枚におろし、中の子は筋、白子何づれにてもよく、頭は薄き所だけ取り捨て、鼻の部分は他の肉と共に清水にて能く洗ひ、次に上げ水を切つて置く。

一、鮭の餡かけ

先づ三枚におろせし鮭の中程のよき所を一人一と切づゝの割にて、五つ切とり、それを煮立ちたる湯の中にて五分間位煮、鍋より引上げ湯氣をきつて置く。別に百合三合位を能く洗ひ水から煮、軟かになつたら笊に上げる。又別に醤油と味醂にて汁を作り、それに葛粉を水にてときたるものを流し入れ、よくかき交ぜて餡を作り、扨て先きの鮭と百合とを椀に盛り、之れに右の餡をかけ、その上におろし生姜を添へて出す。

一、鮭の揚物

殘りの鮭の腹の部分のみ取り、之を小さく切り、擂鉢に入れて能く擂り、それにメリケン粉一合餘りと共に豆腐半丁位（布巾にて水氣をとり）と少しの醤油、砂糖を共にいれてよくすり別に細かくきざみし牛蒡と人參を入れよく擂りまぜ、一人に三つ位の割に圓めひらたくして麻の實を二三粒づゝつけて胡麻の油にて揚げる。又鮭の頭は一分位の厚さに切りそれを蓮根の皮をむきて一分位の厚さの輪切りにしたるものに重ねて（蓮根を兩端にし三枚重ねる）メリケン粉のころもに包みて胡麻の油

にて揚げる附合には青紫蘇か菊の葉何れにてもよろし、十枚位裏と表をよく洗ひ裏面にのみころもをつけて胡麻の油にてあげ、前の揚物と共に附合せて出す、別に小皿に大根おろしと、少量の醤油と味醂をまぜたる汁を添ふ。

一　鮭の親子汁

先づ中の大骨を一寸位づゝに切り、之を深鍋に入れ、水を五合位入れて煮出し、それを味噌漉にて漉し、其汁に醤油と味醂を入れ、塩の吸物より少しく鹽辛くして煮たて、其中へ腹の所の肉を七八分位の大さに切りたるもの、及び豆腐半丁を賽に切りていれ、尚ほ筋子なれば薄き皮をとりばら／＼にして入れ、三分間位煮る、あまり長く煮る時はかたくなり味悪し、白子なれば五分間煮て鍋をおろす、それを椀に盛り、やき海苔をもみ、ふりかけて出す。

評　調理法も献立もよく、説明も親切なり、殊に材料の使ひ廻しに至つては遥に熟練の結果と偲ばる。

三　等　生　鰯（中七十五尾を五人前につくる）

浅草　竹内とみ子

一、つみいれ（二十五尾）

初め水洗ひして鱗をふき、頭をとり、腹をあけて中を洗ひ骨を抜き去り、薄身をへぎて皮をひき、庖丁にてたゝき擂鉢に入れて鹽味をつけ、つくいも少量を加へてよく擂交ぜ、裏漉しにかけ親指程の塊となし熱湯にて煠で笊にあげ置く。

さらし葱、葱は白き部分を洗ひ、さつとゆでゝ水にとり細き金串にて割き、水氣を絞りて班にとりだしと醤油をかけて一寸五分程に庖丁し、つみいれと共に椀に盛り、鰹節にて仕立てたる清汁を用ふ。

二、黄金酢（二十五尾）

前の如く作りて骨を去りしものを小さく切り、味好き三杯酢に暫時漬けおく。後、小鉢へ盛り其上に煠玉子三個の黄味の裏漉しせしものを魚の身のかくるゝ程かけて出すなり。

三、グレー（二十五尾）

前と同じ仕方にて、腹を開け中を洗ひ鹽と胡椒をあて置く、次にフライ鍋にバターを溶かし前の鰯にメリケン粉をまぶしたるものを入れて、ゆり／＼といため、一人につき二三尾を皿に盛り、レモンの汁或は橙酢をかけて出す。

評　普通晩餐料理の趣旨に適して可なり。されど併し第二の黄金酢中の玉子の黄身に食鹽と白砂糖を加味し、又残りの白身を漉して第一のつみいれに使用せば廢物を利用し得て美味を添ふべし。

三　等　薩摩芋（八百目にて五人前）

本郷　まさ子

一、バタ焼

三百五十目程皮をとり水に入れて暫くあくを出し輪切りに切り、鹽、

胡椒をふり、バタをとかしたる中に入れ、しやもじにてかきまぜながら、ゆりゆりいため、中まで火が通つたらば、蓋をなしてむらし置く。

一、薄葛つゆ

三百目をたてに一寸位に切りたるを、厚さ拍子木に切り、ざつと湯煮してさとう、鹽にて甘味勝ちに味をつけ、別鍋にだしと醤油、味醂にて作りたる汁に葛を引き、前の芋を盛りたるにかけ、おろし生姜を添へて出す。

一、酢煮

細く千六本に切りたる芋を水につけてあくをだし、酢三分水一分の中に入れ、白砂糖と鹽にてよく煮て小皿に盛る。

評　仕方斬新ならざる感はあれど薩摩芋の料理としては趣向面白し。

三等　松茸（五百目）

京都　伊吹君子

一、松茸蒸し（飯三合位、酢、鹽、白砂糖好みに合し置く）

先づ松茸の笠の大きなるを六七本、笠と軸とを切放し、金網にて笠の裏を中火に焼き、表を返して又十分焼き、表の皮をむき、竹の皮をひろげ、其上へ焼きたる笠を裏向けにのせ鹽を少々ふり、笠より少々小さ目に飯を握り、笠の上に置き右の皮にて包み、二たところくゝり、重しをのせ置き一時間許り經て取出し、鯖鮓しの如く切り、生姜を添て出す。

但し松茸を焼く時汁をこぼせば香氣美味を去る故注意すべし。

△焼松茸したし物

水菜を湯がき一寸程に切り置き、前に切放したる松茸のじくを金網にて十分に焼き、小口よりむしり、前の笠の皮と共にまぜ柚酢を絞り、醤油に酒を少し加へて出す。

一松茸の吸物

鰹節にて仕立たる清し汁六合程作り、沸騰せる頃松茸の小なるを好みに切て暫時煮、湯がきたる生菜を加へ、椀に盛り蓋へ柚の皮をへぎてのせる。

評　献立と調理法は先づ結構なれ共、材料の使ひ方に於て各品に對する分量の説明乏しきは殘念。

選外優等　生鰯（中七十五尾）

神戸　黒柳露子

先づ七十五尾の、生鰯を孰れも、首を抜き、腸を去り、水にて能く滌ひ、内二十五尾は、其儘布巾にのせて水氣を去り、殘り五十尾は、三枚におろし、背骨は捨て、之れも、布巾にのせて水氣を去るべし。

一、雲丹焼

まづ始めの二十五尾を五尾づゝ二本の青竹串に刺して文火にかけ、鳥

のはじかぬうちにとき、雲丹を塗りては燒き、燒きては塗り、凡そ三四回位、萬遍に塗りつけ、鯛の脊腹が見えぬ迄に仕上げ、雲丹が固くなり且つ狐色にホンノリと焦げたるを度として火よりおろし、竹串をぬき、之を平皿に盛り、ソースを添へて出す。

雲丹は、越前産煉雲丹二十匁を、玉子の黄身三個にて煉り、味醂一合を加へてのばし、ドロ〳〵になりたるものを用ゆ。

二、葛あんかけ

骨拔き生鰯二十五尾を、蒸鍋の棚に布巾一枚を敷きて其上に一列に並べ、次に鹽水にて能く洗ひたる青紫蘇葉をのせ、又其葉の上に鰯を一列に並べ、又葉を敷き、つまり身と葉とを一枚置きに重ね合せ、身と身とが重り合はぬ樣になし、同時に青紫蘇葉の香氣を身に移す樣になして蒸し上ぐべし。身の色が充分白くなりたるを度として鍋を火より下ろし、暫らくむらし、崩れぬやう箸にて取出し、五尾づゝ皿に盛り分け、それに葛餡をかけ、おろし生姜を上にのせてすゝむ。

葛餡の拵方は、上等の吉野葛二十匁を水二合にて溶解し、味醂、醬油を少しく加へ、味加減を鹽梅して煮上ぐるなり。

一、潮吸物

殘り二十五尾を更に皮と腹骨を薄刃にてそぎ取り、竪に二ツ切りとなし、食鹽を少し撒りかけ、身の少しく、しまりし頃鍋に入れ、水七合を加へて煮上げ、鹽味加減を鹽梅すべし。

次に玉子三個を鉢に割り、泡立器にてよく攪拌し、上酒少量を加へ置き、竹皮箸にて鍋より鰯の身を、一ツづゝ挾み上げ、玉子の中につけ、再度鍋に入れて煮るべし、衣がぶつくり、膨脹せし頃を見計ひ、金杓子にて掬ひ上げ、椀に盛り、別に獨活のせん、三ツ葉のざつと湯煮きたるなど入れて、出すべし。香料として、柚の皮又は、揉み海苔などよし。

以上いづれも、五人前の分量として仕立てたるものなり。晩餐料理としては少し手數が掛れど原料が原料なれば、是れ位の世話を爲なければ御客樣も、之れは結構と申されまじ。

評　成程來客饗應には、御丁寧なる料理にして滿足を與ふるの價値あるべし、併し家庭の晩餐料理としては斯かる此原料にて可成手數を要せず斬新なる仕方と美味なるものを採らざるを得ず。

生　鰯

千葉　山口秋子

△鰯のサラダ(三十個)

まづ鰯を三枚におろし、蒸して骨の交じらぬ樣注意しながら、細かにむしり、別に赤大根と馬鈴薯とを湯でゝ、薄く切つたものと、一ツにして食鹽で味を付け、萵苣の細かに切つたものを下に敷き、其上にのせてサラダソースを掛けて食す。

△サラダソースの製法

雞卵の黄味三個をよく煉して、牛乳一合を入れ、砂糖大匙に三杯と胡椒を小量と、鹽大匙に輕ろく一ぱい、メメ大匙に三杯とを入れて、よく混ぜ合せ、つぎに卵の白味の方を泡立てゝ攪き混しながら、まへの混合

物と一ツにし、別の鍋に酢五勺を沸騰させたる中に入れ其れを火にかけて、焦げ付かぬ樣にかき廻し乍ら色付くを度として、火から下し其まゝ水に浸して冷す。(用鍋は土鍋が最も宜し)

△鰯の白あへ(二十五個)

鰯を三枚にひがし、小さく横に切つてざるに入れ、熱湯に鹽小量加へたものを掛ける、別に蓮を二ふしほど湯煮をして、後皮を剝き、亂切にして、薄醬油で味を付けて置き、そして白胡麻五勺をいりて、擂鉢に入れてよく擂り、白味噌五十匁入れて再びすり、小量の砂糖を加へてまた擂り、漉袋に豆腐一丁入れてよく水氣をとつたものを入れてまた擂り、其中にまへの品を入れてあへ、皿に盛りて出す時、柚のおろしを掛ける。

△鰯の昆布卷

鰯二十個にまへの料理の、のこりの頭を交ぜて、出齒庖丁のむれで十分たゝき、つまんで見て、全體がやはらかに成りたらば、匂ひを付る爲め、干梅の肉二つを入れて擂鉢で擂りまぜ、薩摩芋の中くらゐなのを二本皮をむいて湯でたものと合せてよく擂りまぜ、別に昆布を二寸巾で四寸くらゐな長さに切つて、立ちくづといつしよに湯で、そして昆布を俎板にのせて、其上にまへの擂り鰯を敷きひろげ茗荷をきざんで心にしてぐる〳〵卷き、昆布の立ちくづで帶をして、深鍋に汁たつぷり入れて煮る、汁は鰹節の出しで味醂と醬油で味を付けたものを用ひる。

評　料理の嶄新なると其說明の上に於ては感服の外なきも、吸物の外に淡漬の二品を加ふと云ふが如き變化ある獻立を採らざるは遺憾といふべし。

薩摩芋(八百匁にて五人前)

常陸　中尾菊子

一、紅葉和へ――薩摩芋三百匁、梅干十五個白胡麻少々、芋は極太き處を選びて皮をむきて煠で置き、梅干を擂り裏漉にかけ、これに食紅少加へ味醂と砂糖とを入れて火にかけ、どろ〳〵になりたる時卸して前の煠たる芋を一寸位の短册に切りて和へ、五人前に分ちて皿に盛り、白胡麻を炒りてふりかけて出す。

一、梨煮――細き處を二百匁皮をむきて一寸位の輪切になし、梅型何れとも好みの花形に切りて、小口より三分位の厚さに切りて直ちに水にはなちてあくをぬき、鍋に酢少々鹽と砂糖味醂を溶かして煮立たる處に芋を入れて煮過ぎぬ位にて卸し、五人前に分けて猪口に盛りて出す。

一、揚物　薩摩芋三百匁、玉葱五個

芋を皮をむきて生のまゝ大根卸にて卸し、これに擂生姜と極少々の砂糖鹽を加へ、うどん粉を煉りまぜ硬き位にこれで小ばん形になし胡麻油の煮立たる中に入れて揚げる、玉葱を輪切になして揚げて附合せとなすべし。

評　山口秋子さんの鰯料理と同一の評をなすべき獻立に出來居るは撰者の遺憾とする處なり。

八ッ頭芋

吸物

廣島　織村靜子

芋の皮をむき、よき部分にして厚さ五六分、幅一寸位に四角に切りよくゆでゝ毀さぬやうに笊に揚げておき、別に雞肉にてスープをとりよく煮たちたらば肉だけを引き揚げて、後のスープを布にて漉して再び煮立て鹽とほんの少々色の付くか付かぬ程醤油をも落して味をつけ、前に引きあげし雞肉を一人に三切れ位の當にて其鍋に入れ、それより前の芋を入れて冷えたるを暖める位に餘り煮すぎぬやう、直ちに火よりおろすべし。

椀に盛るには芋を二切、雞肉を三切別に青き菜をあしらへば色どりよく殊に新菊などは風味よろしく、又松茸をあしらひ吸口に柚子など用ふるも面白し。

胡桃の餡かけ

これは直徑二寸位の芋をよりよき部分にて、厚さ六分位に輪切りとしよくゆでゝより鰹だしと味醂、醤油(すまし汁位の加減)にてあつさりと味をつけ、別に胡桃を(湯に十分ばかりつけおく時は上の澁皮は容易に手にてむける也)摺り鉢にて摺りこれに砂糖、味醂、醤油を加へてよく摺り交ぜ味は甘くこつてりとドロ〳〵なるがよし。

これは皿に二切れづゝ並べ入れ、上より胡桃の餡をたつぷりとかけるなり。

うま煮

吸物及び餡かけに用ゐし芋の切れ端し、及び殘りの芋を三分位の賽目に切り牛蒡、人參、蓮根など同じやうに細かに切りざつと湯がき、スープにとりし雞肉を鍋にていり、其中に前の湯がきし品々及び賽の目に切りし松茸を入れていり交ぜ砂糖に醤油味醂を入れてよく煮しめる。

評　八ッ頭料理としては方法面白きも、材料の分量目方なきは如何にも惜むべし。

松茸（五百匁）

越後　小畑智惠子

先づ松茸につき居る砂を悉く洗ひ落す。

一、松茸の餡かけ。松茸の小さきもの十五本位を御飯蒸籠の中に入れ凡そ十分間位蒸し、出來たるものを竪に十文字に庖丁して、又横に一所切り、形を崩さぬ樣其儘そつと三本分づゝ程よく皿に盛り、栗つまみ二ツを添へて餡を掛ける。松茸の蒸方は湯の沸騰したる時入れる也。栗つまみの拵え方は、栗二十五粒許りを能く煠でゝ皮と澁皮を除き、それを摺鉢にて摺り、裏漉しに掛け、再び摺鉢に入れ、白砂糖、鹽、及び生姜にて味を付け、清き布巾にてつまむ。又餡は、砂糖、味醂など入れし醤油清汁に葛粉を入れてどろ〳〵に煮る。

二、松茸の吸物。里芋の皮を剝ぎ、手奇麗に竪に切りたるものと、末枯茄子の輪切りにしてあくぬきたるものとを加減好き醤油清汁で煮て、夫れへ、十本の大きい松茸の笠に一寸程柄を付けて眞二つに割きしものを入れ、更に煮立てゝ火より下ろし、其れを茄子二切、芋三切、松茸四切位づゝ椀に盛り、吸口に柚子を添へてすゝむ。

三、松茸酢のもの。殘りの松茸を、吸物の節用ゐし根の殘物とを、小さき土瓶に清酒盃に一杯ほど入れて煮立てし中へ入れ、蓋をきちんとして蒸す。斯くて茸より水出でゝ程よく蒸れしを取り出し、一口に成る位の大きさに千切にして蓋の有る平たき器に盛り、それにキヤベツの青き部分を松葉切りにし、生の儘鹽にざつと揉みて直ぐ洗ひたるを配置好く添へ、尚ほ大根おろしをも少々添へて出す。三杯酢は別の小皿に入れる。

評　松茸料理としては先づ結構なるも、他との比較上當選に洩れたるなり。

松茸（五百匁）

本郷　近藤ことこ

一、松茸玉子とじすまし

松茸百匁の莖ばかり

玉子　三個

ゆず

松茸の莖を、おろし金にてすり、それに玉子の能くほごしたのを交ぜ其の中へだしを極く少々加へ、之を煮出汁に味醂、鹽、醤油を加へた清汁の煮立ちし所へ流しこむ。吸口そぎ柚。

松茸をたんざくにしてもよけれど、此の方が香氣が好い樣で御座います。

二、燒き松茸　柚醤油

松茸二百五十匁

松茸を鹽水にて洗ひ、石附を去り、之をぬれ紙に包み、ぬく灰の中に入れて蒸焼になし、それを手早く手で裂いて、暖い内に柚醤油を添へてすゝめます。

三、松茸フランス風

松たけ百五十目、清汁の殘りの笠

玉ねぎ大一個

松茸を洗つて石附を去つたものを適宜に切り、別に玉葱を細かくきざみ、バーメにて能くいため、その中へ前の松だけを入れて共にいため鹽、胡椒にて味をつけてあつい内に進めます。

この中へハムの少さく切つたのをいれても結構です。

評　此れも誠に結構々々。

栗（二升五合）

本郷　い　と　子

一、栗めし（一升）

栗の上皮をむきてサツト火にて燒く時は、その澁皮はたやすくむけるそれより二つに割るか、又は賽形にきざみて、飯の半煮えの時其の上に

置いて、又火をたくべし、栗は餘り煮えすぎる時はくだけて見苦しきものなれば、中途より飯に入れるなり。

一、白和(一升)

栗の上皮をむき、焼きて其の澁皮を能くとり、胡麻の油にて煎りつけ、油の行き届きたる時に取り出して水にて洗ひ、白味噌三分、豆腐七分の割にて能く擂り合し、その中へ、栗と木くらげを入れて、和へるなり。

一、汁(五合)　(栗、里芋、枝豆、團子、木茸)

先づ栗の皮及び澁皮を去り、柔らかに湯煮して笊に揚げ、水を掛けて能く灰汁を去りおく。次に白玉粉を水にて溶き、適宜の大きさに圓め、煮立ちたる湯の中に入れて、浮き上りたる時掬ひ出しておく。又枝豆をゆでたる後豆をさやよりはじき出し、尚別に芋ときくらげとをゆでゝ和らかになし、以上の材料を沸騰したる味噌汁の中に入るゝなり。

評　取合せよき献立なれど、汁には聊か缺點あり。

松　茸　(五百匁にて五人前)

神戸　長尾紫子

一、土瓶蒸し(二百匁)

蟲の無き松茸を能く洗ひ、一寸位に切り、よき程に裂き、別に中栗二十五ばかりをザット鹽煉でとなして皮を去り、それを右の松茸と共に素燒の土瓶に入れ、(土瓶の口は詰をなしおく事)、之れに味醂、醬油、砂糖を孰れも少量と鰹ぶしとを打入れ、蒸し煮になし、出來たらば土瓶のまゝにて出し、食する時潮さうなる皿に盛りて進む。

一、松茸飯(百　匁)

米を常より少しく強めにしかけ、一升の米ならば酒を盃に二杯、醬油三杯を加へて炊き、炊き終りし時松茸の短冊に切りたるを打込みむらすなり。

一、茶まつ(二百匁)

是も蟲無きものを一寸五分位に切り、細く裂きて丼に入れ、番茶を極く濃く煮出せしを右の松茸にかけ、蓋をなし、五分間程むらしおき、絞りて皿にもり、別に橙をしぼり、砂糖、味醂、鹽を少しく加へ、水飴にて溶したるを打かけて進む。すり柚子、

評　茶まつは一寸變りたれど、先づ普通の献立なり。

薩　摩　芋　(八百匁にて五人前)

神戸　上田露子

一、揚　物

芋六百五十匁程を蒸し、皮を剝き、裏漉にし、其中より四百匁程を取り、(殘りは他の料理に用ふ)、玉子三個の黄身と水少々と鹽を入れてかき交ぜ、白身は泡立てゝ其中に入れ、更にめりけん粉八勺位と焙粉茶匙に一つを入れて能く〳〵かき交ぜ、別に鍋に油を沸かし、其中へ右の品を大匙にて一杯宛掬ひ入れて揚げ、之れに大根おろしを添へ、味醂、鹽の煮出し、醬油にて作りたる汁をかけてすゝむ。

一、和　へ　物

揚げ物に取りたる殘りの芋に、味噌五十匁位を擂りて裏濾しにして交ぜ合せ、其中へ柚子の皮をすりて少々入れ、砂糖を少しく入れて、能く擂り交ぜ置き、(砂糖は白)、枝豆を柔らかに煠でゝからより出し、一寸味醂醤油で味を付けたるもの一合斗りを右の中に和へる。

一、酢の物

揚げ物と和へものに、取りたる殘りの百五十匁程の芋を生のまゝにて皮を剝き、兩端を落し、細く繊に切り、それに茗荷の子を三つ程縱に薄く切りて之を、味醂と醤油と酢とを合し唐がらしを少々刻み入れたる中に暫時漬けたる後用ふ。

評　獻立妙ならず等外とす。

薩摩芋（八百匁）

長野　靜田春子

一、芋の梅干あへ

生芋の大なるものを擇び、適度に切り、皮を剝いて湯煮になし、裏濾にして擂鉢に入れ、それに梅干の種を取りて裏漉にしたるものを入れて能く擂りまぜ、其の中へ芋を賽の目に切つて食鹽と砂糖とで味をつけたものを入れて交ぜる。

二、芋の酢煮

薩摩芋の皮を剝き、千六本の樣に細く切り、水で能くアクを出し、暫く酢に漬けて置き、一時間も過ぎたら、其の酢へお湯を二倍位注し、尙ほ少量の食鹽と砂糖を加へて能く煮ます。

三、靑すだれ芋

生芋を洗ひ、乾かして皮を剝き、竪に細長く切り、それに靑粉を少しつけ、芋五本位づゝ昆布で括つて胡麻の油でざつと揚げ、それを皿の上におろし大根などを添へ、醤油を掛けて出します。

評　仕方面白けれど目方等の說明乏し。

家庭　好み

晩餐二品料理　懸賞募集

一、此の料理は別項記載の七種の材料中より各自の好みに依り、隨意に一種を選び、五人前の晩餐に供する料理三品の獻立を作る也。

一、獻立は日本料理、西洋料理、或は和洋折衷等孰れにてもよし、但し成るべく獻立に變化あるべき事。

一、添合せの野菜は十一月の季節物を自由に選び、且つ調味品及び鰹節等適宜に用ゐる事。

一、原稿は半紙を用ゐ一品每に製法の順序を簡單に說明する事

來月の新題

▲鯔(いな)	八寸位のもの	二十尾
▲牡蠣(かき)		一升五合
▲鷄(にはとり)	毛取二羽	八百匁
▲蓮根(れんこん)		七百匁
▲馬鈴薯(じやがいも)		八百匁
▲牛蒡(ごばう)		六百匁
▲梨(なし)	中粒	二十個

賞品　圖書切符

一等	金參圓	二名
二等	金貳圓	三名
三等	金壹圓	五名

〆切十月十二日



當世令孃の化粧法

小枝子

お美しい方だと云へば直ぐに學習院か虎の門へ行らッしやる方でせうと云ふ位、併し何も美人は必ずしも學習院か虎の門へ入學するとばかり定つた者ぢやァ無いけれども、要するにお化粧が上手でうまく貌を造るから誰れでも彼れでも美しく見えるのだらう、甚麼に色の白い奇麗な人でも白粉をつけた人の前では何となく貌の色が黄ばんで見えるものだ、随分貌立も揃つた十人並以上だと云はれる人でもお化粧もせずに髪でも何んでも構はずに何日櫛の歯を入れたか分らないやうにしちやくちやに圓めて、つんつるてんに着物を着て居やうものなら全然もう見られた者ぢやァ無いが、夫れに引換へて少々お貌は二の町でも身だしなみきりゝと、お化粧が巧みで上手に着物でも着こなして居たならば、美人と云つて振り返つて見られずとも必ず見る目に氣持よく美しいと云はれるに違ひない。

何有に外見なんか甚麼だつて心さへ美しければと云つて一向裝ふりには意を用ゐない人が澤山あるけれども、夫れは全く間違つた話だと思ふ。無論心の美といふ事も必用で大切には違ひないが心を磨くと同時に出來得る限り粧飾も貌も髪も奇麗にしたが好いと思ふ。一寸女中を使ふにしても然うだ、なる丈小薩張と身奇麗にしてゐる者を置き度いと思ふ。某上流の家等では特に取次に出す女だけは美しいのを撰ぶと聞く、如何いふ譯だらうと夫人に訊いて見たらば笑つて語らなか

つたけれども、聞く處によれば五月蠅く來る押賣りの人だの驕者などを歸すには美しい小間使に限るのださうだ。夫れも成る程一策だらうと感心した、で貌を奇麗に洗つて化粧でもしてキチンとした着物でも着てゐると自然と心までも改まつてくるものだ、で餘り無作法な眞似も出來なくなるいつか言語使ひも氣を付けるといふやうになる。

二三の女學校の中で美人といふ評判のある方達の、殊に自分の缺點を上手に造つて美しく見せてゐる化粧法を撰んで此處に御紹介する事にした。

A孃の貌のお化粧(色の黒い方)

私は奈うして此樣に色が黒いんだらうと眞個に自分でも厭になるんですよ、友人はお妙齢になると見違へる程お奇麗にお爲りになるのに私ばつかりは子供の時分と異らないんですもの、ですから隨分人知れず苦心を致しましたわ、やれ何が好い彼が好いつて種々物をつけて見ましたけれども駄目ですね、隨分思ひ切つたお話ですが、洋行してゐた從兄がね佛國では美人になり度いつて砒石とか云ふ毒藥さへ呑む人が有るんですつてね、夫れを聞いて眞實に色が白くなるんなら五年や十年壽命が短かくなつたつて構はないから、呑んで見ようか知らと幾度も思つたんです。けれどでも何だか恐しいやうでね、呑みませんでしたが、九月の女學世界に糸先生のお話に砒石は無効のやうに書いて御座いましたね、で私の白粉の付け方は金盥に一杯位のお湯で貌と襟をようく洗つて、其際大抵は石鹼(ケーパ、若しくはスワン)か洗粉(クラブ、ヤツコ等)を使用ます、殊に小鼻の兩側や生際等に油が浮いて居ないやうに氣を付けましてね、タオルで全然水を拭きとりましてから、時によりてはマツサージクリームをつける事もありますけれども、大抵はクリーム(ジャパクリーム)か、もしくはクリームシモン)を掌の平にとかして首筋から貌全體へ擦り込みます。夫れから極く柔かい布でよく拭きとり、此度は御園白粉をレートかローヤル水かで薄くときまして、鼻筋を一番濃く、でも餘り

目立たない位にして塗ります。襟は貌よりは少し位濃くしますけれども、是れも以前のやうに襟ばかりに白粉を付けたり、貌と襟とはくつきり白さが違つたりしたのは可笑しう御座いますから、矢張り目に立たぬ位にして置きます。友人方は是れだけで宜しいんでせうが、私は色が黒くて如何にも白粉を付けましたといふやうにしか見えませんから、ざつと貌も襟も洗ひ落して仕舞ひます、さうしますと粉がふかなくて誠によくつきます。夫れから粉白粉でむらを直して置きます。一度つけました白



粉は幾程洗つたからつて全然落ちて仕舞ふやうな事は御座いませんが、何處かに殘つてるやうで夫れで居て塗つたやうに見えませんから私のやうな者が、眞から色を白く見せようと云ふには斯うするのが一番です、なまなか眞白に塗らうもんなら夫れこそお化のやうになります。美顏術に行つたと云ふ人もありましたが、砥石でこりて私は行く氣になりません。ついでに申しますが私は友人のやうに頰紅をさすのは好みません、夫れでなくつても人様とお話して居ると直ぐに貌が赭くなりますから、

其上紅をさしてゐたら、まるで金時の火事見舞よろしくといふ風になつて仕舞ひます。でも夜分は薄くさします。これは只だ頰紅と申して買ひますの何處の小間物屋でも賣つて居りますが西洋のです、夫れは臉から頰へかけて薄くぼかしますと何んだか冴え〴〵した貌の色に見えますよ、口紅も私は棒のやうに成つて居る西洋紅を使ひます。あれは日本の紅のやうにけば〴〵した金色や笹色やに光つて人間の口とも思へないやうな事がなくつて好く又歯について赤くなるやうな事も有りません、どうも惡い紅をつけますと寒中なんか外出して風に吹かれたり致すとひどく唇が荒れて困ります。これで私のだけが不可ないんだらうと思ひます。

B 孃の失敗談（眉と生際の作り方）

生際だの眉だのをよく子供の時分から剃り付けると濃くなると云ひますが彼れは嘘でせうね、併し多少は直るかも知れません、私などは母が氣を揉みまして幼さい時から隨分たんせいしては、剃つて見たり延して見たりして呉れましたが駄目でした、富士額の方だの、書に畫いたやうな長い眉の方なんか見るとお羨しくつて堪らないんです。眉が格好が良いと眼付迄よく見えるもので、生際の狹い者は不幸だからお前は乾度幸福者になるだらうと氣安めを母が申します度に私は不幸の方が好いと心の內で思ひます。併し何と思つても生れつきなら仕方がないと斷念めました、でも欺されるとは知りながら廣告なんか見ますと遂ひ堪らなくなつてお小使の底をはたいて買つては內密で塗つて見たりしましたが毛生藥なんて當てになりませんよ。

私が參つて居りました學校の方達は驚く程お化粧に浮身を窶してゐらつしやるんです。ですから皆樣實にお上手で、素貌を見て驚いたなんて仰有る方なんか有りますのです。豈夫夫れ程でも有りますまいが、兎も角も非常な熱心……、何んだか美人でない者は肩身が狹いやうな氣がいたしますよ、で、眉だの生際だのを造りますのには種々に遊ばすが四ビーの柔かい鉛筆で書いて見ろと云はれて一度さうして見た事がありまし

たが鉛筆が悪るかつた故ですかきゝ目はありませんでした。

一度は黛も使つて見ましたが、私には是れも思はしくありませんでした、コロツプを焼いて塗ると好いと聞きましたから早速やつて見ました、成程是れなら大分毛の色に似て居りますし好さゝうでしたが障子を開けて明るい處で鏡と首引してをりましたら、風が吹いたもので全然散つて何んだか貌が黒子だらけになりましたから一寸こすつて見たら貌が眞黒になりました。



それから又玉子の白味ばかりを半紙へ延べまして一日乾して置き夫れを焼くのです、而して焼く時に茶碗を其上に伏せて置きました……まア油煙墨で御座いますね……夫れを細いボヤボヤした筆でぬりました。是れだけは只今でも時々用ゐますが一寸宜しう御座います。塗りまするは矢張り自然に見える

やうにとばかり心掛けて肌を汚さないやうに毛にばかり塗ります、眉毛ばかりは一本剃落しても目に立つと申す位なものですから餘程氣を付けて塗らないとお化のやうになります。つまり薄い毛を只だ濃く見せるといふだけで夫れ以上は出來ません、形迄いろ〳〵工夫して變へて見ようとおもひましたが夫れは見とも無い者になつて仕舞ひます。毛の無い處へ塗つたのばかしは見ても厭らしいものですね。生へなりに從つて丁寧に塗りましてから一寸汗位かいても貌がよごれないやうに手拭で拭いて置きます、すると全然落ちて仕舞ふやうな事は御座いません、落ちました處で多少は殘つてをりますから、結構です、生際も其通りですから極く手輕で一寸見ると塗つてるやうには見えませんですまア何でもお化粧が上手だと云ふのは人の目をくらますのが上手になるといふだけです、何と云はれても女は化物ですわねえ、私のは自分でも鏡の傍へ行つてよくよく映して見なければ、塗つてるとは見えません、他人の人がさう貌を覗き込むわけもありませんから、大丈夫知れつこは無いと安心して居ります。黛に一番宜しいと思ひますのは西洋の黛です、あの棒のやうになつて居て、押し出して使ひますのです香がよくつて誠に結構ですよ、私の使つてますのは粗製の方ですけれども、價は十五六錢位なものです。

○孃の髮の結方

毛は其人の性質を顯はすなんて云ひますが、夫れが眞實ならば女などは困りますね、一目見ればあゝ彼の人は癖毛だから意地が惡いの、堅いから強情の負けず嫌ひだらうなどゝ云はれた日には堪りませんが髮の毛ばかりは親讓りのやうですね、私は母に似たものか黑い事は黑いんですけれども柔かいんですよ。

女には髮の毛が第一の飾ですね、束髮も好いし日本髷は無論結構ですし、お下げでもマガレットでも何でも好きで種々な髮に結つて見ますの、夫れは飽きつぽいからだなんて云ふ方が有りますが飽きるんぢやア無いんですよ、異つたのに結ふのが何より樂しみなんで

すもの、毛の好い方なら日本髪になさるのが一番優美で宜しう御座いますね。

髪を結ふには何よりも一番癖直しが大切だと思ひます、成る丈熱いのですつかり癖を直して丸髷に結ひますなら前髪、髱、小前髪と分けますのです、前髪はなる丈薄く取つて結つた方が出來上つた時の格好がよう御座います無論髱にも前髪にも毛を入れますが、近頃賣つて居りますヘヤロールあれが誠に好いと思ひます。價は極く安くつて涼しいやうな氣持がします、たしか十五錢位です。隨分丈夫ですから長く持ちますよ、三枚なり四枚なり櫛をさして仕舞つてから殘りの毛を卷く方が形がよく出來ます。



襟足の長くつて奇麗な方は此丸髷は大層よく似合ひますけれども、襟足のくつきりとしてゐない人は反つて丸髷にしない方がよいと思ひます。着物だつて然うでせう、幾程流行だからつて色の眞黑い人が白つぽい着物を着たら見られた者ぢやアありませんからね。

今ぢやア皆さん各自に勝手な髷にお結ひになります

から別段是れと云つて定つた結ひ方なんかは有りません、何んでも自分に一番似合ふやうにするのが好いですよ、でも前髪だけはふつくらと澤山出した方がよう御座いますね、夫れから前髪と髱とにリボンの巾の廣いのを結んだ細長いエス卷のやうなのがありますが、あれも年を經つた方なんかには一寸好いものですね、十七八位の若い方がそうするとませて憎らしく見えますよ、それと前髪を出してお下げにしたのがありますね、學習院の方なんかゞなさるんですけれどもあれだけは嫌ひです、お下は子供らしく詰めて結ふから可愛いんですわ。

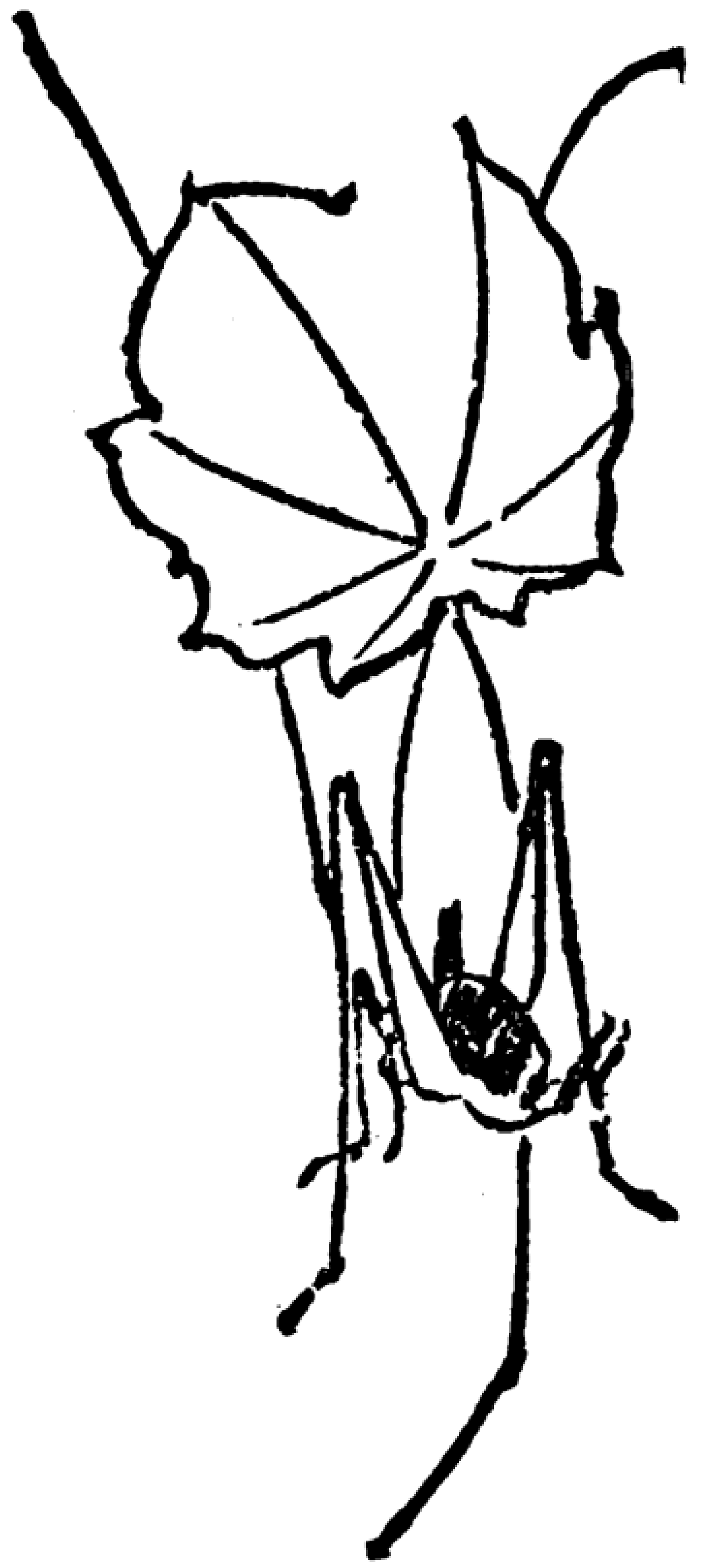
　リボンですか、私は倘且琥珀か極く手薄な繻子等が好きです、赤が一番毛にうつりますけれども私なんかもう赤でもありませんから、餘り毛の色と飛び離れないやうな色ばかり用ゐて居ります。桃色だの綠などゝいふどく／＼しい濃い色は不可ませんね、少しこつた方は妙なくすんだ色合の物ばかり撰んでお使ひなさるんですが、矢張り關口とか八木屋とかあゝいふ店が品がよくつてよう御座いますよ、間に合せの他はリボンだけは近所の小間物店なんかゝら買ふ氣になりません、一つは高價いのと品が古くつて不可ませんからね。

　油は以前までは種々迷つてやれチエリーオイルが好いと云へば夫れを使つて見ますし、やれ八千代だ、やれ井筒だ抔と隨分試めして見ましたけれどもどれだけ毛のためによかつたかは今以つて分りません。でも只今では三宅油椿油をばかり使用ゐてをります。まだ佳いか惡いかは分りませんけれども、大抵の方が椿油ばかりですから私も眞似してゐるといふだけです。少し御話が飛びますが以前私が髮の癖に閉口致してをりました時、某る方のお勸めでカールとかいふので癖直しを盛にやつた事が有りました、どうも夫れはよく直るのですね、思ふ通りにふつくらと前髪でも鬢でも出るのでせう、けれど少しの間に大層毛が赤くなりまして、困つた事が有りました。

　髮洗粉は隨分種々なのを使ひましたよ、始めは袋に入つた灰のやうな粉ので洗ひましたけれども布海苔と

饂飩粉とが好いといふので頻に洗つて居りましたが、毛が折るといふので止めました。夫れから玉子で洗へばいゝといふ事でしたが一週間に一度洗ひますのに玉子なんか使ふのは却々の費用ですからまだ一度も使つた事は有りません、けれども是れは好いかも知れませんで、皆様は何をお用ゐになつてるかと伺ひましたら矢張布海苔ですね、夫れから中にはマダムをお使ひになる方も澤山有ります。マダムは私も愛用してをりますよ、何しろ一分間で甚麽に汚れてをりましても洗へるのですからね、多忙しい時でも一寸で洗へて仕舞ひますから、眞個に調法ですわ、夫れにお湯も澤山要りませんし、まア金盥に三杯もあれば結構でせう。以前の髮洗のやうに諸肌脱いで大騷にやらなくとも、浴衣を着て居れば着たまゝで洗へます。併し是れもまだ使ひ始めたばかりですから毛の爲めには如何なものでせうか、最う少時使つて見た處で無ければ諸嬢へおすゝめ致す事は出來ませんが兎も角も時間だけはたしかに經濟です。





女子外國商館員の實歴談

黒柳吉子

女ながらも、行末は、實業社會へ這入つて、男子に遜色を取らないだけの、働きが爲てみたい。とは、私が十六七歳頃からの、志望で御座いました。それには、高等女學校位の、程度では、迚ても、語學が充分でないと、思ひました故、基督敎主義の學校へ、這入りまして、語學を主として、研究いたしました。

家庭で御座いますか、……ハイ兩親も兄弟もございます。私はその第三女で、言はゞ、有つてよし、無くつてよしの、身體で御座います。學校を卒業いたしましたのは、丁度二年前の、七月で御座います。平素より、そんな風に、心掛て居ましたので、直ぐと、神戸居留地の、某外國商館へ、見習として、雇はるゝことになりました。

商館は、英國倫敦市に、本店が御座いまして、尚世界到る所に、支店や、代理店を置いて、手廣く輸出入品の取扱ひを爲てゐます株式會社で、資本金は、五十萬磅で御座います。神戸は其支店で、十五六年以前に渡來いたしました支配人夫婦が、之れを管理してゐます。支配人夫婦は、日々山手の、私宅より通勤して、執務されますし、其他にも、店員として、英國人三名支那人三名、日本人十五名許り居りますが、日本女子の店員は、三名で、電話係一名、書記一名、それに私とで御座います。

今では女子店員中で、私が一番古參で御座いますが、二年前、私が愈々出る事になりました前日は、什麼な

服裝をして、行つたものやら、先例がないので、眞逆海老茶袴を附けて、行くのも可笑いし、さりとて紋付では堅た苦るしいし、前垂姿も、下婢らしいと、色色つまらない事に心配をいたしましたが、お世話を願ふた、御方が、糸入の衣服に、繻子の帶位で、との御話で御座いましたから、仰在る通りにして、參りました。

男子ばかりの中へ、出るので御座いますから、決して臆してはならん、始めが大事だと、充分覺悟はして參りましたが、矢張り女で御座います、何となく、顔をヂロ／＼見らるゝ樣な、氣持がして、落着き



ませんし、人が笑ふてゐれば、女だてらに、生意氣なと、笑ふ樣に思はれまして、好い氣持もいたしませんでした、支配人の前へ參りまして、先方から、尋問さるゝ事を二三問答いたし、直ぐに、夫人の居らるゝ、事務室へ案內されました、案內者が「此の室が、貴女の勤務さるゝ、場所です」と言はれまして、一先安心いたしました。つまり私は夫人の部下として、働くので御座います。

夫人は年齡四十五六歲位で、大層快活な、一見十年の知己を遇する樣、談話にも障壁を置かず、ドシドシ私の目的や、家庭や、學業などを、御尋ねになりま

した、私は一々御答をいたしました、其他出務時間、服裝、執務上の注意などを、承りまして、其日は歸宅いたしました。

翌日からは申付けられました通り、木綿衣服に、唐縮緬と紋繻子の、晝夜帶と云ふ姿で、朝九時より出掛けました。……執務時間で御座いますか、それは、午前十時より午後五時迄で、其内に、正午より二時迄の、二時間は、食後の休息で御座います。

見習の事で、御座いますから、最初から、六ケ敷い仕事も、あてがはれず、又出來もしません、唯夫人が此れを、彼れをと仰有ることを、至極規帳面にいたして居りましたが、段々夫人は、色々複雜なる、商業上の取引、輸出入仕入書の書方、往復文の書式、商習慣等を叮嚀に御指導下さいました。其内に夫人の代筆をいたします、日本文の飜譯をいたします、先づ一通り了解いたしましたので、假令御夫人が、御留守でも、執務上には、差支へのない樣になりました。

七ケ月目に、愈々輸出事務の一部を、擔當する事になりました、輸出部の仕事は、物品買入、荷造、積出の三係に分れてゐます。私はその買入係になつて、重に雜貨の取扱をいたしました。銅、米穀、花莚、燐寸及綿織絲等の物品になりますと、什麼しても女の手では、やりきれない、事情もありますのです。一口に雜貨と申しましても、範圍が廣う御座いますが、畢竟り輸出重要品外の物品で御座います。それで、其買入れは外國から、買注文が、電報又は書信で到着いたしましたら、產地か、大阪、京都邊へ出張いたしまして、物品の有無を探索いたしまして注文するか、又は出入の商人から、見本を取寄せまして、價格の安値な、品物の良好なるものを、入用丈け、日限を定めて、買入方契約を結ぶので御座います。總じて、外國から買注文の來りし事は、極めて秘密にせねばなりません、これが商人間なり、市場に知れ渡りますと、忽ち價格が、騰貴いたしまして、みす／＼高價な、物品を買入ねばならん破目に陷るので御座います。商機上の事柄は、一寸申上難ふ御座いますが、なか／＼面白いもので御

座います、又商談判にいたしましても、男子が參りましても、價格や、日限の事で、纏り難い場合には、私が出掛けて、談判いたします。すると容易に、取極めが付く事が御座いますが、私が膝を七重八重に折りまして頼みましても、出來ないものが、男子が參りますと、即座に埒のあく事もあります。こんな風に、私が豫期して、參つた通りに纏りませんものが、男子が好結果を得て、歸つて來ますと、何だか、先方は、女と思ふて、馬鹿にした樣に思はれまして、最初の間は腹も立ちましたが、いや／＼これ位な事でと、思ひかへしまして、段々馴れて、今では何とも思ひません、つまり、鐵面皮になつたので御座いませう。

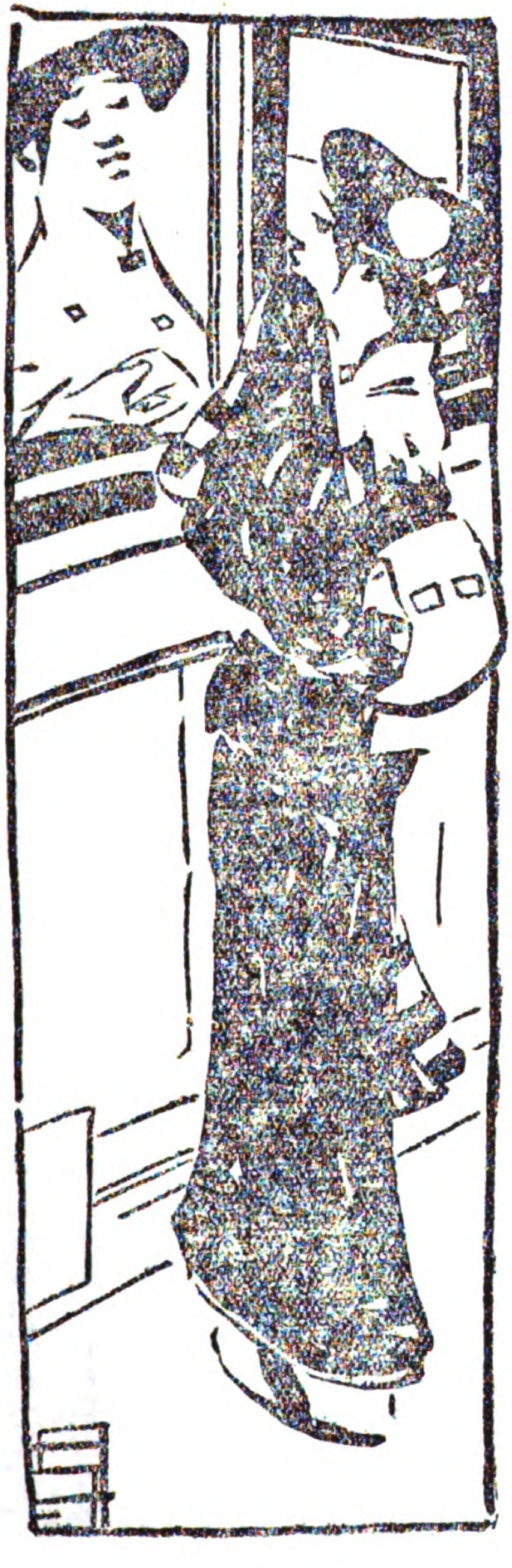
　昨年の暮、輸入部へ移されました。輸入部は、日本商人からの注文品を、産地へ電報で、申遣し、又商館自身が、見込輸入と申して、相場の上りさうな物品を、取寄せまして、商人の買入を待つので御座います。これもなか／＼複雑な仕事で、手短に申上げても、御了解にくいと存じます。何も懸引一とつにあるので御座いますから、倉には持品が澤山ありましても、時には手元に皆無だと申したり、品切のものを、倉には山程ある樣に見せかけたり、畢竟嘘八百を列べて、一文でも自分の利益になれば、他の迷惑は吾れ關せず焉で御座います。

　這麼な風に申上げますと、人格も何もあつたもので御座いませんね。けれども現世の實業界は、皆これで御座います。併し店の信用に、係る樣な事は斷じて、致しません。假へば契約に違つたり、粗惡な物品を、賣付けたり、などは致しません。商機上の事は、相互に公認されてゐるので御座います。若しそこまでも、聖書や論語にある樣な、教訓を守つてゐましては、損耗が重る許りで、迚ても實業界に、飛躍するなどは、思ひもよらんことで御座います。

　收入で御座いますか、……最初見習中が、一ケ月給料十二圓、本務に就きますと、二十圓以上三十圓位のもので御座いますが、別に年二季の賞與金、商人より受取る、手數料等がありますから、先づ給料の倍額位

になります。比較的收入は多額で御座いますが、交際が廣く、その上派出にやらねばなりませんから、矢張り何時も不足勝ちで御座います。單に收入に惚れ込んで、私も這入りたいなど仰在るならば、切に私はお止めいたします、なか／＼並大抵の女では、出來る仕事では御座いませんから。

私は今年廿五歳で、尚今後十年間は、獨身生活を續ける心算で御座います。……老孃だと申さるゝので御座いますか、御尤で御座いますが、男子に遜色を取らないだけの働きは、その頃から出來るので御座いますからね。（終り）



女優問題

◎道義の頽廢――今までの所では俳優と言へば男女とも普通人とは全然別個の圏内に居る者であるとの思想があつたので兩者の間には常に截然たる區別を置いて假初にも混同するといふ事が無くて濟んだ。河原乞食と言つて疎外する譯ではないが自分等とは懸離れた特殊の職業であるといふ意識は、幸ひにも若い婦人抔が彼等に接近する事の危險を防ぐに効果があつた。處が今度の様に女學生上りの女が俳優になつたとすると一般女學生の頭には彼等は至つて自分等と縁の近い者であるとの思想が浮ぶ之は寔に餘儀ない結果だ然なれば從來の截然たる區劃は破られて兩者の間には自然の聯絡が付く事となる。が此現象を藝術の向上と目する半面には家庭の墮落、道義の頽廢といふ恐ろしい暗影がある。

◎玩弄物たる度胸――先づ女學校をも卒やさした程の自分の愛娘を俳優に志願させる様な家庭は如何に辯護しても軟化せる家庭である。日本の現狀では男は未だ〳〵女を玩弄物視してゐる女優だけを例外として崇拜する理屈はない夫にも顧みず自分の愛娘を放つて女優たらしむるといふのは好んで此墮落に導くも同じだ眞際家庭に育つたればこそ進んで女優にも成るのであらうが其遊戯の動機は道樂心が七分を占めて居るのは爭ふべき事である何事に拘らず職業的に熱中して始めて技藝の蘊奥を叩く事が能るので此道樂心が著いて踊つては到底頭角を抜づる譯には行かぬ私は今にして豫言して置くが女優志願者の八九分通は必ず際立つた成功を見ずに終る者ばかりであらう。

◎演劇に伴ふ弊害――然し彼等の成功と否とは當面の問題でない唯憂心す可きは一般女學生の受くる影響で芝居其物は縱や見には行かずとも勢ひ精神が之に近接する然らでも虚榮心の旺な性根の浮易い若い女學生の心は其が爲に如何に深く蠱惑さるゝか判らない。由來精神慾の要求を滿足せしむるに足る可き設備を有たぬ日本の婦人社會は斯る事が動機となつて數年ならずして非常な演劇熱に冒さるゝに違ひないと心配せぬ譯に行かん。九月は男女學生が最も讀書力の盛な月だ而して印象の最も明瞭に頭腦に刻み付けられる時である平素は新聞雜誌を手にせぬ女學生迄も今度の女優問題は皆知てゐる。影響は常に倍してゐると思ふと實際戰々に看過されぬ事である。（三輪田元道氏　朝日新聞）



如何なる婦人が廢物となるか

毒紅唇

浮世の荒浪を泳ぎ得で、磯邊に押し寄せらるゝ藻屑、木屑、西瓜の皮にも似通ひたる婦人も隨分あります。屑の屑たる譯を書いて置くのも、教訓の一端かと存じましたから、大略を左に……。

▲三十歲までも母親の側

婦人は二十歲にもなれば、母親の側を離れて緣付くのが原則ですから、三十歲にもなつて母親の側を離れない婦人は幾らか精神的不具になつて居ります。十五六歲までは心が謙遜ですから、母親の申すことを眞面目に聽きますが、それ以上の年齡になると、學問なり見識なりが母親以上になつた積りで居ますから、母親が臺所元の注意を致しても、洗ひ張りの注意を致しても、其樣な事は諄々しく言はずとも解つて居ると言はぬばかり、上の空で聽いて居ます。それで三十歲過ぎて緣付くと、臺所元、洗ひ張り、其他種々雜多な仕事にマゴ〳〵しますけれども、未だ自分の缺點に氣が付きません。夫が着物や飲食物や來客待遇法に就て細く注意しても、男が何を知つてるものか、其樣な事は女の方がズット細く知つて居ると言はぬばかり、平氣の平左で澄し込んで居ります。それで居ながら、何事も自分の頭腦から考へ出すことはせず、少し面倒な客來でもあれば、何はどう彼はどうと恐にも付かぬ事を五月蠅く訊くので每々夫に癇癪を起させ、それは過日細く話して置いたが、聽いて居らなかつたかと怒鳴られる事があります。何でも人が親切に細く話して吳れる時に聽かないで、人の忙しい時や疲れて居る時に、五月蠅く訊くのが、斯樣な婦人の癖ですから、人の機嫌

を損じてばかり居ります。

▲天然に少しも趣味のない女

舞子ノ濱は好い景色ですことなぞ申しても、一向感じ給はぬ奥様、『海の側に松がタント生へておますな、彼の松は何本ぐらゐおますやろ、あれだけの松を伐つてタキモン(薪)に致しましたら、私所でも五十年位あるやろ思ひますがな、ホンマに惜いもんだすな』と仰しやつたので、呆れ返つて物が言へなくなりました。白砂青松の趣味を解し得ぬ奥様でも、花は綺麗と思はれる事だと思ひますと、『何時か旦那様が吉野山のお話を我夫になすつて居らしつたのを伺ひましたが、奥様も御一緒で御座いましたかと訊きましたところ、ヘイ〳〵私も一緒に參りました、義經千本櫻の芝居を見ました時は、賑かな處やろ想つて居ましたが、ホンマに淋しい處だすな。後醍醐天皇様は彼様な山奥に御駐輦なされましたさうで御座いますが、嘸御淋しかつたやろ思ひました』と仰しやるのです。『如何にも淋しい處で御座いますが、花は綺麗で御座いますね』と水を向けましても、『向島の方が多勢人が出て賑かで宜しいやおまへんか』と仰しやる。鮓は如何で御座いましたと訊きますと、『吉野山で嬉しいと



思ひましたのは彼の詐だけで御座りました」とて、始めて笑壺に入り給ふたので、やれ〳〵これで長官の奥方の御機嫌を損せずに濟んだかと胸撫で下しました。さて此奥方は氏なくして玉の輿に乘られたのでしたが、萬事が狐馬なので、其後離縁になりました。

▲親類縁者へ顏を出さぬ女

親類に不幸があつても、主人だけ行けば澤山、縁者の子が伊勢參宮して歸つても、別段珍らしいとも思はず、面白い話を聽きに行きたいとも思はぬと見えて。親類縁者とは一切斷の道切り同樣な婦人があります。少しは御出掛けなすつた方が御身體の藥になりますよと忠告しても、「出掛けるには着物が要ります。私共では少し增しな着物は、皆一六銀行へ抵當に入つて居りまして、あとは何れも平常着同樣の物ばかりですから、幾ら心安い親類縁者の家へだつて迚も着ては行かれません。先方樣は日に月に立身出世なすつて、離れ座敷をお建てになる、別莊をお建てになる、奧樣は貴婦人交りして居られるのに、私共が乞食のやうな服裝で行くのは、キマリが惡いと申すよりも、先方樣に對して御氣の毒で御座います。立派な御客でもある時、私共がみすぼらしい服裝で參つて親類の者だなぞと申したら、女中まで、呆れ返るぢや御座いませんか」などゝ仰しやる。人間も斯うツムジが曲つて來ては、迚も人交りなど出來るものぢや御座いません。

▲來客に少しも勉めぬ女

客があれば烟草盆なり火鉢なり時節相應の物を出すのが世間並の應接振りで御座いますのに、幾ら夫婦共烟草を用ゐない家でも、客が卷烟草を拈つたり煙管を玩具にしたりして居るのを知らぬ顏の半兵衛さんで澄して居るなどは、餘り情けない事と存じます。併し烟草の火などは、煙草嫌ひの婦人方お氣付なくとも大した事でも御座いません、客の身に取つて一番困り入るのは、斯ういふ事です、「主人は唯今近所の碁會所へ參つて居ますが、今に歸つて參ります」など仰しやつて、

一時間經つても二時間經つても使を立てられぬ事で御座います。尤も短氣な主人など圍碁最中に迎へに來られては怒られるかも知れませんが、兎にも角にも一應使を立てられると、客も主婦の心意氣を酌み取るのですが、何時までも玄關に坐らせて、新聞雜誌を見せるでも無く、寫眞帖を見せるでも無いと云ふ風なのは、來客を何時間かの輕禁錮に處し、困じ果てゝ歸るのを待つて居る策とほか取れないので御座います。斯樣な人を主婦として居る家は、家運日に月に傾くことは申すまでも御座いません。

▲冷めやすい女

「私が結婚するなら極磊落な人が宜い、而して良人が讀書でもして居る側へ、私が足音させずに差し寄り、良人の肩へ手を掛けでもすると、髯を拈りながら鷹揚にからかつて呉れるやうだと宜いと思ふわ」などゝ空想を畫つて居た婦人が果して理想通りの夫を持たれて遊びに來いと言はれるから、奥樣振りを拜見に上つた。

大丸髷に赤てがらで薄化粧の顔元美しく、着物の着こなしがガラリと變つて居たが、變らないのは快活な物の言ひ振り、嬉しさうに私を迎へ、境遇は變化しても心は元の書生だから何卒チヨイ／＼來て下さいと、舊に依つて滑稽まじりの面白い話をするなど却々世馴れたものである。其後二ケ月ばかり經つと、夫が出張して淋しいからとて私を呼び、留守中戀々の情に堪へぬ述懷をさん／＼聽かせられた。斯くて此奥樣追々目に立つほど痩せ衰へ、好きなレースも手に付かぬ程であつた。軈て良人が出張先から歸られ、奥樣の調子付いた可笑さはポンクラのおさんどんにも目に付いたのである。此幸福なる夫婦は、其後間もなく某縣へ轉住され、三年ほど經つて歸京されたが、奥樣は書生時代の疎放な風采に戻り、頭髮をグル／＼卷にして居られた。良人が役所から歸られたのを機會に私は暇乞ひしたが、「先あ宜いから緩りして御出でなさいよ、良人が歸つたつて構やしません。ナアニ挨拶なんか仕なくたつて宜う御座んすよ、變人だから」と小聲で言つ

て、良人の部屋に出向ふともせず、仲働きに任せ限りで、私に蜜柑を侑めたり餅を燒いたり、餅を頰張つては咽喉に滯へた眞似をしてアハ〳〵と大聲に笑つて居られる。私は奥樣が氣が狂つたのぢや無いかと氣味惡くなつたが、必定良人との愛情が冷却したのだらうと睨んだのである。併しこれに就ては一言も質問せず、其儘別れたのですが、其後半年ほど經つてから、奥樣は里方の苗字で葉書を寄越された。

▲浴湯の長き女

夫婦と子供二人の家に、女中一人、子守一人を置き、臺所元は一切女中任せ、子供は小さい方に乳を呑ませるだけで、直に子守に負せて出し、上の方のは家に居ても世話が燒けぬ位なるに、毎日二時間ばかり洗ひ張りや縫物に費し、一時間ばかり新聞を讀み、午後一時になると最早七つ道具を携へて浴湯に出掛け給ふ令夫人、其湯の長いこと〳〵、一時間荒磨きして、一時間細磨して、後の一時間をお化粧に費し給ふ。四時を聞くと女中か子守が子供二人を連れて行くのですが、御自分の入浴に三時間を費された令夫人、子供二人を三十分間に洗つて歸られるのです。如何に婦人は身嗜みが肝腎だと申したとて、御自分ばかりを玉のやうに磨き立て、お子供衆は乞食の子のやうに首筋に垢が付いて居ても構ひ給はぬとは隨分ですこと……。

▲書齋以外に用の出來ない女

歌を詠まれる、畫を描かれる、お茶を成さる、お花を成さる、却々の小說通で、風葉は何樣の、花袋は何樣のと評判せられ、私共の知らぬ書名、時としては私共の知らぬ名前を擧げて滔々と批評されます。書齋の整理と來ては、實に天才とも申すべく、歷史の中にも和漢洋を別けられ、傳記類の中にも和漢洋を別けられ、闇がりでも英國史は何處、佛國史は何處、某文豪傳は何處と確かな見當が付いて居て、間違へずに取つて來られると云ふ風である。其代り書齋以外の事になると、お芋の煮えたも御存じない方で、或時女中の不在に煮

物をされたところ、お醬油を水より多く入れて佃煮よりも辛いお菜が出來たのです。蜀黍の穂を見て、あれが實になるのかと下男にお訊き成さるので、下男がイエあれが實になるのぢや御座いません、實は彼の唐人の毛のやうな物の出てる中に出來るのですと申すと、それぢや蜀黍は動物か知ら……と申されたので、下男は理屈が判らぬから眼玉を白黑さして居る、玄關の書生はクス〳〵笑つてる、本當に一口噺の出來損ひなんです。「彼は奥樣ぢや無い、書齋詰の小間使だ」とは書生の放つた警句です。



▲地理の少しも分らぬ女

十數年來の親しいお友達に向つて、貴女の御國は大阪でしたかチエと、幾度訊かれるか分らない。私が傍で聽いて居るだけでも、七度ぐらゐですから、私が聽いて居ない場所では、何十回繰返されたか分りません。而して此質問を受ける方は、大阪でもなく、岡山の人なんです。何でも關西とさへ云へば、大阪京都の二大都會の繩張內と思つて居らるゝのである。過日も新潟市の大火を新聞

で御覧になつて、私に向つて貴女の御國は新潟に近くはありませんかと仰しやる、私は可笑しさを噛み潰ぶして、近いにや近う御座いますが、奥逆本郷と小石川と云つたやうな近火ぢや御座いません、彼れでも六十里は離れて居ませう、汽車に乘つて半日かゝりますからと、斯う申して遣りましたところ、流石の奥樣も御氣が付かれたと見えて、其樣に皮肉を言はないでも宜いでせうと仰しやる。ナニ皮肉ぢや御座いませんが、ちよつと洒落れて見たのです、と御茶を濁して置きました。

▲廢物矯正と廢物利用

廢物と爲りつゝある婦人を矯正し救濟せんには、母親や夫の愛ばかりに馴れて居た者は嚴格な家へ奉公させるが宜しい、天然に趣味のない者は園藝など致させるが宜しい、親類縁者へ顔を出さぬ者は飲食を儉約して着物の方に餘裕を作らせるが宜しい、來客に勉めぬ者は愛想の好い婦人と往來させて來客待遇の呼吸を呑み込ませるが宜しい。冷めやすい女は山寺へでも遣つて何處までも寂寞の苦痛を感ぜしめ忍耐する心を養成させるが宜しい、浴湯の長い女は閑暇過ぎるのですから、女中と子守を解雇させるが宜しい、書齋以外に用の出來ない女は、一ケ月も下女の代りをさせるが宜しい、地理の分らぬ女は旅行させて地圖の一寸が實際の十里にも二十里にも當ることを知らせるが宜しい。若し此矯正法が無効なる場合は、浮きたるを音樂家とし、沈みたるを女事務員とし、讀書算術などの出來る者を女教員とし、親切氣のある者を看護婦と致すなど、廢物利用の方法は幾らも御座います。



顔の色を美しくする法



醫科大學　大森栁二

△天成の麗質

自ら捨て難き天成の麗質は、必ずしも楊貴妃に限つたものではない。生れた儘の小兒の顔の色艶は、如何に巧に化粧を施しても眞似る事は出來ぬ。これが所謂天の成せる麗質である。言ひ換へると、自然の儘の顔の色が最も美しいものである。古來から素顔の美を發揮することを忘れ、徒に鉛白を用ゐて化粧の方法にのみ腐心した結果、肌や顔の自然美を發揮せず、却て人工美の發達を來した。所が近來衛生思想の普及と共に、この自然美と云ふことに注意する者が多くなつた。

「美顔第一の要件」

色々の藥を飲んだり、化粧水を顔に塗つたりしたとて、顔の色は美しくなるとは限らない、先づ一般に云へば、顔の色を美しくするには、健康でなければならぬ、丈夫な人には自然に備はる美しい色と、云ふに云はれぬ一種の艶がある、だから病人が如何程丁寧に化粧を施しても、この天然の色や艶を表はす事は出來ない、衛生に關した説明は省略して、顔の色を美しくする爲には、新鮮な空氣と、太陽の光線と、適宜な運動とが必要である、特に睡眠に就いては、大に説明しなければならぬ。

「第二の要件」

第二に必要な條件は清潔にする事である。お湯にも入らず、自然の儘に捨て置いて、顔の色の美しきを望むのは、丁度植木に水も肥料も與へずに、美事な花の咲くのを望むと同樣で、求むる者が無理と云はねばならぬ、顔を洗ふに用ゐる石鹸、洗粉、、、、、クリーム等に就

ては、改めて説明をするが、洗面に用ゐる水に關して、こゝに少しく述べて置く必要がある。

▲美人の顔と水

化學上から云ふと、水には軟水と硬水との別がある、軟水と云ふのは石鹼のよく乘る水のことで、石灰又は苦土等を含有して居らない水、或は甚だ少量を有して居る水で、絹類を洗つても生地を害しないが、硬水は煮ると底に石灰が沈澱する、俗に云ふ「荒い水」のことである。東京の水道の水を檢査して見ると、十萬分の一以下の石灰又は苦土を有して居るが、十萬分の一と云ふ位だから、殆ど石灰等の無い善良な軟水である、河の水や井戸の水よりも、水道の水の方が遙に軟水と云はねばならぬ、顔を洗ふには必ず軟水で無ければならぬ。昔から京都の加茂川の水を使へば、顔が美しくなると云ひ傳へて居るが、加茂川の水は友禪等を洗ふ位であるから、軟水には相違ない、元來この水と顔色とは深い關係のあるもので、古來から美人の多い國と云へば必ずその土地には、善良な軟水があるものだが、加茂川の水と同樣に思つて、何所の河の水も善良であるとは云へない、一番安全なのが水道の水である。若し西洋で行ふ樣に、雨を貯へる事が出來るなら、洗面用としても衣類を洗濯するにしても、一番いゝものであるが、これは日本の今日の狀態では、行はれ難いことであらう。

「第三の要件」

毎日朝起きると冷水浴を行つて、皮膚を刺戟するのは、衞生の方面から云つても必要であるが、これは顔の色を美しくするにも、大に効の有るもので、皺のよらぬ樣に心掛けるには、子供の時から湯で顔を洗はぬ樣にせねばならぬ。然し脂肪質の多い人は微溫湯、肥滿せる人は冷水、瘦せた人は溫い湯を使はねばならぬ、皺のよらぬ法は後に説明をする。

次は食物に關する注意である。

▲美顔と食物の關係

顔の色と胃腸とは深い關係のあるもので、早い話が、胃や腸を病んで居る人の顔色は、何んとなく蒼黒づて、身體が痩せるから從つて頬が陷んで、花の様に美しかつた顔も今は見る影も無くなる、これは食物の不攝生のために、胃や腸を毀して惡くしたからである。胃や腸を大切にするには食物に對する注意が必要であるけれど、これは胃腸の衛生を重んずればよいのである。



「顔の色を美しくする果實と肉類」

例へ胃や腸が丈夫であつても、顔の色を美しくする食物と、さうでない食物とがある。その内で殊に必要なのは果實であるが、數多い果實の内でも、蜜柑、林檎、葡萄、梨の汁等は効力がある、柿、梅、桃等はよろしくないから、嗜好きな人はその量を減ずるがよい、野菜類では新鮮なものでさへあれば、何を食してもよろしい、然し果實は毎食

後に用ゐ、野菜類は魚又は肉類と共に食するのである、熟し過ぎたり、未熟な果實は惡い、且つ皮や種子は食してはならぬ。

菜食ばかりではよろしくないから、肉食も必要で混合(野菜と肉類)した食品が最も適當である、瘦せて居る人は脂肪質を多量に食するがよい、身體に脂肪の少い人は肌が常に荒れ、早く顏に皺がよる恐がある。

「顏の色を惡くする食物」

次に顏の色を害する恐のある飲食物は、一般に云ふと不消化物であるが、甘きに過ぎるもの、例令へばジャム、氷砂糖、蜂蜜、砂糖の如きものや、酸味の強きもの、例令へば未熟の果實、酢等も同樣に食してはならぬ、酒は勿論よろしく無いが、茶やコーヒーは昔から色を黑くするからと云つて、婦人は飲まないものである、茶やコーヒーは少量ならば差支はないが、多量に飲むと顏の色を蒼くする、彼の茶の湯の稽古に、薄茶、濃茶を用ゐるが、決して多く飲むではならぬ。

▲美顏と睡眠の關係

西洋の女優の談話を見ても、睡眠と容色とは密接な關係がある事が明である。睡眠そのものから云ふと、吾人は健康と云ふ點より論じて、一日に六時間乃至八時間の睡眠が必要で、睡眠の不足は翌日の氣分に影響する、顏色とてもその通りで、睡眠不足のために顏色を蒼白くする例は、吾人の日常目擊する所である。と云つて睡眠が過ぎるのも、亦惡い結果を生ずる、例令八時間睡眠するにしても、夜の十二時から翌朝の八時までと云ふのではない、朝は必ず早く、冬期は六時迄に、夏期は五時迄に床を去らねばならぬ、從つて夜はそれ相當に早く就床せねばならぬ、寢室に就いては衞生上の注意を守る事は勿論であるが、冬になつて寒いからとて、頭の先へ屏風を立てるのはよろしくない、就床前に間食する事や、又何か考へ事に耽つたり、悲しい思をしたり、床に就いて小說その他の書籍を讀むなどの事は、絕對的によろしくない、室內の溫度は一

ケ年通じての平均攝氏二十度で、新鮮な空氣の流通を計らねばならぬ、茲に斷つて置かねばならぬ事は、右に掲げた睡眠時間は、全然睡眠する時間の事で、床に就いて居るだけではない、必ず八時間は熟眠しなければならぬ、尙ほ肥滿せる人と痩せて居る人とは、睡眠時間に長短の區別あるを要するけれど、それは後段に肥える法及び痩せる法の條下に述べるから、茲には省略する。

　寢床に就いてからの心得は、所謂無念無想であることで、色々の妄想、殊に悲哀な追想は大禁物で、佛蘭西のある有名な女優は、寢床に就くと無念無想で、口元に笑味を含んで眠ると、老年になつても若々しい顏色であるとの、經驗を語つた事がある。

▲美顏と心の持ち方

　次に顏の色を美しくするには、常に愉快に暮さなければならぬ。吾人の精神狀態は直に顏に表はれるもので、嬉しい時には快活な顏付であるけれど、心に悲しいこと、不平な考へなどの起る時は、如何に苦心をして顏に出すまいと思つても、直ぐにあらはれて、不快な陰鬱な顏色になる、これは心理上當然の現象であるから、何とも仕方はないが、常に愉快に生活する樣心掛けなくてはならぬ、然し人間の一生には悲しい出來事や、不平な感想は免かれないけれども、決して自ら悲哀を求めぬ樣にし、自分の心を制し、悲哀を轉じて愉快にして、樂天的の生活を營まなくてはならぬ、この精神作用と顏色とは重大な關係のあるもので、花の如く美しかつた婦人が、結婚後色々の心配や苦勞のため、見る影もない顏色になる事が有るのを見ても、如何に心の持ち方によつて、顏の色を左右するかゞ知れる。

「第四の要件」

　精神作用と共に腦を丈夫にしなければならぬ、腦神經に病氣のある人は、自ら好んで悲哀を求めるもので、例を擧げるとヒステリー、神經衰弱等はその主なるものである。何んでもない事に心配し、苦勞して獨り悄

內に坐つて泣く樣なのは、右の病人に多いもので、婦人には血の道と云つて、生欠伸が出たり、頭痛がしたり、眩暈や耳鳴がある、血の道と云ふは子宮病だとばかり考へるが、神經系統の病氣で、勿論子宮病から來る事があるけれど、一種の神經の病氣であるから、こんな病氣に罹らぬ樣に注意しなければならぬ、腦神經に異常があると、世の中の事が見るもの聞くもの皆悲哀の種となつて、腹立ち易く、泣き易く、何んとなく淋しく感じ、仕事が思ふ樣に出來ず、顏の色は蒼白くなつて、頰は瘦せ衰へ、眼差は鋭くなるから、顏には何んとなく陰氣な相が現はれる、從つて顏の光澤が失せて來る、愛嬌もなくなり、擧動とても不活潑になるから、若し血の道にでもなつたら、直に治さなければならぬ、それと同時に血の道にならぬ樣に心掛けて、心配や苦勞をしないがいゝ、云ひ換へると樂天的に生活するのは甚だ必要な條件である。

「注意五ヶ條」

以上を概括していふと、

一、顏の色を美しくするために、亞砒酸の樣な毒藥を用ゐるのは、害はあつても効はないこと。
二、健康でなければならぬ事。
三、洗面用の水に注意すること。
四、顏の色を美しくする食物を食すること。
五、睡眠は容色に大なる關係がある。
六、精神と顏色とは關係があるから、樂天的生活を營む事。

▲日に燒けぬ法

太陽の光線は七色あるが、その內に紫外線と云ふものがある。この紫外線は皮膚を刺戟して、色素を集めるから色が黑くなる、其所で日に燒けぬ法と云へば、太陽の光を浴びないで居ればいゝが、これは言ひ易く行ひ難い事で、吾人は直接なり間接なり日光を浴びないで居る事は出來ぬ、若し每日々々日光を見ないで居ると、病氣になる事は明かであるから、如何しても太陽の光線を受けなければならぬ、して見ると日に燒けぬ法は無い樣であるが、日光に觸れても色が黑くならないで居られる方法は、無いではないがこれには色々

の注意をしなければならぬ。
　太陽の光線を直接に受けるのと、間接に受けるのとは、色が黒くなる點から云へば、大に異る所がある、普通に吾人が日光に觸れると云ふのは、家を出て蒼空の下に立つて、直接に日光を浴びる事であるが、間接といふのは室内に居て戸や障子、或は壁に反射する日光を受けることを云ふのである。だから人間が生存して居る間は夜間より外に、日光の光線を受けずには居られないのである。

「日に燒ける機會」

　日に燒けるのは日光を直接に受けた時に最も甚しい。これに次いでは汗である、或は鹽分を含んだ風も色を黒くする、むかし流行した唄に「鹽風に吹かれてお色が眞黒け」と云ふのがあつたが、これは經驗上明白な事實である、又前にも掲げた通り洗面用の水が惡いと、矢張り色が黒くなり且つ荒れるものである。

「汗が色を黒くする理由」

汗は九十分の水と十分の鹽類から出來て居るが、この水分が日光に照されて蒸發した跡に鹽分が殘る、殘つた鹽分が顔を刺戟して色素を沈着させるのであるから、汗が出ても直に拭ひ取らなくてはならぬ、室内に居る時は出來るだけ涼しい樣に、窓を明けて置くがよい。

「汗の出た時の心得」

柔な布片で顔は勿論全身の汗を拭ひ、レモン油を水一合の内へ二三滴入れたもので、再び拭ふのは最も有効の方法である、或は外出した時にレモン水をハンカチーフに浸して、汗が出ればそれで拭ふがよい。

「日に燒けぬ藥」

汗が出ても、鹽風に吹かれても、或は日に照らされても、日に燒けない樣にと望む人は、左の處方によつてクリームを作り、顔に塗つて外出し、歸宅してから微溫湯で洗ひ落せばよろしい。

複硫酸キニイネ　五グラム
グリスリン　十グラム
ラノリン　百グラム

日に燒けた跡はレモン水で洗へば一兩日の内に白く

なる。

▲顔に皺のよらぬ法

人に依つて早く顔に皺のよる人と、老年になつても左程著しく皺のよらぬ人とがある。顔に皺が出來ると、如何に色が白くとも皮膚の艶が美しくとも、大に容色を害するものであるから、婦人は殊に皺に就いて苦心をする。顔に早く皺のよるのを防ぐには、先づその原因を知つて居なければならぬ。

「何故皺がよるか」

元來人間の皮膚の下には、脂肪卽ち俗に云ふあぶらけがあつて、肪脂腺によつて皮膚の表面に排泄せられる、この脂肪腺の口が閉塞されると、面皰(にきび)が出來るのである、卻說この脂肪は女子なら十八九歲、男子なら廿歲前後に、最も澤山に皮膚の下に集るもので、女子には特に著しく表はれる、從つて皮膚の色が美しく、全身が多少肥える、所がこの脂肪腺よりは常にあぶらを出して、皮膚の表面を滑にするのであるから、毎日々々脂肪が費される、從つて食物に依つて補つて行かねばならぬ。若し分泄せらるゝ脂肪と、新しく出來る脂肪と、その量に於て平均を失つて、作り出される脂肪が、失はるゝ脂肪より少量であると、それだけ皮膚の張りが少くなる爲めに、皮膚がたるみを生ずる、このたるみの事を皺と云ふのである、右に述べたのは主として食物に依る塲合であるが、その他にも色々の塲合があつて、一々列記するに遑はないが、餘り人の知らない原因としては、面皰の治つた後の始末の悪いためで、前にも述べた樣に面皰は脂肪と關係が深いものである、脂肪腺のない所に面皰は出來るものではないから、後に述べる面皰の療法の條下を熟讀されん事を望む。

「皺の出來易い人」

その他には湯で常に顔を洗ふ者、厚着をして安逸なる生活を續けて居る人に多い。

こゝに云ふ皺と云ふのは、餘り老年にならないのに、早くも皺のよる塲合の事で、婦人が老年になつて月經

が閉止してから後、顔に皺のよるのは如何とも仕方のないもので、寧ろ生理的と云はねばならぬ。この場合に當つてはもう皺のよらぬ法を適用する事は絶對に出來ないものである。

「皺の豫防法」

早く顔に皺のよらぬ樣にするには、若い時から注意をしなければならぬ、最も大切な事は精神を安靜にして苦勞をしない樣にする事である、若い時分から多く心を苦しめると、次第に顔の色も艶もなくなつて、脂肪質が少くなつて來る、第二には身體の運動と休息とを適當に行ふ事で、脂肪の少い人は運動を少くするがい丶、運動が過ぎると脂肪が多く費さる丶から、それ相當に脂肪に富んだ食物を食すべきである。お湯で顔を洗はぬ樣にするは勿論であるが、入浴するにしても普通の湯はい丶が、餘りに溫度の高過ぎるのはよろしくない、睡眠は必ず毎日少くとも六時間以上八時間以内でなくてはならぬ、若い時分から冷水摩擦を行つて、皮膚の抵抗力を增さなければならぬ、從つて水で顔を洗ふ習慣をつけ、化粧品を用ゐるに若し微温湯を要するならば致方もないが、それにしても決して熱度の高い湯を用ゐてはならぬ。

「皺のより易い人の注意すべき事」

次に皺のより易い人と、皺の少い人との區別がある、如何なる人に早く皺がよるかと云ふに、瘦せて居る人、安逸に暮して居る人、長時間入浴する習慣のある人、病氣に罹り易い人、神經に病氣のある人等であるが、睡眠時間の少い者、精神を勞する事の多い者には、特に早く皺がよるものである。こんな人は日常脂肪質の食物を採つて、皮膚の張りを充分にする事、入浴の回數を減じ、且つ入浴時間を短くする事、其れから、充分に睡眠をしなければならぬ。然しこの脂肪食と云つても、脂肪（牛肉のあぶら身、バタ、豚肉の脂肪多き肉等）に富んだ食物に、新鮮なる野菜を混じて用ゐるのである。

皺が早くよると思へば、運動を少しく減じなければならぬ、運動を過度に行へば脂肪が盛に分泌されるから、脂肪が不足する恐がある、されぱとて運動を減じた爲めに、胃や腸を惡くする樣な事が有つてはならぬ。若し神經病にでも罹つて居るなら、一日も早く治さねばならぬ。

社交界の新流行 襟挿花の造り方

襟挿花は香氣佳く美しき花を小さく束ねて、宴會其他へ臨む時ボタンの穴に挿して行くものである。男子のは形が小さく女子のは大きいのが例である。歐米では頻に此の襟挿の美しいのを競ふといふ。手すさびに之を造つて見るのも興味ある事であらう。

先、材料としては、

一、花卉類　これは何でもよいが、成るべくは芳香ある美しい花が宜しい。例せばスミレ、ジヤサント、ヘリオトロツプ、パンシイ、プリムラ、ペコニヤ、ダリヤ、ユーカリス、菊などの類。

二、細銅線　これは成るべく細いのがよい。花梗又は蕚に挿入するため、又花卉を結束るために用ふ。

三、鉛紙　一般に瓶の口を密封するに使用されてゐるものである。通常銀紙といふてゐるが、それでは日本在來の銀紙と紛へ易い。舶來の銀紙若しくは鉛紙といふべきである。これは襟挿の柄を包むためである。

さて襟挿を造るには、何でも中開の花を選むのが肝要である。そして或る一種の花を主として、それに他の花及び葉を配合するのである。今實例によつて製作方法を記すと、

バラ中開花	壹個	花色桃色
スミレ花	五個	花色紫又白
ゼラニユーム葉	壹枚	

右バラの花を眞として、それにスミレを前に添へ、其の裏へゼラニユームの葉を付して、此の三つ即ちバラの柄と、スミレの花梗と、ゼラニユームの葉柄とを、一緒に細銅線で結束る。そして結束つた處を鉛紙で體裁よく包んで置く。即ち次のやうな形になる。



これ等は淸楚したもので、即ち男子用のものである。そして男子用のものは、柄を成るべく小さくせねばならぬ。さうでないとボタンの穴に入らないかもしれぬ。（女子用のは針で留めるから此の心配はない）これが爲めに男子用の場合は、花の大なるものは之を蕚の下より枝を切り、花のみにして、其花の蕚の處へ十文字に（一）圖の如く細銅線を挿し通して、之を左右に分け、（二）圖の如く一緒にして之を花の柄とするのである。


（一）
（二）

女子用のはその儘な必要も心配もない上に、艷麗を主とする處から、何うしても花の數

もの數も多くなる。從つて複雜にはなるが、然し事の處へ十文字の鍼を挿して柄の代用を造るなどいふ事がないから、(即ち眞の花から順順に細銅線で卷いて、順々に花弁を付けて行くだけであるから) 却つて實際は面倒でない。次に一例を擧げよう。

ジヤサント	壹本	花色白
パンシイ	二個	花色紫黃白
バラ中開	一個	花色桃色
ヘリオトロップ	二本	花色紫
ゼラニユーム葉	三枚	

右ジヤサントを取つて之を眞にし、その花梗に細銅線を卷き、次にその前にパンシイ二個を置き、之を一緒に細銅線にて卷き、其の裏にゼラニユームの葉一枚を添へて之を卷き、更に前面の中央に、バラの中開の花一個を置きて　又之を卷き、其の下方全體にヘリオトロップ三本を置き、之を一緒に卷き、其裏へゼラニユーム二枚を添へて之をも一緒に卷き、さて其の柄に鉛紙を卷いて花梗や銅線を隱すのである。鉛紙を卷くのは全く美觀を整へるのみに必要なものである。



即ち圖解すれば、先づジヤサントが眞になり、次にパンシイ、其下中央にバラの中開のもの、其下がヘリオトロップで、裏にゼラニユームの葉三枚付着して出來るのである。

猶ほ

ユーカリス	一本	花色白
ヘリオトロップ	二本	花色紫
ゼラニユーム葉	一枚	

で男子用。又

スミレ	五本	花色白
パンシイ	三本	花色紫黃白
ゼラニユーム葉	三枚	

で女子用のものなど、配合はいろ〳〵ある。少し手慣れゝば幾千も艶麗な挿花を造つて見ることが出來る。

half cup turnips. Cook separatly in boiling salted water until soft. Drain, and add one cup cooked peas. Reheat in a sauce made of three tablespoons butter, three tablespoons flour, one cup chicken stock, and one-half cup cream. Season to taste with pepper and salt, and just befor serving add yolks two eggs and one-half table-spoon lemon juoe.

野菜の煮込み

人參と蕪とをよく洗ひて、短册又は他の面白き形(花形又は圓形)に切り、人參一杯と蕪半杯の割合にて別々に鹽湯の中に入れてうで、水を切りて後、別にうでたる靑豆一杯を其中に入れ置き、次にバタ大匙三匙、粉大匙三匙、鷄のスープ一杯牛乳半杯をよく混和し、鹽胡椒にて味をつけて汁を作り、其中に前の三種の野菜を入れ、一旦之を煖め、膳に供する前に玉子の黃味二つを入れ、それに尙ほ大匙半分位のレモンの汁を加へるのです。

(注意) 玉子の黃味を入れたる時は、よく攪き廻して、固まらぬ樣注意せねばなりません、又レモンの代りに柚子或は橙酢を用ゐてもよろし、ソップのない時は其代りに牛乳を一杯餘分に入るればよし、蕪の代りに甘味多き大根を用ひてもよろし、分り易い爲に左に重ねて其材料を記します。

人參	刻みたるもの一合入茶碗一杯
蕪	刻みたるもの同じく半杯
靑豆	同じく一杯
バタ	大匙三匙
粉	大匙三匙
ソップ	一合
牛乳	五勺
玉子	二個
レモン	大匙半匙

BAKED MACKEREL.

Split fish, clean, and remove head and tail. But in buttered driping-pan, sprinkle with solt and pepper, and dot over with butter (allowing one tablespoonful to a mediumsized fish), and pour over two-thirds cup milk. Bake twenty-five minutes in hot oven.

鯖の蒸燒

魚の腹を開き、汚物を取り清めて、頭と尾を切り取り、バタを引きたる燒鍋に入れ、鹽、胡椒を撒りかけ、處々にバタを載せ(中位の魚一匹に付き大匙一匙位の割合)、コップ三分の二位の乳を注ぎかけ、强き天火或はストーブに入れて廿五分間燒くのです。

STEWED TOMATOES.

Wipe, pare, cut in pieces, put in stew-pan, and cook slowly twenty minutes, stirring occasionally. Season with butter, pepper salt.

赤茄子の煮込み

赤茄子をよく拭き、皮をむき細かく刻み、深鍋に入れ、折々攪き交ぜながら文火で廿分程煮て、バタ、胡椒、鹽で味をつけるのです。

FRENCH FRIED ONIONS.

Peel onions cut in one-fourth inch slices, and separate into rings. Dip in milk, drain, and dip in flour. Fry in deep fat, drain on papar, and sprinkle with salt.

玉葱の揚げもの

玉葱の皮をむき、二分位に切りてバラバラになし、一片づゝ牛乳の中に一寸浸け、其乳の滴を切りて粉の中にころがし、澤山の油にて揚げ、紙の上にて油を切り、それに鹽をふりかけるのです。

(注意) 此れはビフテーキの付合などに一寸よいものです。

櫻井女塾の講習開始

豫て報導せし同女塾の西洋料理講習會は去月十五日より之を開く事となり、每火曜日午前十時より二三時間づゝ講習しつゝあり、希望者は何時にても入會し得るよし。

簡易家政術

櫻井ちか子

CREAM PUFFS.

Put two level tablespoonfuls of butter and half a cupful of water over the fire. When boiling add hastily half a cupful of flour; stir over the fire until smooth; take from the fire, and when cool break in one egg. Beat well and then add a second egg. Beat until smooth and light. Drop by tablespoonfuls on a greased shallow pan, and bake in a moderate oven for half an hour. When well baked these shells will keep a week; simply reheat before filling.

シュークリームの皮の作り方

バタを大匙、すり切り二杯と、水半杯(一合入り茶碗)とを火にかけ、煮立たる時、粉半杯を入れ、手早く攪き交ぜ、滑かになりたる時火より下し、冷めてから玉子一つを割り込み、よく攪き交ぜて、交りたる時又第二の玉子一つを加へ、滑かに軽くなるまで攪き交ぜて、狡脂を引きたる淺き燒鍋の中に大匙にて(全分量を十二位に)滴して、餘り强からぬストーブ或は天火にて三十分間燒く、此皮は一週間位はもちますから、クリームを入れる前に少しく暖めるのです。

(注意) 燒け上れば中は空の菓子が出來ますから、其上部に小刀にて小さき穴を穿ち、次の法にて作りたるクリームをつぎ込むのです。其法は、厚紙を漏斗狀に卷き、其中にクリームを注ぎて紙の外部をつかみて搾り込み、次に玉子の白味一個を泡立てて、砂糖のふるひたるもの小匙二杯を加へ、よく砂糖を混化したる後、クリームを詰めたる口へ小さき匙にて少し宛被せ、ストーブ或は天火の中に入れ、五六分間置けば、泡立たる白味に一寸色着きますから其時に取出す、此菓子は格別に容易く出來るものですから試して御覧なさい。

CREAM FILLING.

3 tablespoonfuls sugar.
1 ½ tablespoonfuls flour.
1 pinch solt.
1 egg.
1 ½ Milk.
1 tea-spoonful lemon.

Mix dry ingredients, add egg slightly beaten and pour on gradually scalded milk. Cook fifteen minutes in double boiler, stirring constantly until thickened afterwards occasionally. Cook and flavor.

クリームの製法

材料

砂糖	大匙三匙
粉	大匙一匙半
鹽	一つまみ
玉子	一個
牛乳	五勺
レモン	茶匙一匙

先づ砂糖、粉、鹽、を一緒に混ぜ、其中へ一寸泡立てたる玉子を加へ、よく攪き交ぜたる後、熱き牛乳を少し宛注ぎかけ、かき交ぜながら十五分間湯煎で煮る、之を煮るには濃くなるまでは絶えずかき交ぜ、濃くなりたる時は折々攪き交ぜるのです、そして冷えたる後に香料を加へます。

STEWED VEGETABLES.

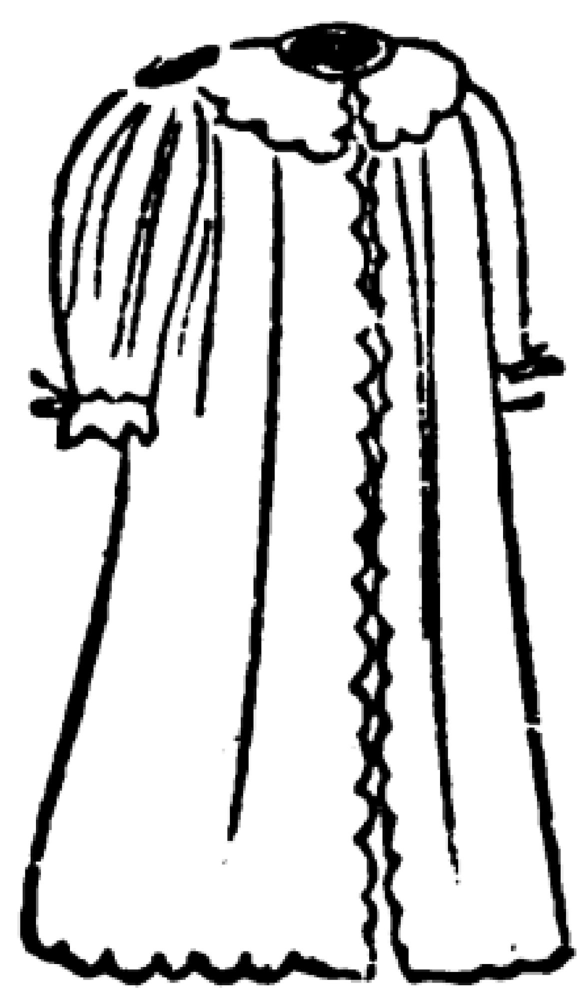
Clean carrots and turnips cut into strips or fancy shaps; there should be one cup carrots and one-

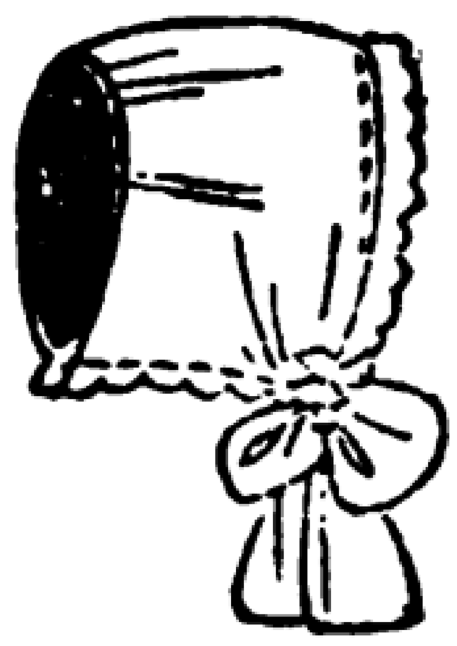
手輕に出來る子供の洋服

嬰兒用ラッパー及びキャップ(帽子)

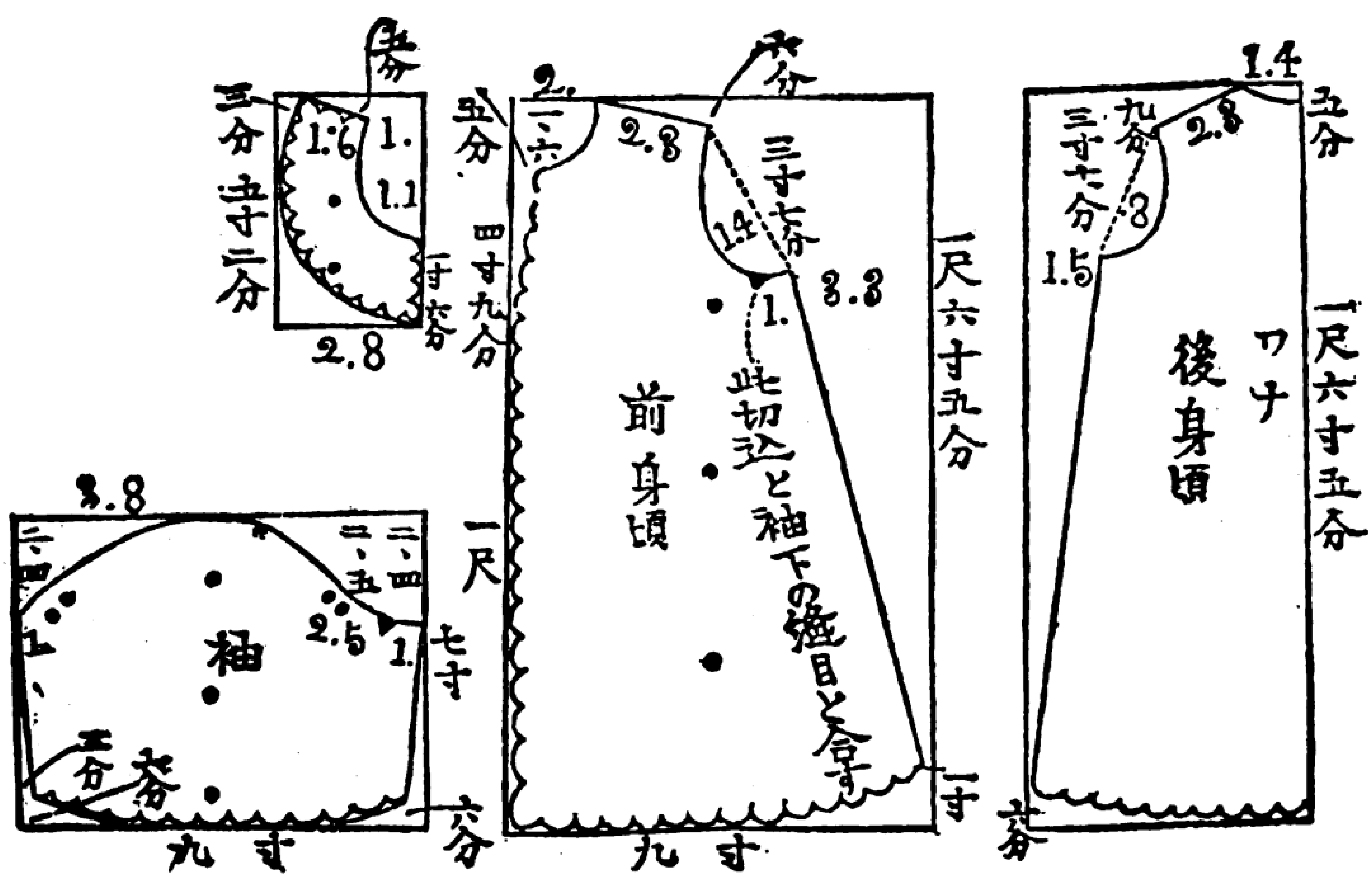
裁縫專門女子共立會　松江美佐子

此ラッパーと申すのは本誌第八卷第八號に記しました嬰兒服の上に羽織るもので、地質は主に白のフランネルを用ゐます。飾としては、折衿、袖口先、身頃の裾及び前などに縫箔を致す事もあり、また右の箇所を、左の形紙通り、即ち、花びら形に切つて、白或は桃色の絹糸などでかゞる事もありますが、此は至極愛らしう御座います故、其の拵へ方を記して置きませう。そして此ラッパーは凡て單に致します。用布は二尺巾四尺を要しますが其の中で圖の如き簡單な帽子を拵へる事が出來ます。尤も此帽子は、フランネルでなく、色も地質もお好み通りのものになさつて宜しいので御座います。帽子の附屬品として、紐及び飾りに用ふるリボンが二ヤールと、絲製の極々糸の細い柔かなレース(巾六七分位のもの)を二ヤール程を要します。





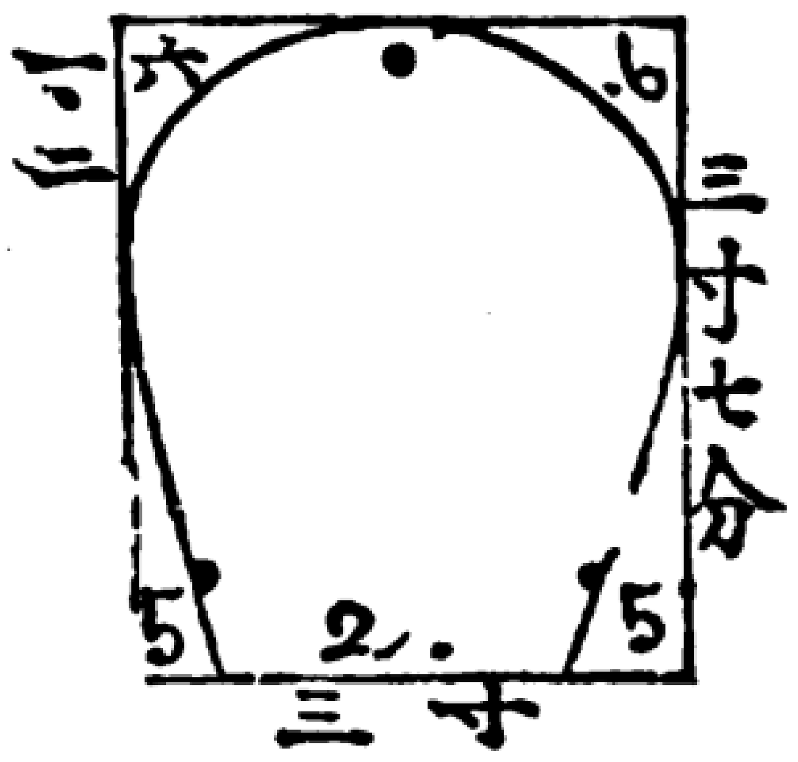
△形紙の拵へ方

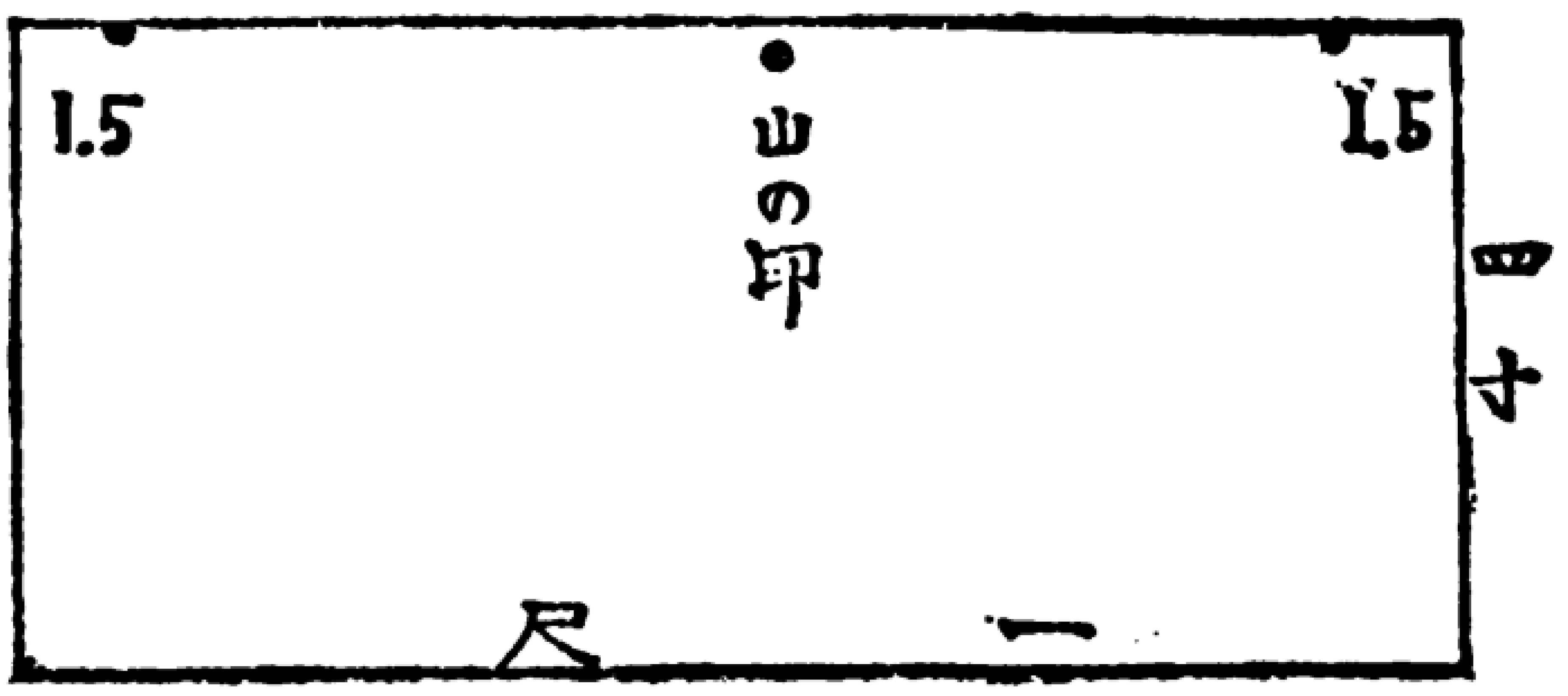


先づラッパーの爲めに、左の通り四角の紙を四枚拵らへ、次に、紙の中央に正敷地の目たての印をつけたる後、寸法通りに夫々截ち切ります。夫れより圖の通り花片形に切りますが、

此れは何處も皆、巾六分位の大きさに致し、二分つまり位切り入れます。

帽子は左の通り先づ二枚の紙を拵へます次に、二枚共

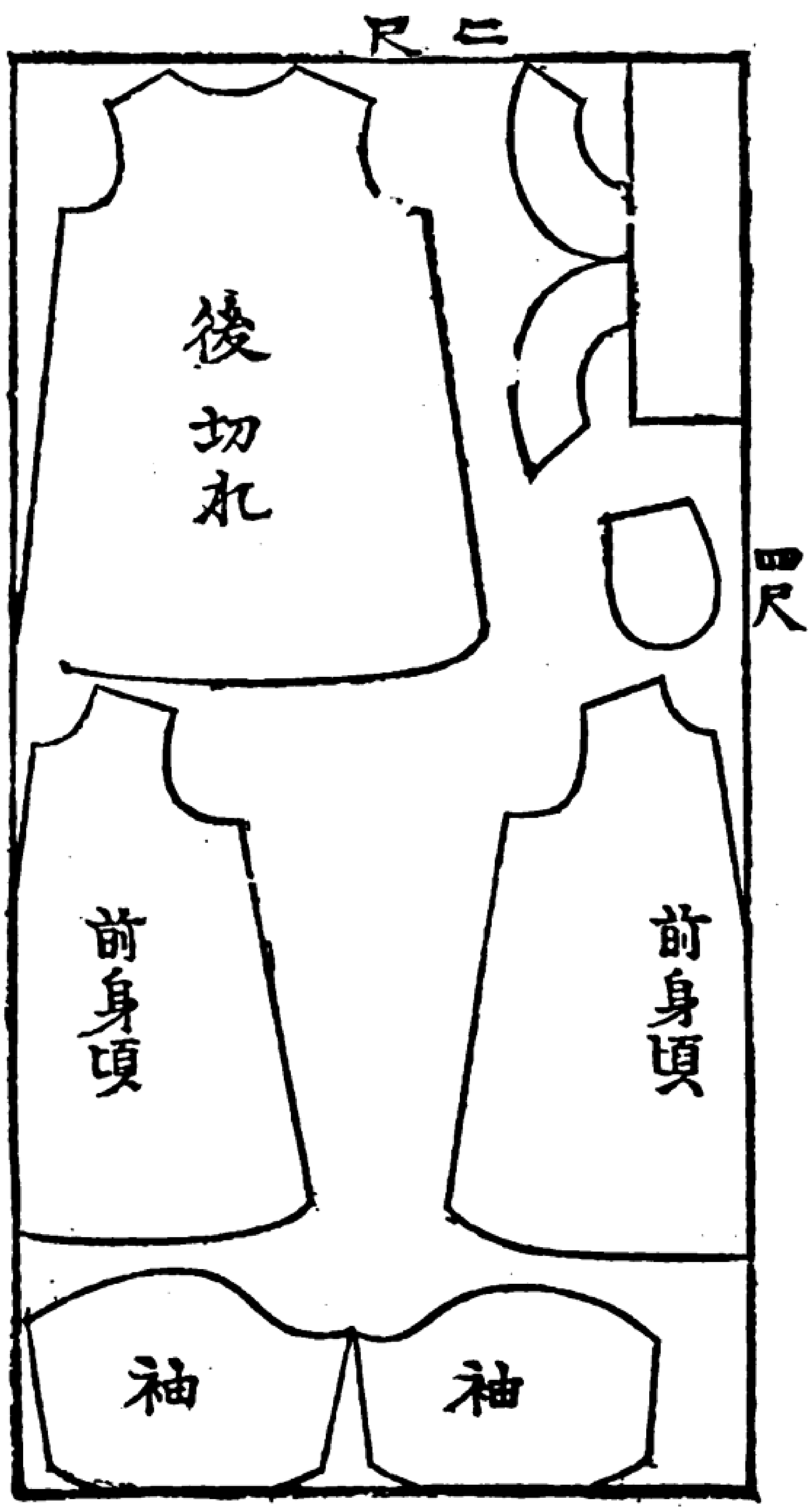




中央に山の印、及び下から一寸五分の所に合印を付けて置きます。

△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

左の通り、二尺巾四尺の切れを廣げて。ラッパー及帽子を裁ち、後にて、ラッパーは矢張片紙通り花片形に裁ちます。



尚帽子は表と同じ寸法の裏を裁つて置きます。裏の地質は何でも好み通りになさつて宜しう御座います。

△ラッパー縫方順序

先づ第一に、袖、折衿、及び身頃の周圍を絹糸にてかゞり、次に、袖口先から一寸位入つた處へ紐を通すだけの切れを付け、次に袖下を縫ひます。此時紐通しの切れは縫ひ込まぬやうに注意をする事。夫より身頃にかゝります。身頃は先づ前後の肩を合して縫ひ、次に折衿を持ちて地の目まつすぐの方を前となし、縫代は表へ出して衿廻りへかりにとぢ付け置き、別に細き見返しを拵らへ、此を折衿と一緒に縫ひ付けます。夫

れより、此の折りは身頃の方へ向けて折り、身返は放して表より押へミシンをかけます、次に此身返しを身頃の方へまつり付け、次に脇を縫ひ最後に裾を付けます。此は、先づ、袖の袖付にある、二ツの印から印までギャザ縫ひをなし、身頃の脇あきだけにちゞめ、夫より袖の切込と身頃の脇の縫目と合し、袖下の縫目は前身頃の印と合して、まつり、袖下の縫目を七分程前へずらして付け、此縫代は斜目の切れで包んで置きます。袖口の方へは紐通の中へゴム或は絹テツプを通し身頃は折衿の付け際位をリボンでしばります。

△帽子縫方順序

先づ第一に、裏表共主の切れの眞中と、後切れの頂上を合して針をうち、主の切れに少しギャザを取り(但し合印から上にとる事)二枚合して縫ひます此縫代は裏表共割り下の方を少し殘してとぢ合せます。夫より後切れの下部に淺く巾着ヒダの如きクセを拵らへ、主の切れの前の方にも、三分位のクセを取りたる後、表切れの端をぐるりと折りて、此處へレースをつけます。レースはギャザを取りたる後前だけ二重に、後の下部は一通りだけ付け表より飾ミシンをかけ次に裏はぐるりとまつり付けます。最後にリボンの飾り及び紐を付けます。此リボン飾りは、頂上又は脇の方何れでも宜しう御座います。



鷄卵を見分ける法

松澤淳水

近頃は、夫人や令嬢方が自分で食物を料理せらるゝ樣になりましたのは、誠に喜ばしい事です。して其料理には必ず先づ鷄卵を用ふると云ふ有樣で家庭料理と鷄卵は密接なる關係を持つて居ります。內政の任に當る諸姉はに之れが研究は强ち無用の業ではあるまいかと思ひます。玆に聊か私の、卑見を述べて諸姉の參考に供します。

鷄卵の滋養に富んで居る事は皆樣も御承知ですが、併し何れの卵でも同じ滋養分があるかと云ふに、決して然うではありません。では如何いふものが良いかと

必ず御尋ねになりませうから、こゝに少しく申上げます。先日も或る奥様が卵子屋の店頭で、褐色の卵は滋養分が多いから少々は古くても良いが、白色の卵は新鮮でも可けないからと云つて、褐色のもの許り買ふて居られましたが、卵殼の色合によつて滋養分が變る事はありません。私は殼の色合を彼れ是れ云ふよりも第一に鷄卵の新古に重きを置いて戴きたいと存じます又卵によつて蛋黄に濃淡がありますが、之れは青草とか又は土中に含有する鐵分、硫黄分、其他種々雜多のものを自由に啄む放飼鷄に蛋黄の濃厚を認めるので滋養分の多少には關係がありません。棚飼鳥とても濃綠なる青菜や青草を充分に與へ、飲料水の中へは古釘か或は硫酸鐵液の少許を入れて置けば、放飼鷄にも劣らない濃色になるのです。唯だ菓子屋等では蛋黄の淡きものを用ゐ、料理等には濃きものを重寶がると云ふ樣に用途に幾分の相違がある位のものです。

そこで新鮮なる卵を買ふには如何したらよいでせう、養鷄家から直接に買へば申分がありませんが、日日の入用丈け一々其樣云ふ風にする事は却々困難です。さればと言つて、卵子屋の卵は、幾人かの手を潜つて來て居るから、新鮮だと申しても當になりません。殊に上海卵等は輸入に多數の時日を經過するから、新しい筈がありません。依て左に簡便なる鷄卵の新古鑑別法を述べませう。

一、鷄卵を日光或は燈火に透し見て、鈍端即ち卵の大きい方の端に泡が見えて、全體の半透明なるものは新鮮なるもの、是れに反するものは古きものです。

一、殼に光澤のないのは新しい卵です。古きものは人手に觸れる等の爲め自然に光る樣になります。

一、鷄卵の兩端を一寸舌の尖に當てゝ、鈍端に温みがあり、鋭端即ち卵の細い方の端の冷いものは新しいです。若し兩端共温みあれば、大概は腐敗して居ます。

鷄卵を食用に供するには、半熟が最も適當で、生の儘食べたり、或は殼に小さい口を明けて喫るなどは最も危險な事です。それは往々內部は腐敗し、或は

腐敗に近づけるもの、所謂ミダレと稱するものがあるからです。それ故卵を生の儘で食ふには、之を破つて茶碗に入れ、其完全なるを見認めて、而して後に食べる事にしなければなりません。

歐米では鷄を自家に飼養して得た新鮮な卵を食料に用ゐて居るさうですが、我國の家庭にも、此の如くに盛んに鷄を飼養して、新しい申分のないものを用ふる樣にしたいものです。

新刊紹介

△詳說女子書翰文　佐藤正範著

最も平凡なるが如くにして最も必要なるは女子の書翰なり、殊に婦人は嫁しての後は日々の家事に忙しくて音信には自然怠り勝になるものなり、多年の知己も遠く隔りては年に一度の往復も却々に出來ぬもの多し、斯くては交情次第に疏らぎて友を失ふに至る。されば山河千里を隔てゝも、消息を通じて交情日夕のごとくならしむるもの書信に如くはなし、この書は女子の書翰文として四季の消息より吉事の祝賀凶事の見舞、慰問文、寄贈文、招請文、依頼、註文、紹介、其他日用願屆の書式等凡そ數十種を撰み、簡易明亮なる作例を示し用語に關する心得を丁寧に說述したれば家庭用の書翰文として好き參考たるべし。定價壹圓。日本橋區鐵砲町六盟館發行

△偉人の感化　岡田琴月著

少年をして偉人の感化を享けしめんには、少年をして其事實を知らしむるよりも、其の人を想はしむるに如かず、是れ偉人の姓名と其の少年時代の傳記とは少年諸子に取つては極めて珍らしからざる事柄なるに拘らず敢て之を繰返す所以なりと著者は言へり、其の珍らしからぬ偉人としてをさめられたるものは豐太閤、リンコーン、ネルソン、ガリバルヂー等十數名にして、其の事蹟を少年向に面白く書かれたり。定價六拾五錢。京橋區南紺屋町實業之日本社發行

△産婦の心得　近藤克代子著

姙娠中は婦人は兎角病氣に罹り易く、動もすれば流産雜難産等の不幸を來すものなれば、此の時期に於ては特に注意して攝生を怠るべからず。其れに次では分娩時の心得、産褥中の攝生、新生兒の取扱等、産婦の心得居るべき事一二に止まらず、本書は此等の注意を何人にも了解し得る樣平易に述べたるものにして、小册子なれ共、而かも誠に有益の書なり。神田區美土代町富田文陽堂發行

△化粧のをしへ　東京化粧研究會編

眞の化粧は衞生的の修容ならざるべからずとの見解の下に、頭のさきより足の爪先までの修飾法を詳細に述べられたり、實驗せざれば其の化粧法としての價値は一々批評し難けれど取り敢えず斯かる書の出でたる事を、世のお化粧に憂き目をやつさるゝ我が姉妹方にお知らせ申すになん、定價金六拾錢。京橋區木挽町三丁目同會發行

△牛と驢馬東海道旅行　田井新一 田口勝 著

時は明治四十一年五月、不景氣の風隅から隅迄吹き渡る頃、何か呑氣な仕事はあるまいかと、國民新聞社の幹部が首を捻つた結果、茲に牛と驢馬の東海道旅行を始める事になり、附添記者の名誉を擔つた男二人、一人は牛を曳いて京都三條より、今一人は驢馬を曳いて東京日本橋より、膝栗毛に取りかゝりし事は當時の國民新聞を讀みし人は知らるべし。本書は即ち當時の附添記者たりし著者の紀行文なり。呑氣なる所が讀みものなり。定價金參拾五錢。京橋區日吉町民友社發行



和歌

三宅花圃女史選

（天）　東京　小池みさ子

病む母を慰めんとて只ひとり
　里の川邊に螢とるなり

評、三の句只一人といふがいとあはれなり。

（天）萩　須磨　有村紫芳子

露しけき萩の細道行くからに
　おり〳〵かゝる村しくれかな

評、秋の氣しきみゆ。

（地）初紅葉　靜岡　河合艶子

色淺きひとしほ染の初紅葉
　おりいたしたる賤はたの山

評、いつもながらたくみによませ給へり。

（地）萩盛　備中　天野その子

きのふけふ花のにしきをしとねにて
　うき世はなれし萩の園守

評、うらやましき園守の君かな。

（地）初秋露　岩代　遠藤ひさ子

夕月夜さすかに秋のおもかけを
　むすひて見する萩のした露

評、耳なれたれどまたすてがたくも覺えて。

（人）麻かりにゆきて　近江　中川はま子

まつはりて咲くひる顔のゆかしさに
　麻一もとを刈りのこしけり

評、よみ人もゆかしうこそ。

（人）霜　岩代　遠藤郎子

ひきすてし大根のくきに霜みえて
　朝戸出さむし畠のなかみち

評、これもよくある句なれどとにかくとゝのひたれば。

（人）月前笛　尾張　松原千代子

曇りなき月にかよへる笛の音は
　すめるこゝろをふきや入れけん

評、すみのぼる笛の音いか斗りなりけむ

（人）紅葉　岩代　遠藤愛子

うなゐ子よこゝろしてくめはねつるへ

さはらはもみち散りもこそすれ

評、おもしろし。

（人）秋祭　京都　三浦しげ子

神祭る旗もなびきて千町田の
穂波ゆたかに風わたるなり

評、豊年のさまいとめでたし。

佳調

白菊　牛込　平塚白百合

白菊の露にうつれる星見えて蟲なきよわる秋のくれかな

菊　神田　西村直子

菊の露ちとせをかけてむすふらむはなのさかりも長月にして

月前鶉　尾張　櫻井喜美子

招きけむ尾花が袖もうらがれて月かげさむくうづらなくなり

○　浪花　桂枝

つま琴をおはしまちかくとり出でゝ月まつほどの手すさみにせん

折りにふれて　美濃　伊島小枝子

人にかれ世にかゐる身のかなしくも伏眼にすぎし君がかどかな

月清き夜そゞろあるきしてよめる　廣島　松山房子

思はずもつきに浮れて来りけりゆふかほしろきいそのこてらに

夕月夜　神奈川　古川登久子

馬率きて浅瀬を渡る夕月夜瀬の音高く千草みだるゝ

秋季雑題　大阪　沖ふく子

時雨ふる音にましりて桐の葉のおつるもさびし秋の夕くれ

残暑　大阪　楓江

秋たつといふは名のみか晝のまもならす扇のひまなかりけり

田家の秋　岡山　ふく子

いと車こゝろぼそくもひくやたれ白萩さける賤がふせやに

我れ誤てり　松江　大澤松江

浅茅原つばら〳〵の葛の葉に思ひみだるゝ袖のしら露

亡き母の墓にて　群馬　武藤あや

亡き母の御墓淋しく師の君の御をしへおもふ秋のゆふぐれ

轉地して　上總　小田けい子

病める身の一人淋しき旅の空母の玉章くりかへし見る

女子同窓會を祝して　紀伊　生馬夕子

師の君のおほしたてたる色見えていつれおとらぬ撫子のはな

折にふれて　紀伊　生馬あさゑ

父の教を兄にまかして弟は母の教をあふぐ眞心のかせ

夕暮れ　和歌山　川端八重

歸りくる片帆おぼろに暮れゆきて夕月ひくゝ松にかゝれり

○　姫路　森鐵子

しと〳〵と秋の夜雨に父まさず病める母見て涙かくしぬ

蟲の音　大阪　出雲加代

世をかこつみにしあらねど秋くれば亡き友おもふ蟲のこゑ〳〵

月　尾張　井口豐子

あさましき心のくもゝてる月の前にはおほふよしなかりけり

朝顔　韓國　増田正子

あさ毎におく露すゞし籬垣に含みぢかき朝かほの花

船　京都　齋藤つれ子

かへるへき御船は見えす秋の日のいつしか波にしつまむとして

初秋露　越後　古澤ふさ子

とふ人の跡なき庭も秋来れば玉とみだれて露ぞおきたる

萩　越後　松永しげ子

月清し虫の音涼し若うどか歌がたりすれ萩のいほりに

竹間夏月　周防　和久井常子

並み立つる高嶺の松はおぼろにて竹の間に出る月の涼けさ

旅より帰りたる折に　岩代　遠藤露子

かへり来てまつかなしきは母よとてすかるわか子の笑かほなりけり

松虫　美濃　廣會美智子

ときはなる名をおひながら松虫の霜にかれゆく聲のいたはし

○　備前　松本もと子

人は栄に鳥はねぐらにかへるときゆくへも知らず流るゝ水よ

折にふれて　姫路　師赤子

窓によりて青き柿の實数へ居れば二羽の小雀のぞき見て飛ぶ

平和の海邊　石見　大塚朝子

あさり舟みものおもげに歸りきぬ姿はなぎさに小手をかざして

○　下總　月沖さゆり子

渡し場の灯影さとゆれほのけぶる雨の夜川に千鳥鳴くなり

月前虫　埼玉　美登利

ねざめする枕にきゝぬ小夜ふけて人まつ虫の月になくこゑ

立秋　佐賀　江口静子

あらひほす麻の汗きぬ吹きかへし吹きくる風に秋は来にけり

菊　攝津　宇野るい

眞君の袂のみ袖にそとふれて匂ひこぼるゝ白菊の花

觀金剛山　神戸　矢島松枝

峯の松に昔如何にとことゝへば答へぬ風の枝を吹くなり

虫實　河内　竹内敏子

乳ほしとなく泪すかして虫實にいづるたんなの哀れなりけり

萩　河内　竹内敏子

亡き姉のはだ着の孫の小もやうに似たる野路の白萩の花

擣衣　河内　竹内久子

子を思ふ秋の夜寒を身にしめてたがたらちねか衣うつらん

曉天鶏　大阪　西田きみ子

朝寝坊とくときおきよさし鶏の曉つくる鳥か音そする

夕月　仙臺　川野喜久榮

そゞろ行川のほとりの夕間疏水に涼しき宵月のかげ

いでゆの里にて　大阪　月野かほる

水清く山美しき磯崎より夏とも知らですごしける哉

○　須磨　有村とみ子

岩清水きよき流をせきとめて水車して遊ぶ男の子ら

○　須磨　有村繁子

野ざく咲くまきはの原にうなゐ子か吹く草ふえにうしは集ひぬ

八月初旬塔の澤福住樓にて　相模　山本たけ子

川風のいとさむきまで通ひ来て出湯のやどは夏としもなし

八月初旬塔の澤に湯あみして　相模　山田民子

暑さをも洗ひ流して塔の澤出湯のやどは夏なかりけり

○　美濃　花橋はる子

蟲かごに鈴蟲入れて歌そへて古郷の姉より送り來しける

山家秋　神戸　植田初子

遠近になるこの鈴の音はして門田の稻葉夕日てりそふ

水草　姫路　地村千代子

いつしかと行かふ船の道たえぬ古江の水草のしげり〳〵て

○　栃木　今中ますゑ

汗ふきて人はかたらず夏の旅十里の並木たゞ蟬の聲

○　新潟　平井ミス

降る雨に訪ふ人もなき山守の庭の小池に蛙なくなり

夏月　京都　松元のぶ子

あめすぎし庭のたまざゝつゆふかみやどれる月のかげのすゞしさ

夜梁　備中　河合ふさ子

病む母の藥のしろに代へんとてはげむ手わざに秋の夜更けぬ

折にふれて　周防　國富清惠

湯乳してねむれる吾子のおもはみてひとりほゝえむ親心かな

山茶花　駿河　天野ふじ子

山茶花は色もかはらで咲そめぬ植つる妹は今あらずして

○　姫路　尾田淡美子

物干しに下女ども寄り合ひて笑聲高し秋の夜の月

○　大阪　三木峰子

葉櫻に春の盛の跡見せて夕時雨せるみ芳野の秋

田家の秋　阿波　多田すゑ子

秋ごとにみのるたり穗にしつか家も黄金かうちにうづもるゝかな

夕立　下野　吉村徽子

名殘なう夕立はれて廊下駄に蝸牛はふ夏のゆふくれ

○　姫路　尾田三三子

御嶽越す行者のむれの今過ぎて紅葉散るなり木曾の村宿

都へ行き給ふ君を送りて　信濃　松尾節子

振り給ふま白き絹のちさく見えてなつかしかけは森にかくれぬ

濱邊にて　赤坂　成富矢須子

さながらに油給の人となりにけり夕映うつるたそがれのはま

秋夕　武藏　臼倉雄峯

ほろ〳〵と庭の紅葉ちり初めて雨にくれ行く夕さびしも

樵客歸月　岐阜　水谷しげ

歸るゝともなにかいとはん山路の月と歸るはならひなりけり

初秋風　岩代　みち子

身にしむはさてこそ秋の風ならめさひしく成ぬ夕くれの空

風知らず　下野　中田あき子

日和よき秋の一日を山寺の萩咲く庭に尼とかたりぬ

秋の夜　埼玉　近藤ふぢ子

ふる鄕の山やいづことながむれば一聲高う雁渡りゆく

旅　青森　橋本しづ子

ひねもすの旅のつかれを小萩咲く家の乙女は慰めてけり

待月　本鄕　西岡古代子

山いづる月をまつまをちゝはゝのおとき晰のおもしろきかな

もみぢ　磐城　猪又よし子

ひとしきりしくれて晴れしむらさめにふもとの里はもみちしてけり

秋の日故鄕おもひて　神田　矢島とみ子

我も姉も待ちておはさん萩の花咲く頃行くとありし文みて

萩　大阪　前川ざほ

草履穿く露冷たくなりにけり今をさかりの庭の白萩

ゆめ　静岡　伊藤さかえ

故里の友に逢ひたるよろこびもさめてつめたきあかつきのゆめ

初秋　遠江　石野豊子

朝顔の日毎に小さくなりゆきて花のまがきのうつろいにけり

霧中雁　愛知　花雪

立ちこむる霧に姿はみえねどもたゞかりかれの聲ぞきこゆる

秋風　愛知　榊原愛子

何となく哀れ身にしむ秋かぜの萩の上葉に音信てより

折にふれて　尾張　櫻井喜美子

泣くちごにちゝふくませて夜もすがらとほき旅路の夫をぞ思ふ

水風晩涼　金澤　安原外子

すみた川小船涼しき夕風はまつ秋ちかきしるしなるらん

深夜月　山口　末田竹子

なかき夜のねられぬまゝに起きいてゝ浮世の外の月を見しかな

露　武藏　吉田やす子

露ふかき草ふみ分けて二騎三騎落ちゆく果ての夜はしらみけり

○　陸中　内藤せき子

聞きなれし松のしらべも音絶えて夕べ靜かに小雨そぼるゝ

山里に教員を奉職して移りし當時　京橋　小林つれ

都戀ひ友こひあかす假の廬に結ひかれたる夜半の夢かな

初霜　徳島　しか子

昨日まで露をむすびし八千草もけふおき初むる霜にかれ行く

夕顔の咲けるを見て亡き人を思ふ

夕顔の露笑顔にほころびぬ植にし人は世にあられども　紀伊　尾原かれ子

萩　筑前　内野ひさな

露ながら手折りて行かむ萩の花よしすゞむしはなきてをしむも

月前花　紀伊　尾原かれ子

さやかなる月の光に我庭の花の色香はいやましにけり

殘暑　京都　小手まり

蟲の音は秋をつぐれどなか〳〵に殘る暑さのはげしかりけり

紅葉　芝　磯部すゞ子

澄み渡る月の光に色ましぬ時雨にぬれし庭のもみぢば

をりにふれて　飛驒　川上志春子

秋草のちゞのなけきもかれやらんよな〳〵ほそき蟲のねを聞く

秋果　神奈川　小川ノリ子

ほゝえみてこぼるゝ見ればいかくりのとげ〳〵しきもにくからぬかな

水仙　紀伊　玉楓

こゝろこめて植ししるしのあらはれてけふこの庭にかをる水仙

秋望　千葉　伊藤とし子

夕日さす小田のあぜ路子を負ひて落穗を拾ふ人やたが母

秋夜讀書　千葉　松崎こう子

十六夜の日記ひもときてひとしほのあはれを添ふる秋の夜半かな

病床立秋　相模　菊池峰子

我が病なかばも癒えぬ海の宿に秋風立ちて物思はする

○　山口　岡富清嘉

宵すだれかゝぐるまでのやれまより見ゆるもすゞし夏の夜の月

月　麻布　臘月女史

すゞみつゝてる月見ればくもりなく心のそこもすみ渡るなり

虹　名古屋　土屋たま枝

羽衣をわれも身につけはる〳〵と渡らまほしき虹のかけはし

○　上野　小枝子

三年あはで今日したづぬる君が門に柳しげりて稚子のなく

朝顔　前橋　宮内りき子

うれしさよふと眼覺めたる枕邊に鉢の朝顔花さきにけり

朝顔　美作　松尾まき

さきいでゝ露のひぬまのあさがほのはかなき戀もわれはするなり

初秋夕　佐賀　野田由綠

初あらし木の間にそよぎ何となく秋の氣せまる夕まぐれ哉

紙　大阪　門脇久子

墨すりて心のたけをかくかみもまなびの道の友にこそあれ

折にふれ　越後　小坂まつ

繕ひものを片へによせて噫母上とくりかへしよむ姉のおとつれ

亡父の年忌に旅にある身はひとしほかなしう覺えて　周防　小越龜代子

大君にくだけてはまたよせかへすあらいそ波のすさまじき哉

歸省　千葉　榎本房子

十年振母の御前にかしこまり母ものいはずわれものいはず

秋夕暮　高崎　池野たま子

放ちやりし蟋蟀なほも去りあへでなき出にけり秋の夕ぐれ

紅葉　信濃　白菊

碓井山しげる楓のあひまよりもるゝも嬉しまつ宵のつき

暮秋　三河　山内經子

あかず見し千草の花もうつろひていつしか秋もくれにけるかな

○　大阪　秋圃露

昨日よりそぼふる雨に蟋蟀のなく音しめりてよは更にけり

霧　山口　末田眞節子

杣人の通ふ谷間のかけ橋をあやうけもなく霧たちわたる

月前興　京都　北尾春子

鹿のねも砧の音もきこゆなり月おもしろき歌のまとゐに

海上の月　函館　野田なる子

久かたの空のものとは見えぬかな波間に住める秋の夜の月

秋月　神戸　輝山たに

夜もすから幸なき身をはつく〴〵とおもひにあかす月かげのまど

事にあたりて　神戸　山谷るゝ

今更になになかなしと思ふらん母のおん身にかはるいのちを

秋の夕ぐれ　前橋　小松露子

何となう空ふく風も身にしみてたもと露けき秋の夕ぐれ

名月　神戸　秋月きよ

うき身にはうき事のみそおもはれて今宵の月もくもりがちなる

失題　兵庫　野田とき子

昔おもふ須磨の浦和の松風にたぐひてきこゆ笛竹の聲

秋の歌の中に　靜田　紀藤榮子

秋の歌萩の雫に筆染めて都の君に文まゐらする

蟲　豊前　佐藤ひで

露ふかき草葉にすだく蟲の音はふけゆく秋をかこつなるらむ

夕立　長門　三隅光子

雨傘は日傘になりぬ一しきり降りにし暫時の夕立のあと

妹の病めるを看護しつ

大阪 塗谷ちかゑ

夜は更けぬ妹をみとりの枕邊にさやかにてらすいざよひの月

初秋 横濱 哲子

物かげに棄てし扇の破れ間より蟲なき出づる秋は來にけり

○ 栃木 岡部ゆう子

網は青田の畦くろ杜あたりゆふかせかろく袖翻るなり

折にふれて 能登 栗倉一子

夕化粧終へてふりむくすがた見に葉櫻そよぐ影さやかなり

母 京都 美智子

すくよかと妹は代りてしろせともわかれて三とせ老ひます母は

秋風 山城 古川よれ子

御祓せし名殘なるらん大幣の瀬々によどみて秋風ぞ吹く

初紅葉 麹町 羽田豐子

嬉しさは乳母がみやけの栗ならでかごに折しく初紅葉かな

夏の夕べ 備中 落合惠美

夕されは小庭の草葉そよ〳〵と湯上り涼し風鈴の音

山家の月 神戸 まさ子

葛かづら柱に棲む山すみの鳴きく小窓月によろしき

○ 岐阜 木村敏子

かたはらに衣ぬひ居れば幼子の蚊帳なみよる宵風かな

○ 麻布 棣子

女旅の小春日うけて心なくあそぶかたへのひな菊の花

萩 下野 篠原ます

萩か花なみだと共にこぼれけり母のみたまにたむけしつれは

訪ふ人も絶えたる長病みの蟲の聲もいとゞ心細くて

牛込 武津子

わくらはにとふ人もがなやめる身のかなしさ蟲のこゑのあけくれ

○ 韓國 有岡トク子

山の端を出でし月影草の上に黄金まきけむ光まばゆき

○ 韓國 有岡千代子

池の面さやけくやどす月かげに鯉もうかれてさゞなみぞたつ

山家 小樽 桑原不染

日もくれぬ人も歸りぬ山里は峯のあらしの音ばかりして

○ 讃岐 香川さつき

なつかしき君と語りし日を思ふ夜ごろとなりぬ月明して

雨 名古屋 松久秋

ふる雨のほどは知られどわが宿のくさはかくれて川となりぬる

一人旅 香川 森君江

夕日さす濱の眞砂に歌書きて友なき旅の憂さを晴さむ

○ 名古屋 松久秋

月かげに雲の行來のあつきびも秋はきつらん風ぞ涼しき

時雨 大阪 紅葉女

風の音もきのふにかはる山の端のもみぢさそひて時雨ふるなり

朝顔 清國 安藤操子

今日もまた友や訪はんと朝顔の花を木陰に移してぞ待つ

朝顔花 清國 小金井 麻枝子

白妙の妹が衣に摺らまほしまがきにかゝる朝顔の花

○ 香川 藤村ゆずる

昔はゆめか現か知らず小闇して萩散る夕君に別れて

○　熊本　山崎くに子
月の夜や人足いれぬ叢に妻戀ふ蟲の聲しきりなり

○　熊本　白菅蘿子
萬枯れし背戸の扉に秋の日の影もうすれて時雨するかな

初秋　越後　阿部秀子
萩の花今ぞさかりになりにけり心して吹けや秋のはつ風

河上月　土佐　弘田潔衞
水の上に影も流れてすみた川すみわたる夏の夜の月

きぬた　香川　森君江
かくはかりきけはかなしきものぞとも知らてや賤か衣うつらむ

露　岐阜　野村靜香子
夕立の雨にも切れぬさゝかにの糸にうつくし露の白玉

○　岩代　木下波留子
咲きにほふ桔梗の花に雨ふりてつゆも色ある野路の夕ぐれ

名月の夜漁夫を想ひて　神田　山川ぶん子
漕わけていさな追ふ夜の漁夫はくる〳〵月のかげやめつらん

失題　京都　山口嘉子
遠きぬた近きは庭のすだく音にことさら秋も深草の里

折にふれて　神奈川　岡部いと子
草の葉の露にやとりて秋深く昔をしのふ夜半の月かな

○　下總　川奈部みい子
朝月夜草に露置く下總の利根の河原に初雁をきく

月前砧　神戸　古川下枝
鳴く蟲の音も絶えたえに砧うつおとのみ高し有明の月

時雨　越後　石井しな
柴おひし馬繋けど主は見えず酒やのかどに時雨ふるなり

鈴蟲　尾張　喜美子
亡き友のみ墓詣でのかへるさにきくも淋しき鈴蟲のこゑ

海邊秋風　尾張　喜美子
わだつみのなみに夕日のかげ落ちて淸淋しくも秋かぜぞ吹く

花の頃友の失せにしを　越後　長澤孝子
春のかり花にそむきて去りぬれどまたこしものをなつかしや君

失題　三河　光子
あはれ知る人に見せばや七草の數にもれたる水引の花

海邊に遊びて　遠江　仲子
波の花秋ににほふ岩が根にすゞみし居れば夏としもなし

稻妻　牛込　高木きん子
おきわたす庭の草葉の露の上をなり〳〵照らす稻妻のかげ

○　京橋　高橋くに子
雨晴れて葉風涼しき夕まぐれ森のしげみにひぐらしの鳴く

秋の野　東京　中根貞子
いささらはいざといひつゝ秋の野に心引かるゝ花のいろ〳〵

○　越後　塚田ゆき子
ほがらかに蓮の花さく水櫃や沈香焚きおはすうす化粧ひびと

亡き友　岩代　古和田秋子
亡き友のみ墓淋しく草むしてま靑蟲鳴く花筒のあたり

短文

【甲賞】

微恙日記

姫路　鈴木ふじ子

ふと眼が覺めた、机の上にはランプがうすく燈つてゐる、蟋蟀がすぐ緣の邊りで心細き聲を出して鳴く、私は又身體がゾーッとして深く蒲團を被つた、座敷の方からは時時父上の御同僚の高笑ひがする、臺所ではコト〳〵と母上が立働いてゐられる氣はひ、「母ちやん」と妹が眠さうな聲でよぶと、「アイヨ」と應への聲が陰に籠つて聞える、眠入らずにでも頭を入れてゐらしやつたんだらう、つぶつた目前に妙の圓い物が出來て、ぐる〳〵と廻つて段々大きくなる、緣の色に變はる、と私は又ウト〳〵とした、何かの音に驚いて目を覺すと、母上が傍に坐つてゐられると言つて額に一寸手を當てられたが、冷つこい手をしてゐらしやる、熱い内にお喫りと言つて葛湯を下された、私は坐り直つて亂れ毛を耳にかき上げ、フッ〳〵と吹き乍ら之を戴いた。

【甲賞】

里歸り

長崎　八尾富美

嫁いでからもう一年中、今日は始めての里歸りである、丁度秋晴の好日和で、遠くの銀杏樹の上には一ヘケなでたやうな白い雲が靜かに止まつて動かない、黄ばんだ稻田を飛び廻る蜻蛉の羽が日光に映つてきら〳〵してゐる、昔のまゝの土橋を渡つて村中へ入ると、何だか胸が騷ぐ、抱いた一雄を見てはきまりわるくもあれば誇りたくもある、お母さん只今と呼べば、奥から早速出て來られたが子供を見ると物をも言はずに奪ひ取つて、父君の病室指して莞爾々々しながら駈けて行かれる。

【乙賞】

雨の日

尾張　喜美子

昨夜からふり出した雨は今日になつてもまだやます、机の前にすわつてみたが何もする氣が出ない、其儘ボンヤリと昨日從兄の道夫さんからきいたハムレットの話しを思ひ出す、とオフエリヤが花を持つて唱ふ姿がボーッと頭にうかぶ、何時かこれを天王座で演じた時　道夫さんに誘はれたけれど、お芝居なんかつまらないわと云つて行かなかつたが、後で好かつたときいてどんなに殘念に思つたか知れない、あの時行けば好かつたのに等と考へてると光やが繪葉書を持つて來た、文子樣だと思つたらもうなつかしくて堪らない、例の言文一致で「お天氣が好くなつたら伺ひます、御馳走をどつさりね……」と書てある、快濶な文子樣のとだから種々と面白い話しもあるだらう。

乙賞

大掃除日記

筑前　高松ひで代

九月十日

大掃除だからといつもよりは早く母樣と一緒に起きる、空の模樣が少し變だけれど、朝の間にしてしまへばと父樣は魚つりの時お召しなさる絆の筒袖、母樣と私は寢卷のまゝで大働き、疊數といふてもほんの二十數枚掃除の時ばかりは狹いにかぎると疊をたゝきながら父樣が仰有る、床の下をゴツと掃き出して疊を敷きつめる、そして雜巾をかけて晝前にすつかり終てしまふ、朝の間のお天氣はがらりと變つて空は青々としたお日和となつた、母樣のほゝかむりの白手拭が折々すゞ風が吹く度にうごく、身體を潔めて居間に上つてくると扨て心地のよいこと、ひかりかゞやいて居る板の間に縫殘をとり出すと、針の運びまでがどし〳〵はかどるやうに思はるゝ。

乙賞

旅行中の兄樣に

京橋　中根貞子

兄樣、繪葉書を有難う御座いました、大層よく寫せましたね、殊に岸打つ波の工合はさも物凄い音がしてゐるやうで、丁度海岸に立つて居るやうな心地がします、彼方に見える松原の一軒家は兄樣の御住居とか、風雅宜しう御座い升ね、兄樣、私は此頃お隣の保さんや靜子さんと毎夕合奏致し升が兄樣の缺けて居るのを大變に淋しく思ひ升よ、合奏するのは何時も六時過ですが、兄樣は其時分に何をなすつてゐらつしやるの、御用のすみ次第どうか成るべく早く御歸り下さい、御待ち申して居り升。

丙賞

親の情

[illegible]　幸子

「あゝ暑い晩だ」とお父樣がおつしやる「貴方も寢られませんか」とお母樣の聲がする、とチンと一時を打つて四邊は、寂寞折々風がコトン〳〵と緣側の月に障る「花は今日大層機嫌が惡るいではないか」「何有あなたヴアイオリンを買つて吳れないつて……ほんとに困るんですよ」「さうか友達が皆持つてるんだから無理はないさ、おれも今少し俸給でもよいと不自由はさせんけれどもな、……可哀想に……、明日〇〇さんから借りて來て買ふてやる事にせうよ」私は是を聞いて嬉しくなりました、同時に親の有難さをしみ〳〵感じてヴアイオリンも何もいらなくなりました。

丙賞

月明の夜

臼杵　加納登代子

月は餘りに過去を多く語りすぎる。病める弱き子の私に

向つて。お月様いくつの昔の秋、栗よお團子よと騒いだ其かみその過去の影が、はつきりと映つて心をみだす。懐しい慕はしい其時分の事は言はずもあれ、つひ五年前迄は、皆少くとも其れまでは恐みの目を以て眺めはしなかつた。蟲がなく。彼處にも此處にも。樂しき秋の月よき夜を讃美するやうに。そして私のよわき心をあざける様に。

丙賞

月の一夜

大阪　すゝき

縁側には月見團子、花いけには例の萩すゝき女郎花など其外いろ〳〵お月様の召上るものが供へられました、一家五人が座敷に陣どりては手料理の洋食二三品に舌たかこんで色々月に就ての話、誰かゞお月様つてどんなものだらうといひ出して、それからそれへと言葉に花が咲いて居ると、丁度向ふの庫の屋根のいらかから月の半身がヌツトあらはれた、アツ月が出ましたと一齊にさけぶ、あたりはパツとあかるくなつた、月はつゆけき玉の様である、人は今夜此月をながめてめい〳〵にどんな感想を浮べて居るであらう、喜怒哀樂さま〴〵の事を月を見るにつけ思ひ出さずには居られないであらう。

丙賞

夕餉

京都　ゆかり女

狭い乍らも野菜物なら家の小畑に色々ある、何がよからうと彼是考へたが、遂々馬鈴薯と定めた、後で足を洗ふのを樂しみに跣足の儘下りて、澤山附いて居さうなのを二三本引拔く、ごぶ〳〵と地が持ち上つて肉附のよいのがころ〳〵と轉がる、「母ちやんまだ〳〵あるよ」と云ひながら二郎が一生懸命に掘つて居る、今朝釣に行かれた良人は未だかと表へ廻れば、夕方の薄明りに、一二町向ふから、麥桿阿彌陀に被つて煙草喫みながら來られる、左手の漁籠が大分重さうに見える、私は急いで家へ入るすり違ひに二郎坊が飛び出して、

「お父ーさーん」と呼ぶ。

お梅がランプをつけた、裏の据風呂からは盛んに湯氣が上つて居る。

丙賞

都にある妹へ

丸龜　森　ゆう子

朝夕は冷やかになりましたれ、其後御變りもなく御勉強のよし、母子皆んなでよろこんで居ります、けさ兄さんにれだつて鈴蟲を買つて戴いたところ、夕方になつてそれは〳〵よい聲で鳴き出しました、庭の垣根の蟋蟀も却御やさしい聲でないて居りますよ、きのふ喚代さんに無

花果を送りました、去年のより大きいでせう、兄さんと二人で菜園へいつてお美味さうなのをよつて來たのですから其つもりでお上りなさいよ、給は四五日中にお送りします、お母さんが夜冷へしてかぜをひかないやうになさいつて、いつ迄も小さい子供のやうに思つて居なさるのですよ。

山遊び

横濱　長尾哲子

小春日和のいと心地よき朝、親しき友だち打つれて杖をとある小山にひきぬ、さす日の光りに露と美くしき尾花が群は、吹く秋風にたえずそよぎて、さながら我等を招くが如し、梢にさわぐ百舌の聲、千草にすだく蟲の音、いづれ秋の心地せざるはなきに、今日はあはれをよそに一日樂しく遊ばんと、思ひの儘にこゝかしこさまよへば木陰涼やかなる芝草の邊り、何となく床しき香を放つにさてはとかさの柄もてかきわくれば、あなうれし今土もたげたるばかりの蕈かずしれず生いでたるなりき、あまりの嬉に思はずゑみのあらはれて、はせくる友にうち示せば、かなたの君も手に〳〵愛らしき野菊、桔梗、さては露けき萩、女郎花等いと誇り顔に見せ給ふ、何れ劣らぬ手柄話は何時はつべしとも定かならぬまとひに、一陣の風さとふきて、名もしらぬ山鳥の聲つげがほに一聲淋しく鳴きぬ。

父の賜

筑後　石野綾子

私の父は、却々やかましやで、十歳にまだならぬ内からやれ御飯のたべやうがいけないの、お茶椀の上げおろしに音が高かすぎるの、そらすわりやうがいけない、歩みやうはかうだの、おじぎのしやうがどうだの言葉遣がぞんざいだのと仰有るので、年の行かぬ私には非常に苦しくて、他所のお父さんのやうにおやさしかつたならばと羨やましく思ふた事が幾度かあつたが、今となつてはそれが一々身の爲になつてゐる、があゝおそかつた、既に父は此の世にはゐらつしやらない、あゝいさゝかでもお恨み申して居た事の今更にもつたいなくて、思つたばかりぞつとする。

十五夜

千葉　山口秋子

東向きの座敷に机が据ゑられて、まだ穗の出揃はぬ、すすきが二三本、それにお團子だの枝豆だのが飾られた、月を待つ間の徒然に、庭に下り立てば、蟲の音が身に泌みる、昔嵯峨野の奥に仲國の小督を尋ねし時、彈き出で給ひし想夫戀の妙曲に耳をすましたのは、ちようど今宵である、あゝかゝる夜に小督の一曲を聞いたなら如何に氣も心も清々するであらう、月は一段の光を添へて今宵をはれて、靜かに東の空にさしのぼつた、座敷では、「お茶がはいりましたよ」と母様のお聲。

良夜

駿河 齋藤てふ子

淺間神社の前を通り、お風屋の角を折れて、公園に行く道へ出た、澄み渡つた空に、月は、今しも彼方の山端より出で笑まし顔に此平和なる夜を、喜ぶ様に見える、夫は願み給ひつゝ實にいゝ月だと今更の樣に眺め給ふ、閑ふの森はしよんぼりとして黒く、廣々とした田面は、早稻が重さうに穗をたれて、そよふく風にさゞ波を打して居る、横の小川の堤には柳がゆらぎ、流るゝ水は月光をあびてきら〳〵して居る、富士の峯はぼうとして今まかさめたやうに、千本濱の松のすきより燈火が三ッ四ッ突然の大きな聲に驚いて見れば、公園歸りの學生が五六人過ぎた、公園はさぞいゝだらう、なほ歩を進むれば、月光にあり〳〵と、並ぶ影法師のはづかしさよ。

花賣

私は花賣です、朝は三時中には必起きて、三丁許りへだたつた原へ花をとりに行きます、そしてまだ朝露にうるんでをる桔梗や野菊や萩等を町に持つて行つて賣り、少し許りの金を得て、歸ります、家には母がもうちやんと朝飾の用意をしておいてくれますのでかうして母子共に朝食をいたゞきます、之れが私の朝のつとめですが、晝も又同じ事をくりかへして居ります、毎朝、毎日、そして私は實に幸福です。

栗にそへて

神奈川 內藤千代子

昨日乳母のもとより栗澤山送りくれ候、今年は殊に味よろしき由なれば、ひとりにて賞味致さん事の、あまりに惜しく候まゝ、御許樣へも御配分申上候、承れば此頃割烹の御けいこお始め遊ばされ候由、御手料理の御材料とも相成り候はゞ、私のみかは、乳母のみかは、栗の面目これに過ぎずと存候。

秋雨日記

芝 和田すみ子

小雨そぼふる萩が下に、餘念なうれむれるポチの、宙にも待かまほしき風情をしばし、縁にたゞずみて眺めけるに、やがて葉末の露の落つるに驚き目を醒して逃げゆきたる、さまをかしとも、をかしかりき。

女學生

神奈川 古川とく子

彼女はよく戀愛小說を讀む、而も手紙が滿足に書けざる也。

彼女はよく男女同權を主唱す、而も社會の事情は女中程も知らざる也。

彼女はよく割烹學に通ず、而も御飯を焦げつかすこと度度也。

秋の我が庭

京都　美智子

白粉の木は、今に花をつけぬが、秋海棠は、見るから優しうさいて居る、けふ朝顔が、一つ咲いたが、之れが今年の名殘であらう、長い夏中、おさな〳〵我々の目をたのしませたのも、けふきりかと思へば何だかいとしくてせめては今宵までもしぼますにあれと、床の間にかざつてやつた、可愛らしいが馬追が二疋、一疋は片足がとれたまゝ、きのふからじつと、糸萩の上に露をすつてゐるひとしきり風が吹いて、まがきがゆらぐ、こぼれた露の玉は定めし蟲の羽根にかゝたであらう。

都に病みて

神戸　さゆり子

お知らせ申さうかしら、そしたら何んなにお驚きになるだらう、思ひ返して筆を取つても、只それのみが氣づかはれて、つひ筆の進みがよどんで了ふ、何か欲しくはないか、氣分はどうのと、何時ぞやあちらで病んだ折のお情は今でもしみ〴〵身にしみる、なれど〳〵妾は遙々山川を越えて、此の學びやに遊んで居る身、何うして離して置かれよう、たとへかくしても遂には知れるはきまつたこと、喰お知らせせゝればなるまいか。

秋の公園

麹町　なでしこ

秋の夕べは實に靜かである。何處か知らぬが哀はれつぽい聲を振り立てゝかしましいまで鳴いている、木立の中の電燈が青白くかゞやく、晝いうちは毎夕人が押かけて來たのに、今日此頃は足をふみ入れる者もない、鯉であらう、にごつた池の中で淋しく水音を立てゝゐる、後の松林はわけて森として、ぶらんこの音が時々ぎい〳〵と聞える。

秋の便り

山形　阿部英子

自分の部屋へ歸つて見ると、黑く枯れた梨の一葉がひらひらと舞ひ込んで、机の上にふわりと落ちた、あゝ此處にも秋が來たのかと病める身には一しほ淋しい感がした

秋の黄昏

伊賀　伏見貞子

もう芒の穗が出たな、と思つて見てゐると、何處からかヒラ〳〵と力の無い黑い蝶を一羽風に吹かれて芒の中へは入つて了つた、今晩露でも降らうものなら、大方死んで了ふだらう、背後の雜木山に力無き夕日が映つて、そよよと肌に冷たく風が吹く、かうして秋の日は暮れてゆく。

露

上總　川上梅子

十日ばかり前から床の中に淋びしく日を送つて居たが、今日久振で縁側に出た、見馴れし庭は其まゝ乍ら、只萩女郎花のみ我が見ぬうちにやさしうほゝゑんでゐる。＊ ナはなつかしさうに我が前に尾をふつて居る、と冷めたい朝風が吹き渡つて萩が結びし露の玉をなしげもなく振り落して行く、あゝ思へば自分の身も遠からずして彼の露の如く果敢なく成るであらうか。

病中の友に

近江　井口ため子

花さん其後は如何です、少しは快くなつて？、一度お尋ねしようと思つて居るのだけれど、學校の方がいそがしくてつひ失禮して居ります、許して頂戴よ、ほんとうに病氣は氣からといひますから氣をたしかに持つて養生して早くよくなつて頂戴な、貴女はすぐ不治の病とおつしやるけれど、まだ初期ですから、それはどうにでもなりますわ、先にお醫者も大丈夫と育つて居らしやるのだから御心配なさらない樣にね、貴女がなほらないとおつしやつても私がなほさないでおかないから、此頃は朝夕が少しひえますからお氣をおつけなさい、いづれ其うちに伺ひますから待つて居て頂戴、この本は兄が送つてよこしたのですが、讀んで御覽遊ばせ。

十五夜友の許へ

牛込　平塚白百合

同じ岩の戸出づるといひけむ今宵の月、あばら家なれば何かといましめがたき高樓より光もしげからむと存じ、この音しげき淺茅生の露きらめきわたるそのまゝを、歌にまれ、詩にまれ、思ひのまゝを紙にのせてかたむく月を惜しまんと存じ候を、君よいかゞ眺めおはすとか。今宵ばかりは何事も月のごとくまろう御きゝすみたまはりたく、折からそよぐ穂波に打まれさせて、かしこ

古里の友に

韓國　山木瀧子

懐かしき御水莖の跡、飛立つ思ひにて拜見仕候、仰せの如く昨年は御地にて樂しき觀月會を開き候が、當年は韓國の片田舍にて、心よりの友とてはなく、淋しき一夜を送り候、御便りの樣なりせば今年の觀月は昨年よりも一層御興味多かりしならんと羨ましく存じ候、それに引きかへ韓人家屋の溫室にて臥ながら觀月致せし事の口惜しさよ、詳細は後より申上候。

故郷の橋

奈良　大西恭子

アヽ、あの音を立てゝ流れてゐるのは小瀨川だ、ぬつとそばたつてゐる、あの山はたしか去年、叔母樣と茸を七つ取つた蜂巢山、妾は今一年ぶりで故鄕の山川に接したので、奈良を出て十二里の道を、漸く此所の音無橋まで歸りついたのである。

あゝ、去年の九月一日の事であつた、南部に旅を貧ふといふので、君ちやんと屋さんに此の橋まで見送られた、ハンカチーフを振つてゐたのは、たしか此所だ、その屋ちやんは、君さんのしらせによると、今春惡胃でなくなられたとやら、ほんとに氣の毒でならない。

短文

牛込　平塚いと子

スインチヨ〳〵とさえた馬追蟲の音がそこゝにきこえ月はまんまるく、野末のはてに鍬形山がうすゞみ色にそめ出されて、露はキラ〳〵と草の葉に輝いてゐる。

秋の夜道は蟲の音聞ゆ
なくかわらふか露がしる

と尾花そよがせてすきとほるやうないゝこゑ、蟲の音もとたえてしばしは馬の足音ばかりがカツ〳〵と。

夜の故郷

武藏　佐野くに子

淸きながれの多摩川の水は枕にひゞき、庭の松蟲、鈴蟲は、ところえがほに鳴きしきるなり、さらでも、人跡少なきに、更け行くは夜中更なり、折々おどろかされしは柿の實落つる音、文窓を開けば、澄み渡りし月は梢に、やどりしを、やぶる山寺の鐘に、落葉三ツ二ツ。

退屈

武藏　日根壽子

今はもうどこが痛むといふではなし、氣分が惡るといふではないが、二年來重い病氣であつた爲に、身體が非常に衰へて居るので、醫師はまだ數ヶ月起きてはならぬといはれるあゝ毎日退屈でたまらない、どうか早く起きて御用をする程になりたいものだ、あの丈夫にせつせと働いて居る人を見れば羨ましくて仕様がない。

併し今はどれ程退屈でも前途には全快といふ光明がある假令人にはだめだといはれても自分では慥かに直る積りである、神の惠みと人の情によつて人一倍十分に攝養の出來ることを常に感謝して居る、さすれば私はやはり幸福である、人を羨むべきでない、神様は今私に休養を命じて下されたのだから境遇に滿足して十分養生せねばならぬと思ふ。

柿

駿河　天野ふじ子

兄いちやんが柿をとつてゐるから見にゐらつしやい——と妹の注進に、裏へいつてみると、今し弟は天邊へ昇つて頻りと柿をとつてゐる、母は下にゐて熟したのを數へて居られる、その中お祖母さんが、杖を曳き〳〵來られて、目映しさうに仰向きながら、「辰や浮雲ない〳〵降りな」と仰言る、弟は聽こえぬ風してとつてゐたが、その中する〳〵と樹から降りて來た、籠の中には眞赤な柿が一杯ー、裏の栗の樹で百舌鳥が高く鳴く。

露の庭

越後 松永しげ子

夕映の雲は灰色にうすれ行き、蝙蝠はいぶせき家の軒端よりぞ舞ひ出づる、駒下駄穿いて庭におきたる露ふみわくるに、草むらにすだく蟲のこゑ／＼いとやさしう、袖ふき拂ふ風心地よく、八日許りの月は濃緑の庭樹のひまより上りて、高殿をもるゝ琴の音かすかに聞ゆ。

遼河の月

營口 中島貞子

月見にとて遼河に出かけたのは七時頃で、同勢は十四五人、三艘の舟に別れて乘つた、月はもう東の方からまん圓な顔を出しかけて舟を對岸に繫いだ時分には三尺ほど昇つてきら／＼流れに笑顔をうつして居た、左手の河北田庄臺あたりでは電が時々ぴか／＼と深赤に光りた放つ今宵は舊七月十五夜て、支那人の納難送る火が點々として流れて行く、いづくも同じ事である、男の子達は飲み且高聲に詩なぞ吟じて却々にぎやかであるが、女子はただ食べるのみである、折から引き汐に乘じて下つてきた舟の帆に暫く月はかくれたが、丁度薄絹に玉を包んだやうである、彼方にあたつて流星が低く長く尾を引ひて飛んで行く、實に靜かで美しい夜であつた。

秋の暁

姫路 山田つね子

白鷺城の白壁がすつと見えかけた、靄の聲が高まつて來た隣の雞が思ひ出した樣にだしぬけに破天紅を發すると向家の熊さんはいつもの如く濁氣ある鼻歌で馬を引出して來て掃除をする、今まで見えなかつた鎭守の森が墨繪のやうにあらはれた、山寺の鐘が餘韻ながく枯野を渡つて響く、五重の塔があらはれた、天主閣も眞白に見えかけた、東の宮は紅に焦げて斷れ／＼の雲が散つた、モーと一聲、牛飼の子供は草原に牛を追ひ入れる、牛に踏まれて萩の露はら／＼と零れた。

針仕事

近江 塚脇禮子

良人は所用のため昨日京都へと出向かれた、四五日滯在の豫定である。

昨夜は早く寢た所爲か、良人の事でいやな／＼夢を見たから、今夜は蚊がひとりでに、ふさぐ樣になるまで起きて居樣と、縫ひかけの袷を出して來て洋燈の心をかき立てた。

一しきりやかましかつた蛙が、一寸靜まると、深田の畷を通る、汽車の音がゴーとかすかにひゞく下の通りの夜廻りの拍子木がカチ／＼、靜かな夜である、坊の可愛いいびきが、スヤ／＼と、蚊帳を洩れて聞える、起きたら妾も寢ようと思ふが、却々起きさうもない、エーいつそ徹夜して今晩こそは之を縫上げてしまはう。

少女心

下總　小澤蝶子

「はてどなただらう？」と私は解らない程尙見度い、そつと庭に下りる。

靴ぬぎ石にピカ〳〵にみがいたばかりの男の靴が一足チヤンとそろえられてあるが、風のまに〳〵青簾がふわりふわりして誰だか見えない、時々心地よげなアヽヽヽ、と若い男の聲がする、お姉さんは「靜子も昨日から歸へつて居りますから……」と。

靜子は姿の名、春治樣か知ら？、わざ〳〵姿な學校を休ませて呼びよせて歸つてみれば用事もなく、そして靴、男の聲、どうもなかしいと思ふてゐると、突然「靜子や……」と呼ばれる、アヽいよ〳〵あやしい。

秋雨

武藏　富美子

一昨日からの雨に洗濯が出來ぬと下女がこぼしてゐる、貴美チヤンは雛卅樣のひざ枕が工合よいのか未だ目を醒まさぬ、納屋では作男の大あくび、鷄も淋しいのかバサバサッと鳥屋へ上つた、さつと吹きくる冷風に實入らぬ栗がポタリと落る、四邊はひつそり、雨に和して扶桑寺の大鼓がねむさうに聞える、もう日暮である。

國の友達へ

大阪　紀子

「汽車の窓から涙でお別れしましたのは、早二年餘りの昔となりましたが、所謂新世帶なるものは漸う一週間前からです、昨日迄は大阪の宅の方からおつかさんが車夫と女中とをつれて來て居て下さいましたので、面白半分に暮しましたが、扨て歸られた後はまるで火の消えた樣、殊に主人の出勤中は淋しいばかりで、田舍の靜かなのもよしあしと思ひます、然し小さいながら　これからは一家の主婦ですから、なか〳〵大變ですよ、ホヽ何れくはしくは後よりまづは右御知らせまでかしこ」

お風呂で失策

前橋　渡邊松子

酒屋に三里豆腐屋に二里と云ふ樣な田舍では無いけれど十二三丁も行かれば洗湯がない、不自由だから大急ぎて風呂桶を作らせた、風呂桶が出來て來たので早速湯殿に位置を極め、下女に手傳はせて水を汲込んで沸しにかゝつた、三十分程立つと泡立つ程沸いて來たので、良人に入湯を進むると、夫には新らしい桶で氣持がよからうと早速湯殿に行かれた、泡立つ程沸いて居るので、うめ水を大きなばけつに二杯供へて、待つて居て良人が見ゆるとふたを取つて一寸待つて下さい火傷するといけないからと、ばけつ一杯水をうめた、良人は金盥一杯の湯で身を洗ひ、ざぶりと中に這入つて、あゝと聲を立てた、未だあつついのですかと、聞くとあつ　い　とは何か、一寸手を入れて御覽、人を水風呂に入れてと云はれ、手を差入

れて見て吃驚、實に日向水位、鐵砲風呂は水の表面丈けよく沸くと云ふ事を知らなんだので大失策。

遅刻

前橋　佐藤茂子

坂東太郎！　ア丶名を聞いても勇ましさうだ。が、實際川は激流である、此の川の一方が數丈の斷崖で、其の下の狹い、細い道を通つて、私は每朝學校へ行く、道は石だらけで、おまけに、急な坂だから、小石は、步く每に足元から、ホカリ〱と急流に、落ち込む、洋傘を杖にして、ビク〱する足を踏みしめ乍ら往來へ出るまでの恐さは大抵でない。

田舎の御馳走

日本橋　花咲くら子

田舎の伯母を尋れたら、大變な喜びで、「東京よりもうめえ御馳走して魂消驚かしてやるべい」と御馳走を出してくれたのは有難かつたが、見ればおしるこでせうか、大きな御椀に三寸もある餅に、汁が少々、御砂糖が小皿にある。お箸をつけて見ると餅がかたくて〱とても食べられなかつたのには實に閉口した。

寐言

伊勢　山川りやう

今日は常よりも朝寐したと見えて、お日様が、まどから

のぞいてゐらつしやる、お父さんも、お母さんも、私の顏を見て、くす〱と御笑ひなさる、私しが、朝寐したからだらうと氣がとがめる、兄樣も矢つ張り笑つて居らつしやる、と姉樣は内所であなたはほんとに面白い御寐言をお云ひなすつたのねと仰しやる、何んな寐言かと伺ふと、「あゝ早く、一日がきてほしいな」と言つたとか、いやな事、ほんとにそんな事を言つたのかしら。

不忍の夕

京橋　遠藤春子

今し沈みかけた夕陽が、名殘の光を放つと、其邊らの雲が、まるで、燃えるやうに、眞紅になつたが、それも一時、やがて次第に色が褪せて、本郷臺の彼方には、早や夕靄が靜くたなびいてゐる、黑ずんだ東照宮の森には、塒を爭ふ鳥の、聲さわがしく、闇は段々に廣がつて行く、西の空にはまだ金色の雲が浮いて居るが、池畔を通る人の影はもう朦朧としてゐる、池には蓮の花が眞盛りで、風はないが、床しい香が幽に鼻を打つ、夕闇は旣に辨天の木立に迫つて居るが、花のみはまだ明るい、ポチヤリと鯉が跳る、花瓣が二片三片、散つて波紋を起す、上野の山に鐘が鳴る。

秋の夜

香川　三村早子

夜はいたく更け渡り。草木も人も皆寐靜まりぬ。我は獨

き思に沈みて廣くもあらぬ庭を飛石傳ひに逍遙ふほどに、月は青白き光を下界に投げ、草間にすだく松蟲鈴蟲の聲細く、谷川の音や、松吹く風の音、庭の木の葉のかき散る樣、遠き砧の響、さては妻戀ふ牡鹿の聲など、見るもの聞くもの皆哀れに淋しく覺えし。

小春

長野　西條梅子

裏の井戸側で、若い娵が赤い襷に姉樣かぶりしてサクサク音を立てゝお米を磨いで居る。

沈まんとする夕日は赤く娵の横顔をてらす。

隣の婆さんは垣の外に夕空をまぶしさうに眺めながら、「明日も上天氣だ」と一人つぶやいて居る。

渡し場

大阪　服部たみ子

「六さん辰坊は向ふに居らんか一寸序に見て貰ひたいんだがなあ、」三十近くのお神さんが川向をすかして見たが、見えんので、つぶやきながら顔をひつこめた、夜は森として蟲の音が耳に立つ、船頭の六兵衛は應!!と答へたまゝ、棹を片手に押へ、腰掛のまゝコクリコクリと白河夜船、舳に置いてある薄暗い角燈は消えさうになつてゐる。

守子

越後　川口はな子

燒きつく樣な練兵場を、五六人の守子が、例の子守歌をうたふて、ゆる〳〵と步いて來る、やがて松の樹の蔭へ來ると、蓙を敷いて子供を下した、中には未だ生れてから二ヶ月位のも居る、中には三つ四つ位のも居る、赤子を風呂敷しいて臥かせ、日傘をかたげ、三つ四つのを叱りつけて蓙に坐らせ、自分等は水泳ぎをはじめた、しばらく泳いで上つて着物をきてから少し休んで、又背負うて餘所の生墻から花を折つて叱られて、何處へか隱れてしまつた。

裁縫

芝　木村せつ

茶之湯、活花、ヴアイオリン、さては謠曲までも、女學校に入りし翌年より卒業後二年迄、御上の御情にて仕込まれ、何處のお友達をお訪れせし折も、まだ一度とて恥かしき思ひせしことなく、得意の中に日を過せしも、あはれや今は怨みの種となりぬ、妾は嫁して夫の着物を縫め得られぬ程、心苦しく思ひし事はなし、茶之湯、ヴアイオリンを何とて夫の褒め給ふ道理やある、すまぬ事とは知りつゝも幾度か母を怨みぬ、遂に妾はあからさまに夫の許を得て、またもとの生徒に還り、裁き娶となるの一步を踏み出しぬ。

少女の病床

麻布　首藤智惠子

そよ〳〵と吹込む秋風の淑しさを、身に覺ひながら心地よげに、眠れる十歳位の小姫子、如何なる夢を結びしか、病に疲れし手をのべて、何やら小聲に唇を動かしぬ、やがて室の外なる足音に眠を醒して胸の苦痛を訴へぬ、嗚呼可憐なるは乙女子の細き胸中にこそ、如何なる思ひのあるなるや。

日記

越後　板下しげ子

庭の黄砂もあらがれも、打ち溶けなむこの炎熱、寒暖計は九十度を示しぬ、なつかしの友垣打ち集はむ今日なれば、つとめて學びやに行く、まりつき遊びめぐり、或は丸事して、さわぎし運動場を見るにつけ、有りし昔の事共思ひ出でられて、餘念なく語りかはし遊びまはる、誰も彼もおとなびたまひ、夫の君をさへ迎へたまひしもありき。さま〳〵の餘興に笑ひくづれ、益ある談話に心をなぐさめ、且つは友情を温む、……つきぬ名殘を惜しみつゝ、亦來ん年を契りて袂を別つ、角田山に日は落ちゆき、長嚴寺の森には高き蜩のこゑ、樂しかりしよこのまどゐ。

昔の友

越中　沼田靜江

「ヤエ子さん」、不圖聲を掛けられたのは梅子さんである。流行の洋傘を右手に翳して、左手に緞子の信玄袋を提げ胸高に結んだ紫紺の袴は桔梗の衣裳に相應しく、色白な優しい顏に微笑を湛えてスッタと立ち歩まられた容子は何處の姫君かと見紛ふばかり、自分は稚な友達の心で挨拶も出來ず、畏る〳〵默しをして其處を別れた、五六歩來て振り向くと、爽かに袴の裾を捌き行く其後姿が秋の夕陽を浴びてピカ〳〵と光る、都會で磨かれた梅子さんの德の光であらう。

いたづら

姫路　尾田四鶴子

前栽で蟲が啼き出す。柱時計は八時を打つた。時々木の葉の散る音がする、美代さんと俊坊が襖から半分首を出した「いつもの繪本を見せて下さいね」と云ふ、上の棚から繪の入つた歷史讀本を出してやる、二人は莞爾し乍ら私の隣に坐つた、私は机に向つて本を讀み始める、やがて俊坊は「美いちやん、この色の方がいゝよ、これは帶ぢやないか」「イヽエそれは帶ぢやなくつてよ、刀ですよ」等云つてをるから、何心なくふと見ると、マアマア何時の間にか妾の繪の具を出し、唾で解いて大事の本に頻りに色を塗つてをる、巴御前が眼鏡をかけてゐる馬が鬚を生やしてるほんとうに困つて仕舞つた。

親しき友へ

美作　性全みね代

何時やら東京より、求め候朝顏、母上に笑はれしまでの骨折、あだならで、昨今美事の咲ばえ、一人めでんも、

なんとなく花の心も偲ばれて、なか〳〵に口惜しう候、御承知の通り露のひぬまの命に候へば、徒らに御朝寢遊ばすより、あたら川添の露しだいて、お響めの一音も給はりたく、花もろともに待ち居候。

危篤

大阪　谷口まさを

今年は水もたつぷりある、稻の出來榮えもよし、此の調子で風さへなければ豐年だなどゝ思ひつゝ繩を綯つて居ると、ガラ〳〵と、此の界限ではあまり聞かぬ人力車の音、さては大阪へ奉公に往つてる妹が此間脚氣に罹つたから養生かた〴〵近日歸ると云つて來たが、それだナと思つて飛び出して見たら大違ひ、二三日前に隣村へ輿入した佐兵衞さんの娵が里歸り、暫くすると電報……妹が脚氣衝心して危篤との事、サア大變だ、直ぐ草鞋がけで停車場へ馳付けよう。エーイ、此の塲合に鶏なんか構つてられるかい。

たのしき日

本鄕　たこぢ

西向のひぢ掛に、もたれて弟と共に裏庭を眺める、一坪計りの空地があるので、お稻荷樣を祭らうと相談がまとまる、弟が土を盛つて山を造る、私が其中へガラ〳〵から出た小箱入のお狐樣を据える、穴の稻荷のつもり、お母樣が御覽になつて、私も手傳ひませうと寄生を探しにお出でになる、間もなくお母樣の後から植木屋のぢいさんも隨いて來た、黑人が來たので本物が出來さう、山も大きくされ、小さな杉や松で森ができる、兄さんの奉納で正一位稻荷大明神の小旗がひらめく、お父さんもお見えになつて、わしも鳥居でも納めようかれと、下女を荒物屋へやる、是で家中の鎭守樣が出來た、只御神體はどこ迄も私ので變らない。

涼

松江　米川よし子

八日の月は、正面の孤島の一本松をすべり下り、今や最後の光を海上に投げて居る、足元にさえづゝて居た千鳥が何か思ひ出した樣に、メツと起たうとすると、目のさめる樣な音して波のうれりが汀を打つ、物なれた千鳥は體を開いたかと思ふと、潮の華をくゞりぬけ、波峯と波峯との間を眞一文字に飛んで行く、女船頭の、唄の聲ふるはして吹いて來る風は、わが單の袂を動かしながら後ろの松原に箏の音を通はして居る。

湯あみ

長門　永久よしえ

胡瓜の棚に着物を掛けて、壁際に手洗を据えて湯あみをする、十三夜の月は丁度棚の枝からのぞいて居る、自分の影が壁にうつる、ほんとうにみんなに髮の形がいゝかしら、少し前髮を出して顏を廻りながら横目で自分の影を見ると、今更ながら鼻の低いのが口惜しい。

女子大學の講義錄

通信教授の計畫――校風の普及策

女子大學は家政、文學、英文、教育の四大學部と高等女學校、幼稚園とを置き創業以來千二百名の卒業生を出し將來發展の素地いよいよ成りしを以て、更に校風擴張の端緒を開き教育の力を家庭と社會とに向つて試んとするもの即ち今回計畫せる通信教授に於て見るべし。蓋し今日の女子教育たる、卒業生の多くは四圍の事情に束縛されて學問の圍に貴重の歳月を空過するの事情あり、斯くては折角得たる學問は忘れ能力は日に鈍り果ては昔日の無教育なる狀態に舞ひ戻るの恐れあり。或者は卑俗なる小說に讀み耽り或る者は不健全なる思想に囚はれつゝ稍く一生を誤らんとするに至るもの尠からずして學問の効果を空うせんとするの傾向あり。こゝに於てかこれを警醒し堅實にして有益なる科學的智識を提供し婦人の德器を成就せしめんとするにありといふ。

吾人思ふに女子大學の如き規模の雄大、設備の完全、新智識の應用、特種の校風いづれの點より見るも女子の學府としては眞に東洋第一なりこの東洋第一の學府をして首都の一隅に固定せしめず、普ねくこれを全國に普及せしめんには通信教授の方法、即ち講義錄を出すことは最も適當の方法と信ず。さればこの機關をして十二分の發達をなさしめんには、從來有觸れたる講義錄の無趣味を避くると同時に女子大學を一個の生物體と見做して、その內部の生活狀態を廣く世間に知らしむること一つの方法なるべし。即ち單に學科の通信教授たるに止まらずして學校其れ自身の內容を說明して校の空氣を普く世人に感得せしむるの方法なり。夫に就ては寮舍生活の狀況もよし化學室の設備もよし圖書部、幼稚園其外種々の生活機關を詳かにするもよし更に新空氣を呼吸しつゝある櫻楓會の才媛をして盛に其の才筆を發揮せしめ學科の講義と相俟つて、花實兼全の講義錄たらしめんこと希望の至りなり。講義錄は毎月二回にして來る四十二年四月を以て其第一回を發行し二ヶ年間を以て修業とす。其學科及び擔當講師は左の如し。

▲實踐倫理……………成瀬仁藏
▲教育學……………麻生正藏
▲心理學……………福來文學博士
▲應用兒童研究……………高島平三郎
▲家庭化學……………
▲家庭物理……………後藤牧太
▲生物學……………渡瀬理學博士
▲生物學……………大澤醫學博士
▲衛生學……………三宅醫學博士
▲經濟學……………中島文學士
▲法制……………奥田法學博士
▲應用社會學……………浮田法學博士
▲美術……………
▲文學研究……………鹽井文學士
▲農藝……………佐々木農學士
▲家政……………▲料理……………▲裁縫

入會金五拾錢一ヶ年分五圓二ヶ年分九圓



姑の書いた花嫁の日記

さわらび

一　婚禮の夕

つひ此間まで庭の櫻の木の下で黐竿持つて忍び足して、蟬を覗つて居た武雄が、最早嫁を迎へる樣に成つたのだから、本當に夢の樣だ。又其小さい武雄に、泣かされて許り居た妹の菊子が、最早二人の子の母になつて居るのだから、考へて見れば年月の經つのは疾い物である。白駒の隙を過る如しと、漢學の師から私しが敎へられたのは、最早五拾年の昔！。如何かすると日に三度も拘攣ると云ふ虫氣のつよい武雄を、人並より壯健に育てあげて、妻を迎へる迄にする苦心と云つたら、大抵の事ぢやない。到底此子は育つまいと案んじて居られた亡き夫に、今宵の樣を見せてあげたい。

それにしてもあの子はまあ如何したのだらう、男はほんとうに呑氣なものだ、一生に一度の身祝ひ、側ではもう上を下へと騷いで居るのに、隣りへ嫁でも來る樣な、一向平氣な顏をして、今朝出たつきり、いくら何でも花婿樣少しは外見もかまはねばならぬものを、第一に三三九度の式だつて先に行つて見て置なければ其場へ行つてわかるまい、其積りで少し早く來て下稽古致しませうと、媒妁人の橋本さんが御親切に云つて下された時、『何卒』と云ふてた癖に、それにつけても櫻田さんでは今頃はさぞ忙がしい事だらう、母御だの橋本の奥樣だので、娘子をお湯に入れたり、髮を結はせたり、と思ふと此方は冷淡な樣にも感せられて、今にも武雄が歸つて來たら散々いつてやる積りで居ると玄關へ車が着いた、約束違へず橋本さんが式を敎へに來られたかと思ふて、先づドッキリとして、武雄が未だ歸らぬのを如何いひ譯をしようかと思つて居ると、

『アハヽヽヽまあ何卒御通り下さい。』

と云ふのが武雄の聲だつたので、漸く胸を撫で下した。急いで玄關の方へ出ると平常の身輕な風に引かへて羽織袴で重々しく橋本氏を導きながら來た武雄、私を見て摺れちがひに、

『母樣只今。』

と笑ひながら云つたのを見ると、大變奇麗になつてゐる、云はうと思つてゐた事もつひ出後れる、橋本氏が、

『今日は實に御日和がよくつて御目出度事で。』

と挨拶なさる。

『まあ色々と御苦勞樣で御座います、御挨拶は後刻、先づ奥へ御通り遊ばして御休息を。』

と云つて居るうちに、武雄はもう先へ行つて終つた。續いて橋本氏も通られる、臺所の方はもうガタ〳〵と大混雜、橋本氏の御世話で待女郎に頼んだのは西川何とやら云ふ踊りの師匠、髪は小さい片はづしで、ぢみな地色の紋つきに、つゝれの錦の巾せま帶をきりゝとしめた二枚やの字。

『御縁女樣は大分御ゆるり、如何致しても後れがちのもので御座いますよ、おほゝゝ。』

と調子のよい事、もう拾年も前からおちかづきの樣。七歳ばかりの女蝶男蝶は御師匠樣に似て、人づきのよいお子、半紙に包んで渡した貝づくしのらくがんを二人は小さい膝の上へひろげて、

『芳雄さんどの色好き？』

『青いのがいゝ玉ちやんは？』

『この赤のがいゝわ。』

などゝ愛らしい品さだめ、聞けば他から女蝶男蝶をと頼まれると、何時も此二人がお師匠樣に連れられて行くのださうな、ほんに四時と云ふに最うやがて六時になる、門前には寄せ返す人の波、ざわ〳〵と云ふ音が中の間迄も幽かに聞える。

『最早大抵。』

と獨ごといひなから待女郎は玄關の方に行く、もう手落はないだらうかと彼方此方と見廻つて最後に、花嫁を導くべき化粧の間に行つて見ると、さくら炭の火が

はねて、青疊に燒穴が二つまで出來てゐる。一つのかけは未だ赤く光つて居たので、驚いて揉消した、外には群集の近よる樣なけはひがして、遠く馬車の軋る音がする、それかと思ふと年甲斐もなく胸がさわぐ。

それが段々と近づいて、やがて門の敷石にカッポン、コッポンと響く馬の蹄の勇ましい音、自分は急いで化粧の間を出て中の間に入つたが、又氣になるので思はず振返ると、待女郎に手を取られて少しうつむいて化粧の間の方に行く、花嫁の愛らしい後影がちらと見えた。文金の高髷にしほらしい角かくし、内へよこした寫眞にあるハイカラとか云ふ姿よりどの位い〻かしれぬ。中の間を通りぬけ佛壇へ御線香をあげた。此嫁の行列と前後して馳けつけたのは大澤家へ遣つた菊子で配偶の秀さんは相變らずの無口、私しへは、

『御母樣今日は』と云つた限り。苦し相な禮をして御目出度うも何も云はず、早速武雄の居間へ行く、菊子は私しの傍へ坐つて、

『漸く子供を寢かしつけてさあ出樣と云ふ矢さきに如何したのか目を覺して泣きたてられたので遂ひ後れて終つて。』と云ふその子に引出されたのか美くしく結つた髮の左の鬢のなかばが少したるんで居る。可愛相に女は子供のないうちが花。

『おまへ髮でもなでつけたら。』といふと、

『はあ有難う。あの兄樣は？』

『未だ居間に居るでせうよ。』

『ちや一寸逢つて來ますわ。』

と昔しの儘の調子で武雄の居間へ行くかと思ふと、

『あ兄樣、お目出とう御座います。』と云ふ菊子の聲が聞えたので、私しも中の間から出て見ると今橋本氏に連れられて武雄が居間を出て來た處、改まつた黑重ねにさび鼠の袴つけた丈高い立姿、我子ながら見直す樣な立派さに何となく胸がせまつて來て目は涙で一杯になつた。

二　其翌朝

早くから目は覺めたが昨夜の騷ぎで奉公人達も疲勞

して居るだらう、來たばかりの嫁に心遣ひさせるでもないと、辛抱して床の中にゐると、種々の事が考へられる。

何十年と云ふ間樂しい時も苦しい時も自分の思ふままに治めて、兎に角保つて來た此松山家の城を愈〻明け渡さねばならぬ日が來た勿論我が世のふけも知らないで、何時までも家政に關はらうと云ふ未練の心深く遂には嫁に厭はれるやうな世間並の姑の跡を踏うと云ふのではないが、さりとて世馴れぬ花嫁に、何もかも委せて、目のあたり來る不幸を運命と斷念める程、悟りすます事のならぬのも、燒野の雉子、夜の鶴、あながち深い罪でもないだらう、先づ此家の風と云ふのをあらまし嫁に話して聞かせて、その積りで初めからかゝつたら追々は世馴れても來れば自から解るもので、さのみ心配はないかも知れぬ、夫にしても菊子が何時か斯樣な事を云つて居た『御老人方が思ふ樣な物ぢやない、今の若い令孃方が、結婚と云ふ問題に就て常に深く考へて居られる事は、無頓着の樣な表面許り見てゐては、推量も出來ぬ程である、家政學とか、育兒法とか、又は良人待遇法とか種々の事が充分に研究されて居るのだもの、皆それ〴〵に「理想」と云ふ物がある、私しが家を持つたらば如何云ふ風に治めようとか、社會に出たらば斯云ふ風にしようとか、最早ちやんと心の



中に新宅の庭の草花の配置までも組立てゝ居る世の中に、今まで散々自分の理想を現實にして來た昔しの嫁の姑が、足る事を知らないでなほも理想の影を追ふ、淺草にある見世物でさへ先樣は御替りなのに、さりとは思ひ遣りのない、世の姑にその覺悟のない限りは、譬へ彌勒の世が來ても嫁との中の圓滿く治まる筈がない。』と。

それはもう左樣だらう、然し姑の側から云へば又多少理屈はある、よしや家風にあはぬ嫁は去ると云ふ樣な、今川や、女大學風な心を持つてゐない人でも、夏の日は風を運び、冬の夜は肌に添へて養育だ可愛い我が子の上にかゝる事を、嫁に我儘させる爲、默して見過ごされ樣か、其又理想は理想にもよる、暖い慈母の懷に培はれた室咲の花の樣な若い娘が、教科書の上の狹い浮世を廣いものとして、歌人居ながら名所を知るの類、何事も知つた顏して、此風疾やの世に出るのだもの、吹き折られずにすむものか、夫をながく嵐の庭に立つくした老樹の樣な姑が、枝を支へ、花を覆ふてやると云ふのは、こりや當然の事ではなからうか、一度吹き倒されて再び起き上つてから、却つて根も莖も確つかりしたと云ふ例も無いとは云はれぬが、倒れずに濟む事ならば濟せたいが姑たるものゝ老婆心、今の娘は何ぞといふと西洋ではどう、外國ではこうと他國の人のする事を皆よいものと心得て、手本の樣に思つて居る、夫も世の流行で藤原時代に『唐土にては』と云ふ言がはやつた樣な物なのだらう、勿論唐、天竺の敎へでも善い處は取るがよいが、惡い事まで眞似をして得意になつてゐる人の氣が知れぬ、此間米國から歸られた杉浦樣の御話しでは、大富豪の娘子が、他國の貴族の名がほしさに、莫大な持參金で嫁に行くのや、財産を愛して後家樣の處へ入る若聟などは別として、大概眞面目の結婚には財産の釣合といふ事が條件の一つに成つてゐるらしい、相當の家の娘でも、もう一人前になると、身分相應な働きをして、結婚の備をすると云ふ事だが、それでこそ自分の思ふ通りの事も充分行つてゆかれると云ふもの、萬一やり損なつたと

て自分で造つた自分の財産減すのは意氣地がないからで、殖すのは其人の働きである、それこそは我身を碎いた雫から成つた物、傍から何といはずとも、無益に浪費する様な事はないと見て大丈夫、そこで初めて「我理想」「自分の主義」と云ふ事も遠慮なしに行はれる、飜つて我日本の狀態では如何であるか、極少數の者の外は、なほ古しへの習慣を其儘、名目は兎に角、事實に於て選まれて貰はれて、三三九度の盃交して、一夜寢て起る、翌日は最早其家の妻となる、幾年月身をつくして育てあげた己が子も、心を碎いて守つて來た其家も、嫁とは云へど、氣心知れぬ人の子に獻る爲に外ならぬ、のかと心づいた其時



に心から嬉しく思ふ姑が果して幾人あるだらうと夫からそれと思ひ移れば、馬鹿々々しい様な氣も起る、姑と云ふのも嫁の古いのだと思へば總べて天下はまはりもち、菊子も人の嫁ではないか、あの子だつて朝夕に姑だの小姑だのにどの位心を置いて居るか知れぬ、女の子は產まぬ物。ものを仕込んでお金をかけて出來あがれば人に遣る、やつての後も兎や角と批評されると云ふのだから男程映がない。

今思へばくだらぬ衣裳調度などに惜まずかけた費用を省いて、今少し菊子の爲に用意して置けばよかつた。御荷物臺十五個と、十六個の張合、御隣の娘御の其時

よりも一個多いと云はれたとて、どれ程彼の子の名譽だらう、簞笥の中に重ねて納めた小袖の模樣、地色の好みも三年過れば流行後れ、有るものは着ずにも置けず、あたらお金を簞笥の中に寢かして置いて、果は古着屋への御奉公、馬鹿々々しいと云ふ事はまんざら知らなかつたのでもないが……』さつ〳〵といふ衣摺れの音が中の間の方から聞える、嫁が起きたのだらうか、私しも起きて其方へ行つて見ると、案の定嫁が一人で中の間へ入らうとして逡つて居るところであつた、私しを見ると少し面を赤くして其處へ坐り、

『お母樣お早う御座います。』としとやかに朝の禮をする、白い首筋が藤むらさきの鹿の子の襦袢の襟に映えて、少し亂れた島田髷に、里方の定紋うつた平打の銀釵、さした樣は、花簪の昨夜より媚めかしさが添ふて見えた、黑地に黃格子の八丈の着物に、紫繻子の丸帶は、私の大好な昔風、身だしなみの薄化粧さへほどこしてある、何くれとなくいひ聞せて遣された母御の心づくしも推せられて、是も人の愛兒と思へば、いぢめると云ふ樣な事は忘れてもすまいと思つた。

『武雄は未だ寢て居ますか。』と訊くと、

『はい未だ……』とはづかしげな中に隔なさゝうな情がほのみえて、何となく人を樂しくさせる樣な容へであつた、女中も起きた、書生も起きた、雨戶も繰られて、庭男の朝きよめする箒の音も、今朝は何だか新らしい樣に聞える、何處からか鶯が來たと見えて、庭の木の間に枝を傳ふて長閑な調べを繰り返して居る、今年の初音は殊に目出度い、其内武雄も起きて來て、三人で食事する、初子(嫁)の膳に玉(猫)が飛び上つて味噌汁をひつくり返した、橋本樣の奥樣が來られて新夫婦に、伊弉諾、伊弉冊尊の懸物を下さつた。

（次號完結）

母の讒訴

こほろぎ



一

電報を受取つた民子は手早く出京の用意を整へた。當分滯京る豫定で、不在の夫には斷りの手紙と共に電報を机の上に乘せて。

かう匆卒の際には殊更氣を落付て何も忘れ物はなかつたが、汽車に乘ると急に手持無沙汰で、讀かけてゐたツルゲチーフの「其前夜」を持つて來ればよかつたと思つた。

偶然ベルの鳴つてゐる處へ馳附て盲目滅法取乘つたのが、僥倖にも新橋直通であつた。横須賀線は例の通り空いてゐて、二等客車は一人の老紳士と民子との買切同樣、逗子か鎌倉から自分の友達か、夫のクラスの人でも乘つて來れば好いと思つた甲斐もなく、大船へ着くと向側の紳士は辨當と煙草とを呼んで、

「孃さん、あなたのも取りませうか」と振り返つた。取る必要はあるのだが、民子は却々喉へ通りさうもない、殊に此人と二人ぎりで何だか工合も惡いから、

「いゝえよろしうございます」と云ひながら思はず口元に微笑を浮べた。「孃さん」と呼ばれたのが可笑しかつたからで。

人の喰べるのを見てゐるのも嫌だから態と窓の方へ身を背けた。隧道に入らうとする列車は速力が加つ山萩や女郎花の咲た山がさつ〳〵と横に飛ぶ、度々往復して珍らしくもない景色だから民子は別に何とも思はず、心の中には電報の文句を繰返してゐる。「ソボワルイスグコイ」。餘程重態のだらう、危篤なのだらう、うまく間に合つてくれゝばいゝが、實家ではどんなに取込んで、私の來るのを待兼てゐるだらう。門の前には醫者や見舞人の車が所狹く並んで――。あの頑丈

な、兩親より強壯なまめな、母を意氣地なしと罵つてゐる祖母が――、何の病氣だらう。何と云つても齡は齡だから――。

『鐵さん』と前の紳士に又呼ばれてびつくりした。怳惚してゐるのが退屈さうに見えたのだらう、先も退屈してゐるので談話相手に呼かけたのであつた。却々親切相な人で、民子も杜切々々に世間談や名所談をして無聊を凌いでゐるうち、横濱からどや〳〵と込んで來た。

　二時半に新橋へ着くと紳士は赤帽など呼んでくれて却々親切だ。直ぐ車を雇つて右京町迄の道の長い事長い事、絶えず焦れて胸を跳らしてゐるうち、辛と四谷の通りから切れて實家の門が見えるが、客來らしい車もなく森としてゐる樣子なので、何だか一層心配にもなる。

二

『其右側の黑い門』と聲を掛けると、車夫は心得て梶を曲げる。門の閾にがたツと車輪が跳ると、いち早く玄關の式臺に下女が飛び下る、續いて妹の鶴子が矢絣か何かのセルを着て、西洋人の樣な薔薇色の頰に張切る程笑を湛へて馳出して來た。横須賀は水や風が荒いので東京へ來ると誰の顏も大變綺麗に見える。

　女中は車夫から荷物を受取つて奥へ運ぶ、鶴子は突如姉の手を握つて、

『お早かつてねえ』と嬉しげに振動かす。

『お祖母樣お病いつて、どんな？』と此方はにこりともせず訊ねると、無雜作に、

『えゝ過日つからよ、あ、それ持つてきませう』と手提袋を引奪つて馳込んで了ふ。民子は何だか譯が解らないで、兎も角も茶の間へ入ると其奥の座敷に、氷嚢を載せて病人がたつた一人寢てゐる。今更らしくはつとして急いで行くと、頭を擡げたのは父であつた。

『あら父樣！？』と二度びつくりした。

『民子か、よく早く來られたなあ』と父は常から靑い額に八の字を寄せて、羞しさうに目を瞬く。

『えゝお祖母樣お病いつて――、道雄には置手紙をして留守に飛んで參りましたの、父樣どう遊して？』。

『なあにおれは何でもない、お祖母樣が少し病くつてな、何も態々呼ぶ程ではないんだが、平常からあの通りの性質で、止めても諾なさらんから――、然しよく來てくれたお前が來れば母さんも大に助かる』と父は氷嚢を氣にしながら枕に就た。そこへ何處からか弟の一郎が出て來て、

『やあ』と會釋する。



『あ久濶、大くなつたわねえ』。

『大くなつた處か、もう高等學校の生徒だ』と父が寢てゐて笑ふ。

『今日は義兄樣來られないんですか』。

『えゝ此節大變艦の方が忙しいんだつて』。

そこへ鶴子が來て、祖母が待つてゐると促すので、民子は父に大略の病狀を訊て、直ぐ往つた。

三

祖母は緣續きの離れの、緣側を頭に床の間の方へ足を向けて寢てゐる、枕頭には藥の載つた盆と小蓋物とが置かれて、裾の方には陰鬱な母が小さな櫛卷の、それも今日結つたのではないらしい後毛がぼそ〴〵眠さうな目の上に懸つて、機械的に病人の足を擦つてゐる。

祖母は非常な悦びで、

『眞實によく來ておくれだつた、私も今度は不治かと思つてね、過日から呼ばう〳〵と云つたのだけれども知つての通り私の發議は却々通らないし、昨夜はもう終夜苦しんで〳〵、辛と電報を打つて貰つたんだがね、道雄さんはお强壯かえ、さうかい、それぢやお前さんも出難くかつたらうに、でも今夜は泊つておくれかえ、おゝさうかい、それは有難いねえ、あ、お米、お米』と母を呼ぶのであつたが、聞えぬか知らん顏をしてゐる。

『母樣!』と民子が聲を添へたので始めて返事をした。母は此二三年めつきり耳が遠くなつた。元來虛弱い人が、始終おど〳〵氣難しい姑に氣兼して五人——二人は死た——の子迄產んだ母の勞力に民子は絕えず同情して、自分を此上なく愛してくれる祖母と屢々喧嘩をした。其祖母がかうやつて——『今度は不治』といふのは信じられないが——弱つてゐる狀を見ると、種々な感に打たれて多く口數をきく事が能なかつた。

母は枕頭へ來て用を訊くと、

『お民にお茶でも持つて來ておやんなさい』。

『いゝえ母樣澤山よ』と民子は周章て止めた。

『まあいゝわね、お前さんはお客樣だから』。

と祖母は云ふ、母はうろ〳〵してゐる處へ築地の叔母が入つて來た。

『おや入らつしやい、ようお早く』と民子に挨拶して

『おつかさん、忠三がねえ、今日お見舞に出る筈ですが、然いふ御樣子ぢやもう安心だし、實は社の方が少し忙しいんで、誠に勝手ですが今日明日は御無沙汰致しますからつて、宜しく』と病人に云ふ。

『大分長いお電話でしたが何か御用でも出來ましたか』と母が訊く。

『なあに文がやつぱり淋しいもんですから』。
『然でせうつて、もう民も來ましたから今夜は歸つてゆつくりお休みなさいまし』。
『え有難う、ぢや今夜は民ちやんにお願ひ申て、少しお暇を頂きませう』と末は低聲に、民子の方に一寸見て意味有げに笑ふ。
　父の妹で、母より三つ年上なのだが、色白に水々して十歳も若く見える。夫は或會社の支配人で、文子といふ娘が一人あるきり。民子は去年夫の出來る迄といふもの、常に文子の境遇を羨んでゐた。
　叔母は活々した語調で、



『何時でいらつしつて？』。
『十一時——何分でしたか、めちやくちやに乘つて了ひましたの』。
『さう？　嘸びつくりしたでせう。お午飯は汽車の中であがつて？』。
　民子は手巾を口に當てゝ『いゝえ』と笑つた。
『いやですよ、まだなの？』。
『をや〳〵そんなら早く告ばいゝのに』。
　流石の母も目を見張つて、
『それぢやお鮨でも命はうか』。
『いゝえ、もう直晚の御飯になりますわ』。

『だつて――、どうせ皆もお相伴するから』。

と母は出ていつた。

四

祖母は『まあ着物でも着替てゆつくりお休み、嘸疲れたらう』と云ひ〳〵母の讒訴をしたゝか並べ出した『あゝいふぼんやりだから困る、お前さんは好い家へ嫁つて幸福だつた。私が萬一の事でも有らうものなら、後の子供は碌なものにはなれない、第一父親が寛過るからとか、何とか、くど〳〵云はれるのが民子は不快で〳〵、母の爲に辯解したくも思つたが、病人の事だからと只生返事ばかりしてゐた。叔母は『又始つた』といふ樣に苦笑をしてゐる。

其内お鮨が來たといふので、二人は交り合つて往かうといふのを、病人が、いゝから一緒にいけ〳〵といふので、遂に連立つて此室を出た。

茶の間には鶴子と一郎とがテーブルの前へお客樣の樣に坐つて、母は長火鉢の傍で、美しく盛られた握り鮨を小皿に取分てゐた。

『さあ〳〵民さん充分おあがり。およしさん、あなた何卒御自由に』。

『まあ〳〵お子樣方から』と叔母は冗談を云ひながら小皿を各自の前へ配る

母は『鶴ちやん』と呼んで、

『父樣にねえ、お鮨をそこへ差上ませうかつて伺つて御覽』。

鶴子は素直に立つていつたが、戻つて來て、

『お眠つてゐらしつてよ』。

『そいぢやそつとして置く方が』と同音に云つて一同は喰べ出す。

『父樣迄ほんとに困つたわねえ』と民子は心配さうに云ふと、

『なあに昨夜のお伽で弱つたんですよ』と叔母は海苔卷を喰ひ切る母が、

『ですが昨夜は眞實に心配しましたよ』。

『ほんとですよ、平常が强壯だけにびつくりしますわ

ねえ。あなたも今夜は早くお寝みなさいまし、あの分ならもう大丈夫でせう』。

『えゝ』といひながら母は忙しくお茶を呑んで、直ぐ病室へと往つて了つた。

其後で一郎が、

『自家のお祖母さんぐらゐ、やかましい人はたんと無いぜ』とさん／＼攻撃する、鶴子がませつ返す、叔母が笑ふ、民子が眞面目で叱る。とう／＼眠を破られた父は、氷の鉢巻をした儘起きて來た。がお鮨は嫌だと云つてお茶ばかり呑んでゐた。

それから民子は父と叔母に問はれて、自分等夫婦の近狀を語りながら着物を着替へて、夫に手紙を出したいからと、暫く鶴子の勉強室に立籠つた。

五

日の短い時分で、ぢき夕飯になつたが、民子は到底お腹が滿くて食べられないからと、母と代つて病人の枕頭へ坐つた。

下女の運んで來た飯汁を受取つて勸めて見たが、祖母は後にすると云つて、眠たり覺たりうと／＼してゐる。ほんの時候當りで腸胃を傷めたのだが昨夜は酷く苦しんださうで、其疲勞と覺しく今日は終日安靜でゐる。

勝手とは離れてゐるから何の動靜も知れない。態と暗くしたランプの光が鼠色の壁に薄すり流れて、老人の緩い呼吸と置時計の音ばかりが、病室の黃昏を我知り顏に語つてゐる。

民子は堪らぬ寂寥を感じて、横須賀の我家の事を思ふと戀人の樣に夫が慕はれて、先刻弟に借りた雜誌も傍へ置いた儘開く氣にもならない。

突如！　何者にか抱附かれてどきりッとしたのは、鶴子が拔足して來て後から目を隱すのであつた。

『まあ隨分ねえ、お祖母樣がお眠つてゐらつしやるぢや有りませんか』と仰山に睨むと、肩をすぼめて口を押へて剽輕な態をする。

『少し御足でも擦つておあげなさい』といふと首をか

しげて八を寄せて情ない顔をする。是でも十六かと其あどけなさが姉は可愛くて、ぶく〳〵肥つた肩を掴んだり、頬邊をつゝ突いたり、病人に注意しい〳〵戯けてゐると、鶴子は圖に乘つて漸々聲が高くなる。聞えるのか病人は時々細く目を開けて『むゝゝゝ』と力のない聲で笑ふ。

『お鶴樣電話でございます』と下女が呼びに來たので鶴子は起ちさまに姉の背中を一つ打て去つて了つた。

又獨になつてぼんやり目を据ゑてゐると、巽南に設つた肘掛窓の細骨障子が異樣に白い。何だか氣になつて密と明けて見たら未だ雨戸が開てゐるのであつた。

恐ろしく霧の深い夕で、まだ暮れないのか月でも出るのか庭はほの〳〵と、飛石や石燈籠が次第に地を離れて霧の中へ吸込まれる樣に見える。植込の蔭に隣家の燈火が射して、多行松の根の邊では、何の虫だか泌通る樣な聲で鳴出した。横須賀は家込なので、秋の哀を民子は今夜始めて感じた、眤と見てゐると飛石や燈籠は愈〻霧に吸はれるものに違ひなく思はれて妙に怖くなつて來た。で急いで雨戸を閉て舊の座へ戻ると祖母の寢顔が亦怖い、甚く目が落込で、色のない脣の蔭にては綺麗に揃つた義歯が光つて、男の樣に節くれ立つた双の手はだらりと左右へ落し、昔から掛てゐる縮緬の掻卷を帶の邊迄踏脱いで、好い心地さうにすやすや眠つてゐる。

民子は一番秘藏で、去年嫁く時なども身分不相應な立派な支度で嫁つたのは、偏に此祖母の口添に依つたのである。其他には祖母の慈愛に浴した事を民子は一一忘れはしないのに、何故今迄優しい爲向けをしなかつたらうと思ふと、こと〳〵しく呼付られる不滿の念も夫の戀しさも忘られて、たとひ十日でも一月でも、全然治る迄滯在つてゐて、しみ〴〵看病をしようと思つた。

虫の音は、位置が移つて遠くチゝゝゝゝゝゝゝと消入るばかりに鳴くのが耳について〳〵、母は何をしてゐるのだらう、叔母はもう歸つたのか、又鶴子でも來てくれゝばいゝのにと、民子は淚は出ないのであるが、何だか胸が熱くなつて來て、泣きたい樣な氣がした。

（そはり）

懸賞募集 こゝろの日記

趣味ある日記文の懸賞募集＝締切十月二十日

娘の學校に通へる、妻の家を治むる、凡そ婦人として日々の務のなきはあらじ、日記は即ちこの日々の務の記錄なり。されど「朝起る」「顔を洗ふ」「飯を食ふ」「誰れを訪ふ」などいふ事は千萬人に通ずる日常の生活にして何人も同じ事柄なれば、殊更に記するの要あらじ、されど日々の心の働きに至りては各人皆別々の趣きありて**千種萬様**の態あるべし。即ち物に觸れ事に關はりて千變萬化する性情の働きを見るべきなり、この働きを寫したるものを「心の日記」として見れば却々に趣味あるものならん、本誌の希望する所は正にこれなり。

されば▲**樂み多き約婚**の日記、▲**多忙なる妻**の日記、▲**内所で書いた嫁**の日記、▲いたづら子を育つる母の日記、▲喜憂のこもる**初産日記**皆是れ絶好の題目にあらずや、▲交り深き友の日記▲失敗せる料理の日記、▲恐ろしき**災難の日記**、▲思出多き**初戀日記**さては▲**失望落膽**の煩悶日記、▲**無念骨髓**の日記など要するに眞實の心を寫して詐らず、眞の事を寫して飾らず、**有の儘の境遇、有の儘の心持**、自然の様を記して投じたまへ。（投稿者は成るべく自己の寫眞を添へて送らるべし）

賞金

壹等	參拾圓	壹名
貳等	貳拾圓	貳名
參等	拾圓	參名
四等	五圓	五名
五等	貳圓	拾名

▲紙數は長短隨意なれども凡そ十枚位までを程度とす
▲當選したる文は十一月十五日發行定期增刊附錄として掲載す
▲賞金は發表の當日爲換券にて送達の事
▲原稿は「こゝろの日記」と表記して女學世界宛の事

讀者文壇 **投書歡迎**（締切十月十五日）

▲**和歌**（一人一首）

▲**短文**（三百字以內）

▲**小說**（二十枚以內）

▲**小品文**（十枚以內）

◎和歌、短文は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず

◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎**賞品**

▲一等一圓▲二等五拾錢

▲三等參拾錢（圖書切符）

▲小說と小品文は詮考の上相當の謝禮を呈す

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	…金二十錢
四冊（三ヶ月分）	……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	……前金二圓八十錢
內 定刊數	……十二冊
増刊四回	…一、五、九、十一月價格同一

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十三圓	四十五圓
一等	……	十九圓五十錢	三十八圓
二等	五十五錢	十六圓五十錢	三十二圓
三等	四十七錢	十三圓五十錢	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る

◎總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十一年十月一日發行（第八卷第拾參號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

女(後付の一)

諸名家幷に各從軍記者分著

訂正 日露戰史

第二卷既成發行

全部四卷――洋裝四六二倍判
總クロース背皮金文字入製本頗堅牢
紙數各七百二十頁以上
定價一册金壹圓貳拾錢
小包料金拾六錢

●日露戰闘地圖――諸將軍題字――戰況實景寫眞畫挿入

明治三十九年丙午元旦、始て日露戰史初卷を發刊し、爾來卷を重ぬること十有六、星霜を閲すること一年有餘にして、全部完了せり。當時嘖々の評、街衢に滿ち、洛陽の紙價、爲に貴きに至る。然るに今日より之を見る、既に善を盡す、未だ美を盡さゞるの憾あり、是に於てか、訂正改竄、十六册を更めて四卷に分つ。其表裝の偉麗にして堅牢なる、宛も偉丈夫の堅甲冑を擐くが如し。斯の如くにして、國威は六合に耀き、戰史は四海に行はるべし。今や其二卷を發刊す。之を東洋絕無の一大戰史と謂はんも敢て誇言にあらざるべきなり。

●第一卷（再版）

◎第一、日露初期の海戰 ◎第二、三、第一軍初期の活動 ◎第四、第二軍初期の活動

●第二卷

◎第五 大孤山上陸及第四軍初期の活動●第一編大孤山獨立上陸軍○第一章上陸後の活動○第二章岫巖占領戰○第三章岫巖北方の形勢●第二編分水嶺の攻擊 ○第一章分水嶺の位地○第二章分水嶺戰鬪後の狀況 ○第三章第四軍の活動○第四章第四軍司令部の前進○第五章我軍の位置○第六章析木城戰鬪●第三編析木城の戰後○第一章析木城戰後の軍政○第二章遼陽進擊の準備 ◎第六 第二軍初期の活動●第一編旅順前進陣地の戰鬪○第一章南山占領後の經過○第二章フイン山及歪頭山○第三章攻圍軍前進○第四章中央縱隊の行動○第五章右縱隊の行動○第六章左縱隊の行動○第七章于大山附近の戰鬪○第八章右縱隊の前進○第九章大小孤山攻略○第十章敵艦隊の絕望○第十一章王仁の聖旨○第十二章旅順要塞の防禦○第十三章攻城作戰○第十四章右縱隊の準備戰●第二編第一回旅順總攻擊○第一章右縱隊の動作○第二章中央縱隊の戰鬪○第三章左縱隊の動作●第三編部分攻擊○第一章右縱隊方面○第二章中央縱隊方面○第三章爾後の經過●第四編第二回旅順總攻擊○第一章右翼方面○第二章中央方面○第三章左翼方面○第四章砲擊効果○第五章爾後の經過 ◎第七 遼陽の包圍攻擊●第一編總說○第一章露軍の防禦配置○第二章日軍の攻擊準備●第二編黑木軍の戰況○第一章初期の戰鬪○第二章側面攻擊●第三編野津軍の勇戰○第一章鞍山站及婚家爐の戰○第二章野津軍の總攻擊○第三章遼陽城下の戰鬪●第四編奧軍の戰況○第一章奧軍の遼陽準備戰○第二章大島師團の奪戰○第三章大久保師團の激戰○第四章小川師團の戰鬪○第五章遼陽郊外の激戰●第五編結論 ◎第八 沙河の大會戰●第一編總說○第一章露軍の攻勢移轉○第二章一般の戰鬪經過●二編黑木軍の戰況○第一章右翼の防禦戰○第二章左翼の攻勢移轉○第三章大會戰の黑木軍●第三編野津軍の戰況○第一章初期の策動○第二章沙河左岸の占領●第四編奧軍の戰況○第一章會戰前の軍形○第二章大島師團の勇戰○第三章大久保師團の勇戰○第四章左縱隊の戰況●第五編結論▲附錄○帝國陸軍公報附露軍公報○海外に於ける遼陽の戰評○海外に於ける沙河の戰評○海外に於ける旅順攻圍の戰評

東京日本橋區本町三丁目 博文館

女（後付の二）

法學博士 有賀長雄君編

大日本歷史

全部上下二冊
菊判特製脊皮附クロース金押美本
紙函入各紙數約壹千百頁

▲上巻 正價金貳圓 小包料拾六錢

▲下巻 正價金貳圓五拾錢 小包料拾六錢

(上下完成)

襄に本書上巻を刊行し、世間下巻の完成を竢つこと切なり。有賀博士昨年十一月歸朝以來餘暇ある毎に本書の印刷校訂を急がれ、今や下巻發行を見るに至れり、下巻は平安帝都を中心としたる藤原氏の文化一旦壞れて國民生活の重點地方に移りし時代より起り政權鎌倉幕府に歸し、北條氏所領安堵の裁判を公平にして天下の人心を繫ぎしより所領を以て人生の最大事と爲す念を誘起し、建武中興は此の念を制する能はざりし爲に失敗し、尊氏が此の念に乘じて建設したる室町幕府の威力は此の念の自然の結果として各家に起りたる家督爭奪の爲に破れて應仁以後の雜亂と爲り興味津々たる群雄割據の時代を經て、元龜天正の英雄は所領以外に天下の人心を繫ぐ所以のものを求めたるより、織田氏豐臣氏の朝廷尊戴主義となり、家康之を大成して公武合體の政道と爲し、武家に學問を勸めて國體を知らしめたるより大義名分論起り、外寇の刺戟に遭ひ、一轉して尊王攘夷の議と爲り、遂に大權を返上するに至りしまで、原因結果の次第を明にすること他の歷史に於て曾て類例を見ざる所なり、又維新以後日本が、立憲政體を確定し兩度の戰役を經て世界一等國の列に入りしまでの事實を叙する頗る詳細なり。

販賣用電話二六二〇番　東京本町 博文館　振替口座二〇四二番

學藝叢書

菊判洋裝美本各紙數二百十頁 正價各金四拾錢 郵稅六錢

人類學叢話

理學博士 坪井正五郎先生著

要目
▲事物變遷研究に對する人類學的方法▲石器時代遺跡の實踐は人類學上如何なる利益ありや▲如何にせば人類學を自修し得べきか▲ミイラの話▲玉飾の起原▲何なか人種の測と云ふ▲外十數項

植物學叢話

理學博士 三好學先生著

要目
▲植物と美術四項▲天然紀念物保存の必要並に其保存策に就て八項▲園藝と學理▲植物體に於ける氷雪の影響▲植物と降雨▲紅葉の話▲梅の生態

水產叢話

理學博士 岡村金太郎先生著

要目
▲本邦養魚沿革事蹟▲海外養魚沿革▲海中に於ける窒素の淵源▲鼈の性質と飼育▲水產學の樂園▲海苔篊▲篊と日比谷公園▲神馬藻と昆布▲寒天の用途▲寒天の製法▲ところてん寒天の歷史外數項

動物學叢話

理學博士 石川千代松先生著

要目
▲進化論▲精蟲の話▲生物の生活は自愛か他愛か▲▲動物の子守▲動物の卵の大小及び數▲遺傳は父から多く來るか母から來るか▲蚕の夫婦▲昆蟲の變態と露國の刺客▲蝙蝠の話▲サルに就ての學問外數項

歷史叢話

文學博士 箕作元八先生著

要目
▲國民の發展と海事との關係▲歷史上より見たる道德の危機▲西洋に於ける封建制度と武士道との起源沿革▲國民將來の覺悟▲日露戰爭の史的意義と國民將來の理想▲ナポレオン一夕話外數項

植物雜話

理學博士 松村任三先生著

要目
▲植物を學術的に觀べ▲我國の園藝と公園▲紅雪▲當▲樺太の植物▲水仙の話▲蠟梅の話▲紅葉▲蕣の話▲百合の種類▲木芙蓉の稀類外數項◉附錄▲花菖蒲▲顯微鏡の話▲少年と植物

國語學叢話

文學博士 上田萬年先生著

要目
▲廿世紀に於ける國語の地位▲桓武帝の話▲演劇上の言語▲戲曲に現はれたる武士道と大和魂▲現今の作文教授法に就て▲予の好める人物▲內地雜居後に於ける語學問題▲教育上の雜觀▲外數項

天文學叢話

理學博士 横山又次郎先生著

要目
▲世界の創造▲原始創造說▲神託創造說▲進化創造說▲外十五項▲海豹島▲總記▲地質▲外六項▲何故に土地により人口に疎密あるか▲科學雜談▲外三項

地理學叢話

理學博士 神保小虎先生講述

要目
▲外國語訳通術▲地理學者にアイヌ語の勸め▲ローマ字變革論▲探檢旅行者の經驗▲二日間に箱根の遠足▲信濃旅行の雜記▲支那巡りの俗話▲ボルネオ外二島巡見雜話▲ボルネオ島蠻王の家▲外一項

物理學叢話

理學博士 鶴田賢次先生講述

要目
▲目分量の誤差▲山紫水明の理▲生ま卵と煠で卵▲水の景色▲扇子の構造▲雪の華▲理學研究雙六の遊び▲野球の飛揚▲寃縷の理顯微鏡以上の微と物質の結構▲自叙自傳ヘルムホルツ

續刊 ◉農業叢話 横井農學博士講述

謠曲評釋

大和田建樹先生著

▲▲▲全部━完成▼▼▼

全部九册

和裝美本紙數約二千頁
每卷貳百五拾頁
正價一册金參拾五錢
郵稅一册金六錢
全部九册金貳圓八拾錢
外要郵稅

大和田先生の謠曲通解出でゝより茲に十有五年、四方購讀諸君の增加する事、年一年よりも多きは、弊館の特に榮とする處、更に今般先生に請ひて大訂正を加へ總說を增し、曲數を增し註釋を增し評語を加へ、總假名を附し、其他大に體裁面目を一新して、諸曲評釋と名づく、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を付して讀者諸君に至便ならしむる如きは、其最たるものなるべし、

第一輯

第一卷 (總說)○能の起原○流儀の分れ○謠の作者○謠本○內外二百番○明和の改正○謠の文章(上)○謠の文章(下)○裝詞○謠本の符號○題目の異同

第二卷 ○岩船の大寺○淀潜○一角仙人○生田敦盛○生贄○籠太鼓○籠祇王○鉢木○花車○花筐○班女○放下僧○放生川○白樂天○羽衣○橋辨慶○半蔀○橋供養○芭蕉○雞龍田

第二輯

○錦戸○錦木○伽原○辨內侍○融○鳥追○東方朔○東北○東岩居士○藤榮○木賊○朝長○知章○巴○竹生島○張良○長兵衛尉○千引○龍虎○呂后○輪藏○鵺○大蛇○姨捨○女郎花○小

第三卷 鍛冶○和田酒盛○往生院○和國○蛙○苅萱○通小町○合浦○葛城○葛城天狗○兼平○鐘引○鐵輪

第三輯

○鳥羽○邯鄲○咸陽宮○景清○高野物狂○笠卒都婆○杜若○柏崎○加茂○鴨長明○加茂物狂○春日龍神○弱法師○賴政○夜討曾我○芳野○吉野天人○吉野靜○第六天○大瓶猩々○當麻

第四卷 ○大佛供養○泰山府君○大會○谷行○高安小町○高砂○忠度○忠信○龍田○立田物狂○湛海○田村○丹後物狂○檀風

第四輯

丹後物狂○唐船○道明寺○道成寺○玉葛○玉井○竹雪○卒都婆小町○園田○土車○土蜘蛛○鶴岡○鶴龜○鼓瀧○經政○寢覺○難波○雷電○羅生門○室君○六浦○鱗形○善知鳥○鵜飼○

第五卷 歌占○空蟬○采女○浦島○雲林院○鵜羽○鵜祭○雨月○右近○浮船○梅○梅枝○井筒○野宮○野守○老松○大原御幸○大社○大江山○落葉○翁○隱岐院○黑塚○車僧○皇帝○花月○吳服○鞍

第五輯

馬天狗○熊坂○草薙○九世戸○國栖○養老○揚貴妃○山姥○八島○鞠○松風○松浦鏡○松蟲

第六卷 ○松尾○松山鏡○松山天狗○滿仲○枕慈童○卷絹○舞車○源太夫○元服曾我

第六輯

現在七面○源氏供養○絃上○藤○藤戸○二人靜○船橋○船辨慶○富士太鼓○富士山○伏曾木我○伏見○碁○木幡○護法○粉川寺○小鍛冶○小督○小袖曾我○項羽○胡蝶○戀重荷○江島

第七卷 ○江口○箙○定家○天王寺物狂○天鼓○調伏曾我○淡路○蟻通○安宅○愛宕空也○熱海敦盛

第七輯

嵐山○鸚鵡小町○藍染川○惡源太○綾鼓○海士○葵上○阿漕○朝顏○蘆刈○飛鳥川○西行櫻

第八卷 ○佐保山○逆鉾○實盛○三笑○草子洗小町○櫻川○佐々木○鷺○切兼曾我○碪○祇王○清經○木曾願書○金札○熊野○夕顏○雪○遊行柳○弓八幡○和布刈○通盛○三輪○三山

第八輯

水無月祓○水無瀨○三井寺○身延○御裳濯○代主○七騎落○志賀○鐘馗○自然居士○白髭○舍利○正尊○上宮太子○正儀世守○猩々○石橋○十番切○俊寬○春榮○俊成忠度○侍從重衡

第九卷 ○烏帽子折○繪馬○廣基○雲雀山○檜垣○常陸帶○氷室○飛雲○百萬○求塚○望月○盛久○

第九輯

紅葉
紅葉狩○西王母○清閑寺○誓願寺○善界○攝待○殺生石○禪師曾我○千手○昭君○關原與市

第拾卷 ○赤壁○關寺小町○蟬丸○須磨源氏○住吉詣○隅田河○墨染櫻㊟索引○附錄曲舞集

女(後付の五)

販賣用電話本局二千六百廿番　東京本町 博文館　振替貯金口座第二百四十番

農學博士 新渡戸稻造君序
法學博士 石川千代松君序
理學博士 澤田順次郎君著

自然界に於ける 兩性の秘密

一名人類性別學

全一册洋裝菊判頗美本
紙數約三百卅頁
近日發行

最に「男女の研究」を著して社會の大歡迎を受け、次で「婦人論」「最新學說女子教育論」「人生之活路」「生物學と理想界」等を公にして、何れも喝采を博したる著者は今や積年の蘊蓄を傾注して茲に本書を成すに至れり。是れ男女の神秘を闡明して兩性に關する千古の疑團を氷解せるもの其內容の一斑を擧ぐれば、ルーにて男女兩性の異なる原因之に關する研究法を首とし男女は裁判上如何に其取扱かを異にすべき醫師は男女により治療法を異にする必要なきか其他美術教育文藝特に今の自然主義を論ぜんとする者等には缺くべからざる本邦唯一の新科學書なり。世の學生は勿論文藝法律、教育、醫術に從事するもの其他苟くも人事の問題に趣味を有する者は是非共一本を座右に備へざるべからざる快著なり

伊國フローレンツ大學教授醫學博士 パウル、マンテガッツア氏著
在醫科大學 秋吉無聲氏譯

醫學上の戀愛觀

再版

全一册洋裝並製四六判紙數二百餘頁
正價金三拾錢 郵稅六錢

歐羅巴各文明國の教養ある男女間に極めて質實なる眞面目なる研究として空前絕後の好評を博したるマンテガッツア博士の戀愛論は今や秋吉無聲氏の忠實なる譯筆によりて錦上更に一段の光彩を添へて著はれたり。戀愛といふ人生の大問題の解決を得て神身の性的自然性を圓滿に發揮せしめんとする男女の必讀の良書は本書を措いて他に求め得られざるべし

販賣用電話 本局二千六百廿番 東京 博文館 本町 振替貯金口座 第二百四十番

女(後付の六)

佐々木弘綱翁遺著
佐々木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊 洋裝四六判美本 紙數約二百五十頁 正價金廿八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐々木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、**和歌の小歷史**として、**作歌の模範**として、**獨習用**に又**高等女學校の教科書**等に、最も適當なる書なり。長く草稿の儘秘藏せられしを、今年翁が十七年祭に、翁の鄕里伊勢石藥師村に紀念碑を建設するに際し、その紀念として、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ近世歌人年表和歌系統圖等を附し、添ふるに井上、小杉、木村、芳賀博士、本居侍講の追悼の文章を以てす。國文和歌に志ある人々の、必ず座右に備ふべき書なり。

東京本町 博文館

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君著

歌學論叢

全一冊 洋裝四六判總クロース 紙數約五百八十頁 定價金壹圓 郵稅金八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より、帝國大學文科大學に於て、講ぜらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て、『和歌と時勢』『和歌の將來』『歌學の根本』『上世の和歌』『歌格の研究』等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て、『人麿と赤人』『貫之』『西行』『實朝』『景樹』等を論評し、或は、『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等精細なる考證あり。或は『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京太夫』等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又、『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等未だ世に知られざりし歌人歌學者に紹介したるが如き、國文學史上に一新事實を提供せるもの。其他、『萬葉集私見』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博學なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より近世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり、國文に興味を有する人々にとりて、必讀の好著なり。

東京（博文館）本町

女（後付の八）


脳病薬の覇王
脳病
神經病全治良劑
健脳丸
醫學博士島村俊一先生有効御証明
迷ふ勿れ脳病患者
本舗 大阪市心齋橋 東京市箔屋町 丹平商會薬房
▲一日早く本劑を服せば。
一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持薬として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき脳充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健脳丸のみである
効能 脳充血 脳膜炎 頭痛 大便秘結 逆上症 中風 卒中
五週分 金貳円 郵税十六戔
三週分 壹円廿五戔 仝十戔
二週分 八拾五戔 仝六戔
一週分 四拾五戔 仝四戔
三日分 貳拾戔 仝貳戔
一日半 金拾戔 仝貳戔

女學世界

（明治四十一年十月一日發行 毎月一回一日發行）第八卷第拾參號（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）



（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

VOL. VIII.　（東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所印行）　No. 13.